多摩蘭坂遺跡 TAMARANZAKA SITE

1980

国分寺市教育委員会 恋ヶ窪遺跡調査会 TAMARANZAKA PROJECT

東京都国分寺市は、史跡武蔵国分寺の建られた南部の低地帯と、これを囲むような中・北部の段丘台地からできていますが、特に、この段丘に見られる国分寺崖線は、豊富な湧水を持つことで知られ、各所に先土器時代や縄文時代の遺跡をこれまで多数発見していることで著名であります。

本調査は、この崖線の湧水を集めて多摩川に流れる野川の上流部にあたる、本市内藤2丁目2一3、すなわち多摩蘭坂における、三ツ木産業株式会社による造成計画に関わる緊急事前調査であり、工事関係者の理解の下で、昭和52年2月4日から3月29日までの第1次の試堀並びに本調査と、同年5月18日から29日までの第2次補遺調査と、合計約1,000 m² についての調査を終え、その結果、多数の石器類をはじめ、奈良時代の遺物と考えられる須恵器等が発見されました。

本報告書が、学術的研究の資料として活用されると共に、これら崖 線上の遺跡に対する関心と愛着の気持ちがいっそう深められるならば この上もない幸いに存じます。

最後に、本調査にあたり、ご多忙の中発掘の指揮をとられた多摩蘭 坂遺跡調査団団長はじめ各調査員、調査補助員の皆様に対し感謝の意 を表わすと共に、三ツ木産業株式会社はじめ、関係者各位に厚くお礼 を申し上げる次第であります。

国分寺市教育長 興津精二

わが先土器時代の研究は、一時停滞の気味があったけれども、最近また、野川流域を中心とする武蔵野台地において、急速な発達をとげている。整然とした地層の堆積とそれを基準にした新旧文 化 層 の 検 出、豊富な遺物の包含は、石器の年代的細別を成功させたばかりでなく、面として遺跡を調査する方法が普及した結果、ヒトの行動型についての追跡も可能になり、ひと昔前の知識などでは、とても対応しきれないレベルに達している。多摩蘭坂遺跡の調査にとって幸いだつたのは、一段も二段も高められたかかる研究水準を直接の背景にすることができたことである。従つて、単にやみくもな発掘の細かさを誇示するのではなく、錯綜した多数の情報の分析を一歩進めるに足りる計画的な見通しのもとに実施できたのであった。そして今、まとめあげられた調査研究の成果は、未調査部分を残し、あるいは調査不能地を除外した帰結であるにしても、その欠を補って余りあるといえるだろう。学問とは、元来、こうした一面をもつものなのである。

また、今回の調査では、文化財保護をめぐって現社会の抱える矛盾 撞着が、そのまま続続とおもて立ってきて、終始、当事者を悩ませる ことになった。だが、三者三様の立場が複雑にからみ合う中で、それ なりの解決方法を見出しながらきたわけであるから、はた目には毀誉 褒貶半ばするところがあっても、互に他の思考行動について、一律的 批判を下せるような筋合いではなかろうと考えている。

ここに長い労苦の結晶である本書の出版に際し、調査開始から今日 に至るまで、変らぬ情熱を傾けてくれた調査員諸兄諸姉、調査の円滑 な実施や事後処理に身心を砕かれた都・市教育委員会各位、ならびに 深い理解を示された三ツ木産業株式会社の諸氏に対し、深甚の謝意と 敬意とを表し、喜びを分ち合いたいと思う。

恋ヶ窪遺跡調査団 団長 永 峯 光 一

- 摩蘭坂遺跡の発掘調査報告である。遺跡は三ツ木産業 株式会社が造成施工するための緊急事前調査であり、 発掘に関する諸経費および整理費を原因者が負担し, 報告書印刷費を国分寺市教育委員会が受持った。
- ② 発掘調査は2次に亘る。第1次は昭和52年2 月4日から3月29日まで、試掘調査から本調査を行 ない, 第2次は5月18日から29日まで補遺調査した ものである。
- ③ 遺物および記録類の整理作業から報告書作成ま では、国分寺市恋ヶ窪遺跡調査会において、調査終了 から昭和53年3月31日まで行なった。
- ④ 本調査は永峯光一を担当者とし、安孫子昭二、 舘野孝が調査員として専従した。また、堀井晶子、行 田裕美,藤村由香里をはじめ大沢進,原川雄二,田中 耕作,新井真博,沢正二,浅野晴樹等の献准的な協力 があった。
- ⑤ 本報告の編集は、安孫子昭二、堀井晶子による ものであり、執筆者は目次に記してある。
- ⑥ 本報告にあたり、とくに次の方々に御教示を得 た。(敬称略)

石器類・礫等の材質鑑定 大沢進(和光高校)

墨書の赤外線 T V 撮影 石川陸郎・三浦定俊 (東京 国立文化財研究所)

銅銭の計測 佐藤興治 (奈良国立文化財研究所) 焼礫付着物質の分析 江本義理 (東京国立文化財研 究所)

- ⑦ 英文抄訳は C. T. Keally 氏によるものである。
- ⑧ 発掘および遺物整理において、次の諸氏並びに 諸機関より種々なる御指導、御助言を頂いた。(敬称 略・五十音順)

秋山道生, 有吉重蔵, 石岡憲雄, 伊藤富治夫, 岡田

① 本書は国分寺市内藤2丁目2-3に所在する,多 茂弘,岡田篤子,岡村道雄,小田静夫,織等昭,加藤 修, 加藤稔, 蟹江康子, 上村昌男, 川崎義雄, 川松康 人, 菊地強一, 能谷常正, 小池政美, 小林達雄, 小林 博昭, 後藤秀一, 斎藤基生, 酒井重洋, 坂詰秀一, 佐 藤攻, 佐原真, 白石浩之, 実川順一, 田中琢, 富樫泰 時, 戸沢充則, 中島庄一, 中津由紀子, 西脇俊朗, 橋 本正,早川泉,樋口清之,福田健司,福田信夫,藤沼 邦彦, 藤原妃敏, 松沢亜生, 松村明子, 水野正好, 三 宅徹也, 森郁夫, 柳田俊雄, 山下秀樹, 山中一郎, 国 学院大学考古学研究室, 奈良国立文化財研究所, 武蔵 国分寺遺跡調查会。

恋ケ窪遺跡調査会組織

会 長 興 津 精 二 国分寺市教育委員会教育 長

副 会 長 星 野 亮 勝 国分寺市文化財保護審議 会委員長

宏 東京都文化財保護審議会 滝 口 委員

永 峯 光 一

坂 詰 秀 一

吉 田 格 武蔵野文化協会

祥一郎 東京都教育庁文化課埋蔵 文化財係長

坂 本 喜 市 国分寺市社会教育委員会 議長

藤 間 恭 助 国分寺市文化財保護審議 会副委員長

進 藤 文 夫 国分寺市教育委員会教育 次長

ШШ 弘 国分寺市教育委員会社会 教育課長

実 国分寺市教育委員会文化 事務局長 山 下 財課長

暉 国分寺市教育委員会文化 事務局員 安 田 財課庶務係長

廣 瀬 恒 雄 国分寺市教育委員会文化 財課庶務係員

鈴 木

目 次

I 遺跡とその環境	1
1. 遺跡の地理的位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
Ⅱ 遺跡調査の概要	10
1. 調査にいたる経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·····11 ·····15
Ⅲ 先土器時代の遺物	23
Ⅲ-1 第1文化層 (第 X 層) (舘野 孝) ナイフ形石器・ 掻 器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23232323232330323234343434

叩き右	
B. 石器製作技術	
接合の意義	
分割技法について	39
石核の大別	41
ナイフ形石器及び尖頭状石器の素材について	45
石器の傷	
C. 石器の分布·······	…(行田裕美)48
平面分布	48
垂直分布	48
石核と剝片と器種について	48
D. 石器のうごき(舘野 孝	
U-2・3・4 (モデル 1)	64
U-11・12・13・14 (モデル 3・4)	
E. 礫の説明	…(堀井晶子)71
石 材	71
大きさと重量	
破損礫と完形礫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	71
赤 化	
付着物	72
a. タール状物質	72
b. スス状物質	72
c. 黒 点······	72
b. 白色斑点状物質	72
F. 礫の分布	…(堀井晶子)74
礫コニット	74
礫ユニット群の設定	74
礫コンポーネント・パート 1 モデル 1	80
礫コンポーネント・パート 2 モデル 2	88
礫コンポーネント・パート 3 モデル 3	96
礫コンポーネント・パート 4 モデル 4	102
G. コンポーネントとモデルの設定(舘野 考	差・堀井晶子)… 106
石器コンポーネント・パートについて	106
礫コンポーネント・パートについて	107
コンポーネント・パートからコンポーネントへ	108
Ⅲ-4 第4文化層 (第Ⅲ層)	…(舘野 孝)… 112

Ш	-5	各文化層の性格(舘野 孝)… 114	Fig.	21	進入路東西方向の調査14
	Α.	第1文化層114	Fig.	22	調査工程図14
	В.	第2文化層114	Fig.	23	整理工程図16
	С.	第3文化層115	Fig.	24	石器台帳・礫台帳17
	D.	第4文化層115	Fig.	25	母岩別台帳17
TT 7	* +	艮時代の遺構・遺物(舘野 孝)… 116	Fig.	26	個体別(接合)台帳18
IV	宗区	と時代の退構・退物(語野 孝)… 116	Fig'	27	礫接合台帳18
1.	遺	物の出土状態について 116	Fig.	28	モデル(礫ユニット)台帳19
2.	出:	土遺物	Fig.	29	層序と文化層20
	Α.	須恵器・埦 116	Fig.	30	調査区と発掘深度の関係20
	В.	須恵器・蓋 116	Fig.	31	第 3 文化層の微地形21
	$_{\rm C}.$	銅 銭	Fig.	32	第1文化層の微地形21
	D.	墨書について 116	Fig.	33	各文化層の石器の割合22
3.	年位	代とその性格 117	Fig.	34	第1文化層の石器23
		図 ま 日 ル	Fig.	35	打製石斧と打製石斧作出砕片24
		図 表 目 次	Fig.	36	第1文化層の石器24
Fig.	1	周辺の遺跡	Fig.	37	第1文化層の石核25
Fig.	2	遺跡とその地形 2	Fig.	38	U-1926
Fig.	3	遺跡の層序模式図 2	Fig.	39	U-2026
Fig.	4	遺跡の層序	Fig.	40	U-22 ·····26
Fig.	5	遺跡全景 3	Fig.	41	U-21 ·····26
Fig.	6	遺跡全景 3	Fig.	42	U-23 ·····26
Fig.	7	恋ヶ窪遺跡 4	Fig.	43	U-24 ·····26
Fig.	8	武蔵国分寺	Fig.	44	第1文化層の石器分布図27
Fig.	9	羽根沢台遺跡	Fig.	45	第1文化層の石器接合図28
Fig.	10	多摩蘭坂遺跡と南関東の先土器時代遺跡 5	Fig.	46	第1文化層の礫分布図29
Fig.	11	多摩蘭坂遺跡採集のナイフ形石器10	Fig.	47	斧形石器30
Fig.	12	昭和 37 年当時の遺跡の露頭10	Fig.	48	第 2 文化層の石器30
Fig.	13	同所, 露頭から出土した石器10	Fig.	49	第 2 文化層の遺物分布図31
Fig.	14	調査終了後の遺跡(昭和 54 年)10	Fig.	50	第3文化層のナイフ形石器33
Fig.	15	試掘調査の開始12	Fig.	51	ナイフ形石器作出砕片34
Fig.	16	グリッド深掘り12	Fig.	52	第3文化層の台形様石器・尖頭状石器34
Fig.	17	(6~7, 17~18) 区12	Fig.	53	第3文化層の搔器35
Fig.		礫群の計測13	Fig.	54	第3文化層の彫器35
Fig.	19	原因別による調査範囲13	Fig.	55	第3文化層の打製石斧35
Fig.	20	須恵器の出土地点14	Fig.	56	第3文化層の礫器・叩き石36

. ()

Fig.	57	分割技法と接合39			接合資料 030・039・068・01769
Fig.	58	分割技法と接合40	Fig.		接合資料 015 · 020 · 063 · · · · · · 70
Fig.	59	石核と剝片と製品41	Fig.	95	礫の石質別個数と重量の割合71
Fig.	60	石核 A型・B型42	Fig.	96	接合礫と接合しない礫の重量分布71
Fig.	61	石核 C ₁ 型・C ₂ 型・C ₃ 型 ·······43	Fig.	97	A礫·····72
Fig.	62	長幅比と数量44	Fig.	98	B礫+D礫 (火はね)72
Fig.	63	打角の集計44	Fig.		B礫+D礫73
Fig.	64	石器の傷46			C礫+C礫73
Fig.	65	ナイフ形石器・尖頭状石器の傷47			D礫+D礫+D礫+D礫 ······73
Fig.	66	U-348	-		タール状物質73
Fig.	67	ユニット概念図49	Fig.		スス状物質73
Fig.	68	U-549	Fig.		黒 点73
Fig.	69	U-950	Fig.	105	白色斑点状物質73
Fig.	70	U-11 · U-12 · U-13 · U-14 ······50	Fig.	106	<i>"</i> 73
Fig.	71	U-1550	Fig.		<i>"</i> 73
Fig.	72	試掘区 石器分布図51			礫ユニット概念図74
Fig.	73	試掘区 石器接合図・剝片剝離順序52			P-7 ······75
Fig.	74	U-2・3・4 (モデル 1) 石器分布図53			P-17······75
Fig.	75	U-2・3・4 (モデル 1) 石器接合図54			P-16······75
Fig.	76	U-2・3・4 (モデル 1) 剝片剝離順序 ······55			P-26 · 28 · 29 · · · · · · · · · · · · · · · · ·
Fig.	77	U-5·6·7 石器分布図 ······56			P-30 · 31 ······75
Fig.	78	U-5·6·7 石器接合図57			P-30 の東側の小群75
Fig.	79	U-5·6·7 剝片剝離順序 ······57			モデル 1 タール状物質付着礫分布図 ······76
Fig.	80	U-8・9・10 (モデル 2) 石器分布図58			モデル 1 スス状物質付着礫分布図 ······76
Fig.	81	U-8・9・10 (モデル 2) 石器接合図59			モデル 1 白色斑点状物質付着礫分布図 ······77
Fig.	82	U-8・9・10 (モデル 2) 剝片剝離順序60	Fig.	118	モデル 1 礫の破損度別分布図77
Fig.	83	U-11・12・13・14 (モデル 3・4) 石器分布図 ······61			モデル 1 礫接合図78
Fig.	84	U-11・12・13・14 (モデル 3・4) 石器接合図62			モデル 1 礫のうごき79
Fig.	85	U-11・12・13・14 (モデル 3・4) 剝片剝離順序 ······63	Fig.		モデル 1 接合による礫個数の変化······81
Fig.	86	各ユニットにおける母岩の種類と個数64	Fig.		モデル 1
Fig.	87	各ユニットの石器接合関係一覧64	- 0		モデル 1 接合礫と接合しない礫の重量分布·····81
Fig.	88	U-2・3・4 (モデル 1) の石器組成65			モデル 2 タール状物質付着礫分布図 ······82
Fig.	89	接合資料 02365			モデル 2 スス状物質付着礫分布図 ·····83
Fig.	90	接合資料 02566			モデル 2 白色斑点状物質付着礫分布図 ·····84
Fig.	91	接合資料 046・060・047・・・・・・			モデル 2 礫の破損度別分布図85
Fig.	92	U-11・12・13・14(モデル 3・4)の石器組成68	Fig.	128	モデル 2 接合による礫個数の変化·····86

Fig. 12	9 モデル	2	礫接合図	86
Fig. 13	0 モデル	2	礫のうごき	
Fig. 13			接合礫と接合しない礫の重量分布	87
Fig. 13	2 モデル	2 ·		88
Fig. 13	3 モデル	2	P-14 の底面の礫 ·····	89
Fig. 13	4 モデル	3	タール状物質付着礫分布図	90
Fig. 13	5 モデル	3	スス状物質付着礫分布図	91
Fig. 13	6 モデル	3	白色斑点状物質付着礫分布図 ······	92
Fig. 13	7 モデル	3	礫の破損度別分布図	93
Fig. 13	8 モデル	3	礫接合図	94
Fig. 13	9 モデル	3	礫のうごき	95
Fig. 14) モデル	3	接合による礫個数変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	96
Fig. 14	1 モデル	3		97
Fig. 14:	2 モデル	3	接合礫と接合しない礫の重量分布	97
Fig. 143	3 モデル	4	タール状物質付着礫分布図	98
Fig. 14	4 モデル	4	スス状物質付着礫分布図	98
Fig. 14	5 モデル	4	白色斑点状物質付着礫分布図	99
Fig. 146	6 モデル	4	礫の破損度別分布図	100
Fig. 147	7 モデル	4	礫の接合	100
Fig. 148	3 モデル	4	礫のうごき	101
Fig. 149) モデル		接合による礫個数の変化	
Fig. 150) モデル	4	接合関係一覧	101
Fig. 151	モデル	4	接合礫と接合しない礫の重量分布	102
Fig. 152	? モデル			
Fig. 153	3 モデル		礫個数の変化	
Fig. 154			接合距離と重量の関係	
Fig. 155				
Fig. 156			4	
Fig. 157	コンポー	ーネ	ントとモデル	107
Fig. 158	P-23 K	おり	ナるA礫, B礫, C礫の構成	108
Fig. 159	モデル	しと	モデル 3, 4 の母岩数と石質の割合	109
Fig. 160			礫のうごき	
Fig. 161			礫のうごき	
Fig. 162			礫のうごき	
Fig. 163	モデル 4	1の	礫のうごき	111
Fig. 164	第4文件	層	の石器	112

Fig.	165	U-1	112
Fig.	166	(7, 18) 区の配石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	112
Fig.	167	第4文化層の遺物分布図	113
Fig.	168	各文化層における石質と母岩の割合	114
Fig.	169	須恵器と銅銭	117
Fig.	170	須恵器実測図	118
Fig.	171	器内底面の錆痕	118
Fig.	172	墨書の反転	118
Fig.	173	蔵骨器と銅銭の伴出遺跡分布図	120
Fig.	174	銅銭計測表	121

附図

多摩蘭坂第3文化層の遺物分布図 多摩蘭坂第3文化層の遺物接合図

Ⅰ遺跡とその環境

1. 遺跡の地理的位置

武蔵野台地は、関東山地から流れ出る多摩川と、秩 父方面から流れ出る荒川とにはさまれた東南方向に開 く扇状の台地である。この台地は、東部では台地内に 谷頭をもつ解析のすすんだ地形を呈するのに対し、西 南部では解析谷はほとんど存在せず、平坦な地形が広 がっている。台地の地形面は、下末吉面と武蔵野面に 区分されるが、東部では下末吉面などが分布するが、 西部では主に武蔵野面となっている。武蔵野台地の南 縁は,国分寺崖線によって境されている。国分寺崖線 は、北西端は立川の北東にはじまり、中央線を国立駅 の東で横切ってから、東京天文台を通って二子玉川方 面へとつづいている。この崖の下には、武蔵野段丘よ り低位の立川段丘がある。これら二段の段丘は、かつ ての多摩川により形成されたものである。崖線下に流 れる野川は,立川段丘を浅く浸食しているが,この流 れ出る水は、崖線沿いの武蔵野礫層中からの湧水によ っている。野川は崖線を形成した古多摩川の名残川と 考えられている。

多摩蘭坂遺跡は、この野川の上流部にある。地籍は 国分寺市内藤2丁目であるが、中央線国立駅から西国 分寺に向ってすぐの段丘崖線上にある。この崖線は、 前述のように国分寺崖線であり、したがって遺跡は、 武蔵野段丘のへりに位置している。遺跡のすぐ東側に は、小さな谷が南側から入りこんでいる。

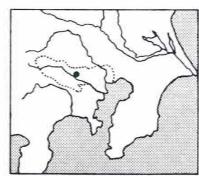
この付近の地質は、この付近で知られている武蔵野台地の地質と同様で、基盤の上総層群を不整合に覆い、段丘礫層である武蔵野礫層がのってくる。さらに上位には、厚さ約8.5mの関東ローム層が堆積しており、地質柱状図をFig.3に示す。礫層とローム層との間には、ローム質の砂が漸移層として認められ

る。ここでのローム層は、武蔵野ローム層 5 m, 立川ローム層 3.5 m であり、武蔵野ローム層中には、1 枚の東京浮石層と呼ばれる浮石層が厚さ 10 cm 程で挟まれる。浮石層は、箱根火山が噴出源とされ、フィショントラック法による年代測定では、約5万年前とされている。東側に入りこむ小支谷では、この浮石層は浸食されて確認できなかった。上位には、武蔵野、立川ローム層がのってくる。立川ローム層には2枚の黒色帯が存在する。本遺跡における旧石器の包含される層準は、上位より、従来から呼ばれているいわゆるソフ

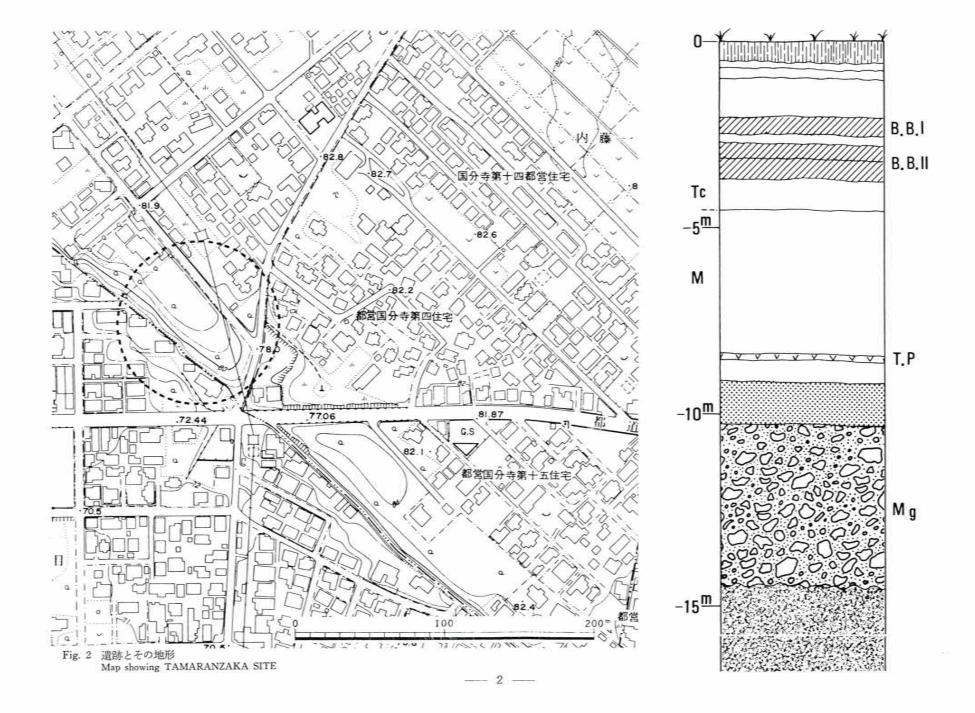
トローム層下部より若干の石器の産出と、第1黒色帯の上限付近、第2黒色帯の上部、同黒色帯下部付近である。

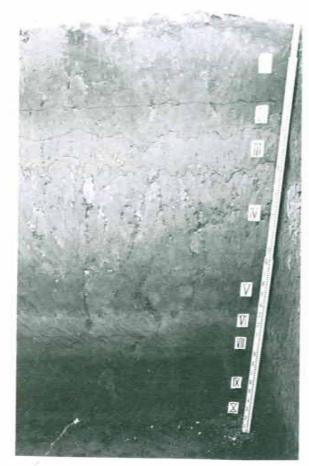
Fig. 1 周辺の 遺跡

- 1. 多摩蘭坂
- 2. 武蔵国分寺 関連
- 3. 恋ヶ窪
- 4. 殿ヶ谷戸 Around Sites









▲Fig. 4 遺跡の層序 V:第I黒色帯 W:第I黒色帯 Columnar Sections

◆Fig. 3 遺跡の層序模式図 Tc:立川ローム層、M:武蔵野ローム層 B.B.I:第I黒色帯、B.B.II:第II黒色帯 T.P:東京パミス層、Mg:武蔵野礫層 Columnar Sections



Fig. 5 遺跡全景(南西方向より) Aerial view of TAMARANZAKA SITE

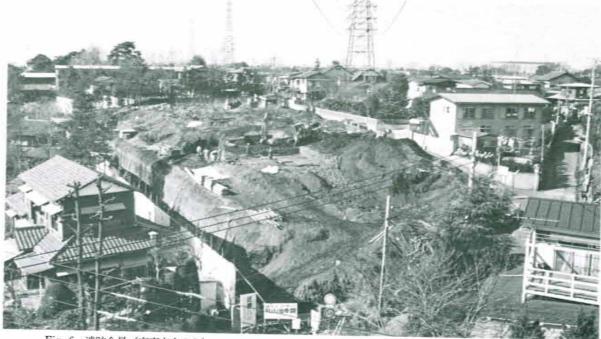


Fig. 6 遺跡全景(南東方向より) Aerial view of TAMARANZAKA SITE

2. 周辺の遺跡

多摩蘭坂遺跡がある武蔵野段丘面の縁辺部は先土器時代や縄文時代の遺跡が多い。当初から恰好の居住環境を呈していたらしい。この段丘が立川段丘面に移る崖線は、平均20mの比高差をもつ国分寺崖線で、崖線下には台地からしみ出す湧水が随所にみられる。湧水の小さな流れは集合して野川となり、小金井、三鷹、調布と流下し、世田谷で入間川、仙川とも合流し、同区二子橋付近で多摩川に流入する。

この野川の源流は国分寺市恋ヶ窪および武蔵国分寺付近に求められるが、先土器時代の当時はさらに上流域にあったものであろう。というのは、武蔵国分寺遺跡調査会が尼寺の寺域内調査で国分寺崖線下を調査した際に、谷状に窪んだその充塡土から先土器時代遺物が出土したことがあるが、崖線上縁部の遺跡から流れ込んだものであろう。また、府中病院西側の切通しのロームにも先土器時代の礫群が顔をのぞかせていたが、コンクリートが吹きつけられてしまった。多摩蘭坂遺跡はこの地点をさらに溯ったもので、現在判明している最上流の遺跡ということになる。

つぎに、周辺の遺跡について (Fig. 1 参照) 簡単に ふれるが、地図に入らない南側には立川段丘の崖線 (府中崖線)、それに青柳段丘があり、縄文中期末の敷 石住居址や奈良~平安時代にかけての住居址群や横穴 墓が検出されている。

- 1. 多摩蘭坂遺跡。本遺跡であり本文参照。
- 2. 武蔵国分寺関連遺跡。国分寺市東元町3,4丁目,西元町1~4丁目所在。南北に走る府中街道を境に東側が僧寺域,西側が尼寺域となっている。武蔵国分寺の寺地は東西8丁(900 m),南北5丁(550 m)と推測されており、全国の国分寺の中で最大の規模といわれる。寺域内および関連地域の調査がここ数年来継続して進められており、平安時代を中心とする資料が、かなり豊富に検出されている。この範囲の国分寺崖線上には先土器時代や縄文時代各期の遺跡も複合す

る。国重要文化財の、4つの把手をもつ勝坂式土器を 出した多喜窪遺跡(西元町2丁目)、海獣葡萄鏡をは じめ先土器時代や縄文早期撚糸文土器を多量に出した K. D. D 遺跡(東元町3丁目)、崖線を下りた立川段 丘面には縄文後期の堀之内式・加曽利B式期の八幡前 遺跡(東元町3丁目)等がある。

3. 恋ヶ窪遺跡および羽根沢台遺跡(西恋ヶ窪1丁目・東恋ヶ窪3丁目所在)。恋ヶ窪遺跡は、加曽利E式の連弧文土器が最初に注目されて有名であるが、遺跡は勝坂式期から継続する大集落で、その範囲は東西250m、南北100m程度と推測される。この3年来、恋ヶ窪遺跡調査会が調査に掛っているが、大方は宅地と化した。なお、地続きで遺跡の北西部に先土器時代の槍先形尖頭器を出した熊之郷遺跡がある。

羽根沢台遺跡はむしろ日立中央研究所構内遺跡の方が通りよい。本遺跡と恋ケ窪遺跡は、日立中研構内で西部国分寺線の東側の、現在は埋められた浅い谷を境としよう。かつて、塩野半十郎氏や学習院高校・国立高校により調査され、勝坂式期住居址や中期末の敷石住居址が検出された。また、田戸下層式や茅山式土器の出土もある。先土器時代の立地環境としても申し分ない位置を占める。

4. 殿ヶ谷戸遺跡(国分寺市南町2丁目所在)。通 称丸山遺跡で、昭和26年に吉田格氏により調査され、 先土器時代の礫群と切出型ナイフ形石器の一群が検出 された。なお、田戸下層式や加曽利E式土器の出土す る地点もある。現在は大方が都立殿ヶ谷戸公園となっ ている。崖線下に湧水がある。



Fig. 7 恋ヶ窪遺跡 KOIGAKUBO SITE

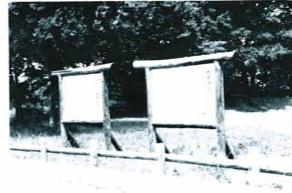


Fig. 8 武蔵国分寺遺跡 MUSASHI KOKUBUNJI SITE



Fig. 9 羽根沢台遺跡 HANEZAWADAI SITE

3. 南関東の先土器時代 Fig. 10 多摩蘭坂遺跡と南関東の先土器時代遺 武蔵野台地・大宮台地を中心とする先 土器時代の遺跡は、河川の流域や台地 Terrace 縁辺付近に分布する傾向がある。石神 Mountain 井川流域や, 野川流域には特に密に分 布するが、これらの遺跡群は早くから 研究フィールドとされた為でもある。 Musashino これらの密集地域は、それぞれに先士 Terrace 器時代の集団領域を形成していた可能 性を示す。とすれば、いまは疎らな地 域も、かつてはそのような領域を形成 Holocene deposits していたものかもしれない。今後の研 究の進展に注目していきたい。 Tachikawa TAMARANZAKA SITE and the Pre-Terrace ceremic Sites in Southern Kanto TOKYO BAY 1:300,000 - 5

先 土 器 時 代 遺 跡 分 布 図 ・ 文 献 目 録 (武蔵野・大宮台地、相模野・下総台地一部)

No.	遺跡名	所 在 地	文献
1	多摩蘭坂	国分寺市内藤町 2-2-3	舘野孝・多摩蘭坂遺跡調査団 1977「国分寺市多摩蘭坂遺跡の調査」考古学ジャーナル 140
-	7 17 10 3		舘野孝・堀井晶子 1978「国分寺市多摩蘭坂遺跡の調査」東京都遺跡調査・研究発表会Ⅲ
2	能之郷	国分寺市西恋ヶ窪1	吉田格 1952「東京都国分寺町熊之郷・殿ヶ谷戸遺跡」考古学雑誌 38-2
2	100	Harvey of the Age of t	吉田格 1954「武蔵野台地の縄文式文化以前の遺跡」武蔵野 33-3・4
3	K. D. D	国分寺市西元町 1-2488-3.5	武蔵国分寺遺跡調査会 1976『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報 I』
4	殿ヶ谷戸		吉田格 1952「東京都国分寺町熊之郷・殿ヶ谷戸遺跡」考古学雑誌 38-2
4	殿 7 日 /	(a) (1) (1) (1) (a)	吉田格 1954「武蔵野台地の縄文式文化以前の遺跡」武蔵野 33-3・4
-	m	小金井市貫井南町 3-617・618	小金井市教育委員会 1978 『貫井』小金井市文化財調査報告書 5
5		小金井市貫井南町 3-546	はけうえ遺跡調査会 1978『はけうえ』
6		小金井市前原町 3-31	小金井市教育委員会 1974『平代坂・七軒家』小金井市文化財調査報告書 3
7		小金井市中町 4-14	吉田格 1957「東京都小金井市西之台遺跡報告」武蔵野 231 · 232 号
8	西 之 台	1.754.111.1-1-ml a-1a	小田静夫 1974「立川ローム層最古の文化」具塚 13
	at at a	小金井市中町 1-1392	J. E. Kidder・小田静夫 1975『中山谷遺跡』Occasional Papes 1 I. C.U 考古学研究センター
9	14 200		J. E. Kidder・小山修三・小田静夫 1972「国際基督教大学構内 Loc. 15 の先士器文化」人類学雑誌 80-1
10	I. C. U Loc. 15	小金井市東町 1-6	前原遺跡調査団 1975『前原遺跡』
11	前原	小金井市前原町2丁目	小田静夫・伊藤富士夫・C. T. キリー 1976「前原遺跡」Occasional papers 3 I. C. U 考古学研究センター
		Above Libert A 10 11	小田静夫 1962「東京都練馬区中村南発見のマイクロ・コア」若木考古 63・64
12	中 村 南	練馬区中村南 1-2・10・11	「
			永峯光一 1972 「練馬・豊島・板橋三区に於ける考古学的調査」東京都教育委員会
13	武蔵野公園		小田静夫・C. T. Keally 1973「武蔵野公園 I 」野川遺跡調査会
14	I. C. U Loc. 28	調府市野水1	野川遺跡調査会 1970「東京都野川遺跡の発掘調査」考古学ジャーナル No. 49
			野川遺跡調査会 1970「野川遺跡の調査」文化財の保護 3
			野川遺跡調査会 1970『野川遺跡調査概報』
			小林達雄・小田静夫 1971「野川先上器時代遺跡の研究」第四紀研究 10-4
			野川遺跡調査会 1972「国際基督教大学構内 Loc. 28 の先土器文化」人類学雑誌 80-1
15		調布市仙川町 3-17-1	東京都教育委員会 1974『仙川遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告第2集
16	久ヶ原小学校		大田区教育委員会 1978「おおたの窓」特集号
17	千 歳 台	世田谷区千歳台 4-24-28	千歳台遺跡調査団 1978「ちとせだいニュース」No. 1 · No. 2
18	高井戸東	杉並区高井戸東3	高井戸東遺跡調査会 1976『高井戸東遺跡』
			高井戸東遺跡調査会 1977『高井戸東遺跡』
			高井戸東遺跡調査会 1977『高井戸東(駐車場西)遺跡』
			高井戸東遺跡調査会 1977『高井戸東(近隣第1)遺跡』
			高井戸東遺跡調査会 1977『高井戸東(近隣第2)遺跡』
19	给 木	小平市鈴木町 1-481	鈴木遺跡調査団 1975『鈴木遺跡』鈴木遺跡調査会
			舘野孝 1975「小平市鈴木遺跡の調査」武蔵野文化協会調査・研究発表会 I
			戸田正勝 1975「東京都鈴木遺跡」日本考古学年報 28
			鈴木遺跡調査団 1976「鈴木遺跡の調査」日本考古学協会昭和51年度総会研究発表要旨
			鈴木遺跡調查団 1976『鈴木遺跡範囲確認調查報告書』鈴木遺跡調查会
			鈴木遺跡調查団 1976『鈴木遺跡都市計画道路 213 号線内遺跡範囲確認調查報告書』鈴木遺跡調査会

No.	ì	遺	亦	名	所	在	地	文 献
								鈴木遺跡調査団 1976『鈴木遺跡流域下水道建設工事にともなう緊急発掘調査報告書(その1)』鈴木遺跡調査会
								鈴木遺跡調査団 1976『鈴木遺跡流域下水道建設工事にともなう緊急発掘調査報告書(その2)』鈴木遺跡調査会
								鈴木遺跡調査団 1976『鈴木遺跡と旧石器時代~掘り出された洪積世のこだいら~』鈴木遺跡調査会
								実川順一・鈴木遺跡調査団 1978「小平市鈴木遺跡―昭和52年度調査―」武蔵野文化協会調査・研究発表会Ⅲ
00		Kit are						鈴木遺跡調査団 1978 『鈴木遺跡 I 』鈴木遺跡刊行会
20	石	神井	公。因	園内	練馬区石神井 5-1	2-14		大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井流域の無土器文化遺跡(続)」オセド2号
04								池淵遺跡調査団 1972『石神井町池淵遺跡の調査略報』
21	谷一				練馬区高野台 1-3			滝沢浩 1962「ナイフ形石器の一考察」オセド3号
22	栗			原	板橋区桜川 1-4			岡本勇 1955「東京都板橋区栗原遺跡」日本考古学年報 4
								中川成夫 1957「セントポールグリーンハイツ内遺跡発掘調査概報」史苑 17-2
								立教大学史学研究室 1957「セントポールグリーンハイツ内遺跡調査概報」立大史学科調査報告
								立教大学文学部 1957「栗原―セントポールグリンハイツ内遺跡発掘報告
								大沢鷹邇・芝崎孝 1959・1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」「同続」
00	-	1	27	23	27			大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器時代遺跡」武蔵野 39-1・2・3
23	下	里	r	谷	保谷市東伏見 3-5	-9		むさし野台地研究会 1974『保谷市坂上遺跡調査略報』
								津川圭一 1963「保谷町の遺跡と遺物」保谷町公報
0.4	-			-				大場磐雄 他 1966「北多摩(郡)北部における考古学上の調査」北多摩文化財総合調査報告第2分冊
24	坂			下	保谷市東伏見 6-10	0		榎本金之丞 1958「関東ローム層中出土の粘土製品」石器時代 5
								大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川の無土器時代遺跡」武蔵野 39-1・2・3
								榎本金之丞・松井健 1975「関東ローム層中出土の容器状粘土の産状とその鉱物組成」地球科学 59
	200			Same	(2 a section distribution			むさし野台地研究会 1975「坂下遺跡をめぐる問題点」むさしの台地研究会報告Ⅱ
25	溜				練馬区関町 4-616			榎本金之丞 1960「東京都溜淵遺跡」人類学雑誌 68 巻 1 号
26	城			Щ	練馬区上石神井1-	-225		立教大学文学部 1957「栗原―セントポールグリーンハイッ内遺跡報告」
07	-1-				AND THE PROPERTY OF THE PERSON AND T			榎本金之丞 1958「城山無土器文化の遺跡」日本大学史学会研究会報
27	春	木		5000000	練馬区富士見台 4-			練馬区史編纂委員会 1957『練馬区史』
28	茂			呂	板橋区小茂根 5-17	7		杉原荘介 他 1952「東京都板橋区茂呂におけるローム層中発見の石器について」第9回日本考古学協会発表要旨
								滝沢浩 1953「東京西効発見の所謂プレ縄文の遺跡」西効文化 4
								杉原荘介 1955「縄文文化以前の石器文化」日本考古学講座 3
								杉原莊介 1955「東京都板橋区茂呂遺跡」日本考古学年報 4
								杉原在介 他 1959「東京都茂呂における関東ローム層中の石器文化」駿台史学 9
								滝沢浩 1959「茂呂とその頃」オセド1号
- 1								大沢鷹邇・芝崎孝 1959「石神井川流域の無土器文化遺跡」オセド1号
								大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」オセド 2 号
								大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器時代の遺跡」武蔵野 39-1・2・3
00	-14-	-		-		c was was		滝沢浩 1962「東京都茂呂出土の石器新資料」考古学集刊 3
29	戊	呂	果	万	板橋区小茂根 3-12	• 4–19		大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」オセド2号
0	al.			,	. بدر در و مسرحومور			大沢鷹邇 1969『板橋区の考古学』
30	小	Щ		台	板橋区小茂根 3-4			大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」武蔵野 39-1・2・3
.	Les	Jiber.			race and a contract of the con			大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」オセド2号
31	根	1		上	板橋区小茂根 1-5			大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡」オセド2号
								大沢鷹邇・芝崎孝 1960「石神井川流域の無土器文化遺跡 (続)」オセド2号

No.	遺	跡	ž	所 在 地	文献
					戸沢充則 1965「関東の先土器時代」日本の考古学 I 所収
					星野佐和子 1965「東京都根ノ上遺跡について」考古学集刊 3-2
					大沢鷹邇 1969『板橋の考古学』
32	比	丘 尼	橋	練馬区北大泉 339	安孫子昭二 1971「練馬区北大泉町比丘尼橋遺跡調査概報」文化財の保護 3
33	市	場	坂	新座市片山馬場	滝沢浩 1962「埼玉県市場坂遺跡略報」考古学手帖 15
33	177.72				滝沢浩 1963『関東・中部地方におけるナイフ形石器文化とその終末』
					滝沢浩 1964「埼玉県市場坂遺跡」埼玉考古 2
34	打		趣	富士見市水子字東子原	富士見市教育委員会 1976『打越遺跡第2地点・第3地点』文化財報告第11集
2000					富士見市教育委員会 1977『打越遺跡 V』文化財調査報告第12集
					富士見市教育委員会 1977『打越遺跡第4地点・第5地点・第6地点』文化財調査報告第13集
					富士見市教育委員会 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集
35	中		道	朝霞市大字岡字中道 777, 776-1, 783-1	東洋大学中道遺跡発掘調査団 1976『中道遺跡調査報告書』
36	西	下		東久留米市下里 4-4	平塚和義・新藤康夫 1973「東京都黒目川上流域の先土器時代資料」考古学ノート 4 号
					東久留米市教育委員会 1976 『西下里遺跡』
37	下		宿	清瀬市下宿強清水	清瀬市史編纂委員会 1973 『清瀬市史』
38	砂		Ш	所沢市三ヶ島字砂川 1075	所沢市教育委員会 1974 『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡』
					戸沢充則 1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」考古学集刊 4 巻 1 号
Ï					本橋清・安蒜政雄 1969「埼玉県砂川遺跡の一尖頭器」考古学集刊 4 巻 3 号
					安蒜政雄・戸沢充則 1975「砂川遺跡」日本の旧石器文化 2
					安蒜政雄 1974「砂川遺跡についての一考察」 史館 2 号
					安蒜政雄 1977「砂川遺跡についての一考察」史館 9 号
39	浅	間	谷	西多摩郡瑞穂町大字箱根ヶ崎浅間 2521-3	吉田格・肥留間博 1970『狭山・六道山・浅間谷遺跡』東京都瑞穂町文化財調査報告 [
40	六	道	Щ	西多摩郡瑞穂町大字石畑字狭山嶺 2258-1	" "
41	狭		山	西多摩郡瑞穂町大字箱根ヶ崎狭山 26-1	" " " " " " " " " " " " " " " " " " "
42	前	田 耕	地	秋川市二宮字前田耕地 1171-1	前田耕地遺跡調査会 1977 『前田耕地 I 』
					前田耕地遺跡調査団 1978『前田耕地遺跡』
43	元	橋	本	相模原市元橋本1	元橋本遺跡調査団 1978 『元橋本』
44	下:	九沢山	谷	相模原市下九沢山谷	江藤昭・中村喜代重 1977『下九沢山谷』
45	寺		尾	高座郡綾瀬町寺尾字代官 678-1	鈴木次郎・白石浩之 1978「綾瀬町寺尾遺跡の調査」第2回神奈川県遺跡調査研究発表会
46	小	園前	畑	高座郡綾瀬町小園前畑	小野正敏 他 1972「小園前畑遺跡」綾瀬町文化財調査報告第1集 神奈川県教育委員会
47	月	見	野	70	明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団 1969「概報月見野遺跡群」
48	本		郷	横浜市戸塚区瀬谷町本郷	岡本勇・松沢亜生 1965「相模野台地における関東ローム層中遺跡群の研究」物質文化 6
49	花	見		横浜市緑区川和町 2128	鈴木重信・坂本彰 1978「横浜市花見山遺跡の調査」第2回神奈川県遺跡調査研究発表会
50	法	蓮 寺		船橋市藤原町法蓮寺山	斉木勝 1973「先土器遺物包含層の調査」『小金線』
51	今	島	田	市川市柏井町今島田	市川市史編纂委員会 1971『市川市史』第1巻
52	殿		台		安蒜政雄 1970『殿台遺跡』市川市文化財調査報告書第 2 集 杉原荘介・大塚初重 1955「常総台地における関東ローム層中の石器文化」駿台史学第 5 号
53	丸			市川市国府台丸山	杉原壮介・天塚初里 1900 吊総石地にわりる 日本 日中の日命人に」 秋口入丁寿 0 5
54	鴻		巣	柏市鴻ノ巣	古内茂・矢戸三男 1974 『柏市鴻ノ巣遺跡』 房総考古資料刊行会 柳田敏司・横川好富・小林達雄 1965 『米島貝塚』 庄和町文化財調査報告書第1集
55	米	島貝	塚	南葛飾郡庄和町米島 818-824	柳田敏司・横川好富・小林達雄 1905 『木島貝塚』 圧和門 又に超調査報告書場 「朱 荒井幹夫・実川順一・田中英司・織笠昭 1971 「大宮台地の先土器時代新資料(続)」 Prehistory 26
	5222		_	A DESCRIPTION OF THE PROPERTY	流井幹天・実川順一・田中央司・織笠昭 1971 人呂台地の元工語時代制資料 (続力) Helistory 25 山本良知・黒須岑生・田中英司 1975 局部磨製石斧を出土した風早遺跡」考古学ジャーナル No. 126
56	風		早	南葛飾都庄和町西今野	山本民知・黒須今生・田中央刊 1970 周印階製石庁を山上した岡十週前 つロテンサーブル 100 120

No.	遺跡名	所 在 地	文献
57	浦寺	鳩ヶ谷市浦寺大通 662	加藤晋平・藤本強・大井晴男 1961 「埼玉県鳩ケ谷町浦寺遺跡・関東ローム層中の石器群について」 考古学雑誌 47-1
58	海 道 西	川口市石神	「海道西遺跡」第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨
59	えんぎ山	浦和市大崎棚井えんぎ山	安岡路洋 1969「浦和市えんぎ山の調査」第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨
60	大 崎	浦和市大崎	浦和市史編纂委員会 1974 『浦和市史』第1巻
61	南 部 領 辻	浦和市南部領辻	" " "
62	大 古 里	浦和市三室字大古里	浦和市大古里遺跡調査会 1976『大古里遺跡発掘調査報告書』
63	片 柳 下 宿	大宮市中川 544	大宮市史編纂委員会 1968『大宮市史』第1巻
64	中 川 八 幡		" " "
65	大 和 田	大宮市大和田 1900	" "
66	上 峯 陣 屋	与野市上峯陣屋	安岡路洋 1962「大宮周辺の無土器文化」埼玉文化月報 21
			梅津昇 1968「旧石器採集の好機」考古学ジャーナル 20
67	台 耕 地 南	大宮市三橋 4-220	大宮市史編纂委員会 1968『大宮市史』第1巻
68	間ノ谷	大宮市三浦 4-985	
69	三橋	大宮市三浦 4-230~237	" " "
70	西 本 郷	大宮市西本郷	" " "
71	吉野原I	大宮市吉野原	" " "
72	高 台 山	大宮市砂町 2-268	" " "
73	十二番耕地	上尾市原町十二番耕地	早川智明 1974「伊奈町大山遺跡」第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
			荒井幹夫・実川順一・田中英司・織笠昭 1971「大宮台地の先土器時代新資料 (続)」Prehistory 26
74	大 山	伊奈町大字小室字大山	早川智明 1974「伊奈町大山遺跡」第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
75	西原	西町西原	笹森健一 他 1972『加倉・西原・馬込・平林寺』埼玉県遺跡調査会報告第14集
76	新 曲 輪	The state of the s	柳田敏司・庄野靖寿・青木義脩 1966 「岩槻市新曲輪遺跡調査報告」埼玉考古 4 号
77	諏 訪 山 B	岩槻市諏訪山	柳田敏司 他 1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第8集
78	南	岩槻市南	" "
79	武蔵加納城地		塩野博 1965『武蔵加納城址』埼玉県遺跡調査報告第2集
80	柏原	桶川市柏原・若宮・八幡原・前原	甘楽義雄 1971「桶川市柏原遺跡」Prehistory 24
81	東台	桶川市原町東台	桶川町教育委員会 1968『川田谷の遺跡と遺物』桶川町文化財報告Ⅰ
82	榎 戸	北本市下石戸字久保	吉川国男 1972「北本市の遺跡と遺物」『北本市の埋蔵文化財』北本市文化財調査報告書第1集
83	宮岡	北本市高尾字宮岡	n n n n n n n n n n n n n n n n n n n
84	城 山	鴻ノ巣市大間原	塩野博・菅谷浩之 1962「埼玉県鴻ノ巣市城山発見のナイフ」若木考古 62
85	平 塚 新 田	熊谷市平塚新田	山内幹夫 1973「比企丘陵北部発見の先土器時代資料の紹介」史峰 2 号
86	立正大学内	熊谷市万吉	n n
87	小 岩 井 渡 場	飯能市小岩井中原	安岡路洋・中島宏 1977 『渡場遺跡』 飯能市教育委員会
88	中野久木	流山市中野久木	中野久木遺跡調査団 1974『流山市中野久木遺跡調査報告』流山市教育委員会
89	新開	入間郡三芳町藤久保字唐沢·	新開遺跡調査団 1977『新開遺跡』第 1 次調査 A・B・C・D 区 概報,三 芳町 教育委員会
		同町竹間沢字新開	新開遺跡調査団 1978『新開遺跡』第2次調査H~P区概報,三芳町教育委員会
90	坂 浜	稲城市坂浜 986	樋口清之「東京都南多摩郡稲城町坂浜遺跡」上代文化38
91	平 尾 No. 9	稲城市平尾	東京都住宅供給公社南多摩郡平尾遺跡調査会『平尾遺跡調査報告』
92	多摩ニュータウン No. 52	多摩市市乞田岩の入	多摩ニュータウン遺跡調査会 1967『No. 52 遺跡の調査』多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ
93	" No. 467	多摩市乞田平戸	多摩ニュータウン遺跡調査会 1973『多摩ニュータウン遺跡調査概報』―No. 29・467・468・499・501・502 遺跡―
94	" No. 394	八王子市南大沢1号	多摩ニュータウン遺跡調査会 1977『多摩ニュータウン遺跡調査概報』―No. 394 遺跡―

Ⅱ 遺跡調査の概要

1. 調査にいたる経緯

多摩蘭坂遺跡がいつ頃に認知されたのかは、実ははっきりしない。本遺跡の調査速報を「考古学ジャーナル」140号に載せた時は、戸田哲也の発見になる、と記したが(舘野、1977)、戸田氏は滝沢浩氏にこの遺跡を教えて貰ったし、氏の論文中に出土したナイフ形石器の実測図があるという(滝沢、1964)。そこで改めて、滝沢氏の論文を紐解き、氏に事の次第を尋ねたところ、前年(1963年)頃に友人の露見信行氏が道路際のカッテング面で露出している礫群を見つけ、移植ゴテで掘じくっていてこの石器が出土したのだ、という。とすれば、本遺跡の発見者は覊見信行氏ということになる。

一方、松井新一氏が発見したという説もある。松井氏は国立高校に勤務の傍ら、国分寺市の文化財保護審議委員として長く市に貢献されているが、先年、これまで氏が情報収集されてきた文化財関係の疣大なアルバム類を教育委員会に寄贈された。この中に、多摩蘭坂先史遺跡とする、昭和47年4月11日付撮影のネガがある。この位置も靎見氏と同じ北側露頭で、礫が顔をのぞかせている。しかし、昭和47年という年月は、歴史が残すぎる。というのは、この年都教育庁文化課に就いた小田静夫・雪田孝の両氏がこの遺跡の発掘を試みんと地主に申請のため訪問している。小田氏は松井氏が記された記録を以前に見て、野川流域の最上流



Fig. 11 多摩蘭坂遺跡採集のナイフ 形石器 Knife-shaped Tool from TA-MARANZAKA SITE

の遺跡として銘記していたという。そこで、改めて松 井氏に遺跡発見の経緯を尋ねたのだが、とくに気憶が ないということであった。

それはともかく、以上の情報からも多摩蘭坂遺跡というのは、バス通りに面する北側の台地を指すのが妥当であり、今回の調査区域は、開析された支谷を隔てたその北側台地にある。したがって、本遺跡は地点を変えて呼称すべきかもしれない。しかし、当初に発見された遺跡の正式調査がないので、多摩蘭坂遺跡に包括しておくことにする(註)。

それでは、遺物発見のない本地区が何故に遺跡の範囲に取込まれたのであろうか。それは、国分寺崖線上の支谷の入る凹地地形では、崖線下に大抵湧水が認められ、この台地上には例外なく先土器時代の大規模な遺跡が存在するという、地理的立地上の特徴から、当地もその蓋然性が高いという観点からと考えられる。さらに、もう一つの要因は、開発され行く崖線上にあって、本遺跡の範囲は幸いにも雑木林あるいは植木・花壇等に使用されて原地形が残されてきたことによる。以上の事由から、東京都遺跡台帳のNo. 2726として登録された(東京都教委、1974)。

さて、この多摩蘭坂遺跡の地にも開発の波が押しよせ、破壊の危機にさらされるようになったのは 1951 年秋口である。以下、調査にいたるまでを簡単に記してみよう。

9月1日 国分寺市宅地開発等に関する審査会の席上、三ツ木産業株式会社による内藤2丁目2-3、すなわち本遺跡における造成計画が明らかにされる。市教委員会はこれを受けて、三ツ木産業に対し、計画予定地が遺跡の中心部分であるので、工事着手にあたっては事前に発掘調査が必要である旨説明する。そして、事前調査に際しては所定の法的手続きを踏むよう







Fig. 12 (上) 昭和 37 年当時の遺跡の露頭 Open Cut in 1962

Fig. 13 (中) 同所露頭から出土した石器 An Artifact from Open Cut at TAMARAN-ZAKA SITE

Fig. 14 (下) 調査終了後の遺跡(昭和 54 年) After Excavation (1979) 指示する。

9月8日 三ツ木産業株式会社取締三ツ木次平より、保護法57-2条に基づく発掘届が国分寺市教育委員会に提出さる。これにより事前調査の協議に掛ることになるものの、市教育委員会は武蔵国分寺跡の継続調査に加えて、新たに恋ケ窪遺跡の緊急調査を抱えてその体制作りが急がれていた最中でもあり、新たに提起した多摩蘭坂遺跡の件については手が及ばないのが実情であった。このため、暫くは調査員の確保を第一義とする調査体制の目途を立てることが焦眉の急務であった。

9月28日 国分寺市教育長から東京都教育長宛に 発掘届を進達。これにより、市教育委員会は都教育庁 文化課と調査体制の件で、再三にわたる協議を重ねる こととなる。

12月10日 東京都教育長から文化庁長官宛に発掘 届の進達。この頃、三ッ木産業から市教育委員会に擁 壁工事を先行したい旨の懇請あり、現地で協議。調査 に支障ない範囲の許可を指示する。

しかし、12月下旬に市計画課より擁壁工事が未許可であるとの連絡があり、現地で市教育委員会、市計画課、多摩西部建築指導事務所それに三ツ木産業の4者で以下のような取扱いの協議がなされる。①擁壁工事は都の許可を待って着工する。②それ以外の範囲は現況のままとする。

52年1月中旬 三ツ木産業より工事着工の遅延による社の窮状から、3~5月に一部造形工事を着工したいと、強力な要請あり。市教育委員会は、もはやこれ以上の調査遅延は道義的にも不可能との判断から、とりあえず、遺跡の内容把握のために試掘調査を実施したい方向で、武蔵国分寺遺跡調査会の席上で関係者と協議する。幸いにも、昭和51年12月1日に恋ヶ窪遺跡調査会が発足しており、この調査が52年3月に開始されるところから、同調査団(団長 永峯光一)に協力を要請し、さらに国学院大学考古学研究室舘野孝等の参画が得られ、急拠調査団の編成がなされるに

いたった。

そして、1月下旬に試掘調査の方法等に関する最終 協議を行ない、調査の準備を整えた。

2月3日 永峯光一より保護法 57-1 条に基づく発掘届が文化庁長官宛に提出さる。

このような経緯をふまえ、2月4日から試掘調査が開始されたが、以下にその調査スタッフを掲げておく。そして、試掘調査の結果本遺跡が先土器時代における複合した遺跡であることが判明し、試掘調査から本格調査へ切換っていく。それとともに、調査体制も多摩蘭坂遺跡調査団から恋ヶ窪遺跡調査会に委譲する形式をとっていくことになる。

註 小支谷の底を道路が通っており、暗闇坂というら しい。とすれば、本地点の方は暗闇坂遺跡と称す べきかもしれない。

多摩蘭坂遺跡調查団

団 長 永峯光一(東京都文化財審議委員) 調査員 安孫子昭二(東京都文化課学芸員) 舘野 孝(国学院大学考古学研究室) 堀井晶子(国学院大学考古学専攻科卒) 渡辺裕水(明治大学考古学専攻科卒)

調查補助員 小日向正・熊川英子・行田裕美・服部実 喜・女屋和志雄・熊谷剛文・新井真博・横山 裕平・田中耕作・藤村由香里・浦辻栄二・関 原栄子・樫村友延・保坂康夫・砂田佳弘・芹 沢清八・沢 正二・村井 実・原田昌幸・入 山恵一

2. 調査の方法と経過

遺跡の範囲・状況 当該地はかつて長い間武蔵野特有の楢・椚・欅等の混淆林で、杉の大木が所々に混っていたらしい。それを先代の地主が抜根し、植木・草花の造園にしたという。このため、遺跡は保存が比較的良好であった。

工事で造成される範囲は、南北巾が暗闇坂を上って左に折れる北側の道路から崖線までの約30 m、東西巾が坂下から崖線沿いに西に70 m 行った地点まで、面積にして約2,600 m²の範囲である。しかし、調査に着手した2月旬には、既に崖線沿いに巾2 m の外擁壁工事が行なわれ、このため斜面下方(標高79 m ライン)が削平されていた。この土取り工事は台地上からユンボで行なったものだが、かなりの深さまで行なう都合上、ユンボ自身も地表面を掘下げ、自ら沈んだ恰好で操作しており、標高81 m ライン辺の遺物包含層を破壊した在り様であった。

一方,東側の谷へはグリッドのx-30 区あたりから傾斜がつのる。このことから,調査対象範囲は標高 $80\sim81\,\mathrm{m}$ ラインにあたる東西 $65\,\mathrm{m}$,南北 $30\,\mathrm{m}$ 内の約 $1,800\,\mathrm{m}^2$ といった所であろう。なお,発掘調査したのは約 $1,000\,\mathrm{m}^2$ であるから,対象面積の $56\,\%$ に相当する。

調査区の設定 北側の道路境と西側の境界(道路 と直交する)をそれぞれx軸・y軸にあて、北西隅を 起点とする 1 区 2 m のグリットを、範囲全体に机上 で作成した。ただし、この座標の原点は南西隅に振替 えるので、実際上の起点である北西隅の区画は、(1,20) 区になる。以上のグリッドで、y 軸の方位は $N44^\circ$ W を指す。

当初の設計によれば、該地は北西側から東側および 南側に雛段状に造成され、それによって先土器時代と 目される文化層の深さも大方は削平されるものであっ た。一方、先土器時代以外にも遺跡が複合するのかど うか、遺物の分布範囲や包含深度と層序の関係は、ま た,遺物の密度や遺構の存在等から,全体の調査計画 と調査費用の積算を計らなければならない。

以上のようなことから、遺物全体に 4m×4m (16 m²) の試掘区を 14 ケ所設定した。この試掘区の 総面 積は遺跡対象面積の 1割方に相当する。設定した調査 区は次の 14 区である。

 $(6 \sim 7, 17 \sim 18) \cdot (6 \sim 7, 12 \sim 13)$

 $(6 \sim 7, 7 \sim 8) \cdot (11 \sim 12, 17 \sim 18)$

 $(11\sim12, 12\sim13) \cdot (16\sim17, 12\sim13)$

 $(16\sim17, 17\sim18) \cdot (21\sim22, 17\sim18)$

 $(21\sim22, 12\sim13) \cdot (26\sim27, 17\sim18)$

 $(26\sim27, 12\sim13) \cdot (24\sim25, 9)$



Fig. 15 試掘調査の開始 Opening of Test Excavation



Fig. 16 グリッド深掘り A Test Pit

試掘調査の概要 調査は西側から東側に向けて進行させたが、調査区の片端から先土器時代の遺物や礫群が出土していった。その包含の状態はとくに第Ⅳ層下部に濃密に広く分布し、遺跡がかなり大規模な集落址であることが推察されたのである。あまつさえ、遺物包含層は1枚にとどまらず、第Ⅲ層、Ⅵ層、第Ⅳ層から第Ⅹ層にかけて複数枚検出されたのである。各区の遺物包含状況は次のようである。

(6~7,17~18) 区。黒色土下 $70 \,\mathrm{cm}$ で第 \square 層ソフト・ロームにいたる。ソフト・ローム下部に石器・礫の散布あり。これを突破し、第 \mathbb{N} 層ハード・ローム下部で礫群の集中が $3 \,\mathrm{rm}$ 下部で礫群の集中が $3 \,\mathrm{rm}$ に相接して検出された。礫群を取上げたが、以下は掘下げていない。

(6~7, 12~13) 区。黒色土下 20 cm で第Ⅲ層にいたる。第Ⅳ層下部で石器の出土あり。その後, 180 cm の無遺物層を介在し, 第Ⅳ層から第Ⅴ層にかけてチャートの石器が出土。

(6~7,7~8)区。第Ⅲ層以上が掘削されており、第Ⅳ層の上面が露出している。遺物は第Ⅳ層下部および第Ⅹ層上部に出土。

(11~12, 17~18) 区。黒色土下 85 cm で第Ⅲ層にいたる。第Ⅲ層下部で槍先形尖頭器の一群が出土。しかし,第Ⅳ層下部からの遺物出土がなく,広く分布する第Ⅳ層下部の文化層にも空白地が存在することが確認された。

(11~12, 7~8) 区。第V層下部および第X層に遺物出土。とくに第X層から出土したチャートの一群は、接合する纒った資料である。

(16~17, 17~18) 区。第Ⅲ層下部および第Ⅳ層下 部に遺物出土。

(16~17, 7~8) 区。第Ⅳ層の中位まで削平されている。第Ⅳ層下部に礫群および第Ⅹ層に遺物出土。

(21~22, 17~18) 区。第Ⅲ層に大形剝片および第 Ⅳ層下部に黒曜石の砕片を多量に包含する一群が出 十。

(21~22, 12~13) 区。第Ⅲ層上面まで削平されて



Fig. 17 $(6 \sim 7, 17 \sim 18) \boxtimes$ Grid (6-7, 17-18)

いる。第Ⅲ層下部および第Ⅳ層下部に遺物出土。とく に、第Ⅳ層下部は礫群が東に連なるところから拡張 し、やがて (26~27, 12~13) 区側の拡張範囲と接合 する。

(26~27, 17~18) 区。第Ⅳ層下部に遺物出土。土 置場に難儀して、それ以下は掘下げず。

(26~27, 12~13) 区。第Ⅲ層下部および第Ⅳ層下部に遺物出土。とくに,第Ⅳ層下部で礫群が検出されたことにより広く拡張し,面的な調査に切換える。

 $(23\sim25, 9)$ 区。第X層の遺物が斜面寄りに多く分布するところから、分布の広がりを確認すべく調査した。第X層からナイフ形石器が出土。

遺物の記録方法 出土遺物には石器や剝片それに 焼礫の類があるが、これらは次のように記録した。焼 礫等が集中して遺構を構成する礫群等は、縮尺10分 1で実測し、それ以外の散布の状態では縮尺20分の 1で実測した。各遺物はグリット別に1点ずつ通し番 号を付して取上げ、遺物台帳にはその原位置を記録した。なお、礫を取上げる際にはその頂部に、北の方位 を示す矢印をマジックインキで記した。この記号により、実測図に則った礫群の復原を容易にすることと、 その礫の焼損の度合いや附着物の位置の観察に役立つ し、破損した礫同志が接合する場合の位置関係等も分りやすいという利点がある。



Fig. 18 礫群の計測 Measuring of Pebble UNIT

ローム層中には炭化物片の集中する所がある。焚火 をした場所と考えられ、それが礫群とどのような配置 関係にあるのか問題視されてきた。このような範囲 は、ジョレンや鎌で簿く剝ぎながら炭化物の検出につ とめ、1点ずつ妻揚子で表示し、その集中範囲の記録 (実測図・写真)を作成した。

工事設計の変更 調査の進行に終始付添って発掘 の進捗を直視してきた施工者は、2月中旬にいたり、 雛段状造成を白紙撤回し、遺物包含層を損なわない範 囲での平担造成に変更する、と通達してきた。実際の ところ, 試掘区のいずれもから遺物の出土が報じら れ,この分では調査期間および費用の兼合いから,造 成の目途が困難であるとの判断からとられた措置のよ うである。

現時点での埋蔵文化財行政は、原因者の協力を得て 発掘調査の推進を計ってきた以上, 削除されない範囲 までをも調査することは、自ら破壊行為を助長すると いう矛盾を併せもつ。このために、設計変更という措 置に対しても一概に否定できる立場にはない。

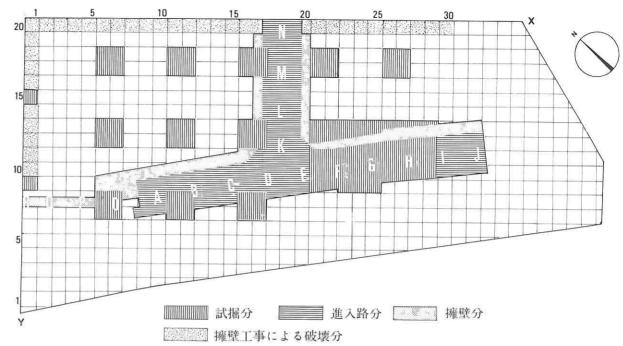


Fig. 19 原因別による調査範囲 The Position of Excavation

向後のケースとして、開発地が遺跡に掛る場合に、 原因者は同様な設計変更あるいは盛土設計という形で 調査の回避を計る例が増すであろう。しかし、このよ うな場合にしろ、遺跡内容を最低限度把握できるだけ の調査の必要性を行政指導しなければ, その遺跡は "保存"という名目の下に、永遠に隠蔽されてしまう であろう。

進入路の調査 設計の変更に伴なって、3月に入 ると試掘調査から進入路の範囲の調査に切換えた。た だ調査団も、礫群の集中と石器分布の濃密な(21~ 29, 10~13) 区を中心とする範囲の重要性を施工者側 に説明し、拡張して調査したことは幸いであった。こ の範囲の接合資料を通して、集団の行動がかなり動的 に把握できそうな気配がある。

から西に直角に入り、y-10区附近でT字状に分れる。 だから, あたかも遺跡の中央部に大規模なトレンチを 入れた恰好になる。 巾 5.5 m, 延長距離約 68 m, 面積 にして約374 m² というのがこのトレンチの法量であ る。ところが、あいにくこのトレンチは当初のグリッ ドとは一致しない。そこで新たにこの範囲を西側から 5 m づつ区切り、A、B、C、……のアルファベッ ト大文字を冠して便宜的に呼称することにした。東端 区は J 区となる。 南北範囲も同様に、 南側から北側に K, L, M, N区とした。

この進入道路の掘削工事の深度は第Ⅳ層と第V層の 境であったが、第VI層まで調査し、東西トレンチの南 半分は層序の実測のため第X層まで調査した。

この調査では遺跡を面的にもカバーすることができ ところで進入路であるが、 $5.5 \,\mathrm{m}$ 巾で $x-17\sim20$ 区 たために、礫群を中心とする纒まり と広がり、分布

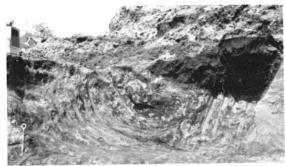




Fig. 20 須恵器の出土地点 The Place producing Sue-Pottery Fig. 21 進入路東西方向の調査

An Excavation Scene

が、やはり範囲全体に及ぶことを確認できた。とくにその纒まりを見ると、A区、C区、M区を中心とするユニット等が注目されるが、C区のユニットでは、従来の資料には見当らなかった大形のナイフ形石器の出土が強く印象づけられた。

須恵器の出土 進入路分の調査は3月初旬から1 ケ月を要して行なわれたが、この間に思いがけない遺 物の出土を見た。

3月8日夕刻のことである。L区西壁際で、一抱え もある杉の切株をユンボで抜根して貰い、この後を清 掃したところ、黒土の落込みの中から須恵器の埦に環 状に配された銭貨6枚が出土した。埦はユンボの打撃 で口縁側が破壊されていたが、器形復元は可能であっ

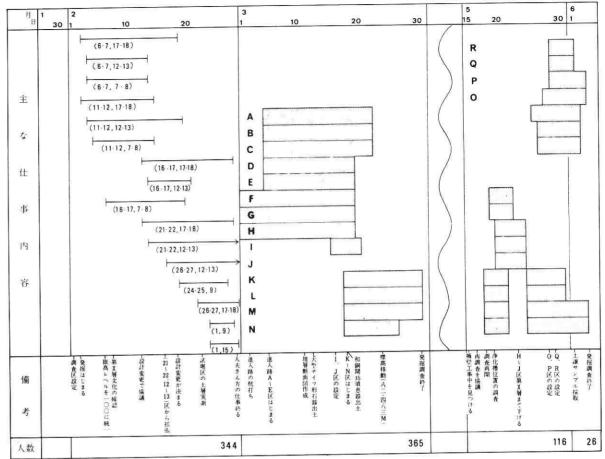


Fig. 22 調査工程図 The Progress of Excavation

た。この日、武蔵国分寺遺跡調査会事務所にこれを持 込み、須恵器を洗い、銭貨の錆下しをしたところ、須 恵器は8C後半頃であり、底面に墨書が認められた。 銭貨は、和銅開珎5枚と万年通宝1枚であった。

このことから、10日にユンボで上げられた黒土を入 念に再捜索したところ、新たに万年通宝1枚と須恵器 の細片2点を見出した。

擁壁部分の調査 3月末に進入路の調査が終了したが、外擁壁の設計に許可がおりず、現地はそのまま

になっていた。それが、5月10日頃に漸く許可され、 工事に着手するらしいという情報がもたらされた。

前の調査で、和銅開珎を含む須恵器の出土があったが、鎮壇具としての性格がつよいことから、造成の削平面がローム面付近なので、あるいは建築遺構の存在を確認できるかもしれないと期待していた。

そこで、5月14日に現地に赴いたところ、北側の 道路沿いが2m程の巾で削り取られているではない か。驚いて工事担当者に問うたところ、設計図通りの 擁壁工事であるという。前回の調査もこの設計図に則り行った筈なのに、といぶかしがったが、調査したのは道巾であり、実際は道路際に立つ擁壁の内のりまで削平されるのであった。このようにして、北側の道路沿いの擁壁部と西境の擁壁部は既に手遅れの状態であったが、進入路両側の擁壁工事が未着手だったのは不幸中の幸いであった。

この件を原因者と再協議し、5月 18日から急 拠 再調査に踏切ったのである。これにより、それまでの進入路の調査巾は5.5 m から8 m に拡幅されることになった。ただし、東西トレンチの南壁側は盛土中になるので、北側2 m 分だけ拡張し、7.2 m となる。

調査はまず北側からの進入路の両側を,p-A層上面で清掃して,鎮壇遺構に伴なうであろう建築址の探索を試みた。この範囲はx列の $13\sim17$ 区, $21\sim24$ 区を含むものであったが,柱穴址1本すら検出できなかった。

擁壁部分の調査は進入路東側を、次いで西側を行なった。東側の(20、13~20)区ではソフト・ローム(第III層)で槍先形尖頭器が検出されたが、第III層中に遺物は殆んど出土せず、その意味ではユニットを外れると遺物分布の空白化が顕現することを明確にしたといえよう。III区北側は既に試掘調査の拡張で第IIIM層から第IIIM層を調査していたために、この下から調査を再開したが、遺物は殆んど出土しなかった。

次いで,進入路の西側に移り, $K\sim W$ 区西側を調査した。前回の調査で,L,M区の西壁際に直径 4m程度のユニットが半分掛っていたものが,此の度さらに 110~cm 拡幅したことにより,ユニットのほぼ全体を 調査した。

また、A~C区北側の擁壁部調査も同様に進められ、A区ユニットの連なりを検出した。これとともに、A区の西側にO、P区を、さらに宅地の境界にいたが、A区の西側にO、P区を設けた。このようにして進められた擁壁部分の調査が終了したのは、6月4日であった。

3. 遺物整理の方法と工程

6月4日に調査終了の後,6月半ばから出土した遺物類および実測図や写真等の記録類の整理作業に取掛った。この作業は当初の計画では12月に終了し、年度内に報告書刊行の予定であった。しかし、その実施過程で附帯するいろいろな問題や疑問が生じ、その条件を解決するために新たな項目を開拓し、試行錯誤をくり返した。このため当初の計画は大巾に修正され、結果的にはかなり複雑な工程を踏むことになった。もちろん、それに伴なう人員数、時間数も大巾に超過した。同時に、この作業工程を経て獲得された成果も更に大きいものがある。

本報告はそれらの成果が項目別に掲げられているために、ややもすれば理解しにくい部分があるかもしれない。実際の整理工程は、それらの項目がシステム的に連携し合いながら、進められてきたのであり、独立的に扱われることは殆んどない。そのような観点から、本遺跡の整理作業工程を振返るのもあながち無意味なものではなかろう。以下、整理工程の順を追って、原稿作成までのプロセスを簡単に記してみよう。

① 遺跡水洗・註記

遺跡から出土した石器および礫の類は 4,886 点を数えた。まず水洗するにあたっては、収納した遺物をラベルの通し番号順に配列し、調査で作成された遺物台帳と照合し、洩れがないことを確認する。次ぎに遺物の水洗であるが、石器類は軟らかいブラシで、礫類のやや硬めのブラシと区別した。

註記の記号は、TM (多摩蘭坂の略称) —Grid 名もしくはA、B等の大区画名—遺物取上げ番号で行なった。

註記済の遺物を今度は石器と礫の類に分別し、グリット別に纒めてコンテナに収納する。

以上の作業は約1ヶ月,延190人を要した。

② 石器台帳

①で分別された石器類は1,234点,遺物全体の25.3

%に相当する。

石器台帳は、発掘現場で記載してグリット別・大区 画別の遺物台帳をもとに、新たに項目を追加し、整備 したものである。すなわち、この項目とは石質、器 種、標高レベル(上・下)、自然層序、文化層、計測 値(長・短・厚・重量)である。計測値の要領は、特 にフレイクであるが、長さはバルブを上にした垂直位 を、短さは長さに交叉させた端から端までの長さであ る。

ところで、この石器台帳では、礫は標高レベルだけを記載し、残りの項目は白抜きとした。というのは、 礫は石器とは異る要素を検討する観点から、別項目を 設定する必要があり、別に⑧の礫台帳を作成したもの である。

以上の作業は、遺物全点のレベルの標高値換算および層序の確認、それに石器の項目照合などいろいろあり、約1ヶ月、延120人を要した。

③ 母岩別分類(石器)

礫と区別された石器は、最初の作業工程として母岩 別の個体に識別するとともに、極力その接合を行なっ た。識別された資料は母岩別台帳に登録される。

石材には黒曜石、チャート、珪質頁岩、頁岩、安山岩等があるが、顔付きが酷似して識別の困難な黒曜石は、混入の誤ちを防ぐ意図から、とりあえずユニット内での識別に留めておいた。チャート等は比較的識別がし易いとの判断から、遺跡全体に眼を拡げて識別の対象としたが、いま振返ると幾分の混入を生じたかもしれない。それはともかく、チャート等は最初は、母岩別に識別することにも戸惑いがあったが、眼が慣れるにつれて接合作業の成果も上っていった。これに対して黒曜石は、29個体までの識別を行なったものの、接合となると難しく、結局5個体分の接合に留まった。

母岩別分類は 2.5 ヶ月を要し、接合作業はこれに重 複しながら 4 ヶ月を費した。しかし、経験と勘が加味 される分野が大きいだけに、実測図作成中にもしばし

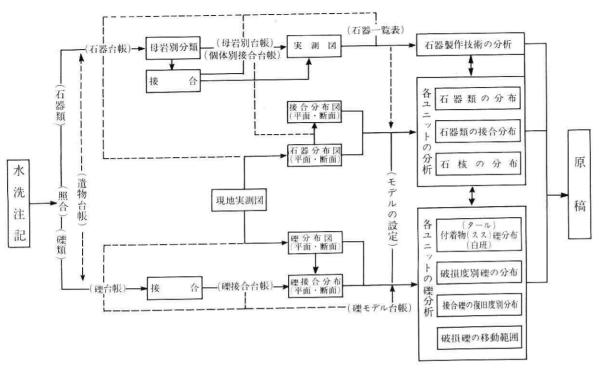


Fig. 23 整理工程図
The Progress of Research

ば接合し、図を改める破目に陥ったものである。

④ 母岩別台帳(石器)

母岩別に識別された資料の台帳であり、母岩別に1 葉1点のカードからなる。このカードにはチャート、 安山岩、黒曜石、千枚岩、凝灰岩、砂岩、石英、砂質 頁岩、珪質頁岩、頁岩の10種類が分別され、さらに 1母岩1カードでそれぞれの出土地点、器種の別、標 高値、相互の接合関係、実測の有無を項目とした。

例えばチャート (chert) は頭文字のCを記号化し、それの No. 9 資料は C-009 とする。009 を母岩とする 剝片等は 31 点あるが、その中での接合関係を実測した資料等と対照できるというものである。

なお、第3文化層の石器類の母岩別個体数を見ると、頁岩が72点で最も多く、次いでチャート66点、

安山岩 59 点, 珪質頁岩 53 点, 黒曜石 29 点, 砂岩 14 点, 凝灰岩 12 点, 砂質頁岩 11 点, 千枚岩 3 点, 石英 2 点の順となる。

⑤ 接 合

識別された母岩別の資料を接合する作業。約4ヶ月を費し、261ヶ所(102個体)の接合に成功した。それらは個体ごとに個体別(接合)台帳に登録される。

⑥ 個体別(接合)台帳

接合した個体は遺物番号,器種,標高値,重量,出 土地点,実測の有無が項目として記入される。これら の接合資料は剝片の剝離に従って遺物番号を配列し, 矢印で表示する。

さらに、これらの接合関係を模式的に図化したもの を書き添えておく。

⑦ 石器実測図

個体別に識別された資料および接合された資料は、 次の段階として実測図作成となる。これらは原則として1葉1点でパンチカードに行なった。パンチカード を用いたのは、その後に必要となる分析の操作を斟酌 したからである。

一方、接合資料の実測法は剝離された順に1枚づつ外していくという、これまで行なわれてきたような剝片を接合して石核に近づいていく方法とは逆の仕方を採った。同時に、その接合し合う範囲をスクリーントンで区別し、互いの番号を貼って表示した。

このようにして作成した資料は528枚(接合資料59個体)を数えるが、この数値は全資料1,239点の42.6%に相当する。このうちから図版に掲載したのは355個体(接合資料56個体)である。これらの資料の多くは実は所謂石器よりも剝片の類である。しかし、剝片といえども製作技法の復元に重要な意味があるし、何よりも石核の種類の多さから、逆に、剝された剝片の種類の多さが注目されたのである。また、ユニットによる石核と剝片の関係から製作技法のくせを見出さんものと鋭意実測を行なったものである。

石器実測図には4名が従事し、2ヶ月を要した。

⑧ 石器平面·断面接合図

石器類の中で、接合した資料(接合個体 102)を抽出して各々の出土した地点を結んだものである。その意味では礫の平面・断面接合図と共通し、ユニットの捉え方に重要な意味合いを持たせることになる。

しかし、仔細に検討すると、接合資料は単に点と点が接合するというだけにとどまるものではない。石核から剝取された剝片は、その剝離順序を復元できるところから、逆に石核の移動の軌跡を知ることができる。例えば石器ナンバーの275、276は、U-12方向からU-13方向への移動の軌跡が辿れるのである。このように見ると、遺跡から出土する石器と礫は異った動きを持つことがわかる。いうまでもなく、双方の用途・機能の性格が異るためである。ユニットはこれら

遺物を言	五值	各和	INLO	(B)	包含作	文化桥	表生	75	作工	有者			国安香节
001				34.717	1A.k								.t2E=
002 003			20,735	75.258	1	1							1
- 004	F. vil	117		20.938 30.988	1 1 -	3 3	1.03	در	0.9	7			
005	A 200	317		70.723		1.7	(3.9)	12	V. 7	-/-			150
006			80.723	86.703									
007			81.703	90.677									
008				70.798									
009	24.5	F (6(1)		\$0.513		73	2.8	8.1	2.0	40			4.4
010	学覧	7代表研以		80.773		4	(1.1)	0.85	2.45	SULT			
虚拥 惠考	2.00						TAI			R. A.	性生	26	
. 001	3 m	3.16	3	-1_	180	124 3	43 . 5	T- 7-	* %		9-44 Th	15 B	TH' 禁药
002	W.	Thu The	82 833	20 758 20 248	78.7	神子 22.8年/2	D 39	29 23 0		+ -	-	4-1-	
	147	KL:	22 873	D. 138				29 2	16 -		-1-	* 0	£ 5.
003				54-124				2.0 -1	-/-				~
003	54	TEN		05-712		11 11 12 14							
		The	82 728	\$5 723 \$7 763			D 90	21 2.7	40 A		a .b	-	
005 006 007	5/4	选, 选,	\$7.728 20.743	95 723 81 763 91 888			D 8.0	34 2-7	50 -0	-6-	0-6	-	0 -
005 006 007 008	04 04 04	後、		Sr 703			D 8.0	24 2-7 1-7	60 -	-6-	o - b	* -	0 -
005 006 007 008	04 64 64 54	はん 関ル 関ル		\$1 703 \$1 688			D 8.0 C 7.2	34 2-7	20 4	r - 5 - r - 7		* -	
005 006 007 008 011 012	的例如	後ん	20.743	\$1 763 \$1 607 \$1 788			D 8.0	24 2-7 4-7 1-7 28 1-6 1-2 2-3	€5 -8 20 -4 240 -6	r-b - r e - r - 4	 • -	* -	-
005 006 007 008	04 64 64 54	はん 関ル 関ル	2x 7x3 85-727	\$1 703 \$1 600 \$1 708 \$1 708			D 8.0 C 7.1 D 5.3 B 10.2 D 44	24 2-7 4-7 1-7 28 1-6 62 2-3 21 2-0	€5 -8 20 -4 240 -6	r - 5 - r - 7			

Fig. 24 石器台帳·礫台帳 The Ledger of Artifacts and Pebbles

の要素の複合状態を通して止揚されるべきである。

⑨ 礫台帳

石器類と分別された礫は3,652点、遺物全体の74.7%にのぼる。それらの礫は、礫台帳にグリッド毎の通し番号で整理した。礫台帳の項目には石質(チャート・頁岩・砂岩等)・器種(焼破損礫=焼ハ・焼自然礫=焼自・自然礫=自)・標高値上下・自然層(N下層・X層等)・文化層・実測図番号・大きさ(形ーA:完形礫、B:8割方礫、C:5割方礫、D:5割方以下礫、長軸、短軸、厚)・重量、加熱による赤化(A:赤味がきわめて弱、B:赤味がAとCの中間、C:赤味がきわめて弱、B:赤味がAとCの中間、C:赤味がきわめて強)・付着物(タール状、スス、黒点、白斑点)、ヒビ割れ、火はね、がある。これらの項目の多くは、小平市鈴木遺跡の礫群の観察に堀井らが採用したものであるが(鈴木遺跡調査会、1977)、此の度はさらに項目を追加し、個々の礫を詳細に観察し、

記録することにした。鈴木遺跡の報告ともども参照されたい。

鈴木遺跡の項目と区別されるのは器種の他に,遺物 台帳から標高値,自然層,文化層等を転載し,付着物 に新たに白斑点が加わったこと,赤化の程度をランク 分けしただけでなく,その範囲をも記号で示したこと である。この赤化の項目は次の段階,すなわち礫群モ デルを分析する上での基礎資料となる。

礫台帳作成には約50日、200名を要した。

10 礫接合

出土した遺物の74.7% (3,652点)が焼礫の類である。これらの大部分は加熱により破損して、遺跡に集積されたり、あるいは広く散布する。これらの接合を、最初は出土ごとやユニット別に行なった。その後、全体の接合関係を見るために、場所を国分寺市営プールに移して行なった。狭いスペースでは礫を広げ



Fig. 25 母岩別台帳 The Ledger of Original Stones

てもあまり効果が上らず、出来れば調査区の配置通り に広げられれば申し分ない。その意味では季節外れの ブールの空間は幸いであった。

この作業を整理メンバー全員で約1ヶ月間行ない, 1,974ヶ所(566点)の接合に成功した。接合資料は 個体別にカード化され、接合台帳に記載される。

① 礫接合台帳

接合した礫は個体ごとに台帳に登録される。すなわち、接合個体が566であるから、通し番号順にカード 化された566枚からなる台帳である。

この台帳の項目には、遺物台帳番号、標高値(上・下)、礫の(形の)復旧度、重量、礫の状態があり、 それらが接合したことによるトータルな項目として礫



Fig. 26 個体別(接合)台帳 The Ledger of Individual Stones

の復旧度, 重量, それに石材の種類が記される。

さらに、"接合展開図"と仮称しているのだが、接 合資料同志の相関関係(接合する距離と角度がメモさ れた)の概念図が付記されている。なお、この概念図 では互に接合する面の場合にのみ実線とし、そうでな い場合は線は引かれていない。

礫群の分析はこの台帳を基本として行なわれたもの である。

台帳作成は接合するとその都度書き込むので、礫接 合作業の1ヶ月に一致する。

① 礫分布図

うに、縮尺 1/30 で平面図・断面図を作成した。報告

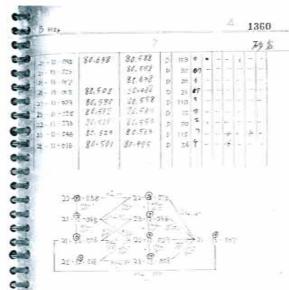


Fig. 27 礫接合台帳 The Ledger of Connected Pebbles

書では、これをさらに 1/2 に縮少したので出来上り 1/60 になる。勿論この下図は現地実測図を基にした ものである。現地における実測図は出土した遺物を余 すところなく記録したが、礫の集中範囲は10分の1、 疎らな範囲は20分の1で作成してある。

① 礫接合分布図

礫分布図の礫を礫接合台帳から抽出し, 実線で結ん だものであり、 縮尺率も礫分布図に同じくする。

(14) 磔モデル台帳

石器および礫の分布で特徴的な纒まりを示す地点が いくつかある。この纏まりには1ヶ所のユニットもあ れば、2、3ヶ所のユニットからなるものもある。こ れらの纒まりの中から、仮りに4ヶ所を抽出してモデ ルとし、石器と礫群の関連性、分布の意味や性格等を 検討する。

本台帳は、各モデルに含まれる接合礫を礫接合台帳 調査区域全体の第3文化層の礫分布が一目で分るよ から抽出し、1葉1個体礫でその接合関係を整図した カードである。したがって、各モデルの礫の接合図は

このカードを重ねることで完成するし、逆に、各隣の 身分を知りたい場合は、これをめくればよいことにな

⑤ モデルの設定

14で説明した4ヶ所のモデルの設定基準と概略は次 のようである。

モデル1 A~C区にまたがる U-2, U-3, U-4の 纒まり範囲である。このモデルでは U-3 に石器の器 種と量が豊富なことや石器の接合例も多いのが目立 つ。一方, 破損礫同志の接合は、P-2 を挟んだ P-1 と P-3 に顕著に認められるという特徴がある。

モデル2 L, M区の U-9 である。このユニット は礫群と石器類の分布が直径 4m の範囲で一致した纒 すりを示す。

モデル3 (21~25, 11~13) 区にある U-11, U-12 の纒まりである。このモデルは礫の分布と接合の 状態から設定したのだが、石器の接合線はU-12 と モデル4の U-13 とが関係深い、という矛盾が見られ

モデル4 (27~28, 12~13) 区にある3ヶ所の礫 群および U-13, U-14 の纒まりである。この 3 ヶ所 の礫群は相互に接合し合うとともに、他とは殆んど隔 絶して独立する。一方、石器類はモデル3の U-12 と 密接に関係する、という特徴がある。

たお、これらのモデル間に共通する事例として、炭 化物の集中分布個所を持つことを付記しておく。

16 石器製作技術の分析

⑧が遺物の分布状態からの分析であるのに対し、こ こでは実態としての石器を対象とする。すなわち石器 実測図のとくに接合資料を通して、石器製作の技法や くせを見出そうというものである。

かくして, 石核には A, B, C1, C2, C3, D, Eの 型が存在するし、ナイフ形石器には a, b, c, d, e, f. x の型が存在することが明らかになった。

⑦ 各ユニット等の分析(石器類)

設定された4ヶ所のモデルについての、主として石

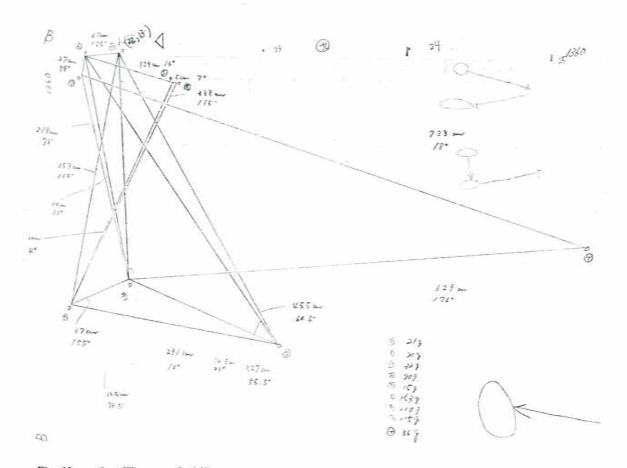


Fig. 28 モデル(礫ユニット)台帳 The Ledger of Models (Pebble units)

器分布の分析である。それぞれ石器類の分布,石器類の接合分布,石核の分布,の3本の柱からなるが,これらの分析を通して,モデルの性格,石材選択の嗜好性,礫群との関り方等,遺跡に居住した集団の動きがダイナミックに捉えられる可能性をもつ。

例えば、モデル3とモデル4のユニット12・13・14 には接合し合う資料が目立つが、その中に同一母岩か ら分割された6個体の資料がある。これらはそれ自体 いくつかの接合資料からなるものの、不思議にも個体 間の接合がない。このため母岩の元の形を復元することが困難で、剝離の先後関係もはっきりしない。ただこれらがユニット間に分散している事実がはっきりしている以上、そこに至った経緯やユニット間の性格を推測しなければならないのだが、解釈に苦しむ。

18 各ユニットの分析 (礫)

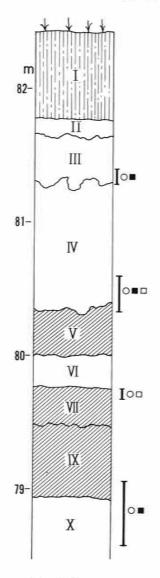
⑦と同様に、モデル化された4ヶ所のモデルを礫の 類から分析したものである。付着物(タール状、スス 状、白斑状)の分布、破損度別礫分布、接合礫の復旧 度別分布,破損礫の移動範囲の6枚を1組とする分布 図からなる。

付着物の中で、タール状、スス状の付着物の認識は 従来からなされてきたが、此の度は新たに白いパテ状 の白斑が注目されるにいたった。東京国立文化財研究 所の江本義理氏に分析を依頼したところ、この成分は 石英質のものであるという、果して人為的な所業に関 わるものか、今後の類例の追加に期待したい。

破損度別礫分布は、出土した礫が完形礫であるか、 部分的に欠損する礫であるか、5割程度を留める礫か、あるいは砕けたり剝れ落ちたような細礫であるかに分類し、記号化したものである。そして、それらの礫同志が接合した場合、どの程度まで復旧したものかを、実線や一点鎖線・破線で表現したのが復旧度別分布である。そして、この接合関係資料を基本にして作成したのが、破損礫の移動範囲である。原位置を保った範囲にスクリーントンを貼り、それ以外の移動は、やはり実線、破線等で区別してある。

なお、この以上の礫群の分布と分析で、最も興味深 い成果が現れたのはモデル4である。

4. 遺跡の概観



文化層の認定

本遺跡に堆積する自 然層序は、武蔵野段丘 に見られる堆積層序と 共通する。立川ローム 層における第Ⅲ層の上 面から、遺物の包含さ れる最深の第X層上面 まで、約3mの層厚を 測る。自然層序の大略 は次のようである。

第 I 層 表土で黒色 土。厚さは一定せず。 第 II 層 暗褐色土で しまりある。厚さ一定 せず。縄文時代の層序 であるが、本遺跡か ら、縄文時代遺物は出 土していない。

第Ⅲ層 黄褐色軟質 ローム土層。所謂ソフトロームで、平均35 cm の厚さを測る。

第Ⅳ層 黄褐色硬質 ローム層。平均 90 cm の厚さを測る。

第V層 暗褐色ローム層。立川ローム第I

Fig. 29 層序と文化層 Layers and Culture Layers

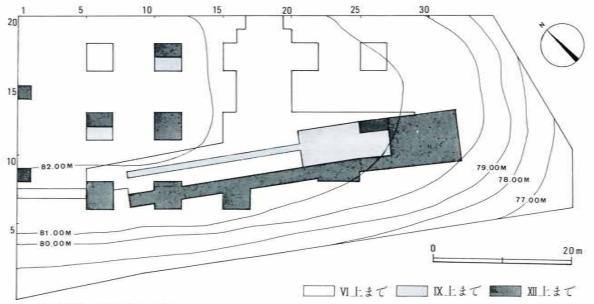


Fig. 30 調査区と発掘深度の関係 The Excavated Depth

黒色帯で、平均 30 cm の厚さを測る。

・していない。 第 W層 黄褐色ローム層で、所謂姶良、丹沢 (AT) 第 Ⅲ層 黄褐色軟質 パミス。平均 25 cm の厚さを測る。

> 第Ⅷ層 暗褐色ローム土で立川ローム第Ⅲ黒色帯上 半部。平均 30 cm の厚さを測る。

第Ⅷ層 本遺跡では観察されていない。

第IX層 黒褐色ローム層で、立川ローム第Ⅱ黒色帯下半部。

第X層 明褐色ローム層。

以上の堆積層序で、本遺跡からは第X層から第Ⅲ層 にいたる3mの層中に、先土器時代の文化層が4枚 検出され、時代を追って第1文化層から第4文化層と 呼称した。

多摩蘭坂第1文化層 第IX層下部から第X層にかけて検出された。遺物の垂直分布厚は最大1m程度ある。

多摩蘭坂第2文化層 第VII層上部に検出された。遺

物の垂直分布厚は約 50 cm である。

多摩蘭坂第3文化層 第Ⅳ層下部から第Ⅴ層上部に かけて検出された。遺物の垂直分布厚は最大1m程度 ある。本遺跡で最も充実した内容の文化である。

多摩蘭坂第4文化層 第Ⅲ層に検出された。遺物の 垂直分布厚は約50 cm を測る。

ところで、第1文化層および第3文化層の遺物垂直 分布が1mの範囲にあることを注目したい。従来の研 究の在り方は、層位は型式に優先するとして、文化層 の認定を自然層に適合させてきた気味がある。だか ら、遺物そのものの型式学的研究や遺物同志の剝離順 序あるいは接合作業などの、いわば発掘調査終了後の 整理作業を待つことなく、発掘現場で層位の指名され た遺物は、最後までその層位の文化として裾えられて きたのである。

私達も発掘現場ではこの在り方を踏襲して、層序を 目安とする記録を行なったために、第N層と第V層、

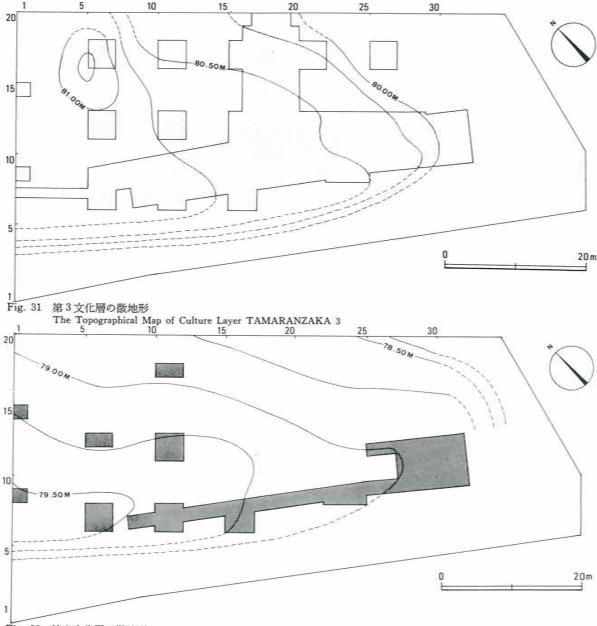


Fig. 32 第1文化層の微地形 The Topographical Map of Culture Layer TAMARANZAKA 1

第 N と第 X 層の遺物をそれぞれ分離し、本遺跡には 6 枚の文化層が確認されたと考えた。ところが、遺物同士の接合と個体別の復旧作業をすすめるにつれ、第 N 層と第 V 層、第 N 層と第 X 層の遺物が自然層位の境界を越えて、強く結びつくことを確認するにいたった。このことから、文化層の認定は、自然層序の認定に加えて、整理作業で得た成果をフィードバックして行なう必要性を改めて痛感するのである。

徴地形から見た各文化層

調査区の範囲と発掘深度の関係を Fig. 30 に示した。 現地形を見ると最高位は標高 82.00 m で, 調査区の北 側が平坦に広がり, 南東に緩やかに傾斜して舌状に張 り出す台地となっている。南西側の斜面はいわゆる国 分寺崖線の崖線部で, 段丘面の本来の比高は約 10 m を測る。

第3文化層当時の地形を復元すると Fig. 31 になる。この最高位は (5, 17) 区辺で、 $81.25 \,\mathrm{m}$ を測る。現地形の平坦さに較べ、全体としてゆるく傾斜する。そして、東西進入路である $(5\sim31, 6\sim13)$ 区辺が台地縁辺にあたる。この調査区からは石器ユニット $10 \,\mathrm{r}$ 所、礫ユニット $29 \,\mathrm{r}$ 所がもろに当り、いわば生活拠点地帯がすっぽりトレンチに入った形となった。

一方、崖線の奥側にあたる北東の斜面地に遺物は少なく、(11~12, 17~18) 区では第3文化層の遺物が全く出土していないし、進入路北側にも散漫なユニットが見られるだけである。

つぎに第1文化層当時の微地形を Fig. 32 に見ると、最高位は 79.50 m であるが、この地点が逆に崖線側に寄ることに注目したい。全体として、第3文化層の当時よりもさらにやせ尾根であり、東側の谷に緩やかに傾斜していく。(11~12, 18) 区を除いて、他の調査区では第1文化層からいずれも遺物の出土が見られる。とくに(6~30,6~10) 区の崖線沿いの調査区では5ヶ所に石器ユニットが掛っている。その占地する地形の在り方が、台地上の傾斜変換点付近に求められる現象は、野川流域の諸遺跡や、高井戸東、鈴木等の

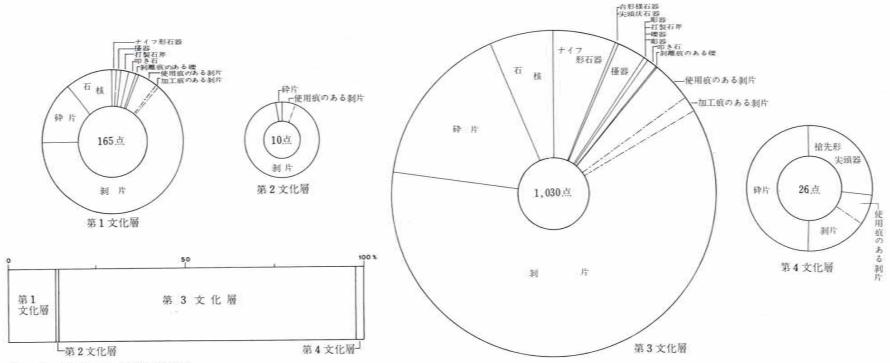


Fig. 33 各文化層内の出土石器の割合 Pacentage of Artifact from every Culture Layer

遺跡とも共通するものである。

このように第1文化層と第3文化層を微地形と遺跡 形成の関係で見た場合、いずれの時期も台地上の傾斜 変換点付近に占地したことがわかる。そしてこのこと は、第4文化層の槍先形尖頭器のユニットが、第3文 化層当時よりもさらに奥まった側に移ることからも、 傾向として認知されよう。

各文化層の石器について

遺跡範囲の半分を調査した勘定であるが、全体としては第3文化層が圧倒的に多い。第3文化層は石器総数の84%を占め、第1文化層の14%を大差で引離している。

第1文化層の石器組成で目につくのは、打製石斧お よび打製石斧を作出する際の砕片である。ナイフ形石 器もある。石核の占める割合いが他の文化層よりも大きい。

第2文化層の内容は貧弱で、その性格ははっきりするにいたらない。大形の石刃と使用痕ある剝片がある。

第3文化層は、いわばナイフ形石器の文化であり、 器種のバラエティーも多い。 掻器、台形様石器、尖頭 状石器、彫器、礫器、叩き石等があり、破片ながら打 製石斧もある。 石核にもいくつか種類がある。 剝片同 志の接合や個体識別により、 剝片剝離技術が復元でき る資料がある。 使用痕ある剝片がかなり多いが、これ もナイフ形石器文化の特徴であろう。

第4文化層は槍先形尖頭器の文化で、7点出土した。この中の1点は、同一母岩の砕片多数と一緒に出

土したが、使用に適さなかったのか、そのまま放置されたもののようである。

各文化層における石材の選択

第1文化層ではチャートが半数以上で, 頁岩系を含めると約8割の高率となる。この傾向は第2文化層に受けつがれている。

第3文化層になって黒曜石が加わり、安山岩も増して、石材のバランスが保たれるようになる。これは石器の多様化に対応した在り方でもある。

第4文化層には安山岩が9割方を占めるが、槍先形 尖頭器だけなので資料的な限界がある。

Ⅲ 先土器時代の遺物

Ⅲ-1 第1文化層 (第X層)

ナイフ形石器 (Pl. 57 293, 295)

293 の表面には上下両端からの数回におよぶ剝離面 が交錯し、素材は上・下に打面を持った石核から剝取 された縦長の剝片である事がうかがえる。 刃潰し、加 工は基部両側縁及び先端部にのみ施されており, 前者 の場合は表面から裏面の方向で打瘤を除去し、あたか も基部を作出する様に観察される。

295 はチャートの部厚い剝片を素材としている。基 部両側縁にのみみられる数回の刃潰し加工は剝片の形 状を大きく変形することなく、293 同様基部作出の意 図がみられる。表面の剝離痕からは整った石核から得 られた剝片が素材となっている様であるが打面には自 然面が残されている。

搔器 (Pl. 57 292)

292 は直径 12~13 cm 程のチャート円礫の打面作出 剝片が素材として使われている。表面には礫面を残す

が大きな剝離面が覆っており、打面作出の為に数枚の 剝片が剝取された事を物語る。剝片の末端部分で薄く なりつつある部分に二次加工を加え、コンケイヴした 刃部を作出している。 Pl. 66 348-b に相当し, 10 点 の接合を示し打面作出剝片になっている。

礫器 (Pl. 57 294)

に二次加工を加え、鈍角な刃部を作出している。基部 は欠損しており接合はない。

打製石斧 (Pl. 58 296~306)

296は干枚岩の扁平な楕円礫を素材とし、大きな剝 離は刃部に対してやや斜めの方向から施される。頭部 及び刃部には細かな剝離がみられ下ぶくれの形をと る。自然礫の形状を上手に利用したものである。磨痕 及び擦痕はみられない。75g。

297は凝灰岩で表面に礫面の一部を残す。

298~306は凝灰岩の同一個体で剝片の大きさから 推するとかなり大きな斧を製作したものと思われる。

斧作出砕片としての特徴である横長の形状をとる。 298-b, 306 の頂部には両面加工の痕跡が伺われる。 299は断面の一部であろう。

叩き石 (Pl.65 345)

扁桃形な円礫の一辺と屈曲の著しいコーナーにそれ ぞれ一つの剝落面が観察される。従来から叩き石の特 徴としてみられる叩き痕による表面のつぶれは全くみ られない。軽度の段階の叩き痕の種類であろうか。

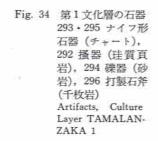
使用痕ある剝片 (Pl. 60 314)

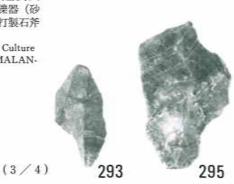
表面下端には下設打面からの剝離痕が残り下端部が 294 は砂岩で扁平な小形の長円礫の先端に近い部分 肥厚する縦長剝片の両側に小剝離痕が観察され、先端 部は新鮮な形状を保っている。上・下に打面が設定さ れる石核から剝取された状態を良くあらわしている。 頁岩。

不定形石器 (Pl. 59 309)

表面には自然面が先端部右位にみられ、多方向から の大きな剝離痕が交錯する横長剝片を素材としてい る。先端部には二次加工痕はみられず、素材の形状を 利用しているものである。打面は除去されている。

石核 (Pl. 63 335~337) (Pl. 64 338~343) (Pl. 65 344) (Pl. 67 348-g) (Pl. 68 349-b', 350-b, 350-c) (Pl. 69 351-b)











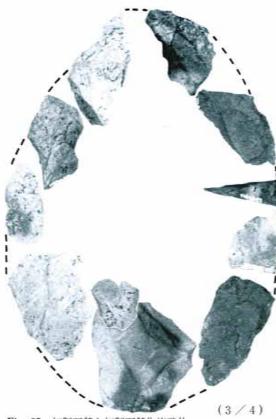


Fig. 35 打製石斧と打製石斧作出砕片 第一次剝離面には、同一方向からの剝離が施こされ、中には、やや側面からの剝離を切っているものもある。主要剝離面側の打点は、大きく段を持つものもある。剝片のよじれ具合を考慮に入れて、これらを両面加工の大形打製石斧を製作する時の砕片とする事が可能であり、おおよその位置関係を図示したものである。調査によってその本体は検出されなかったものの、打製石斧の存在は確認された訳である。Ax and Ax-sharpening Chips

第3節 Bでも詳述するが、石器製作技術の特徴と して分割技法が多用されている石核が多い。338例は 分割面を打面として下面に礫面を残置する形をとり, 縦長剝片を生産する手順がみられる。石核の側面は小 さな剝離に覆われており、生産される剝片の形状を整 える意義を有する側面調整が良好に看取される。340 も同様に下位背面に礫面を残し分割面を打面としてい る。更に 341, 343 例は節理面が分割面に相当する様 である。342 例は、下位に礫面を有するがこの礫面も 打面となり、ト・下両設に打面を設定する形をとって いる。これらの石核から剝取される剝片の形状は、小 形ではあるが縦長剝片が想起される。Pl. 61 315~ 325 はこれらの石核から生産されたものと推され、366 に至っては第1次剝離面には下位に打面があり主要剝 離面と 180° の転移が顕著に認められる。上面、下面 のいずれもの打面は調整されており、縦長剝片の定形 化と、石核面の確保を強く印象づけている。Pl. 65 346 の接合資料も石核面の確保を証明できる良好な例 としてあげる事ができる。

一方, Pl. 63 335, 337 は背面に大きく礫面を残し、礫面を打面として求心的な剝離を進行させて行く

例としてあげる事ができる。その形状はチョッパー状あるいはチョッピングツゥール状を呈し、これらの石核から生産される剝片は、極めて不定形のものである事が推される。Pl.62 326~334 はこれら一群のものと解され、横長剝片も多くみられる。Pl.70 335 の接合例もこれに属すると推される。329、330、332 例は調整された打面を有し、礫面を直接打面として剝離を進行させていくのと並行し、小規模の打面を作出して剝離を進行させる場合も充分考慮される。

さらに Pl. 63 336, Pl. 66 348 例は,一定の打面を作出し、剝片剝取を進行させる意図が伺い得るが、348 例の接合状態を観察すると節理の多いチャートが素材である事が作用してか、良好の剝片は得られないで終っている。これらは、Pl. 70 354 の接合資料と結びつくか否か不明である。

この第1文化層に関する調査の面積は極く限られたものとなったが、台地の南側縁辺にそって6つのユニットが分布する形をとる。ユニット間の孤立性が強く接合関係もユニットのみで納まる傾向を示しているが、限定された調査区がこの点に大きく作用している

Fig. 36 第1文化層の石器 345 叩き石(砂岩), 314 使用痕のある 剝片 (頁岩), 309 不定形剝片 (安山岩) 314 319 309

様にも考えられる。それ は、U-20 を構成する一員 となっている 348, 351, 355 等の接合資料からも窺 える。

348 は、9 枚の 剝片が 1 個の石核に接合する例であ り、a が剝離される以前に 複数枚、更に c 以後 d との 間に複数枚の剝片が存在す る事になる。一応、剝片剝 離の進行状況は把握できる が、抜き取られている剝片 の存在がある。

また,351 例は,1枚の 縦長剝片と1個の石核が接 合するものであり,剝片の 長さが石核の長さの2倍強

Fig. 37 第1文化層の石核 335・344 (頁岩), 336~338・350~ 351 (チャート), 348 (珪質頁岩)。 388 は分割技法の 石核と考える。 335・337・349 は, 礫面を打面とし, 求心的な剝離を進 行させていく石核 である。 384~351 接合資料 Cores, Culture Layer TAMARANZAKA 1

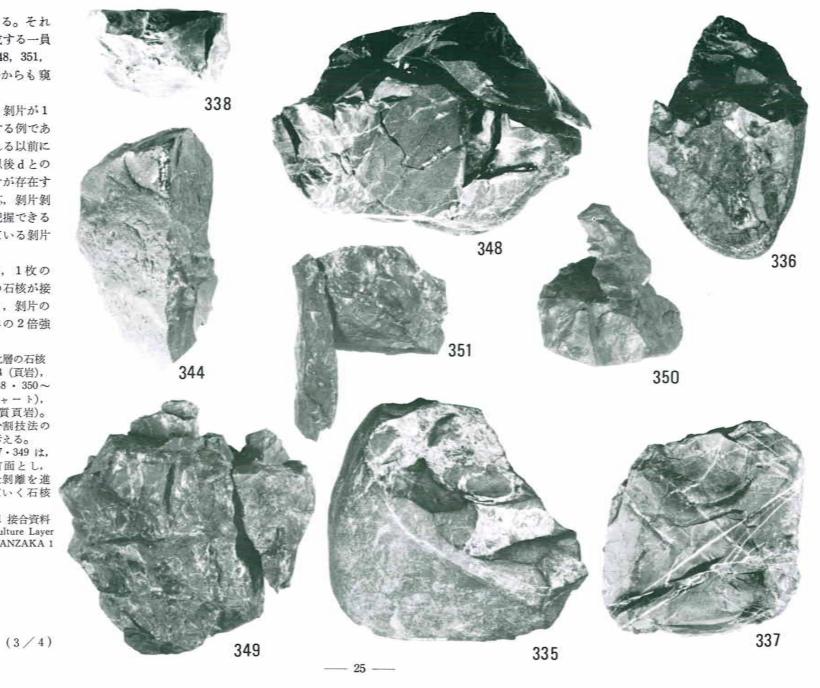




Fig. 38 U-19



Fig. 39 U-20



Fig. 40 U-22

を示す。剝片 a の第 1 次剝離面には下位からの長い剝離が行なわれていた事を物語る面が観察されるばかりか、剝片 a と石核の間にはやはり複数枚の剝片が存在する様である。石核 b の下面は、チャート特有の節理面で覆われ、その段階で剝片の生産は中止されたものと思われる。いずれにしても接合点数の僅少さの理由は、未発掘部分に求めなければならないだろう。

355 は礫面を打面にして生産された2枚の剝片の接合例であり、同一個体、特に石核の欠如が指摘できる。

U-22は両面加工打製石斧の存在を窺わせる剝片類, 斧形石器を含むユニットとしての特徴がみられる。遺 物の平面分布も纒っている。

350 例は、剝片 1 枚と 2 個の石核が接合する節理面を多分に包含しており質の悪いチャートであるにもかかわらず、剝片 a と石核 b, c の間にはやはり複数枚の剝片が存在する。石核が 2 個に割れた段階で剝片剝

離作業は中止されている接合状態を示している。又, 353 例の石核 2 点の接合でも同様の事が観察される。

354 は剝片同志の3点接合から成り,発掘資料中には,同一個体,及び同一母岩の存在もみられず,石核の欠如が指摘できる。

この 354 と対象的なのが 340 例の石核であり、接合 する剝片はない。

U-23は打製石斧1点、ナイフ形石器1点、片面加工の礫器1点、叩き石1点を含むユニットで、器種組成もしっかりとしている。遺物の平面分布は、ばらついているが標高79m上に集中する傾向がある。このユニットから出土した接合資料は349の1例のみである。

349 は握り挙大の節理の多いチャートで節理面で半割されており、剝片 a, b, a'が剝取されている。剝片 a, b, a'からみても良好な剝片が生産される例とは考えられない。



Fig. 41 U-21



Fig. 42 U-23



Fig. 43 U-24

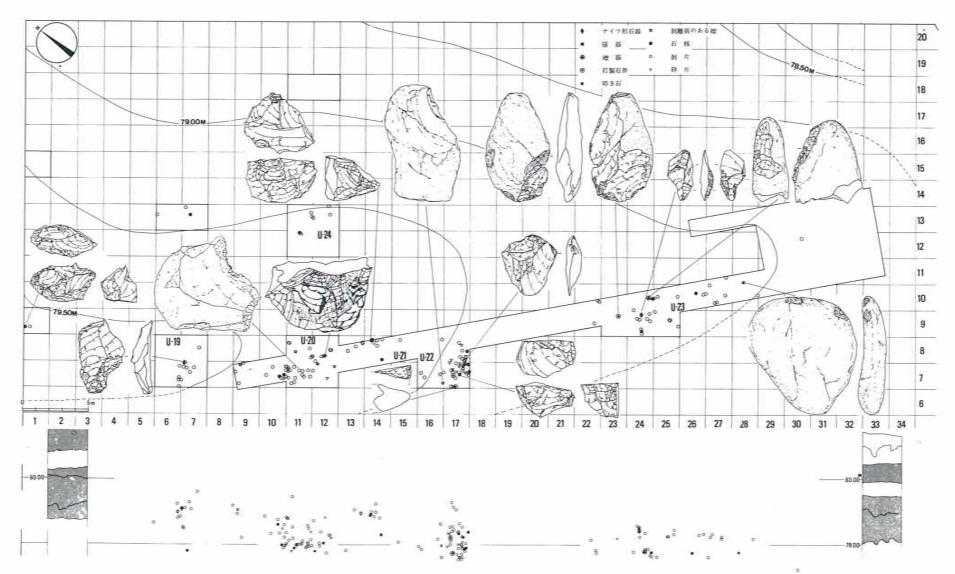


Fig. 44 第1文化層の石器分布図 調査区内に 6 箇所のユニットが検出された。垂直分布は、それぞれのユニットでまとまりを見せるが、約50 cm~1 m の幅がある。U-20・22 は良好なまとまりを示し、P-22 は特に打製石斧の製作の状況が窺える。 Distribution of Artifacts, Culture Layer TAMARANZAKA 1

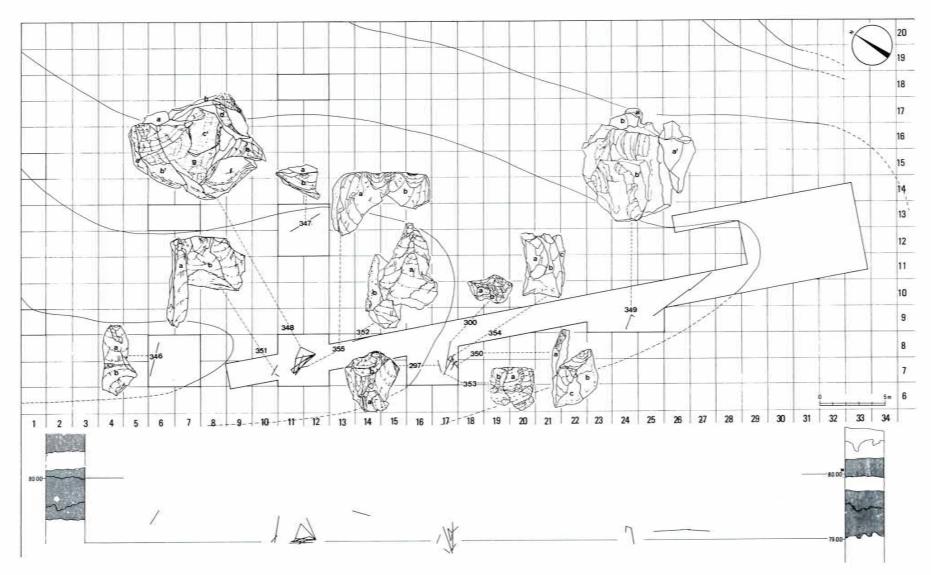


Fig. 45 第1文化層の石器接合図 接合は、すべてユニット内で完結する。垂直分布では約50 cm の幅を示す。 Distribution of Connected Artifacts, Culture Layer TAMARANZAKA 1

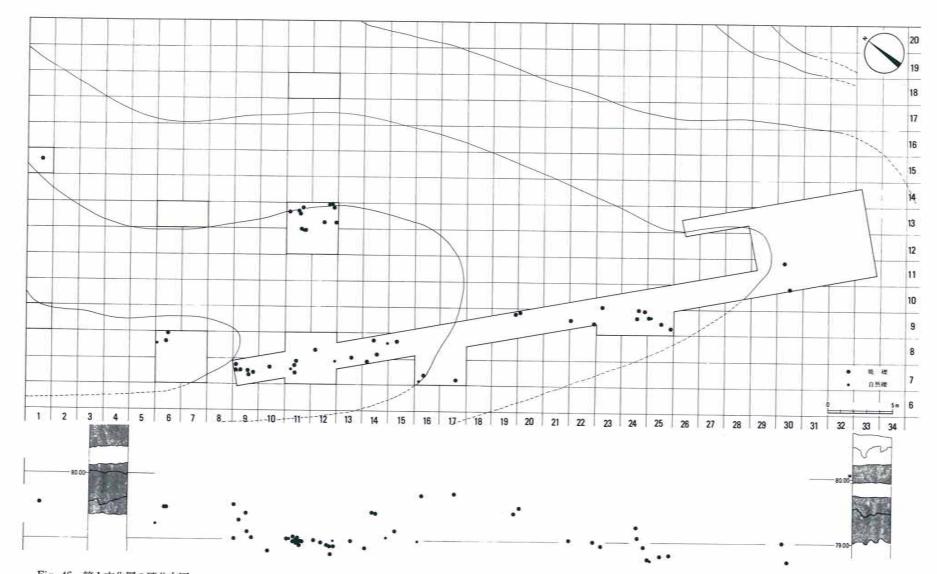
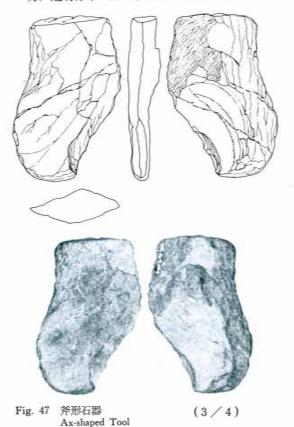


Fig. 46 第1文化層の礫分布図 第1文化層の礫は、ほとんどが焼礫である。石器ユニットに伴う形で検出されているが、礫は破損礫であっても大きく、配石として考えられそうである。U-24では、比較 的良くまとまる。 Distribution of Pebbles, Culture Layer TAMARANZAKA 1

以上の様に、第Ⅲ黒色帯のX層下部から、第X層に かけて出土した石器群の観察を行なってきた訳である が、2、3の特徴が看取できる。

南関東においてナイフ形石器の出現は既に指摘されてきている如く、本遺跡でも第1文化層とした石器群中に存在する。砂岩製の大形石器となる片面加工の礫器や、不明確な剝離面に覆われている斧形石器、又、両面加工の打製石斧の存在も明らかとなった。これらの石器組成を確保する為の技術基盤として、原石に対する分割技法の存在を始めとして、幾つかの剝片剝離技法もある様である。

一方、遺物分布の上からみていくと、各ユニットは



接合操作の上からも孤立的であり、U-19 や U-23 の様に、ある特定器種の卓越や組成器種が充実しているユニットと対置して U-20, U-21, U-22 の様に、石器を含まないものがある様に考えられる。この二者にとって、前者においては、石核を含む接合資料の僅少性がみられ、後者においては、石核・剝片・砕片の接合状態の良好な例を多く含んでいる。

以上の事から、本遺跡第1文化層において、一定面 積上に立地する石器群の二者は居住空間とそれを支え る石器製作に深く関わる空間とによって構成されてい たものと考える事ができよう。

Ⅲ-2 第2文化層(第VII層)

第2無色帯上部から中部に至る自然層位中から検出された文化層であるが、資料点数も極めて少く、多くを語る事は出来ない。しかしながら、第1文化層及び第3文化層と比較してみると、剝片の縦長化が安定している様である。287 (Pl. 56) の接合資料は、平坦な礫面をそのまま調整する事も無く、打面として部厚い剝片を生産している。接合状態からすると素材は径約15 cm の円礫を使用しているようである。上・下に打面を設定し、各々の面から複数枚の剝片を得ると次に石核を180°近く回転させ、やはり複数枚の剝片を生産した状態が看取される。

一方,288~291 (Pl. 57) は,調整打面を設定した 石核から生産されており,打縁調整もしっかりしてい るようである。

出土点数も少なく、又、出土状態もユニットを形成 する程のまとまりは見られない。

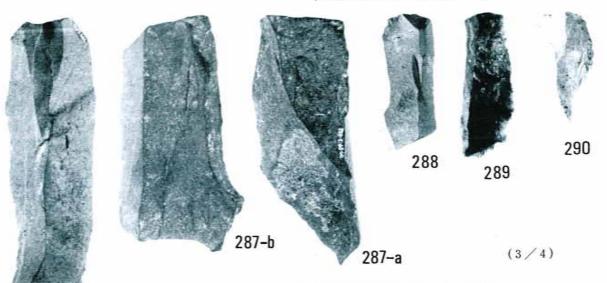


Fig. 48 第 2 文化層の石器 291 使用痕のある剝片, 287-a, b~290 剝片 (291・288:砂質頁岩, 287:安山岩, 289:チャート, 290:凝灰岩) Artifacts, Culture Layer TAMARANZAKA 2

291

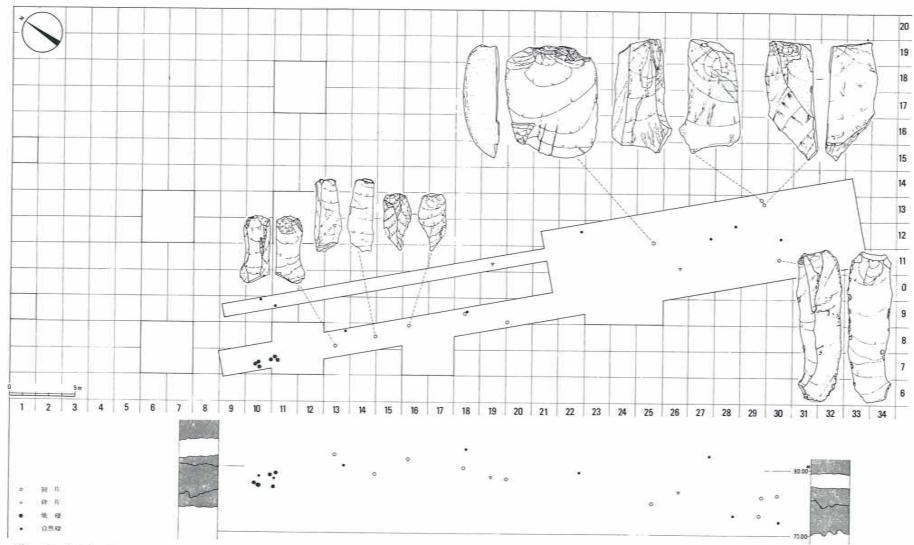


Fig. 49 第2文化層の遺物分布図

調査区内に遺物は散漫に検出された。垂直分布には、東と西では約1mの幅がある。(10,7)区周辺に焼礫が5点検出されている。第1文化層の分布に比らべ、全体的にまとまる傾向は推定出来ない。

Distribution of Artifacts and Pebbles, Culture Layer TAMARANZAKA 2

Ⅲ-3 第3文化層(第IV層)

A. 石器の説明

ナイフ形石器 15 (Pl. 2), 17~30 (Pl. 3), 31~40, 43~46 (Pl. 4), 47~63 (Pl. 5), 65~67・70 (Pl. 6)

15・17 は長さ、幅、厚さとも確保された良好な大 形縦長剝片を素材とし、表面右側縁に裏面からの急角 度な刃潰し加工を施している。17 は、更に左側縁下 部に至るまで刃潰し加工を施し、基部を丁寧に作出し ている。基部を作出する事により打瘤の一部は除去さ れている。15 の表面左側縁、裏面右側縁には小剝離 痕が認められるが、これは摩滅状態からみて使用によ る歯こぼれかと思われる(Fig. 65)。この両者のナイ フ形石器は、恐らく16 の様な大形縦長剝片が素材に なるものであろう。

18 は表採資料である。縦長剝片の打面部を基部に設定し、刃部を除く緑辺に刃潰し加工を施している。 長さ、幅、厚さとも意識された均整のとれた石器である。この様なナイフ形石器は本遺跡ではこの資料1点だけである。

19~23 は、縦長剝片を素材とし、剝片の打面部を 基部に設定している。19・21・23 は右側縁に、20・ 22 は左側縁にそれぞれ刃潰し加工を施している。19・ 21・22・23 は、基部を作出する事により打面部の形 状を変え、より狭少なものとしている。

24・25 はナイフ形石器の基部である。24 には背面 基部加工がみられ、25 の基部下端は表面から裏面へ、 両側縁は裏面から表面へ剝離が行なわれている。

26~30 は縦長剝片を素材とし、剝片の打面部を基部に、その打面部の形状を殆んど残さない程狭少にするか或いは除去する様に剝離を施し、基部を作出している。表面には1本の稜線を持つ。29・30は、打面に直交する2つの剝離面の交錯により、26・27・28は、打面に直交する剝離面1つと平行する剝離面1つの交錯により形成されている。平面形は左右対称の尖

頭状を呈する。

31・32は縦長剝片を素材とし、表面左側縁のみに刃潰し加工を施している。素材となる剝片の打面部は、 31は基部に、32は先端部に設定している。どらも基部加工以外に二次加工を施さない。

33~35 は、素材となった剝片の打面の形状を殆んど変える事無く、そのまま大きく残し、33 は左側縁、34・35 は右側縁にのみ刃潰し加工を施している。いずれも部厚い不定形剝片を素材として、打面部を基部に設定している。断面の形状は、いずれも第一次剝離面と刃潰し加工とにより、厚みのある三角形を呈している。

36 は、横長剝片を素材とし打面部を左側縁に設定し、下端へかけて二次加工を施し、基部を作出している。素材の打面部の形状を全く変える事無く、そのまま残している。

37~40 は、切出し形ナイフ形石器である。両側縁に刃潰し加工を施し、刃部を明瞭に作り出している。
37・39 は横長剝片を、38・40 は縦長剝片を素材としている。37 は素材の打面部を左側縁に持つが、刃潰し加工により除去されている。38 は、打面部を先端に設定しており、刃部作出の際に除去されている。39 は打面部を左側縁に設定しているが、刃潰し加工の際に殆んど除去され、僅かに形状を留めているにすぎない。右側縁には僅かに礫面を残している。40 は打面部を基部に設定している。打面の形状は殆んど変える事無く大きく残している。これらの断面形は平たい台形を呈する。

43・45・46 は縦長剝片を素材とし、素材の打面部を基部に設定し、43 は右側縁、45・46 は左側縁にかなり急傾斜な刃潰し加工を施している。43 の表面には、打面に直交する剝離面と平行する剝離面が交錯している。45・46 の表面には、基部から先端へかけての一方向からの剝離面が認められ、稜をつくり、47 は左側縁に礫面を残している。

44・47~53は、縦長剝片を素材とし、44・48・49・

51・52 は打面部を基部に、47・50・53 は先端部に 設定している。50・51・53 は打面部が除去されている。44・51・53 は左側縁に刃潰し加工を施している。53 は鋸歯状剝離による刃潰し加工が顕著である。47・52 は基部にのみ刃潰し加工が施されている。

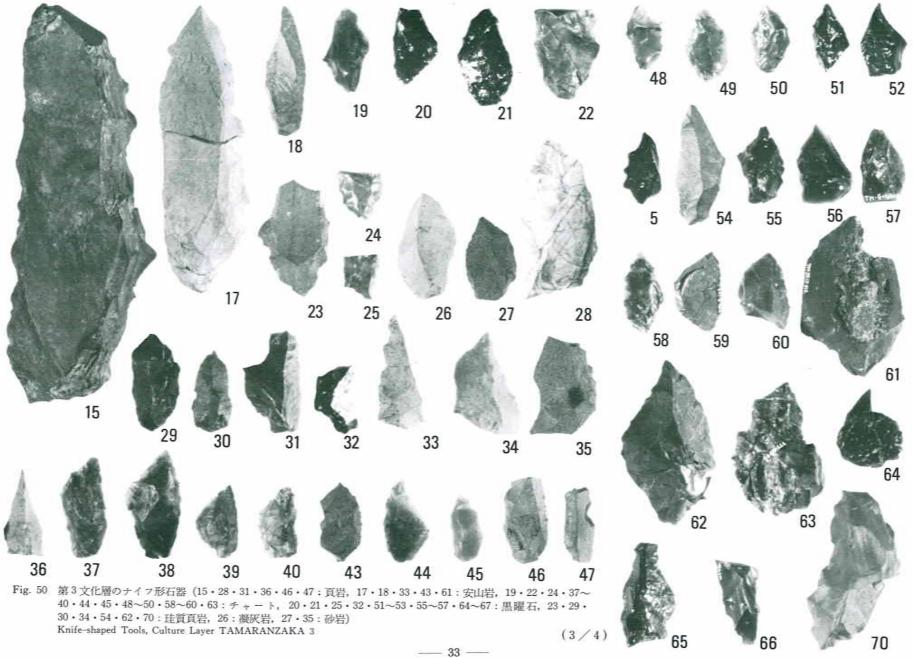
54~60 は横長剝片を素材とし、54、58~60 は打面部を左側縁に、55~57 は右側縁に設定している。54・55・57 は刃潰し加工により打面部は除去されている。64 は表採資料である。左側縁と右側縁下部に刃潰し加工を施し、切り出し状の刃部を作り出している。57は、表面右側縁部において、表裏両面に剝離が施されており、裏面の刃潰し加工は、緩い角度を保っている。

61・62は、概して大きな剝離により基部を作出し、 先端部左側縁のみに数回の剝離を施しただけのナイフ 形石器である。61は、縦長剝片を素材とし、打面部 を基部に設定し、基部作出時に打面部は除去されてい る。62は、横長剝片を素材とし、打面部を左側縁に 持つ。打面の形状は、基部作出時の剝離によりやや狭 少となってはいるものの、素材の形状を良く伝える程 に残っている。両者とも礫面を大きく残している。

63 は節理面を主要剝離面とし、基部加工は一切行なわず、両側縁先端部のみに加工を施している。右側縁からは、表裏両面に向って大きな剝離を施し、左側縁には離面からの剝離が施されている。基部を意識せずに先端部のみに加工を施すなどの点から前述の61・62 に類似する。

65 は縦長剝片を素材とし、打面部を基部にし、左側 縁には裏面からの細かい剝離が施されている。所謂刃 潰し加工とは若干異なるが、ナイフ形石器として一括 することにした。刃部は欠損している。

66は、縦長剝片を素材とし、素材の打面部を基部とし、一側縁に刃潰し加工を施したナイフ形石器を切断し、切断面を打面として基部方向に小剝離を施した石器である。定形的なナイフ形石器とは異なるが、一応ナイフ形石器に分類した。



67 は、上端が欠損している。表面右側縁には裏面からの、裏面右側縁には表面からの交互の剝離が施されている。縦長剝片を素材とし、打面部を先端に設定している。ナイフ形石器になるものと推されようか。

70 は、扁平な礫の表面をそのまま打面とした比較的大き目な剝片を周辺に沿って連続的に加工を加え、 先端部に小さな刃部を作出している。この種の例は他に無く、一部欠損している為、器種分類に際し困難を 来したが、一応ナイフ形石器の中に加えることにした。

ナイフ形石器作出砕片 (Fig. 51)

石質による個体別分類作業を通して一括された資料の接合作業を行なった訳であるが、今回、図らずも2点の砕片がナイフ形石器の刃潰し加工の段階で生じたものとして確認された。22-aは、チャートの先端の欠損したナイフ形石器の基部に接合するものである。この砕片は、整理当初はナイフ形石器として登録されていたが、最終的にこのナイフ形石器作出砕片として再登録されたものである。22 (Pl. 3)は、本体との接合時点での図であるが、本剝片が剝がされた後に於ても1~2回の刃潰し加工が行なわれている。又、対置する側辺には、パンチ・ホール・マークが3ヶ所程接して観察されるが、これらは刃潰し加工とは別に、器体の厚みを確保する為のものとしてみてとる事が出来るだろう。

55は、黒曜石のナイフ形石器の基部に接合する例である。部厚な横長剝片を素材とし、右縁辺の刃潰し加工によって打面は除去されている。

前者は U-3 の中での, 又, 後者も U-18 の中での 接合であるが, いずれも, これらとの同一個体の資料 は見当らない。

台形様石器 64 (Pl. 6)

素材の打面部を表面左側縁に持ち、右側縁は切断されている。打面は、裏面からの剝離により除去されている。表面は打面に平行する剝離面より成り、この面を切るように下端から先端方向へ剝離が行なわれ、基

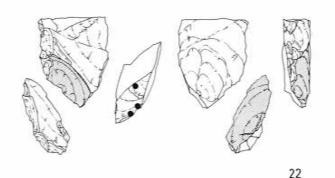


Fig. 51 ナイフ形石器作出砕片 (22:チャート, 55:黒曜石) Blunting Chips

部を作出している。素材の形状は、刃部の曲線からみると縦長剝片というよりも、横長の剝片に近いようである。

尖頭状石器 41·42 (Pl. 4), 69 (Pl. 6)

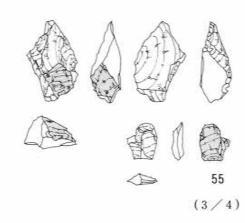
41・42 は、部厚い横長剝片を素材とし、41 は、素材の打面部を右側縁に、42 は左側縁に設定している。両者とも鋸歯状の剝離により打面を除去している。41 は、鋸歯状剝離を右側縁、左側縁下端部に施し、42 は左側縁のみで右側縁には全く及んでいない。これらの形状は、第一次剝離面と刃潰し加工の交錯により形成された稜線を中心とした左右対称形の尖頭状の平面形と、稜を頂点とした三角形状の断面形を持つ。角錘状石器の一群である。

69 は、礫面を打面とした部厚い縦長剝片の裏面から表面の両側縁に、数回の連続的な剝離を施している。先端部が欠損している。片面加工の尖頭状石器である。

搔器 73~80 (Pl. 7), 81~93 (Pl. 8)

形態は、種々様々で、幾つかの特徴があげられる。 76・92・93 は、角の丸い三角形状の平面形を呈し、 一辺、ないし二辺にスクレイパーエッヂを持つ。76・ 93 は、表面に礫面を残している。

79・80・83・88 は、縦長剝片を素材とし、一側縁 にのみスクレイパーエッヂを持つ。



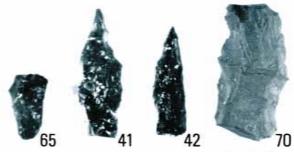


Fig. 52 台形様石器 (65: 黒曜石) (3 / 4) 尖頭状石器 (41・42: 黒曜石, 70: 安山岩) Trapezoidal and Point-shaped Tools

74 は、縦長剝片を素材とし、左側縁と未端部にスクレイパーエッヂを作出している。

78 は、部厚い剝片を素材とし、50°のエッヂを持つ 先刃掻器である。

89は円形掻器である。

影 器 68 (P. 6), 245-a (Pl. 37)

69 は、表面に大きく礫面を残す縦長剝片を素材とし、打面から右側縁にかけて1回の樋状剝離が入っている。

245-b は、礫面を大きく残す横長剝片を素材としている。接合状態からみると、打面作出剝片と考えられる。素材の打面部を左側縁に設定した際、上部から左

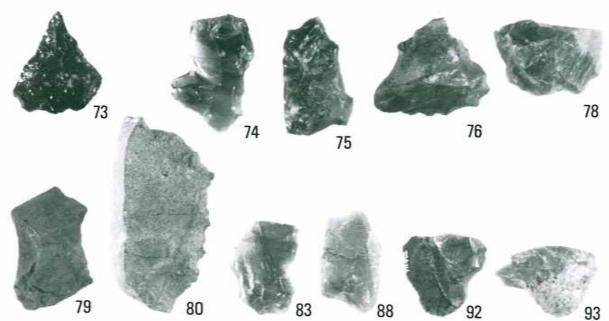


Fig. 53 第 3 文化層の掻器(73・74:黒曜石,75~78・83・88・92:チャート,79:安山岩,80:砂岩) (3 / 4) Scrapers, Culture Layer TAMARANZAKA 3

側縁にかけて3回,右側縁にかけて1回の小さな樋状 剝離が入っている。

打製石斧 71 (Pl. 6)

頁岩で、断面は三角形を呈する大形石器の破片である。 稜が直線的である形状からみると、胴部周辺のものであろうか。 また、稜の摩滅は著しく、剝離の重複する部分は丸くなっている。 両面加工の打製石斧として一分類しておく。

礫器 72 (Pl. 6), 212·213 (Pl. 22)

72・212は、大形の扁平な礫を、213は大形の柱状の礫を素材としている。72・212は、その剝離面に沿って細かい剝離を連続的に施し、213は、剝離面を打面として逆方向へ剝離を行なう交互剝離により鋭い刃部を形成している。素材の形状と、剝離の位置より石核とはせずに、礫器として分類した。

叩き石 234~236 (Pl. 28), 237~240 (Pl. 29)

第3文化層からは、合計7点の資料が出土している。235のみ珪質頁岩であり、他は全て砂岩である。 長辺の上・下両端に打痕が観察される234・236・237、 長辺の未端片方にのみみられる235・239・240、更に、 長辺の側面に打痕による剝落がみられる238の三者がある。

重量分布は、100g以下が4点、130gが1点、200g以上が2点という様に大きく3つのばらつきを示すが、形態的な特徴とは結びつかない様である。重量や形態的な特徴は、叩き石の果した機能の差に結びつくと考えているが、本資料群からは明らかになし得なかった。238・239・240は、打撃点から大きく剝落したネガティヴな面が観察される。

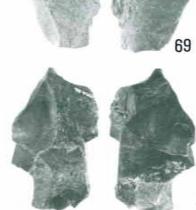


Fig. 54 第 3 文化層の影器 (69 · 245-a: 珪質 頁岩, 245-a: 接 合資料) Gravers, Culture Layer TAMARAN-ZAKA 3

(3/4)

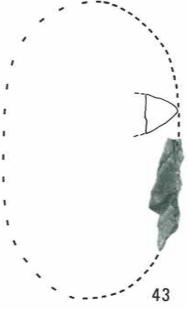


Fig. 55 第 3 文化層の打製 石斧(頁岩) Ax, Culture Layer TAMARANZAKA 3 (3/4)

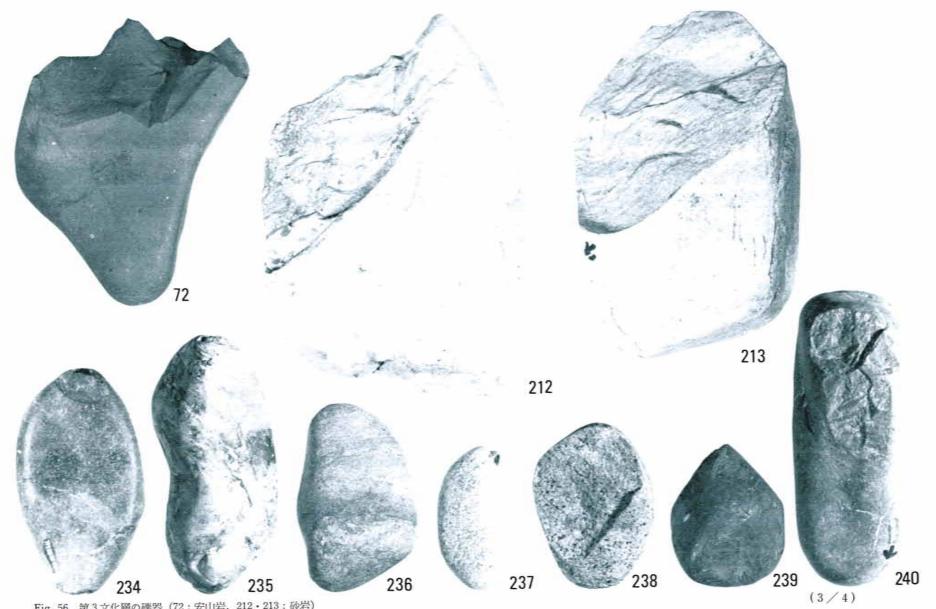


Fig. 56 第3文化層の礫器(72:安山岩、212・213:砂岩) Pebble Tools 第3文化層の叩き石(234・236~240:砂岩、235:頁岩) Pounding Stones, Culture Layer TAMARANZAKA 3

B. 石器製作技術

接合の意義

石器・礫の接合作業の意義は大きく以下の3点に要 約出来る。

1. 技術論

石器と石核は、剝片・砕片を間に置いて技術的な対 応関係を有する事より、剝片剝離の逆手順を踏む事が 出来、すなわち、接合作業を通して、その技術は復元 されるものである。

2. 型式論

不定形石器の認定や、特定石器の系譜をより確実に 立証する事が可能である。

3. 分布論

遺跡内部における遺物、特に石器に関しては、そのものの動静が看取できる。この時、手順としては、単なる一片の砕片であろうが、特定器種であろうが同じ舞台にのせて接合作業にかかる必要がある。その結果、ユニット内における特定器種のあり方や、砕片のあり方から、自立的なユニットであるのか、相互補完的なユニットなのかの性格付けが可能となる。

また一方、焼礫の接合作業からは、礫ユニットの成立過程から消費過程を経た廃棄(遺棄)過程にいたる居住空間により密接した行動の軌跡を看取出来る。第1次生産過程とする石器製作の結果残されたユニットと、居住に密接した火の痕跡として残された第二次生産過程としての礫ユニットではどの様な平面的なあり方を示すものであろうか。かつて筆者等は、鈴木遺跡の報告の中で、接合を含めた焼礫の属性分析を行なった(鈴木遺跡調査会 1976)。その結果、7つの礫群中、1例は独立的な接合例、平坦地に分布する3例は、等高線と平行関係の接合例であり、斜面に分布する2例は等高線に直交する接合例として3群に大別する事が出来た。今回は、この焼礫接合線に石器接合線を重ね、遺跡におけるユニットの結びつきを明らかにし、行動の単位化を図ろうとしたものである。

分布論の旗手とも言える麻生は、1972年、下本山岩 陰, 1968年, 岩下洞穴, 1969年, 十三菩提遺跡, 野 川西耕地遺跡, そして1969年以来10次にわたる泉福 寺洞穴遺跡において、遺物の"in situ"を記録化して いる。それはまさに遺跡における遺物の微視的分布を より詳細にデータ化する方向であり、遺跡の概念化へ の正道であるとする考え方を示している。それらの一 連の理論的な説明は、1975年の「原位置論」の現代的 意義, に表われる。それは, 遺跡における遺物の偏在 性であるとか、規則性であるとか等の実体を通してそ の認識の過程を重視すべきものとしている。その例と しては、中本遺跡の遺物分布密度図や特定遺物分布の 偏在性を示す概念図を再構成させ、ドット・マップを 載げている。ところが、それらの図化を通じて、実際 に何が汲みとれたのかは一斉の言及が行なわれていな い。特に原報告では、住居址とある遺構と特定器種と の相関関係について, 又, 一面では特定器種の技術的 分析の欠如が指摘出来るのではなかろうか。それは認 識の過程を重視するあまりに、かつての「考古学研究 の概念(虚像)から脱皮して実体(実像)を捉えなけ ればならない」とする原位置論のベースは、1959年に 刊行された神山遺跡において指摘された遺物分布の限 定性をそのまま再現させたものと言えるであろう。そ れは,「遺構から出る全遺物の割合の実体を集合組成 であると規定し、考古学研究で扱うのはその不完全組 成の実体である」としているのにもかかわらず、ドッ ト・マップの作製が先行し、そこで停止している事 は、自ずから不完全組成を図上で複製していくことそ のものではなかろうか。その事自体が、あたかも原位 置論の帰結であるが如く解釈される危険性が十分にあ る訳である(註1)。

ドット・マップが独り歩きする例は、この辺の事情の勘違いによって生み出された副産物で、そうした例は幾つか見られるものの、一方では、着実な分布論の実行も見る事が出来る。八王子寺田遺跡群発掘調査報告(加藤・宇田川 1973)として、松山廃寺での遺構

と遺物の分布状態やその接合状態の関わりを説明する上で、茶碗・土瓶・仏具・灯明皿等の分布から「台所」、「奥之間」等の場所を設定している。

また, 高岡寺院址発掘調査報告(高橋 1978)では, 瓦・畳・瓶等の分布から遺構の性格を指摘しており, 評価に値しよう。

先土器時代の遺跡における遺物の在り方を一つの構 造体として捉え、いくつかのまとまりを有為な連関で 結びつける考え方は、"インダストリー論"として1967 年以降に登場する (戸沢 1975)。砂川遺跡の分析方 法は, それに基づくもので, 注目に値する成果を得て いる。それは石器の接合を通じて個体別分類の3類型 化を徹底させ、石核・石器の動きから遺物の地点分 布の実体を明らかにしたのみならず、背景の技術に ついての言及にも成功している(戸沢・安蒜 1974・ 1975)。「一遺跡の一群の石器群をインダストリーとい う概念でとらえ……」、「石器文化は先土器時代文化の 構造を支える最少かつ基本的な単位(石器文化)であ る」(戸沢 1975) という事は、遺物の最小のまとま りをユニット(註2)と呼び (小林・小田・他 1971), 遺跡ごとの遺跡の型式をコンポーネントとし、その地 域的な一定の広がりや時間的な一連のつながりをフェ ーズとする (C. T. キーリー・小田 1973) 両者の間 には落差は存在しない。

小林・小田による野川遺跡においてのユニットの6型の分類(小林・小田 1971)は、質的な内容や、量的な内容を盛り込んだ一見立体的な考え方の様に見えるものの、実は、単純、しかも平面的な分類方法といえる。それは、ユニット同志が相互に関係を保有し合うという状況を論外とし、単に概念的分類基準に終始したものである。しかしながら、各文化層におけるセトルメントの叙述は斬新である。

遺跡を叙述する点で、1961年以来、加藤晋平による 常呂川流域の一連の研究と類似する。加藤の場合、あ くまで初期の問題は、北海道における先土器時代の編 年観にあった様である(加藤・桑原 1969)。中本遺 跡では、単位面積当りの石器出土量を、Star Carr 遺跡・沿海州 TADUSHI 遺跡・KOSTENKI 遺跡等と比較し、間接的な生産道具の特徴的な出土量から広郷遺跡・緑ケ丘B遺跡との類似性を指摘している。間接的な生産道具と直接的な生産道具は常に対応する関係であり、さらに石刃製作遺跡を含め、北海道ではこの三者の遺跡が存在し、前者を常呂パターンと命名し遺跡の性格付けを行なっている点は大胆な仮設といえる。

この様に遺物の接合操作のもたらす結果は、単に分布論の一翼を担うばかりか技術論としての自立も可能となり得る。その好例としては、山形県小国盆地に所在する岩井沢遺跡(加藤・渋谷 1973)において実施されたものである。それは、原石から原石核への剝片剝離工程の検討を1,188点の出土遺物中、77点の剝片類の接合関係から行ない、6種の工程が観察されるとの指摘がなされている。遺跡における遺物の分布がそれらの接合個体とどの様にかかわっているのかという点は欠如しているものの、一定の評価に価するものである。

富山県直坂遺跡 I (橋本 1975) から出土した石器 群の研究の中でシステム論を導入した橋本は、石器類 の接合資料を操作し、石核と剝片の関係を論じてい る。これらの接合資料も、平面分布上どの様な位置を 占めるのか興味はつきない。また、接合個体内の目的 剝片として抜けているものの形状等についての言及が 欲しいものである。

また、縄文時代における石器製作の研究からも、接合作業を通して新知見が見い出されれつつある(註3)。 乙部町栄浜遺跡では、礫を荒割りした後、節理面の除去を行ない主要剝片の剝取が行なわれているとしている。そして不定形の剝片を多量に生産し、その中から製品として作り易い剝片を選別している。不定形石器の量的割合いの高さは、使用目的に応じた結果か、あるいは時期的な相違であるのかという指摘がなされている(内田 1977)。従来、縄文時代の石器製作に関 する研究が極めて少なかった理由として、遺物量が多い点、定型的石核の欠如、剝片の不定形化があげられるが、この様に一連の接合作業が行なわれると、剝片 剝離の工程が看取出来るのである。

さらに、外国では、André Leroi-Gourhan や Michel Brézillon によって調査研究が進められてきた PINCEVENT 遺跡の 16・25 Section において、出 土遺物の克明な記録化を基礎とし、特定器種の平面 分布の分析を涌し、3個の屋内炉址をとり囲む居住 空間の設定に成功している。石刃や彫器を製作する 段階ではじけ飛んだ砕片の接合や,29個の残核の由 来, 彫器と彫器作出削片の接合操作を通じて, 彫器の 居住空間内での運搬, 更には居住空間内での石器の 修繕等に関する研究までも進められている (Leroi-Gourhan · Brézillon 1966)。出土遺物の正確な記録化 と真摯な研究を通じての遺物の接合操作がいかに人間 行動の実態を把握する為に有効であるかという事を如 実に物語った例と言えよう。更に、Pincevent 36 区お よび Section においては、前回の16・25 Section 各 地点の研究成果を踏まえて, 焼石・砕石・獣骨の分 類・接合を通じ、屋外炉及び屋内炉の縁石の移動を含 めた2個の居住空間の限定を行なっている(Leroi-Gourhan et. Brézillon 1972)

また、1970年代に入って北部チリでは遺跡学の研究が始まっている(Johnson 1977)。 Aguas Verdes 期に属し、RAnL 199B・RAnL 200B 遺跡と同種な槍を出土する RAnL 87XX 遺跡は、1968年に Colombia 大学のプロジェクトチームによってアタカマ沙漠の縁で発見されたものである。 凝灰岩を原石とする石器製作址的性格を持ち、約 29 m^2 の調査区からは 312点の二次加工を受けた石器類と無数の砕片が出土し、これらは 2つのユニットを形成している。報告者のJohnson は、石器類を 7つの属性(\pm 4)によって分類し、検出された石器群を 1人か、多くても $2\sim3$ 人の手によって遺されたものとしている。接合資料を石器製作技術とつき合せた成果の一つと云えるであろう。

- 註1 1965年河出書房から出版された「日本の考古学 I 先土器時代」以降,1975年までの間の研究成果を集成 した雄山閣の「日本の旧石器文化 総論」で麻生は, 原位置論的発想から接合の類例をあげ,方法論的に成 立させ得た業積は大きく評価すべきであろう。
- 註2 遺物のまとまりをユニットと呼ばうが、あるいはブロック・地点分布・スポットと規定しようが、研究者によりそれは選択されるべきもので一向に問題はない。ただ、そこから具体的な資料操作が出発すべきものであり、又その成果を問題としたい。
- 註3 北海道森越遺跡(峰山 1975)では、縄文中期、円 筒上層式土器に伴出する石器群の接合例があり、宮城 県上深沢遺跡(宮城県教育委員会 1978)においても 好資料に恵まれている。
- 註4 打面の調整,打瘤の形成,素材の歪曲度等の属性項目を設定している。



分割技法について

第3文化層出土の石器類,85個体・241点の接合作業を完了した時点で特異なかたちの接合例が目についた。本来剝片剝離の工程は、剝離面の重複により新旧が看取され、剝片が生産された順序を決定出来るものである。接合面の関係から第一次剝離面をAとし、主要剝離面をBとし、剝片剝離工程の順序を複数枚の剝片が生産された過程として模式化すると、

A+B+A+B.....

という連続化が成立する。この順序が剝片剝離工程の 正常なものである一方。

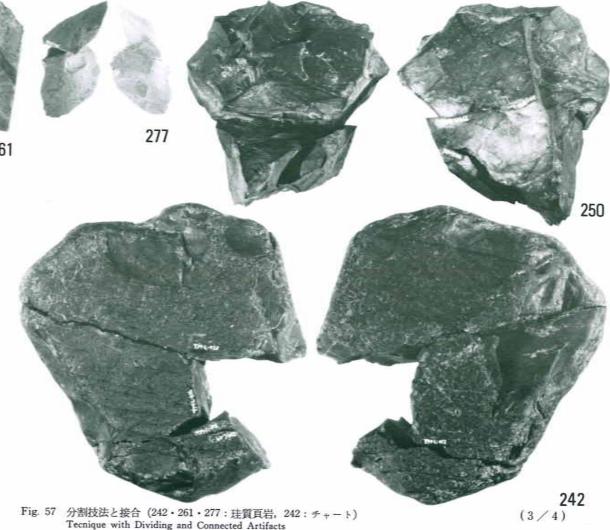
A + A

の関係を示す接合例が存在する。261 (Pl. 46) の3点接合の例は、残核+2剝片の関係であるが、残核の表面に残されている5~6枚の剝離面に直交する様に側面に261-a,261-bが接合する。aとa'は節理面を接合面とし共有し合っており、残核であるaの厚さは、a'剝片の長さには満たない。以上の点より、261-aと261-a'は、同一母岩であったにもかかわらず初期の段階でそれぞれ運命を異にした異個体として剝片剝離が進行していったことになる。

277 (Pl. 54) は2剝片の接合資料である。277-aの第一次剝離面に277-bの打面部が接合し、矢張、

A + A

の関係が成立し、剝片同志の新旧関係を把めない。 a, b の共有する接合面は、節理面と直交する様な方



向からの剝離面で断ち切られており, a, b は異個体

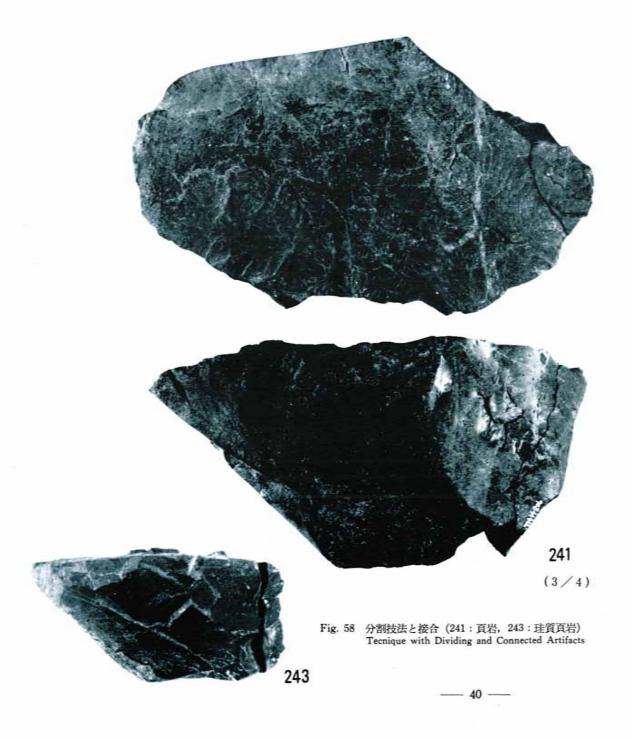
250 (Pl. 40) は,石核同志の2点接合であるが,(a+b)+a'

から剝離されたものである事がわかる。

の関係を有し、その接合面では、a+b 系と a' 系の分

割が終了してから後に数回にわたり剝片剝取が行なわれている。 259 (Pl. 45) も, 250 と同様な資料であると推される。

242 (Pl. 32) の接合状態を観察してみる。一辺が10 cm 前後, 厚さ3 cm 程の礫を最初に平坦な面で斜め



に2分割している。この分割面には、打撃点周辺には 剝離痕が残るが、他は石の有する節理面が覆い、2分 されたいずれもが舟底形を呈する石核となっている。 242-a 系 (Pl. 33) は、甲板面を一部横位からの打撃に より整え、242-b、242-c を剝取している。242-c や、 242-d の甲板面に近い打面には、パンチ・ホール・マ ークがみられ、執拗に打撃している意識が窺える。更 に242-c の剝離によって242-d 剝片の打面は作出され ている。242-c と 242-d の間には 2、3 枚の剝片が入 るらしいが、242-d の剝離で242-a 系の剝離作業は終 了している。

一方の 242-a' 系は前者と同様, 甲板面を薄い 剝離 で整えた後, 242-b' を剝離し, 終了している。

242 の接合資料は、同一母岩であるにもかかわらず 初期の段階で分割され、a 系、a' 系という 2 つの個体 になったものである。

243 (Pl. 36) も 242 と同様、初期の段階で 2 分割された接合例で、舟底形を呈しているが、これも又、甲板面を打面として剝片剝離が進行し、243-a、243-bの寸詰りの剝片が剝出されている。 243 に接合すべき片割れは見い出す事は出来なかった。

241 (Pl. 30) は、径約15 cm の長円礫を大きく2分割し、周囲には礫面が一部残っている。分割面は、平担な大きな剝離面であり、この分割面を甲板面とする甲の高い舟底状の石核となる。この甲板面を打面として下に向って打撃され、241-a の部厚い剝片が取られている。

この他に分割された例としては、接合例ではないが、241、215、216、217 (Pl. 23) のそれぞれは、断面は半球形を呈し、剝離面には大きな剝離痕がみられる。これは、215、217 の下半部に明瞭に観察され、石核の大きさ、形、剝離の重複関係からすると初期の段階で分割されたものであろう事が判明する。ここではこれらの一群を分割技法として一括しておく事とする。

石核の大別

石器製作の過程において、石核と剝片、剝片と砕 片と石器は、常に対応する関係にある。ここでは、 第3文化層出土の石核の大別とそれに対応する剝片 について述べる事とする。

A型 225・226・227・228 (Pl. 26), 224 (Pl. 36) 比較的小形の扁平な円礫を素材とする。前回の剝離面を打面とし交互剝離を行ない,残核は,剝離面の中央が突出するチョッピングトゥール状をなす。 生産される剝片は,縦長,横長と一概に言えないが,比較的横広の例が多く,原則的には主要剝離面の末端部,或いは側縁に礫面が残置される。打縁調整は特に認められない。

B型 218·219·220 (Pl. 24), 222·223·224 (Pl. 25)

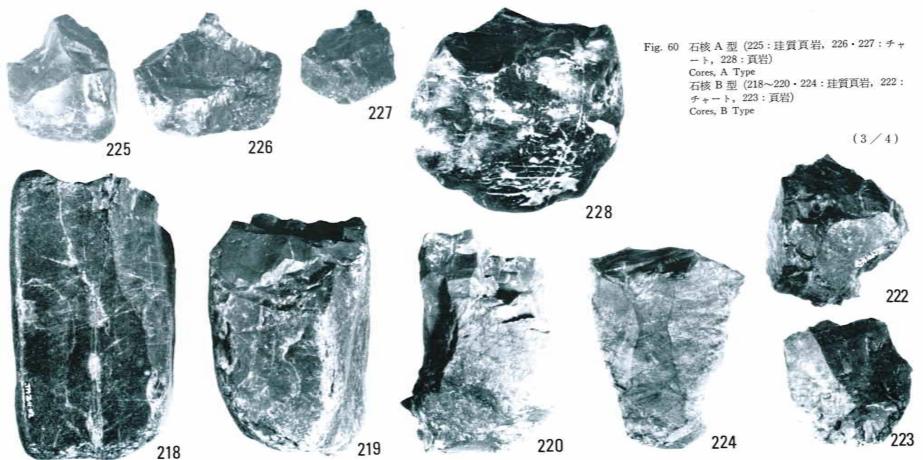
隅丸の直方体や、立方体が素材となり、打面を再生しながら縦長の定形的な剝片を生産する。横断面は、ほぼ四辺形、縦断面は、台形を呈し、背面には際面の一部が残置される場合が多い。打面は、上・下、側面と転移するが、それも生産する剝片の長さが、石核の高さや幅を越える時点までであり、その後は放置されると考えられる。接合資料では、245(Pl. 37)、246・247(Pl. 38)、248(Pl. 39)が好例であり、剝片の例では、263・265(Pl. 48)がこの型の石核から剝取されたものであろう。打縁調整、打面調整とも次の C₁型の或る段階に類似する点が指摘出来る。

C型

素材としては、長円礫、扁平な隅丸の直方体と多様性が認められるが、分割技法を行なう一群がこれ に相当する。分割後、打面の設定や転移、生産され

Fig. 59 石核と剝片と製品 Cores, Flakes and Inplements

1	A			a 910 940
E	0		900	b 340 346
	0			
				der élei
	1			
C	2			f ADAO
	3			
9 (D			h 1	
? (E)	~ 20	i	



る剝片の形状等により以下の如く3種に細別される。

C₁型 221 (Pl. 25), 241-a (Pl. 33), 262 (Pl. 47) 242-a 系の石核は2分割されたものの一方である。 甲板面は、打面を調整する為にあり、目的剝片の生産は、その後、甲板面に平行する状態で進行していく。 b, c は打面調整剝片になる。残核は、分割面としての節理面や大きな剝離面、或いは礫面の一部が、背面、側面に残置される形をとる。石核の高さにより打

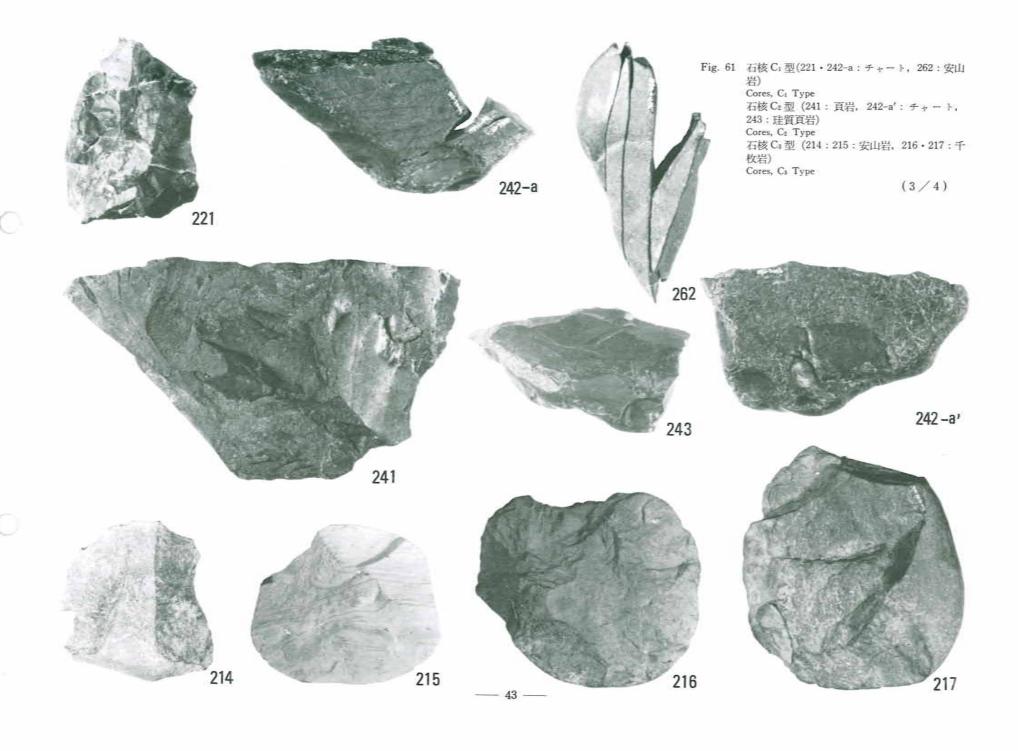
面が下にも設定され、上・下両端からの剝離が行なわれる例もある。定形的な縦長剝片を生産する工程の一種と推される。

C2型 241 (Pl. 31), 242-a' (Pl. 35), 243 (Pl. 36) 初期の分割面としての甲板面が常に打面となり,定形的な寸詰りの縦長剝片が剝取される。石核は,背面,側面に礫面が残り,舟底形を呈する。C1型が分割面に対してほぼ平行に剝片剝離が進行するのに対して, C2型は,分割面に対して直交した状態で剝片が

得られる点,更には生産される剝片の形状が異なる点が大きな特徴である。C₂型は,C₁型の剝離が進行する一工程の形状であるとも言えるが,本遺跡の接合資料中ではその関係を明確に把握出来る例は全く見られない。

C₃型 241 · 215 · 216 · 217 (Pl. 23)

長円礫,扁平な円礫が素材となる場合が多い。2分割された礫の表面部分を打面とし、中心に向って周囲から剝離を進行させる一群が相当する。断面は半球



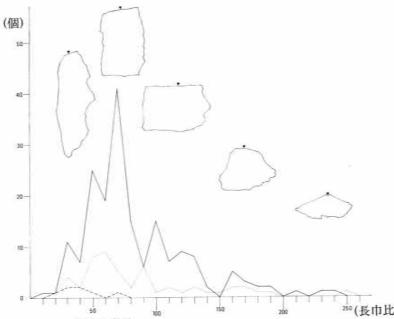


Fig. 62 長幅比と数量 Graph showing Pacentage of Length and Width on the Flakes

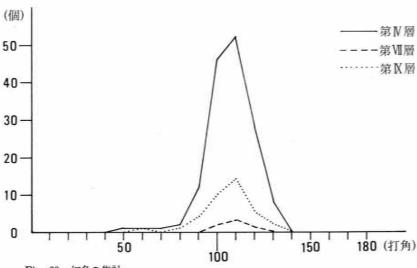


Fig. 63 打角の集計 Graph sowing the Striked-Angle on the Flakes

形を呈し、生産される剝片の 形状は不定形とはいうものの 横長剝片が卓越する様であ る。剝片の打面及び石核の背 面には礫面が残置され、丁度 チョッパー状の形状をなすも のである。この型の石核から 得られた剝片としては、204・ 205・208 (Pl. 21) がその特 徴を良く示している。

3 類 5 種に大別した石核以外で考慮に入れなければならないものもある。

一つは黒曜石類の剝片剝離 工程 (D型) である。黒曜石 は肉眼観察により約29種類 に分類されているが、接合個 体も少なく、又、残核が残ら ぬ程まで打撃を受けており、 その剝片剝離の工程は全く把

もう一つ (E型) は、15・16 (Pl. 2)、17 (Pl. 3)、107・112 (Pl. 10) 等の巨大な剝片がどの様な石核から生産されのかも不明である。いずれも調整された打面を有する。主要剝離面の左位には、打面に対して約90°の角度からの大きい剝離がみられ、中央に一本の部厚な稜を残しているものもある。112 の様に打縁調整が施されている例もあるが、一般的には15・16・107の様に平担な調整打面から剝

取されている様である。この様な剝片を素材とした通 称「オバケナイフ」は、武蔵野台地でも近年検出され 始めて来てはいるが、石核の形状についての把握まで には至っていない。今後の課題として残したい。

生産された剝片の長幅の比率をグラフ化した (Fig. 62)。出土した剝片のうちから、先端が弾け飛んで欠失している例や、剝片の中央部分に亀裂が生じ、縦位或いは斜位で折れている例は除去してある。100の値が長さと幅が一致する点にあり、以下は縦長剝片の、以上は横長剝片の形状を示す事になる。

この表からは幾つかの剝片のグルーピングが可能と なる。先ず、0~90までの縦長剝片の一群、90~150 までの一群, 150~200 まで, 更に 200 以上の一群と 大きく四群に分類出来る。これらを石核の分類と組み 合わせると、前から順に、B·Ci型の石核から生産さ れた一群, C₂型の一群, A型の一群, C₃型の一群に 相当する様である。一方、関西地方においての所謂, 瀬戸内技法によって生産される翼状剝片類は、その長 幅比をとって比較してみると、200~300までに至る ものが大半を占める(松藤 1974)。本遺跡の石核及び 剝片との対応関係からみると、A型の一部、C₂型と、 長幅比の上では類似する傾向をみるが、剝片剝離技術 上においては全く異なる線上に置かざるを得ず、一般 的に横長剝片,或いは不定形剝片と呼称し,翼状剝片 とは区別すべき研究史も、また、ここにあらわれると してみてとることが出来る (宮塚・矢島・鈴木 1974) (平口 1974) (白石・荒井 1976)。以上の様に、本遺 跡第3文化層の石核、剝片と瀬戸内技法との関連は認 められない。

更に, 打角は, 長幅比に関係なく大方は, 85~120° の範囲に入り, 110°にその集中がみられる (Fig. 63)。

ナイフ形石器及び尖頭状石器の素材について

今回は、次にあげる8項目を分類の基準とした。

- ①素材となる剝片の形状
- ②素材となる剝片の打点の設定場所
- ③刃潰し加工の位置と加工の形状
- ④基部加工の状態
- ⑤刃潰し加工の形状
- ⑥平面形
- ⑦断面形
- ⑧その他 (石質等)

石核とナイフ形石器・尖頭状石器の素材となる剝片の対応関係,及び8つの属性より,a·b·c·d·e·f·g·h·i型の9つの型に分類した。以下,各型について述べる。

a型 37·39 (Pl. 4), 54 (Pl. 5)

横長剝片を素材とした切り出し形ナイフ形石器である。素材を横位に置き、打面部は刃潰し加工の際に除去されている。石質は、チャート・頁岩である。

b型 38·40 (Pl.4)

縦長剝片を素材とした切出形ナイフ形石器である。素材の打面部を基部或いは先端部に設定し、両側縁に刃潰し加工を施し、刃部を明瞭に作出している。断面の形状は台形状を呈す。石質はチャートである。

c型 26~30 (Pl. 3)

縦長剝片を素材とし、素材の打面部を基部に設定 し、刃潰し加工は行なわず、基部作出の為にだけ細 かい剝離を施す。基部作出は、素材の打面部の形状 を著しく狭少にするか、或いは全部除去することに より行なわれている。表面には、打面と直交する2 つの剝離面,又は打面と直交する剝離面と平行する 剝離面の交錯により1本の稜線が形成される。平面 形は,稜線を中心とした左右対称の尖頭状形,断面 形は,稜を頂点とした扁平な三角形状を呈す。石質 は,凝灰岩・砂岩・頁岩・珪質頁岩である。

d型 43·45·46 (Pl. 4)

縦長剝片を素材とし、素材の打面部を基部に設定し、一側縁のみに刃潰し加工を施す。基部加工は打面の形状をやや狭少にする如く行なわれる。平面形は刃部を除き両側縁を長辺とした長方形状を示し、断面形は台形状を呈す。石質は安山岩・頁岩・珪質頁岩である。

e型 33~35 (Pl. 4)

部厚い不定形剝片を素材とし、素材の打面部を基部に設定し、一側縁のみに刃潰し加工を施して基部加工は行なわれない。基部加工を行なわない為、剝片剝離時の打面の形状を変える事無く大きく残している。表面には第一次剝離面と刃潰し加工の交錯により形成された1本の稜線を持つ。断面形は厚みのある三角形を呈す。石質は安山岩・砂岩・珪質頁岩である。

f型 36 (Pl. 4)

部厚い横長剝片を素材とし、素材の打面部を側縁に設定し、刃潰し加工は行なわず、基部加工だけを下端から先端へかけて施している。剝片の末端が刃部となる。打面の形状は剝片剝離時のままである。表面には、打面に直交する2つの剝離面が交錯し、1本の稜線を形成している。断面の形状は稜を頂点とした三角形状を呈す。石質は頁岩。

g型 61·62 (Pl. 5)

礫面を大きく残した不定形剝片を素材とし、素材 の打面部は側縁又は基部に設定され、先端部片側の みに数回の刃潰し加工を施す。基部は大まかな剝離 によって作出される。石質は安山岩・珪質頁岩であ る。

h型 41·42 (Pl. 4)

尖頭状石器である。部厚い縦長剝片を素材とし、 素材の打面部を側縁に設定し、鋸歯状の刃潰し加工 を一側縁を除き施している。この時、打面部は除去 される。第一次剝離面と鋸歯状の剝離による刃潰し 加工の交錯により形成された稜線を中心に左右対称 の尖頭状の平面形と、稜を頂点とした正三角形状の 断面形を呈す。石質は黒曜石である。

i型 15 (Pl. 2), 17 (Pl. 3)

大形縦長剝片を素材とし、素材の打面部を基部に 設定し、一側縁に急傾斜な鋸歯状の剝離による刃潰 し加工を施す。第一次剝離面と刃潰し加工の交錯に より形成された1本稜線を持つ。断面は稜を頂点と した三角形状を呈す。石質は頁岩と安山岩である。

石器の傷

良好な状態で石器の傷が幾つか観察された。ここでは特に撮影の条件が良かったものを紹介する。叩き石の打痕・線条痕,石核底面の剝落痕,石核・剝片・ナイフ形石器の punch-hall-mark,大形剝片の切断面の状態,大形ナイフ形石器の刃部の剝落痕・磨滅痕,尖頭状石器の磨滅痕・線条痕を観察した。黒曜石製の石器については,観察の条件が最も良く整っており,資料づくりは継続する予定である。今回,尖頭状石器 2点の傷の一部を扱った。

顕微鏡撮影には、実体顕微鏡 NIKON SMZ を用い、カメラは Nikomat FT2、フィルムは Kodak Tri X を使用した。

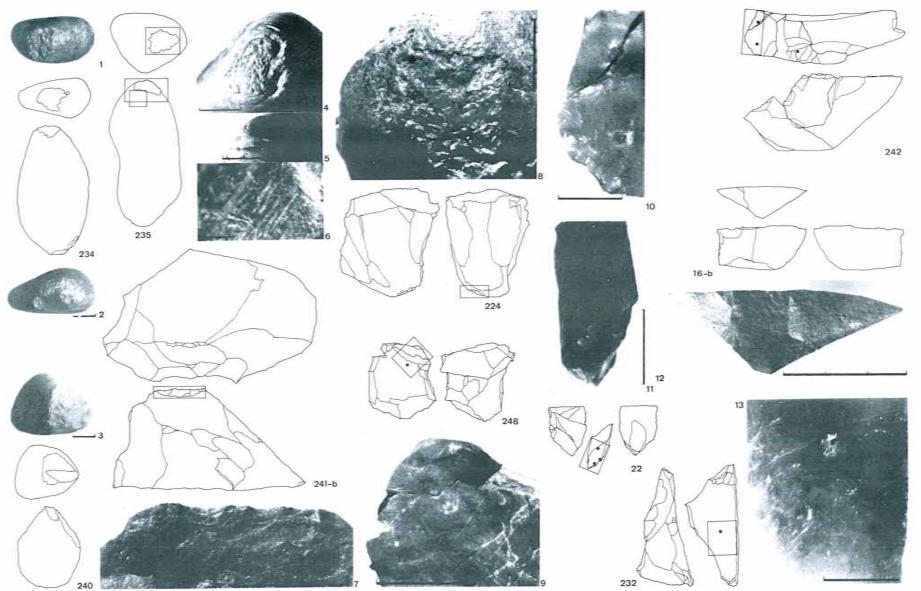


Fig. 64 叩き石・石核・剝片・ナイフ形石器の (傷実測図 1:2.4 写真1 目盛 1 cm) 1~4:打痕,5~6:線条痕。作業面に対して放射状の線条痕が見られる。長いものは 1 cm を上回わる。この特徴は、頂部を中心にして外側に向っており、交錯するものはあるが直交する例は全く無い。線条痕の単位は明らかでない。7~8:剝落痕。石核の打面に対向する末端底面に観察され、剝片剝離作業と大きく関わりを持つものであるう。9~11・13:パンチ・ホール・マーク、12:切断面Damage on Artifacts

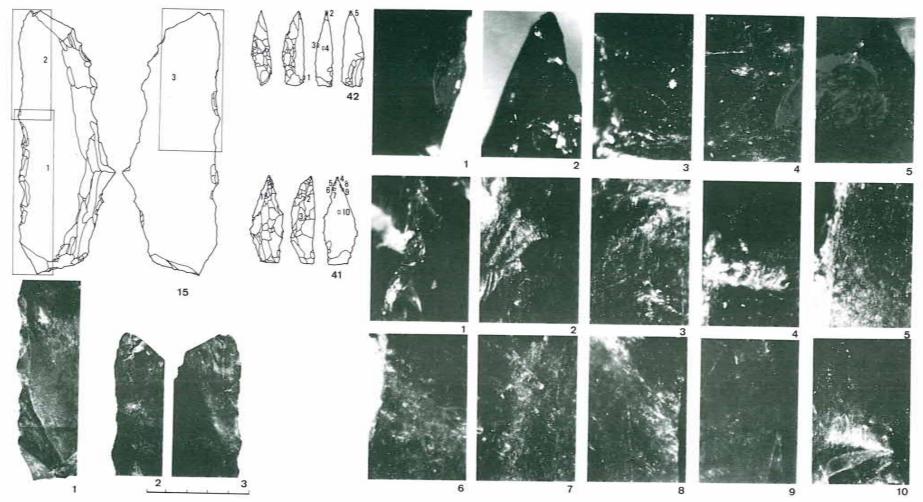


Fig. 65 ナイフ形石器・尖頭状石器の傷(実測図 1:2, 顕微鏡倍率 20.1)
15-1: 剝落痕, 15-2・3: 磨滅痕。かなり明瞭な使用痕が見てとれる。刃部上半部と下半部では使用の相違があらわれているのであろうが。 42-2・5, 41-1・4: 磨滅痕。尖頭状石器の先端部は、表裏とも磨滅が著しい。41 の稜の中央より先端に近い箇所も著しく磨滅している。 側縁部で磨滅が顕著なのは、両方とも基部近くであり、42 では右、41 では左側縁部に約 1 cm にわたって観察された。単位は明らかでない。42-1・3・4, 41-2~10:線条痕。撮影の条件の良いのは剝離面の少ない裏面であるが、比較的裏面の方に線条痕が多い。傷は部位によってほぼ一定の方向を持っている。ほとんど平行するが直交に近い角度で交錯する例は、41 の裏面、左右両側縁部の肩部に観察された。表面の傷は 42 の方が明瞭で、稜上部に右上からの斜めのもの、左側縁部では中心から外側へ向い、上位では稜の傷と同方向、下位では稜線に平行するものである。右側縁部では、やはり稜線に平行するような角度で、中心から外側へ向っている。裏面の傷は、上半部はほぼ全面、下半部は 42 が右側縁に、右上からの斜めの傷、41 が中央部に縦位の傷である。上半部の傷の方向も、両者は相違している。42 は、先端部には磨滅の他、線条痕は無く、中央部は横位、側縁部は外側から中心へ向う斜めの傷である。41 は、先端部は縦位、中央部も縦位、側縁部は、前述の如く、中心から外側へ向うものと、外側から中心へ向うものが交錯している。両者の傷の部位はほぼ同じであるが傷のつき方は相違する。

Damage on Knife-shaped Tool and Point-shaped Tools

C. 石器の分布

平面分布

遺物の平面分布をみていくと、全体的に密な部分、 散漫な部分、空白の部分等が観察される。このような 識別出来る最少の平面的なまとまりを便宜上、ユニット(U)という名称で扱うこととする。約1,000 m² の面積から17のユニットが検出された。

垂直分布

遺物の垂直分布幅の最も小さいユニットは U-15 (42 cm) であり、U-8 もこれに近い数値を示している。最も幅の大きいユニットは U-9 (116 cm) であり、U-5、U-7 (114 cm) がこれに次ぐ数値を持つ。ユニットの上・下の幅は、極めてバラエティに富んでいるが、ユニットの占地する位置、及びユニットの内的性格とどの様に結びつくのかは不明と言わざるを得ない。

次にユニットの断面の形状についてみると, やはり, 従来言われてきた様に概して凸レンズ状を呈している (安孫子 1971) (小田・伊藤 1976)。この中で,

U-9の断面形状は、特異な在り方をする。良く観察すると、上部の一群と、下部の一群との間に空白部が存在する。これは、礫群(P-13)の断面分布でも同様である。特に礫群の場合、上部の一群と下部の一群が、密接な接合関係を持つ。どの様な性格付けをしたら良いか、現段階では不明であり、類例を待ちたい。

石核と剝片と器種について

各ユニットの組成については表に記した。(Fig. 86)

U-3のナイフ形石器は、 $b型 \cdot d 型 \cdot e 型$ があり、 石核は B型のみ、剝片は、チャート・頁岩を主体と した縦長剝片が多い。

U-4には、e型のナイフ形石器、B型の石核があり、 剝片は、縦長剝片、C₂型の石核から生産される打面 に礫面を残した横長剝片、不定形剝片が混在する。

U-5 には、i型のナイフ形石器、B型の石核、縦長 剝片、 C_0 型の石核から生産される剝片がある。石質 は、 f_{+} ート・頁岩・安山岩が多い。

U-6 には、a型のナイフ形石器があるが、石核との関係は把めない。

U-8 には、c型・d型のナイフ形石器、B型の石核がある。剝片には、頁岩・珪質頁岩を主体とした縦長剝片と、不定形剝片がある。石核、剝片、ナイフ形石器の関係が比較的みてとれるユニットといえるであろう。

U-9 には、尖頭状石器 (h 型), C₂型の石核、安山岩・珪質頁岩の縦長剝片がある。尖頭状石器を除き、 石核、剝片の関係がみてとれるユニットである。

U-12 には、B型の石核、珪質頁岩・チャート・安 山岩・頁岩の縦長剝片、横長剝片、不定形剝片が混在 する。

U-13 には、c型・e型・f型・g型のナイフ形石器、A型・B型・C₂型の石核、縦長剝片・横長剝片・不定形剝片が混在している。各種のナイフ形石器、石核、剝片の混在しているのがこのユニットの特徴である。

U-14 には、a型・b型のナイフ形石器、尖頭状石器 (h型)、A型・ C_8 型の石核、珪質頁岩の縦長剝片があり、U-13 同様の混在がみられる。これは、石器類が頻繁な移動を繰り返した結果であると考えられる。 A型の石核が2個あるが、この石核は、U-13・U-14







Fig. 66 U-3 (1) 全景 (西から) (2) 中心部 (北西から) (3) ユニットの底面 P-2 の底面にも相当する配石が見られる (北西から)

にのみ集中している。

長剝片がある。

U-2・U-7・U-10・U-11, U-15・U-16・U-18 に に属するであろう。 は、ナイフ形石器、石核は無い。

来そうである。1つは石器製作技術の観点に立脚し、 に属するものであろう。

石核・剝片・製品の一連の工程が窺えるユニット群で U-17 には、c型のナイフ形石器、B型の石核、縦 ある。比較的、製品のセットは把えられず、偏りのあ るユニットである。U-3・U-8・U-9・U-17 がこれ

一方、各々の石器が独立した情報を具備し、ユニッ トの一員を担っている形態をとるもので、石器組成も 以上の石器ユニットを大きく2つに分類する事が出 整っている一群である。U-12・U-13・U-14 がこれ

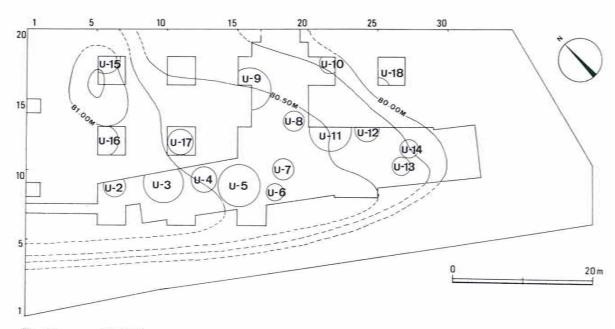


Fig. 67 ユニット概念図

集中の度合、規模に関わりなく、専ら平面分布上での最小のまとまりを範囲で表わした。標高80.00mから 81.00 m の平担な面に分布する様子が見てとれる。U-9 の東側と南西側は、無遺物の範囲である。遺跡内の空 白部分は、ここではほぼ中央付近に存在する。17のユニットのうち13ユニットが台地の張り出し部分に分布 し、空白部分は台地の中央部分にも相当している。試掘区の (11~12, 17~18) 区からは遺物は検出されなかっ

Distribution of UNIT Conception





Fig. 68 U-5

- (1) 全景 (南西から)
- (2) 大形ナイフ形石器 (南から)





Fig. 69 U-9
(1) (真上から) P-13 と平面分布を同じくする。
(2) U-9 の下面、上位のユニットの中心から約
50 cm 下位に無遺物層をはさんで検出された。P-13 の下面でもある。







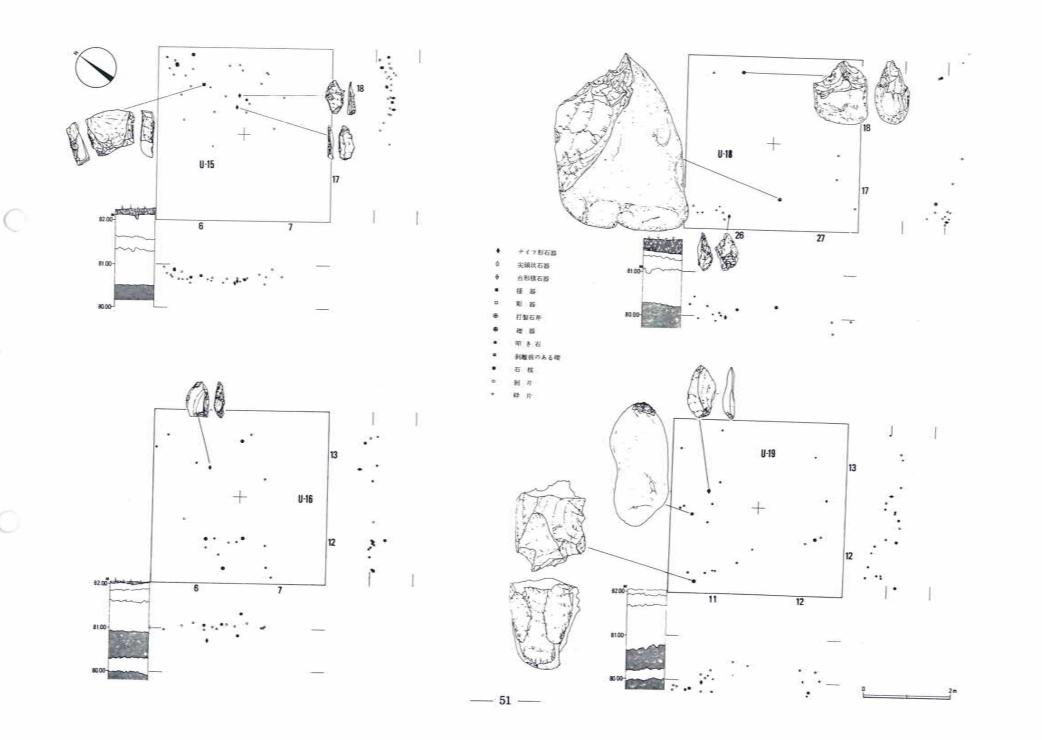


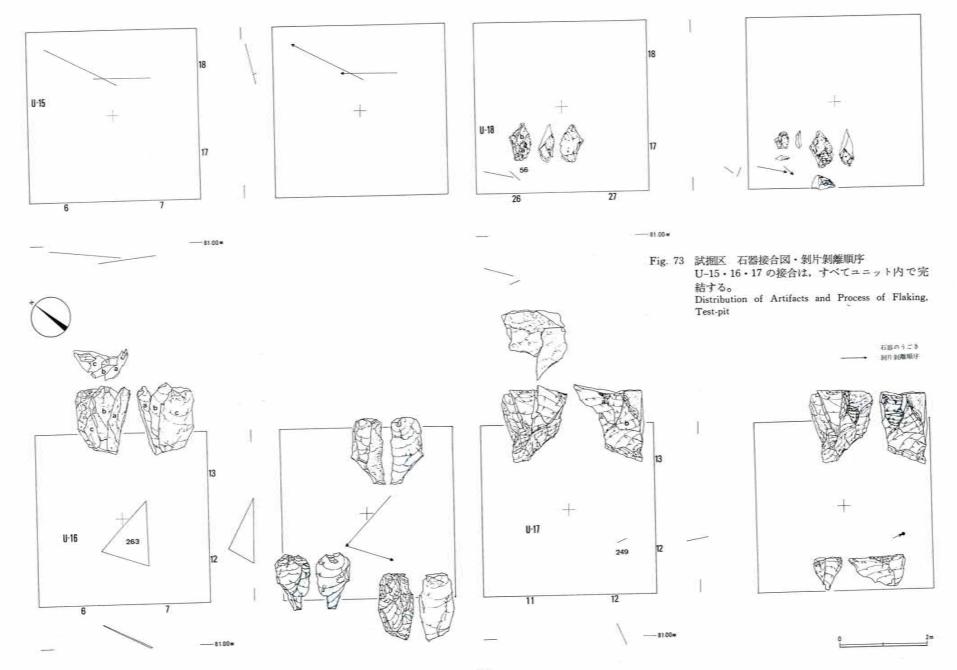
Fig. 70 (1) U-11 (南西から)
(2) U-12 (南西から) U-11 よりも約10cm 下位
から検出された。P-20 と平面分布を同じく
する。

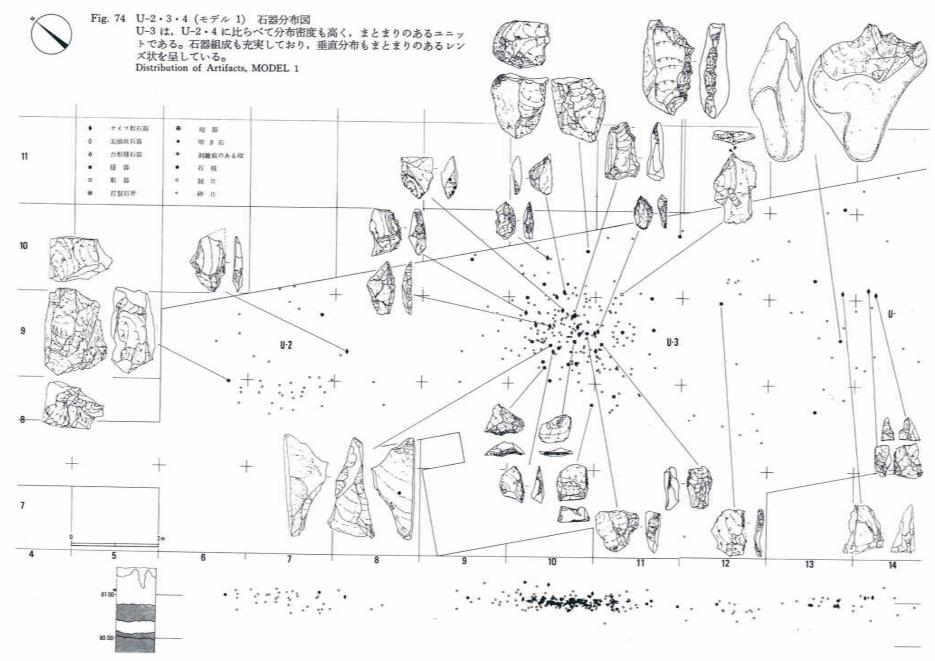
(3) U-13・U-14 (西から) 東側に P-21・22・ 23 が一列に並ぶ。

Fig. 71 U-15 (南西から) U-15 の検出とともに約30 cm下位から P-27・28・29が見えはじめる。

Fig. 72 試掘区の石器分布図 試掘調査区の為、ユニットの規模は明確に把握 出来ないが、ユニットとしてのまとまりを持っ ている。垂直分布では1mに近い幅がある。 Distribution of Artifacts, Test-pit







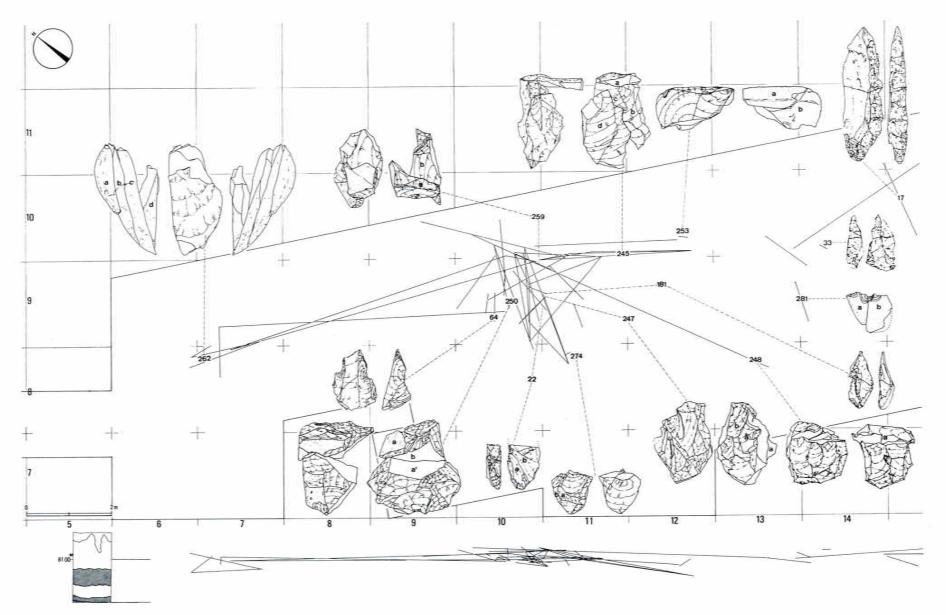


Fig. 75 U-2・3・4 (モデル 1) 石器接合図 U-2とU-3との間には、2個体、U-3とU-4との間には1個体の接合関係がある。U-3には、17個体の接合資料が含まれ、ユニット内の接合数では最も多い。 Distribution of Connected Artifacts, MODEL 1

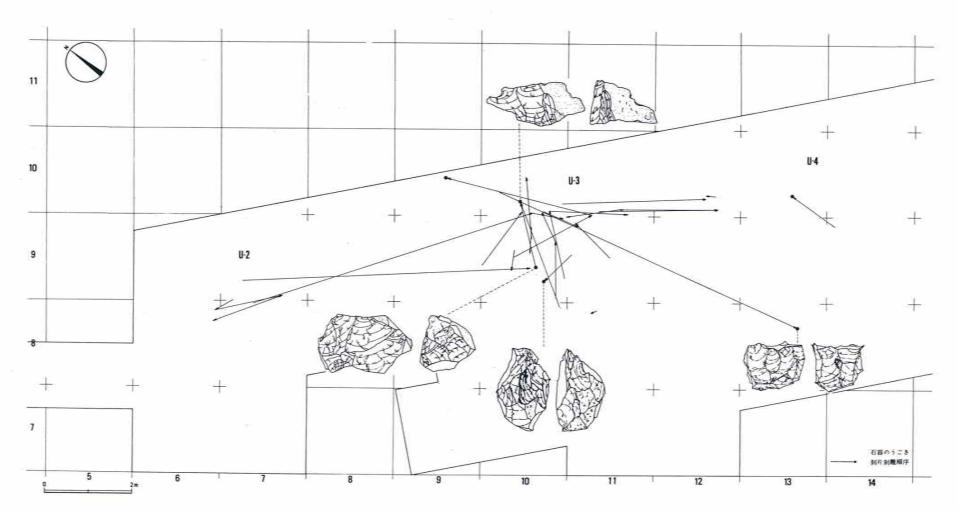
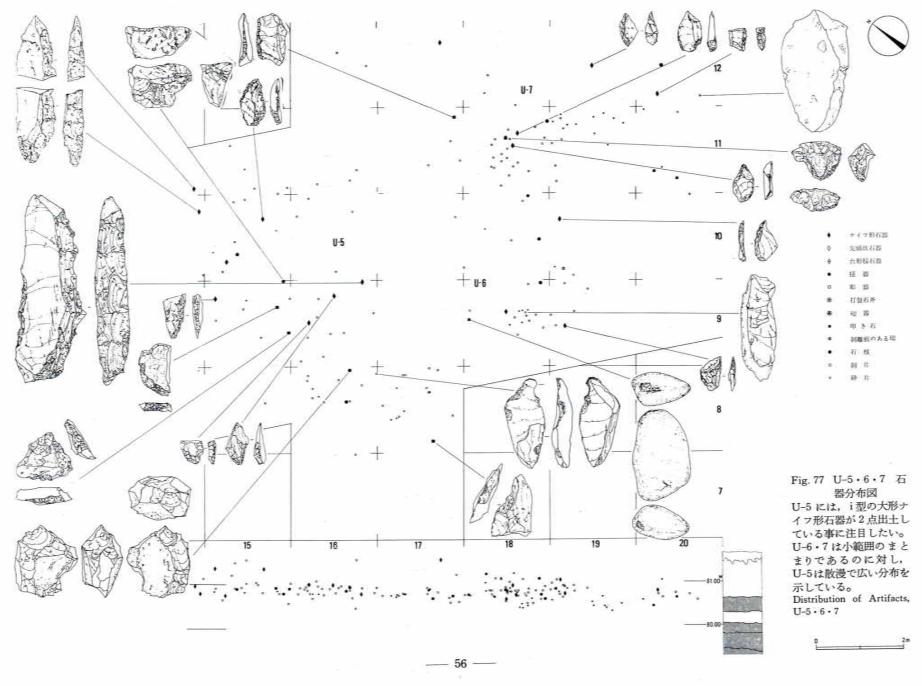
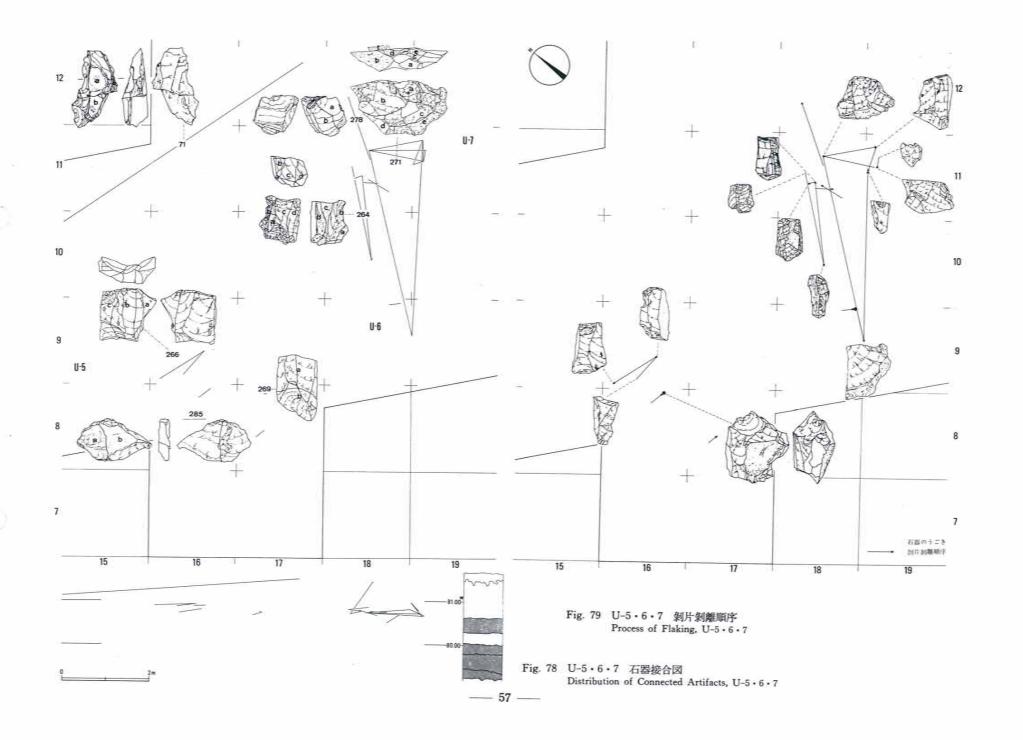
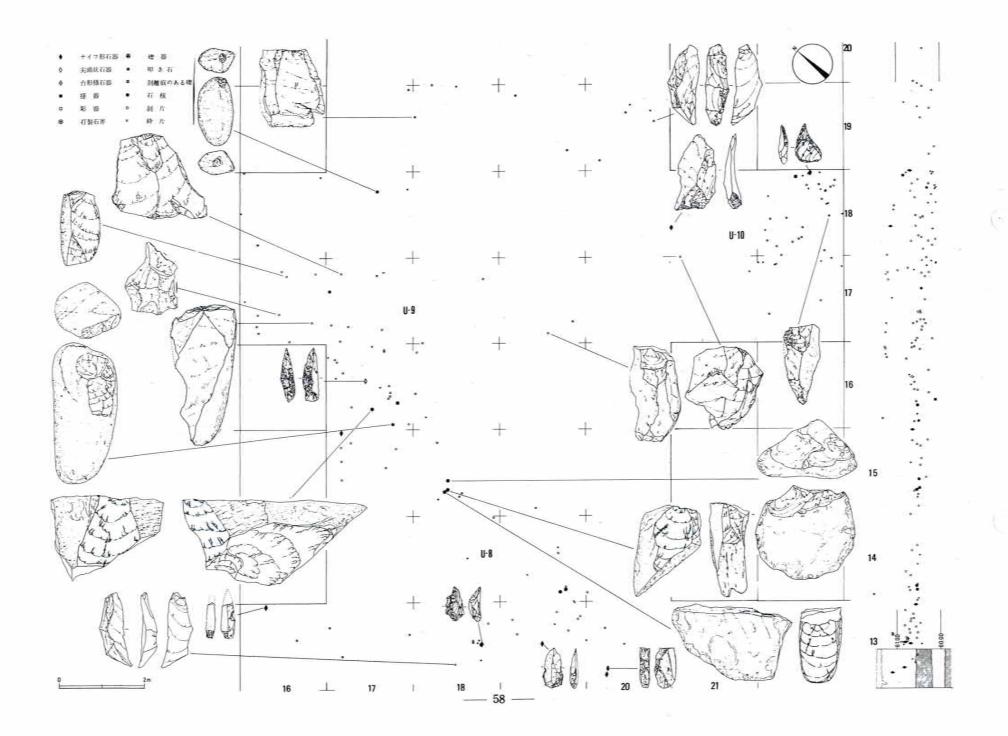
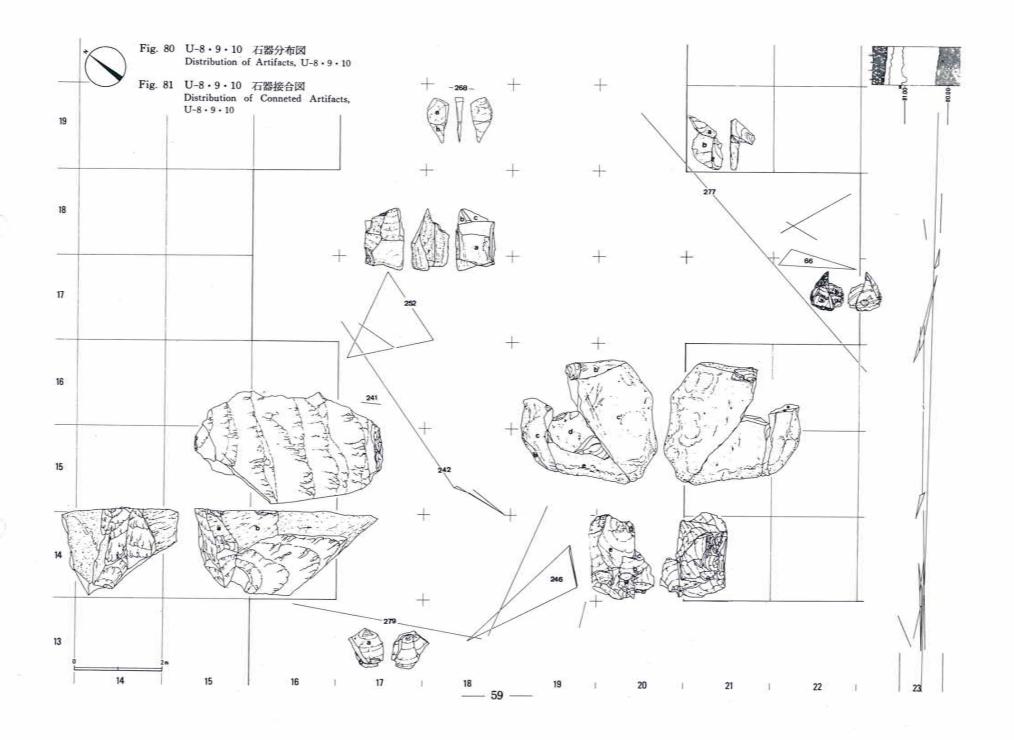


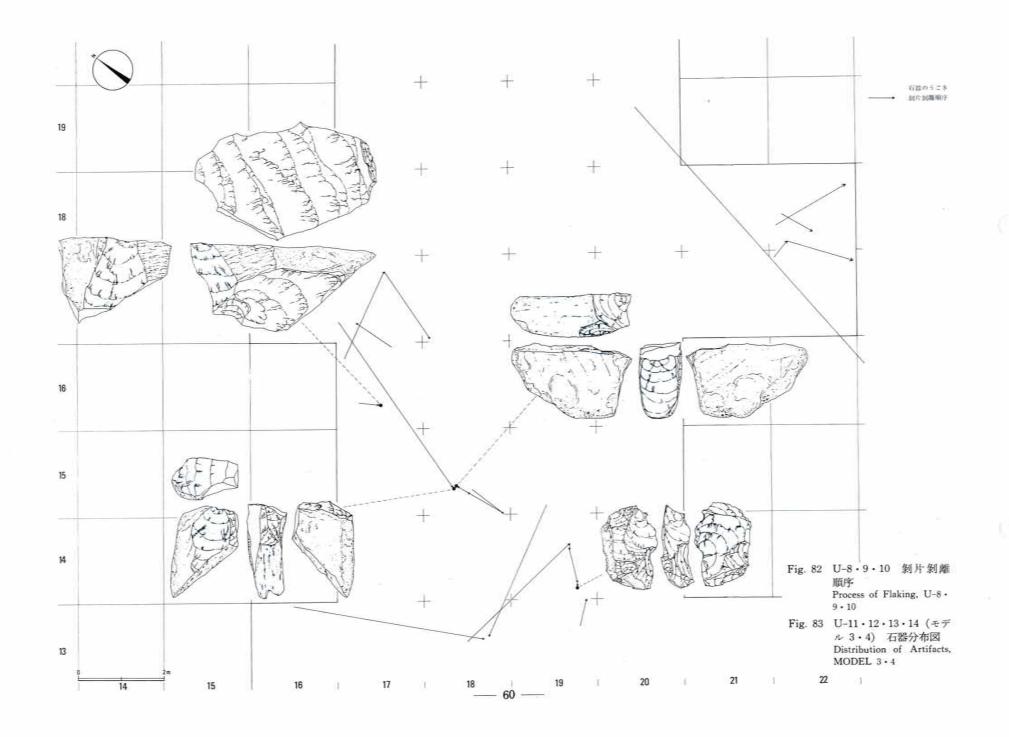
Fig. 76 U-2・3・4 (モデル 1) 剝片剝難順序 相対的に、ほぼ南北のうごきと東西のうごきに二分される。南北のうごきは、U-3 内のうごきであり、東西のうごきは U-2 と U-3、U-3 と U-4 にまたがるうごきとみてと れる。両者は U-3 で交錯する。 Distribution of Process of Flaking, MODEL 1

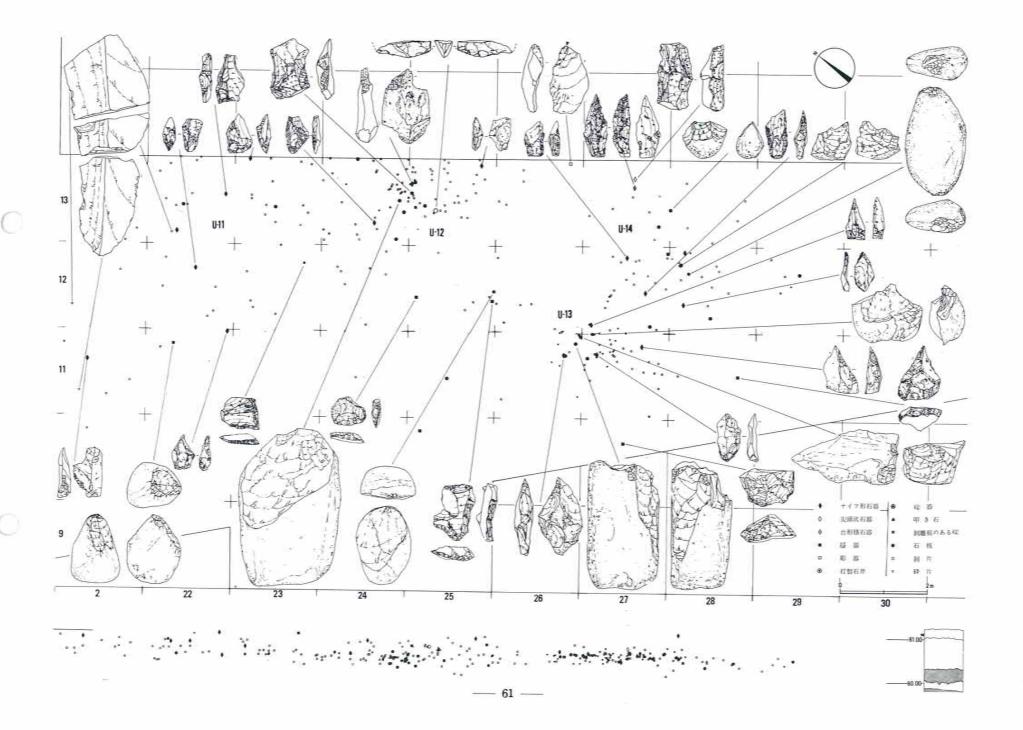


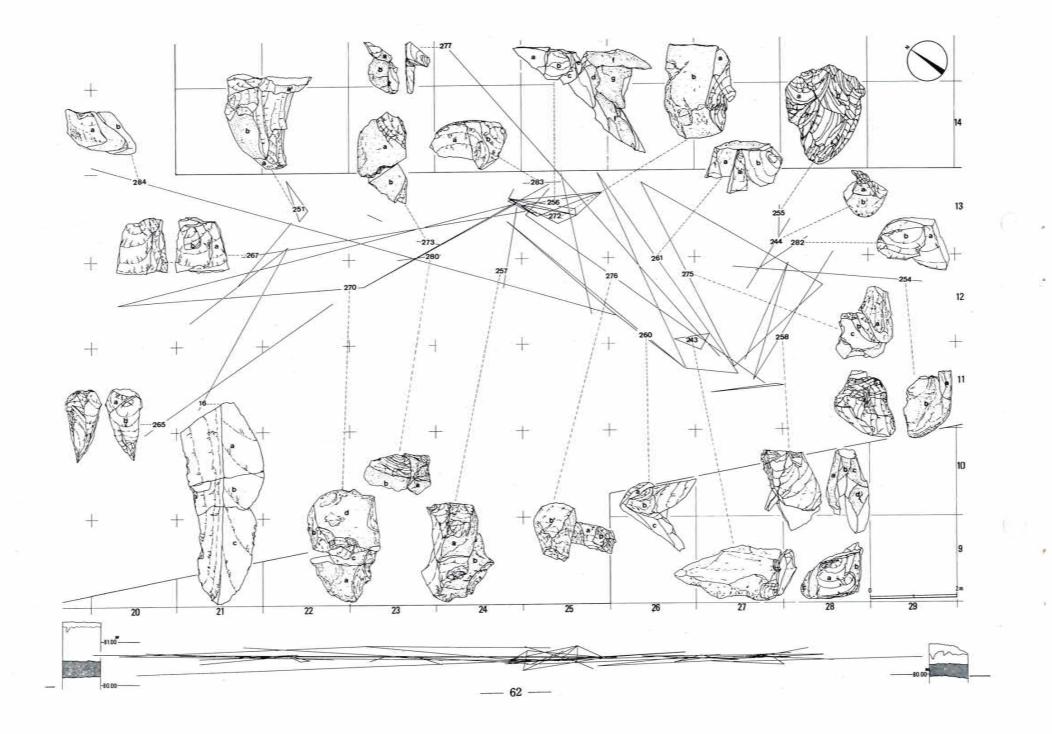


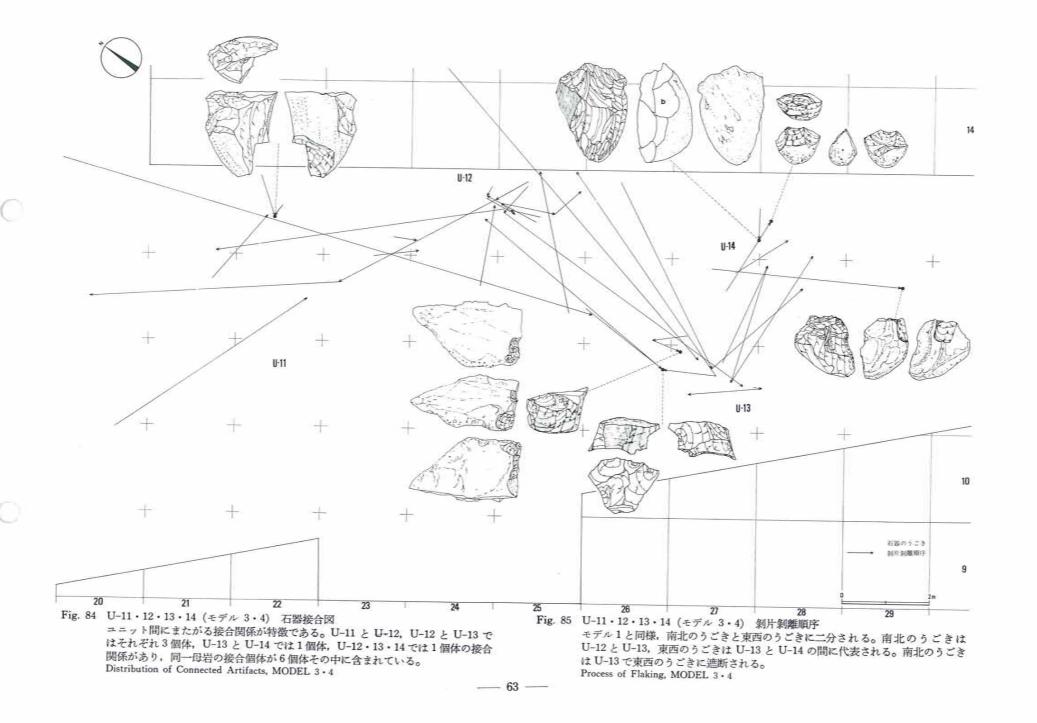












D. 石器のうごき

接合作業の基本は、母岩別資料の分類である。この 作業は非常に困難で、時間を必要とするばかりか正確 性を求められる。これが正確に行なわれないと、次の 母岩別資料の分布図は意味の無いものになるのみでな く、接合そのものの作業を停滞させる事になる。分類 合関係は表に示した通りである (Fig. 87)。 作業が終ると、後は根気よく接合を試みるだけであ る。個々の顔付きを完全に覚えてしまう程、何回とな く繰り返す事である。本遺跡に接合資料多いのは、こ の様な一連の作業を黙々と繰り返し行なってきた所産 に他ならない。

石	Ŧ	珪	頁	砂	安	黒	萲	砂	Ŧ	石	合	
二人質	7	質頁	Ι.	砂質頁	Щ	曜	灰		枚		1	備考
買った	1	岩	岩	岩	岩	石	岩	岩	岩	英	Ħ	
2	9	1	3	1	4	2					20	
3	29	6	13	2	6	1	1	2			60	Model 1
4	9	2	1	1	6	2					21	
5	14	4	9	1	10	6			1		45	
6	7	2	3		3						15	
7	7	3	3		1	6		2			22	
8	2	5	5			5	2				19	
9	4	8	5	2	10	4	1	3			37	Model 2
10		1	1		3	4					9	
II.	3	8	1		9	6	2	1			30	Model 3
12	5	6	8	1	5	6	2	1			34	Model 5
13	4	7	1		1	2	1		1		17	Model 4
14	5	5	6		2	3	1	1	1		24	Model 4
15	10	1			1			1			13	
16	5		2		3	1				1	12	
17	4	2	3				4				13	
18						2					2	
合計	117	61	64	8	64	50	14	11	3	1	393	

Fig. 86 各ユニットにおける母岩の種類と個数 (第3文 Classification of Original Stone at every UNIT

こうして得られた接合資料で、ユニットに関係する 接合資料数は85となった。内訳は、ユニット内での 接合資料数63, ユニット間に跨る接合資料数13, ユ ニットとユニット外に点在するものとの接合資料数 10 (接合資料 017 はユニット間の接合とユニット外と の接合の両方に属する) である。各ユニットの石器接

ユニット間に跨る接合は、U-2 と U-3 との間に 2, U-3 と U-4 との間に 1, U-6 と U-7 との間に 2, U-11 と U-12 との間に 3、U-12 と U-13 との間に 3、U -13とU-14との間に2,計13を数える。残りのU-5・8・9・10・15・17・18 は全てユニット内での接合

ユニット間の接合資料番号 ユニット外との接合資料番号(グリッド) ユニット内での接合資料番号 21 2 023 -085,099 009,014,016,019,032,040,046,060,062 025(12,10),088(12,10) 065,066,067,084,087,089,091,100 -047 4 036,037,061,098 092(17,12) 5 | 005,013,049,050.097 6 055 -008,042 033 052 064 7 8 021,026,059 080(26,12),081(16,13) 9 027,048,056 029(18.15) 10 077,093,095 017(20,12) 11 010,012,030,035,041,044,074 -017,024,068 076(25,12) 028:034.039 063.071.083 031.078 079(20,19) -020 051(29.12) 003,018,069 15 038,086 022 16 17 045 18 094

Fig. 87 各ユニットの石器接合関係一覧 Connected Artifacts and UNITS

をしている。

これらユニット間の接合関係により、幾つかのまと まりを把握する事が出来る。U-2・3・4, U-6・7, U-11・12・13・14 の 3 つのまとまりである。

この3つのまとまりの中で、資料に恵まれたU-2・ 3・4. U-11・12・13・14 のユニット群を取り上げ分 析の対象とする。

U-2 · 3 · 4

U-2 は石核 2, 剝片 34, 砕片 4, ナイフ形石器 1 の 計 41 点。U-3 は石核 12, 剝片 160, 砕片 26, ナイフ 形石器 14, 搔器 10, 彫器 1 の計 223 点。 U-4 は石核

> 2、 剝片 16、 砕片 1、 ナイフ形石器3, 礫 器1の計23点より 構成されている。石 質のあり方を見てみ ると、母岩別資料の 少ない黒曜石は、製 品として含まれてい ない。逆に母岩別資 料点数の多いチャー トは、多くの石器を 残している。安山 岩·頁岩·珪質頁岩 も僅かではあるが製 品として利用されて いる。

次に,各ユニット の組成をみると, U-2・3・4とも剝片 の占める率は全体の 70%を越えており、 特に U-2 は 83 %を 占めている。中で も. U-3 には石核が

12点、ナイフ形石器が14点も残されている事実は注目すべきであろう。石核は全てが残核ではなく、剝片剝離を進行させていくのに可能な例が残されている事も重視しなければならない。叩き石は1点も含まれない(Fig. 88)。

このような遺物のあり方を追求する為に、母岩別資料の分析を通して、ユニット形成に関わる剝片剝離のあり方を辿っていく事にする。

ここに取り上げる母岩別資料は、U-2・3・4に跨る 分布を持ち、母岩別資料に石核又は接合資料を含むも のである。

母岩別資料 A-010

組成:剝片5点

接合資料 023: 剝片 4点 262 (Pl. 47)

分布: U-2

制片剝離のあり方: U-2内に原石に近い形状を保った石核が持ち込まれ、U-2内で剝片剝離作業が行なわれている。。剝片5点はユニット内に残され、残りの石核はユニット外に運び出される。連続性の強い接合関係がこの点を裏付ける。

母岩別資料 SH-021

組成:石核1点 221 (Pl. 25), 剝片1点

分布:石核は U-2, 剝片は U-3

制片剝離のあり方:幾つかのうごきが考えられるが、やはり剝片剝離作業が行なわれた場所には砕片が残らねばならない。U-2、U-3以外の場所での剝片剝離作業が考えられる。その場所から石核はU-2へ、剝片はU-3へ運び込まれたものと考えられる。

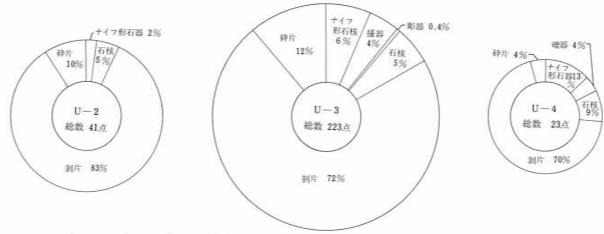


Fig. 88 U-2・3・4 (モデル 1) の石器組成 Composition: U-2・3・4

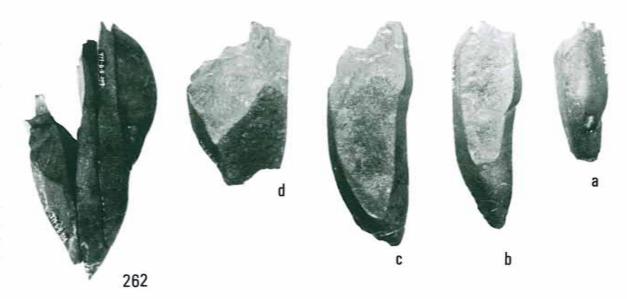


Fig. 89 接合資料 023 (A-010); 262-a~d: 剝片(安山岩) Connected Artifacts

(3/4)













(3/4)

Fig. 90 接合資料 025 (CSH-006); 245-a: 影器, 245-b~d: 剝片 (珪質頁岩) Connected Artifacts

母岩別資料 SH-029

組成:石核1点 223 (Pl. 25)

分布: U-3

制片剝離のあり方: U-3内で剝片剝離作業が行な われ、剝片・砕片は全て持ち去られたと解するよ り、むしろ、U-3以外の場所で剝片剝離作業が行 なわれた後、石核が単独に U-3内に運び込まれ たと解する方が妥当であろう。

母岩別資料 C-032

組成:石核1点, 剝片2点

接合資料 046:全て接合関係を持つ 247 (Pl. 38)

分布: U-3

剝片剝離のあり方:組成では剝片としたが、247-a は目的剝片とは考えられない。むしろ、247の接 合例が示すように、247-a、247-a′との間の剝片 は調整剝片と考えられる。従って、剝片剝離のあ り方は、U-3内で剝片剝離作業が行なわれ、目的 剝片はU-3外へ運び出され、石核・調整剝片が 内に置き去りにされたものと考えられる。 母岩別資料 CSH-006

組成:剝片3点,彫器1点

接合資料 025:全て接合関係を持つ 245 (Pl. 27)

分布: U-3

剝片剝離のあり方: 245-a は打面作出剝片である。 この剝離面を打面として,連続的に剝片剝離を行ない,剝片4点がU-3内に残され,石核はU-3 外へ運び出されている。打面作出剝片は後に彫器に転用されている。砕片が伴出しないのが問題となるが,接合資料,打面作出剝片の存在などから,U-3内での剝片剝離作業を想定出来る。

母岩別資料 CSH-002

組成:石核2点, 剝片8点, 砕片2点接合資料016:石核2点 250 (Pl. 40)接合資料060:剝片2点 259 (Pl. 45)

分布: U-3

制片剝離のあり方: U-3 内で剝片剝離作業が行な われ,目的剝片は U-3 外へ運び出されたのであ ろう。接合資料は 2 例だけで,残りの剝片は接合 しない。このことは,接合資料と接合しない剝片 との間に、複数枚の剝片の存在が考えられなければならない。この剝片が目的剝片としてユニット外へ運び出されたものと考えられる。

母岩別資料 SH-003

組成:石核1点, 剝片4点

接合資料 047: 石核と剝片 1点 248 (Pl. 39)

分布: U-3 剝片1点 U-4 石核1点

U-17 剝片 1 点

(12, 8) 区 剝片 2点

制片剝離のあり方: U-17 で剝片剝離作業が行なわれたか否かは、1点の剝片からは把めない。U-3 に残されている剝片は打面再生剝片である。打面再生後、少なくとも数枚の剝片剝離を行なっている接合状態を示している。打面再生剝片は、その場に残されるとの仮定にたつと、剝片剝離にかなう石核はU-4へと運ばれる。この時、数枚の剝片もユニット外へ姿を消す。U-4で剝片剝離作業が行なわれたか否かは不明である。(12、8) 区に残されている2点の剝片は、どの場所での剝片剝











248

Fig. 91 接合資料 046 (C-032); 247 (チャート) 060 (CSH-002); 259 (珪質頁岩) 047 (SH-003); 248 (頁岩) Connected Artifacts

(3/4)

離作業によってもたらされたものであるか全く把めない。ただ、U-3内で生産された剝片は、整った縦長剝片が多いことが石核より看取される。 (12,8) 区の剝片は不定形な剝片である。接合資料の剝離の順序は、U-3から U-4へのうごきを表わしている。

母岩別資料 C-008

組成:石核1点, 剝片10点, 砕片1点

ナイフ形石器1点

接合資料 085:ナイフ形石器と剝片2点

接合資料 099: 剝片 3点

接合資料 100:剝片1点と砕片

分布: U-2 剝片 5 点

U-3 石核、ナイフ形石器、剝片 5 点、砕片 剝片剝離のあり方:石核は残核である。何枚かの剝 片剝離後、石核として、U-2 内に持ち込まれ、 U-2 内で剝片剝離作業が行なわれる。次に、石核 は U-3 に運ばれる。U-2 で剝離された剝片のう ち5 点はそのまま残されている。U-3 でも剝片 剝離作業が行なわれ、残核として廃棄される。剝 片も寸詰まりのものが多く、残核とともに廃棄さ れたものと考えられる。接合資料の剝離の順序に 基き, 085・099 について, U-2 かち U-3 へのう ごきを裏付けることができる。

U-11 · 12 · 13 · 14

チャート及び珪質頁岩は各ユニットに 均一に 分布 し、安山岩は U-11 に多く、U-13・14 に少ない。 黒 曜石も U-13・14 には少ない。 頁岩は U-12・14 に多 く認められ、U-11・13 には概して少ないことが窺え る (Fig. 86)。

各ユニットの組成は、U-11は石核3点、剝片57点、 砕点3、ナイフ形石器3点、台形様石器1点、掻器1点、叩き石1点の計69点。U-12は、石核5点、剝片49点、砕片1点、ナイフ形石器3点、掻器1点、叩き石1点の計60点。U-13は、石核6点、剝片32点、砕片17点、ナイフ形石器4点の計59点。U-14は、石核4点、剝片27点、砕片3点、尖頭状石器2点、ナイフ形石器4点、掻器1点、叩き石1点の計41点より構成されている(Fig. 92)。

石質別に各ユニットを見ると、チャート、珪質頁岩、頁岩、安山岩、黒曜石の占める割合は、殆んど同率である。それにもかかわらず、製品として使われている石材は、黒曜石が最も多い。このことは、U-2・3・4のユニット群と全く対照的なあり方をしている。

すなわち、U-2・3・4のユニット群には黒曜石製の石器が1点も無いのに対し、U-11・12・13・14のユニット群には黒曜石製の石器が多い。

次に、各ユニットの組成比率をみると、剝片の占める割合は、U-11・12では80%を越え、U-13・14では54%・66%と前者よりも低い値を示している。石核の占める割合は、各ユニットとも10%以下であるが、剝片剝離を進行させていく事が可能な石核のまま残されている。ナイフ形石器は、低い値であるが、各ユニットに存在し、U-14では10%の値を示し、又、尖頭状石器が5%の割合で含まれている。叩き石は、U-13を除いて各1点ずつ認められる。

以上のあり方を踏まえ、石器類のうごきを追求する 為に、接合資料を中心とした母岩別資料について、剝 片剝離のあり方を分析することにする。

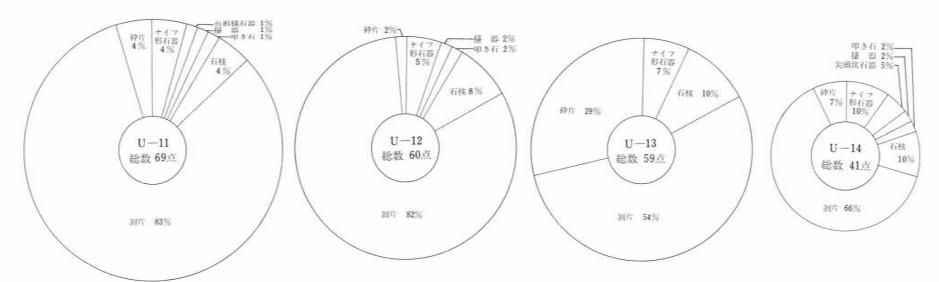
母岩別資料 A-015

組成:石核1点,剝片2点

接合資料 030:全て接合関係を持つ 251 (Pl. 41)

分布: U-11

剝片剝離のあり方: U-11 外の場所で剝片剝離後, 石核として U-11 に搬入され, 剝片剝離作業が行 なわれている。接合資料をみると, 何枚かの剝片



Compositon, U-11 • 12 • 13 • 14

Fig. 92 U-11・12・13・14 (モデル 3・4) の石器組成 U-12・13・14 は、接合資料から強い関係を示すが、組成にそれぞれ異った特色を持っている。

が抜かれている。この剝片はユニット外へ運び出 されたものであろう。ユニット内には石核と調整 剝片の2点が残されている。

母岩別資料 C-009

組成: 剝片12点, 二次加工痕のある剝片1点

接合資料 039: 剝片 8点 接合資料 024: 剝片 2点

分布: U-11に剝片1点, 残りは全て U-12内

剝片剝離のあり方: U-12 内に原石のまま持ち込ま れ、剝片剝離作業が行なわれる。039の8点の接 合資料には抜けている剝片が想定出来るが、この 抜けている剝片だけが目的剝片として持ち去られ たことを意味しているのであろうか。ともかく. U-12 内で剝片剝離作業が行なわれ、13 点の剝片 が残されている。

母岩別資料 A-003

組成:剝片8点

使用痕のある剝片1点

二次加工痕のある剝片1点

尖頭狀石器1点

播器1点

接合資料 068: 剝片 2点 267 (Pl. 49)

接合資料 028: 剝片 2点 283 (Pl. 55)

分布: U-9 剝片1点

U-11 剝片 1点

U-12 残り10点

剝片剝離のあり方: 028は, U-11と U-12に跨る接 合である。総数12点のうち、製品2点を含む10 点が U-12 内に残されていることから, U-12 内 での剝片剝離作業が想定される。このうち、2点 の剝片は、それぞれ U-9 と U-11 に 1 点ずつ移動 している。石核は剝片剝離作業後、持ち去られた と考えられる。

母岩別資料 T-001

組成:剝片2点,使用痕のある剝片2点

接合資料 017:全て接合関係を持つ 270 (Pl. 50)

分布: U-11 U-12

(20, 12) 区

剝片剝離のあり方: U-11, U-12, (20, 12) 区以外 の場所で剝離された大形剝片として、U-12 内に搬入されたのであろう。

母岩別資料 CSH-045

組成:石核1点 218 (Pl. 24)

分布: U-13

剝片剝離のあり方: ユニット外の場所から、石核と 1. て U-13 内に運び込まれている。U-13 内で剝 片離作業は、剝片・砕片等が無いことから、行な われなかったと考えられる。

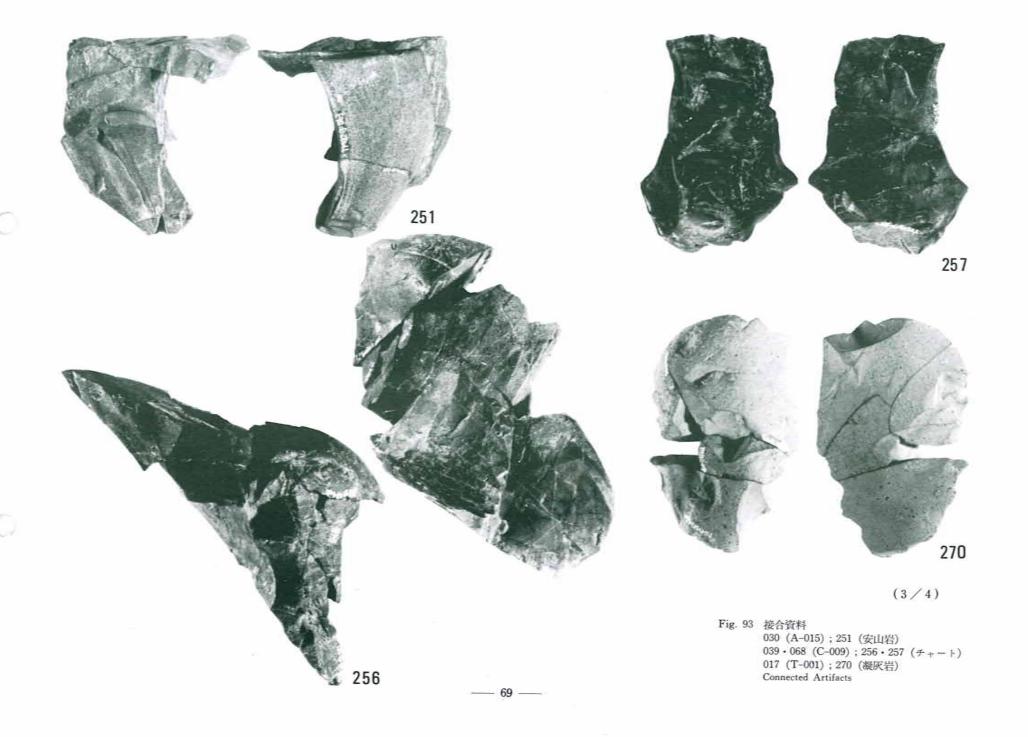




Fig. 94 接合資料 015 · 020 · 063 (CSH-003); 275 · 258 · 260 (珪質頁岩)

母岩別資料 CSH-012

組成:石核1点,剝片2点

接合資料 031:全て接合関係を持つ 243 (Pl. 36)

分布: U-13

制片剝離のあり方:分割された状態で,U-13内に 持ち込まれ、分割面を打面とし、数回の剝片剝離 が行なわれている。接合資料には、抜けている剝 片があり、これらの剝片は、ユニット外に持ち去 られたものと考えられる。ユニット内には、石核 と剝片2点が残されている。

母岩別資料 C-018

組成:石核1点,剝片5点

接合資料 069: 石核と剝片 1点 244 (Pl. 36)

分布: U-11 剝片 1点

U-13 剝片 1 点

U-14 石核 1点, 剝片 3点

剝片剝離のあり方石核は残核の状態である。U-14 で残核になるまで剝片剝離作業が行なわれ、その うち剝片3点は、残核とともにU-14内に残され ている。2点の剝片はU-11とU-13にそれぞれ 運び出されている。後の生産されたであろう剝片 は、U-11、U-13、U-14 以外の場所に持ち去られたものと考えられる。

母岩別資料 C-026

組成:石核1点,剝片1点

接合資料 051: 石核と剝片 252 (Pl. 42)

分布: U-14 剝片

(29, 12) 区 石核

剝片剝離のあり方:接合資料の剝離の順序に従う

と, U-14内で剝片剝離作業後, 石核が, (29,

12) 区に運び出されたものと考えられる。

母岩別資料 CSH-003

組成:石核1点

剝片 22 点

砕片 4点

ナイフ形石器 2点

播器1点

接合資料 020: 剝片 3 点と搔器 1 点 258 (Pl. 45)

接合資料 063: 剝片 2 点とナイフ形 石器 1 点 260

(Pl. 46)

接合資料 082: 石核と剝方 2点 261 (Pl. 46)

接合資料 015: 剝片 3 点 275 (Pl. 53)

接合資料 071: 剝片 2 点 276 (Pl. 53)

接合資料 079: 剝片 2点 277 (Pl. 54)

分布: U-11 剝片 2点, 砕片 2点

U-12 剝片 3点, 砕片 1点

U-13 石核 1 点, 剝片 7 点

ナイフ形石器1点

U-14 剝片 6点, ナイフ形石器 1点 播器 1点

(25, 12) 区 剝片 1点

(26, 13) 区 剝片1点

(20, 19) 区 剝片1点

(16, 17) 区 砕片 1点

剝片剝離のあり方:原石のまま, U-11, U-12, U-13, U-14 のいずれかのユニットに持ち込まれ, 剝片剝離作業が行なわれたものと考えられる。残核の状態にある石核, 剝片7点が残されている事から, U-13 での剝片剝離作業を考えたい。剝片7点は, その後, 頻繁な持ち運びがあったことを考慮に入れなければならないが, 石核は移動することなしに U-13 に存在し続け, 剝片剝離作業は行なわれたものと考える。これらの中で接合関係

を持つものは、頻繁な持ち運び行為を見せている。015 は、U-13 と U-14、(26, 13) 区に跨る接合、079 は U-13 と U-14 に跨る接合、063、082、071 は U-12 と U-13 に跨る接合、079 は U-13 と (20、19) 区との接合である。これらの接合資料の剝離の順序を追ってみると、あらゆるうごきが察知され、一定の規則性は把え難い。

E. 礫の説明

石材

焼礫には、砂岩、チャート、頁岩、千枚岩、安山岩、玄武岩、花崗岩の7種類の石材がある。頁岩、安山岩の識別は、火熱による表面変化でかなり困難であった。砂岩は比較的識別し易いが、全体の約8割を占める事から、多摩蘭坂第3文化層の礫群を担った主な石材であった事が覗える。この砂岩の占める割合は、礫ユニット(礫群)においても同様である。砂岩以外の石材は、特別な分布上のかたよりを示さなかった。チャートは細かく破損し易い事と、顔付きが以ている為に接合しにくく、砂岩よりも復旧しにくいという傾向があった。

大きさと重量

礫ユニット (礫群)の礫は、完形の円礫が必要とされるのか、それとも或る一定の法量であれば破損礫であっても使用目的にかなうのであろうか。この問題を解く為に、ユニットを構成する礫の大きさと重量の関係を分析してみる。

礫は、法量を計測するとともに、破損礫の場合は、 それが原形に復元された場合のどの程度の割合にあた るのかを推定し、破損の度合によって4級に分類し た。

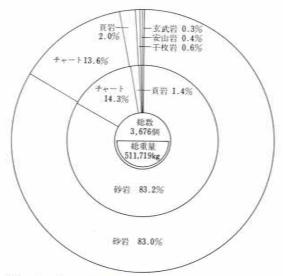


Fig. 95 礫の石質別個数と重量の割合 Pacentage of Number and Weight of Pebbles

分類	可 破損• 否	破損度	[完形・破損礫で] 接合しない礫 の重量	接合に A に復旧 より C の重量
A礫	完形碟	2-2	5∼7,800 g	10∼1,975 g
B礫	破損礫	2割以内	1∼2,600 g	10∼2,324 g
C礫	破損礫	5割以上~ 2割未満	17∼ 625 g	45∼ 760 g
D礫	破損礫	5割以上	-	_

破損礫と完形礫

検出された焼礫のうち殆んどが破損礫で、完形礫 (A)は全体のわずかに 9%にすぎなかった。それらの破損礫の接合作業を通して 3,676 個のうち 2,205 個が実に約 60%の礫が接合関係を持つ事が解った。発掘範囲が遺跡全面に及ぶとすれば、この比率はさらに高まるものと予想される。そして $B \cdot C \cdot D$ の各礫が接合した事により、A 礫および B 礫に復旧した比率は接合前の 17% (612/3,676) から 41% (803/2,060) に高まったのである。ところで、復元推定 8 割方にして

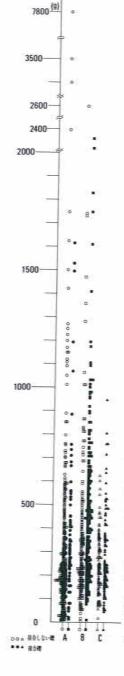


Fig. 96 接合礫と接合しない 礫の重量分布

遺跡内に持ち込まれた礫は 1g~7,800gまでの範囲にある。ここでは、1,000g以上は大礫に属し、数量も少なくなる。傾向としては、A・B・C礫とも 400gまでが一つの幅で最大値を示す。A 礫が B・C礫に比べ軽量である事が特徴的である。

又, 同じ意味で接合後 B・C 礫に復旧しても, 定形礫に比 し、重量は重いという傾向を 持っている。全体に、接合後 A·B·C礫に復旧したものの 方が重く、B・C礫について は、推定A礫になるとさらに 重量を増すことが予想される 訳である。礫の持ち込みに は,或る一定の基準があり, 礫が消費過程で破損してゆく 際に、より重い大きい礫がそ の役割を担ったであろう事 が、この表から読みとれよう か。2,000g以上の礫は、ユ ニットの中でも良く目立ち、 配石的な要素が考えられる。 Graph showing Weight of Pebbles with Connected or Unconnected

あるB礫は、焼損によるヒビや火はね等により礫皮を一部欠落する程度であるから、実は殆んどA礫とは差が無い。そして額面通りの復旧度8割前後の礫というのは、むしろC礫に類別してあり、全体の級別基準は下げてある。このように遺跡から出土する礫のうち、A礫・B礫への復旧の度合が高い事は、持ち込まれる段階の礫はやはり円礫なのであろう。そして、それが9割以上破損しているという事は、まさに使用されて破損したに相違ないであろう。

遺跡に持ち込まれた礫がどの場所でどのように使用されて破損し、散布したのか。原位置の記録された、 級別された破損礫同士の接合を通じてこの問題に対応 出来るのではないだろうか。その接合関係を通じてユニットの構築・使用・停止について考える手掛りが得られそうである。

赤化

焼礫は、一様に赤味をおびている。火熱よる礫面の変化の1つと考えられるが、赤味の濃さの度合いの違いが、火熱の強さによるものか、回数によるものか未だはっきりしない。

今回は、赤味の色調を3段階に分類し観察してみた。

- A 自然の色に近い赤色
- B AとCの中間の赤色
- C 真赤に赤化した赤色

以上の分類の中で、Bに分類されるものが最も多いが、部分的にAもしくはCに分類される礫も多い。この為、礫を原位置の状態で色味を観察し、それを位置記号で表示した。

付着物

a. タール状物質

赤変した礫面に多く観察される光沢のある黒色の物質。礫表面に部分的に付着し、礫の集中部分には重なり合う傾向があるが、分布上の偏りはそれほど強くみ

られない。スス状物質付着物に比らべ付着量は少ない。

b. スス状物質

光沢の無い黒色の付着物。タール状物質にくらべて 付着範囲が広く、殊に礫の集中ケ所には多く存在す る。付着状態は、部分的であったり、或いは全体に薄 く観察されるものもある。この付着物の分布を見る 時、散布している礫が群を形成し、散布の中のまとま りを浮き出させる事がある。

c. 黑 点

黒い点状の付着物。茶褐色のものもある。殆んどの 焼礫に付着しており、石器類にも顕著に観察される場 合がある。スス状物質の密度の低いものかもしれない と考え、一応分類し、位置を記号で表示した。

d. 白色斑点状物質

鳥の糞状を呈する白色の付着物。発掘調査中から、 大きい礫の下面にしばしば明瞭に観察されたため、注 目していたものである。ペテ状の付着状態であったか ら、特に注意を払って水洗した。その分布は他の付着 物に比べて稀薄で、礫密集部の中に点在したり、礫の 密集部とは関係のない散布礫に点在する。

〈付 記〉

これらの付着物を東京国立文化財研究所の江本義理 氏に分析していただいた。その分析結果の概要は次の ようである。

aは分析の結果ススと判明し、火熱の痕跡を証明したことになる。ただ、光沢の要因として、単なるススの付着だけではなく油性の燃焼物が考えられるという。

c は分析によればマンガンであるという。その付着 する要因には2通りあり、堆積岩内の生成過程からの 含有物である場合と、土中で付着する場合とがある。



Fig. 97 A礫 (27—12—065) PEBBLE A (Reconstructed Stage)



Fig. 98 B礫+D礫 (1108) PEBBLE B + PEBBLE D

いずれにしろ、該付着物は人為的な作用によるものではないらしい。

dは分析によれば、石英(二酸化ケイ素)であるという。土中に溶けた二酸化ケイ素が、何らかの要因で 礫面に沈澱、沈着したものであろうという。したがっ て、黒点とともに人為的な作用によるものとは考えら れない。しかし、土中で同一の条件にある全ての礫 に、何故に付着しないものか、疑門が残る。自然作用 を誘引する何らかの人為性が考えられようか。



Fig. 99 B碟+D碟 (1363) PEBBLE B+PEBBLE D

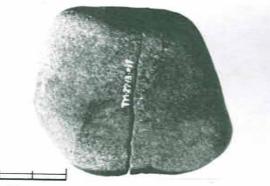


Fig. 100 C礫+C礫 (1416) PEBBLE C+PEBBLE C



Fig. 101 D礫+D礫+D礫+D礫 (1478) PEBBLE D+PEBBLE D+PEBBLE D

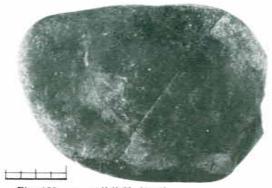


Fig. 102 タール状物質 (1370) Pebble with Coaltal-like Attachment



Fig. 103 スス状物質 (1363) Pebble with Soot-like Attachment



Fig. 104 黒点 (1322) Pebble with Black-speck Attachment



Fig. 105 白色斑点状物質 (M-038) Pebble with White Attachment



Fig. 106 白色斑点状物質 (M-038) Pebble with white Attachment



Fig. 107 白色斑点状物質 (1418) Pebble with White Attachmet

F. 礫の分布

碟ユニット

石器のユニット同様、平面分布の上で識別出来る最小の或る一定のまとまりをユニットとして取り扱い、石器ユニット(U)と区別する為、P(Pebble)で表わす事とする。32 ユニット検出された。

従来、礫群として捉えられてきた焼礫の集中範囲に対し、あえて、ここでユニットの名称を与え、石器群と同じく、ユニットごとの性格を比較検討しようというのは、いわば、焼礫とそのまとまりの中から先土器時代における新たな情報を得る理論の展開をすすめる為の出発点に戻る必要があったからである。

礫コニットの解明の手掛りも又、礫の接合作業を第 1の基本とする。石器と違い、情報量の少ない点で、 いかに礫コニットの実態に迫れるかという事が最大の ねらいである。情報量の乏しさに対し、資料数の潤沢 さがまた難点ともなる為、基本的には、礫コニット は、どの様なかたちで他の礫コニットとの関わりを持 ち、さらには石器ユニットとの関わり方に、得られた 情報の中から、それらの関連性を背景づける確認を得 られるのかという論点にしぼった。

その際、接合作業による礫ユニットのグルーピング を行ない、その中での個々の礫ユニットの性格づけを し、次に礫ユニット群の比較を行なった。

礫ユニット群の設定

接合によるユニット同士の関連の深さを基に礫ユニット群を設定した。礫ユニットの占地面積の広さは、 遺跡上での占地範囲の輪郭を明らかにしているものであるが、接合線による地面の区割りは、さらに遺跡の 居住範囲の分割を示した。

石器ユニット間の接合関係における分割範囲は、礫 ユニット間に示された分割範囲によって強調されたも のもあり、又、そうでないものもあった。

ここで、石器・礫ユニット像の実体に一歩迫る為,

礫ユニット群の分割範囲から、それらにコンポーネント・パートとして1から4までの番号を付し、それぞれの特色をあわせてモデル化し、分析の対象とした。

Component-part 1 $(P-1 \cdot 2 \cdot 3) = Model 1$

Component-part 2 $(P-13 \cdot 14 \cdot 15) = Model 2$

Component-part 3 (P-18 · 19 · 20) = Model 3

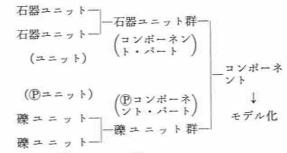
Component-part 4 $(P-21 \cdot 22 \cdot 23 \cdot 24 \cdot 25)$

=Model 4

コンポーネント・パートとは、コンポーネントの下 位概念を示すものであり、その集合がコンポーネント、或いはアセムブリッジに成長する為の一要素とし て設定したものである。

石器の分析が進行を同じくした時に、コンポーネント・バートは一致を見るものと、見ないものに分かれ

たが、そのまま石器・礫両ユニットの性格の違いが遺跡の同一の平面上に展開する人間行動の相違でもあり、又、同一空間をとりまいて活動した類似機能の分析の一手段として、コンポーネント・パートの名称は、石器及び礫ユニットそれぞれの内容を組み合わせる事を目的に双方にそのまま使用する事とした。



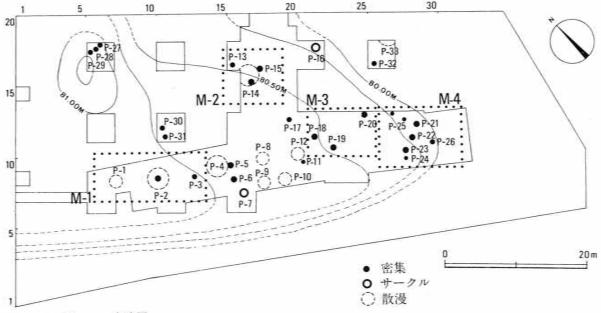




Fig. 109 P-7 (南西から) サークル状のユニットである。分布図を併せ 見ると、密集部分の中央部が抜けている。比 較的礫が大きいユニットである。ユニット内 の接合が殆んどで P-12 との間に 1 個の遠距 離接合をする。



Fig. 110 P-17 (北西から) ほとんどがチャートで構成されたユニットである。チャートは細かいひびでおおわれている状態が見てとれる。A礫・B礫から成り、接合関係は小範囲に広がる。



Fig. 111 P-16 (北西から)
P-7 に類似する形状である。C碟・D碟の破損礫から構成されている。接合はユニット内にとどまり、遠距離接合は無い。南側に多量の炭化物片の分布がらみれ、試掘壁に遮られた南方向への拡がりが推定出来る。



Fig. 112 P-27・28・29 (真上から) P-21・22・23 の形状及び配置に類似した傾向を持つ。3 群とも下面は一線に揃い接合関係では3 群相互に礫の共有状態を示している。外に向う接合線は、それぞれ試掘区の壁に遮られた北方向に延びると推される。



Fig. 113 P-30・31 (北東から) 手前の P-30 には叩き石が伴い, タール状物 質が付着していた。P-30 には石核が伴い正 立した状態で検出された。両ユニットとも, あたかも礫が地面の上に転がされたような状態である。P-30 は P-2 との間に接合関係を 持つ。



Fig. 114 P-30 の東側の小群 P-30 と同じ試掘調査区内の小群である。P-29・30 と同様地面の上に置かれただけのような配置である。P-20 の南側にもこのような小サークル状のものがあるが、密集するもの、サークル状のもの、散漫なもの同様の分類を試みたい。

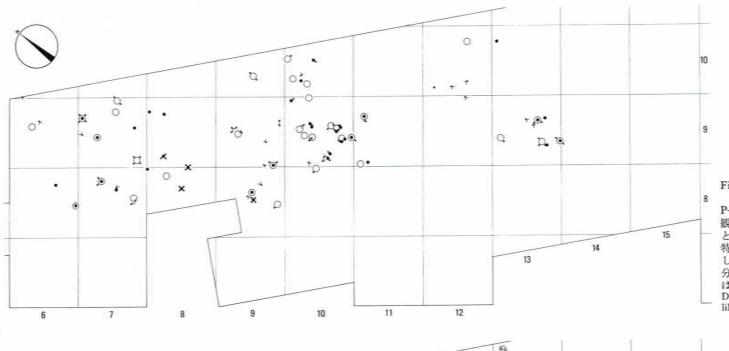


Fig. 115 モデル 1 タール状物質 付着礫分布図

P-1 では、分布する礫のほぼ全部に 観察される。P-2 では、配石を中心 とする細破損礫の集中箇所に密で、 特に配石の北側の(10,9)区に集中 している。P-3 では、礫集中部には 分布が薄く、全体的に集中する傾向 はない。

Distribution of Pebbles with Coaltallike Attachment, MODEL 1

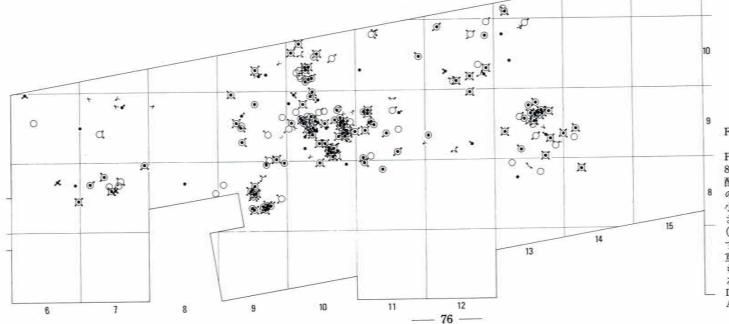


Fig. 116 モデル 1 スス状物質付 着礫分布図

P-1 では、ユニットの南側の (7, 8) 区に小さくまとまる。P-2 では、配石を中心とする細破損礫の密集部 の上の (10, 9) 区に殆んど重なり、小さなまとまりが 3 群を形成する。こちに P-2 の西 (9, 8) 区と・、北 (10, 10) 区にわずかであるが集中する。P-3 では、礫の集中部に一部重なり、その東側に小さな空白部をもって、半円を描くように分布する。

Distribution of Pebbles with Soot-like Attachment, MODEL 1

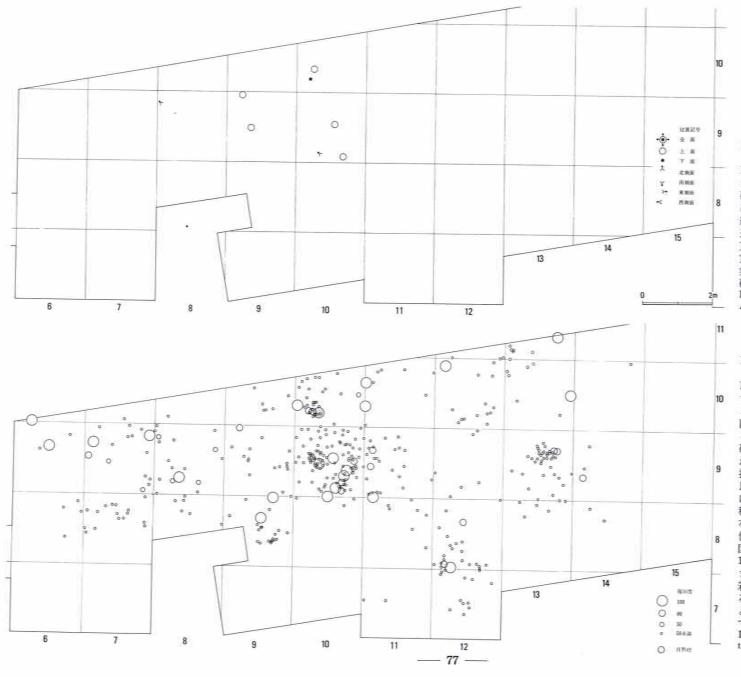


Fig. 117 モデル1 白色斑点状物 質付着礫の分布

P-2では、7個の礫に付着が認めれた。径約10cm位の比較的粒が揃う礫が多く、配石中で最大の礫の上面にも認められた。これらの付着礫を結ぶと配石の北側の(9~10)区に一辺約2mの四辺形が描かれ、その南東位の配石を含む礫の集中部と一部重なる。なお、スス状物質付着礫の集中箇所は配石部分と北東位の付着礫を結ぶ線上でつながる。

Distsibution of Pebbles with White Attahment, MODEL 1

Fig. 118 モデル1 礫の破損度別 分布図

P-1 では構成礫数の約80%がD礫 である。礫の集中箇所はないが、ス ス状物質付着礫が集中する (7,8) 区付近がやや集中しているといえ る。なお、(6~7, 9) 区で4個のA 礫がNW-SE線上に並んでいる。そ れらはいずれも 200 g 以上の重量を 持つ。P-2 では、5個からなる配石 以外殆んどが D 礫である。 P-2 で は、A,B,C 礫も含めて、1~300g 程の範囲の礫で構成されている。分 布状態は疎らで,配石の中,及び西 側に小さくまとまる3群が (10,9) 区と,配石の2m北東位の(10, 10) 区に1群ある。これらの小さな まとまりは、いずれもスス状物質付 着礫の分布を通して見ると明確にな る。P-3 では、集中部が D 礫 23 個 とB礫2個からなり、大きさが揃っ ている。

Distribution of Pebbles according to the Stage of Damage, MODEL 1

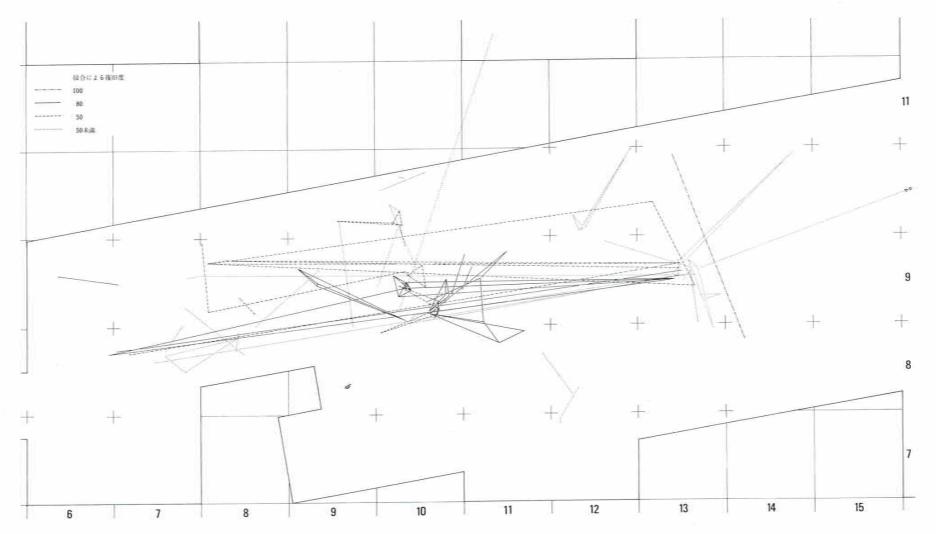


Fig. 119 モデル1 礫接合図 P-1, P-2, P-3の礫の接合関係を見る。まず, ユニット内で完結するものは P-1 で7個体, P-2 で21個体, P-3 で6個体である。次に, ユニット間にまたがるものは P-1 と P-2では2個体, P-2と P-3では4個体, P-1と P-3では4個体, P-1と P-3では4個体, P-1, P-2, P-3の3ヶ所にまたがるもの1個体である。したがって, P-1, P-2, P-3はいずれも関連し合うとこが明らかであり、特に中間に位置する P-2を挟む P-1の接合の度合が高いことが目立つ。 Distribution of Connected Pebbles, MODEL 1

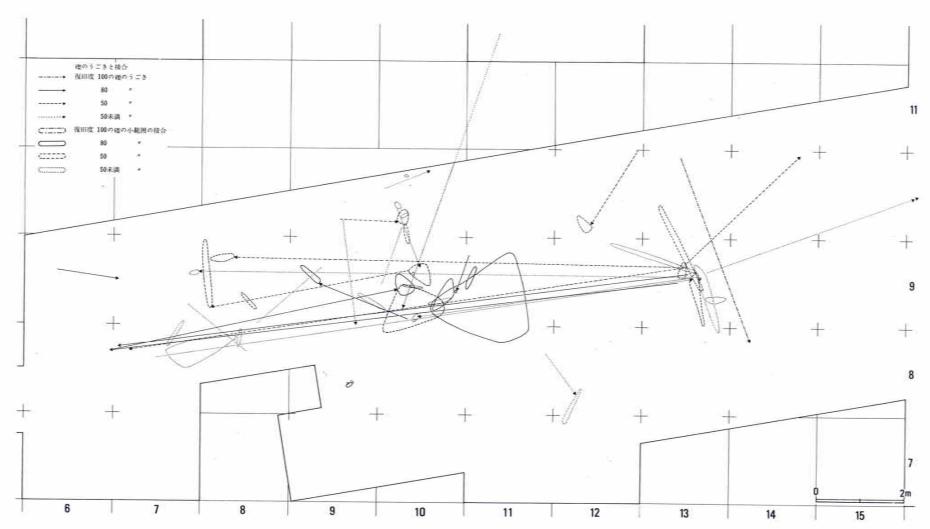


Fig. 120 モデル1 礫のうごき

P-1, P-2, P-3を通して接合関係を有する114個の礫は、B礫、C礫、D礫から構成されているが、接合により38個体の礫に復旧した。その復旧の度合を見ると、A礫に戻ったものは1個体も無く、逆にD礫に留ったものが29個体と圧倒的に多い。細破損礫で構成されていたP-1, P-2, P-3とそれぞれの関係が接合してなお細破損礫の集合体であることが該ユニット群の大きな特徴である。このユニット間では接合線が同じ方向にいくつも重なり合い最大接合距離が13mに及ぶ。また小範囲の接合関係は、P-2では礫の分布範囲に重なる。

The Movement of Divided Pebbles, MODEL 1

礫コンポーネント・パート1 モデル1

である。P-2 は P-1, P-3 にくらべ礫数量, 分布面積 において規模が大きい。P-2は、北西6mにあるP-1、 南東5.5mにあるP-3とほぼ一直線上に並び、礫の接 一辺である北東一南西線上に小礫群が並ぶ。もし、こ 合関係によってこれら3つのユニットの関連性が示さ の付着物が付着する特定の条件があるのならば、それ れる。

平面分布は、P-2、P-3 が良くまとまっている。垂 で必須の条件を備えていたといえよう。 直分布は、P-3 の上面、下面が揃っているのに対して P-1, P-2 の上, 下の範囲は 60~70 cm である。なお, 1. P-2 における配石, 小礫群の集合, 白色斑点状物 P-2 の分布での特徴は、ユニットの最下面に5個の礫 による配石があり、また上、下の範囲約 60 cm を構成 しているのは殆んどが復旧度50以下の細破損躁であ 2. P-2における配石を中心とした礫の密集部分と, るの

礫の接合関係によって捉えられた。P-1 と P-2 の間で は2個体、P-1とP-3の間では1個体、そしてP-1、 P-2. P-3 の 3 者に いるものが 1 個体ある。 それらの 礫の消費過程を見ると、P-1 と P-2 では、最初に礫が 破損した地点《礫の拠点》は、P-2 である。同じよう に P-1, P-2, P-3 の間でも P-2 が拠点である。その まで関連性を推定するに留めるが、(11, 12) の P-30 後、P-1 に礫片が1点移動し、そこでさらに2個に割 の礫と P-2 の礫は接合しており、また石器母岩 別資 れそのうちの1片がP-3に移動したか、あるいはP-2 料の分布の重なりがその可能性を強めている。 で3片に破損した礫片が P-1 および P-3 に移動をし たと考えられる。これに対して P-1, P-3 の間では、 P-3 で1 個の礫が12 片に割れ、そのうちの2 片が P-1に移動したと考えられる。

以上のようにこれらの接合礫は、P-1、P-2、P-3に 踏る約13mの範囲に、4個体15本の接合線を重ね る。そして礫が割れた順序を復元すると、それらの礫 が使用された場所として P-2, P-3 が浮き彫りされて くる。このような場所がほぼ同じ間隔で同一線上に並 ぶことは、それらユニット同志の相関関係を示唆する であろう。さらにそれは、礫ユニットの形成、消費過 程に、ユニットが持つ開口方向を見せているのであろ

うかっ

なお, 白色斑点状物質付着礫は, P-2 北側に点在す P-1, P-2, P-3 の 3 群から成る。この中心は P-2 るが、それらを結ぶと一辺約 2 m の四辺形となる。そ の南側に礫の集中部及び配石が一部重なるのに対して この範囲内に遺物はほとんど見られない。さらにその は石器ユニット, 或いは礫ユニットが配置された時点

以上の礫ユニット群をまとめると、

- 質付着礫が示す範囲が礫コンポーネント・パート1 の中心であろうか。
- 炭化物片の分布がほぼ一致する。
- P-1, P-2, P-3 のユニット間の関連性は、4個体の 3. P-1, P-2, P-3 の礫ユニットは、標高82 m 上で しかも同間隔で配置し、ユニット内の礫は接合関係 によってユニットの共存や移動の関係を示している といえる。

なお、(6~13, 9) の北側は未発掘区であり、あく





Unit	Total	A	В	С	D
P-1	44 (62)	5 (5)	2 (2)	4 (6)	33 (49)
P-2	212 (269)	11 (11)	15 (10)	5 (1)	181 (247)
P-3	77 (86)	3 (3)	5 (3)	0 (0)	71 (80)
Model 1	333 (417)	19 (19)	20 (15)	9 (7)	285 (376)

Unit	Total	В	С	D
P-1	27	1	1	25
P-2	79	0	1	78
P-3	9	0	0	9
Model 1	115	1	2	112

接合関係を持った礫個数

3500-

Fig. 121 モデル1 接合による礫個数の変化

P-2 におけるD礫の接合数が目立つが、復旧の度合は低く、B礫にいたるものが5個体程であとは $C \cdot D$ 礫にとどまっている。

()内は接合前

Change of Number by the Reconstion of Pebble, MODEL 1



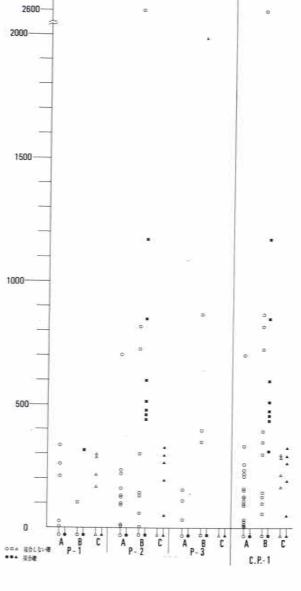
のであろうか。



Fig. 122 モデル 1 (1) P-2 (西から) (2) P-2 底面の配石と炭化物片の分布状態 (南西から) (3) P-2 底面の配石 (真上から) 4 個の大礫と,上位の細破損礫の集中状態が対照的に見てとれる。(4) P-3 (北から) 比較的大きさが揃った礫が、小範囲に並んだ様な状態である。 MODEL 1

Fig. 123 モデル1 接合礫と接合しない礫の重量分布 量的に、 $A \cdot B \cdot C$ の割合が少なく、接合後も、A 礫に復旧したものは1 点も無く、P - 2 でB 礫が、 $500 \sim 1,000$ g 前後の値に復旧している。接合しても、なおD 礫であるこのユニット群では、特に激しい消費の過程を辿ったも

Graph showing Weight of Pebbles with Connected or Unconnected, MODEL 1



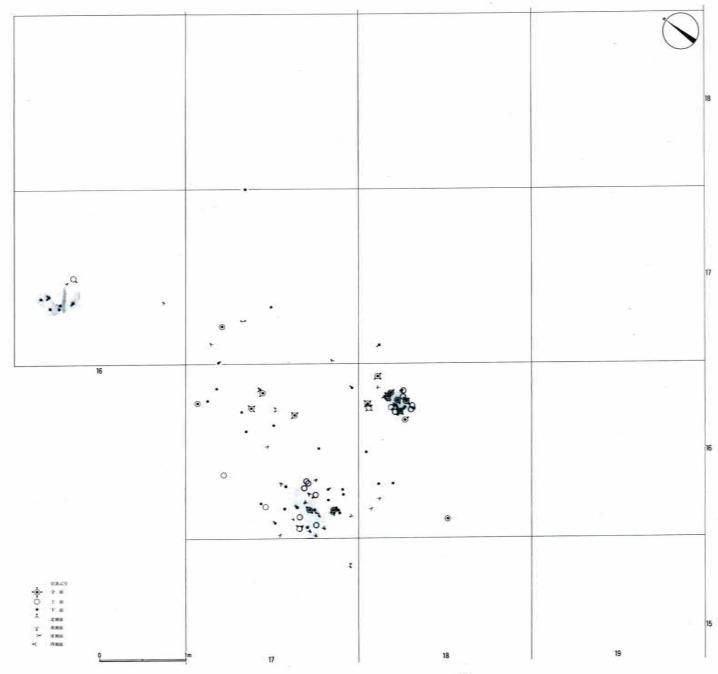


Fig. 124 モデル2 タール状物質付着礫分布図
P-12では、礫の集合部分にわずかに散布する。P-13では集中部及びその南東側にまばらに分布し、さらに、集中部の北側の(17,16)区に小範囲なが、砂散布する。P-14では、礫の集中部に最もまとまる。Distribution of Pebbles with Coaltal-like Attachment, MODEL 2

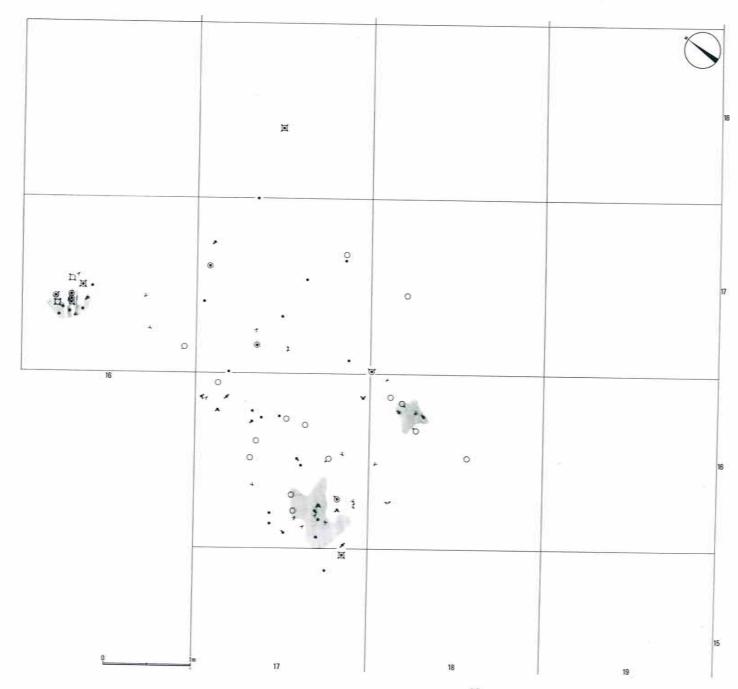


Fig. 125 モデル 2 スス状物質付着 礫分布図 P-12では、礫の集中部分 の分布と一致し、まとまっ て見られる。一方、P-13 では、密集部に付着礫がき わめて少ない反面、散布し ている礫の全体に見られる という傾向が窺えた。P-14 でも、集中部分における付 着礫はきわめて少ない。 Distribution of Pebbles with Soot-like Attachment, MODEL 2

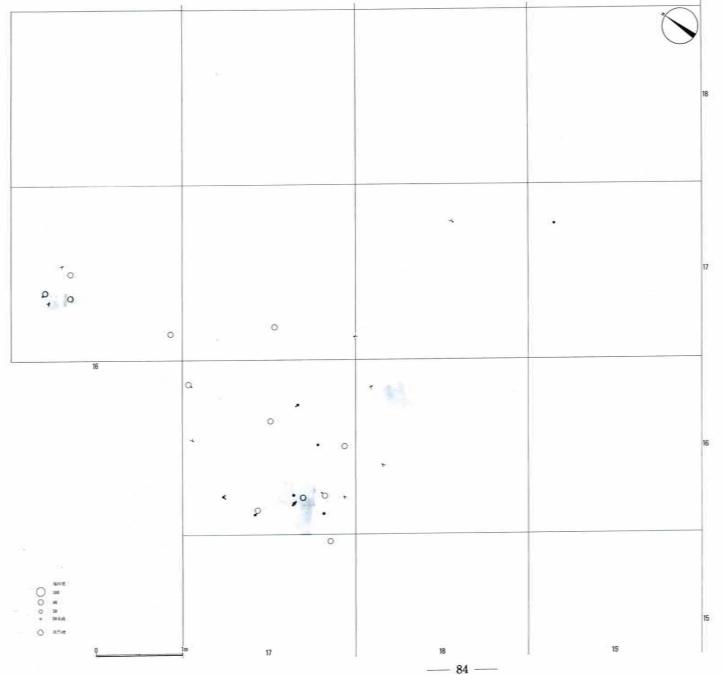


Fig. 126 モデル 2 白色斑点状物質 着礫分布図 P-2では2点見られる。P-13 では 22 点あり, 当遺跡 のユニットの内で最も多 い。しかし、どの位置に特 にまとまるというものでも ない。P-13の分布はター ル状物質の範囲と重複する が、スス状物質の分布範囲 よりは狭い。 Distribution of Pebbles with

White Attachement, MODEL 2

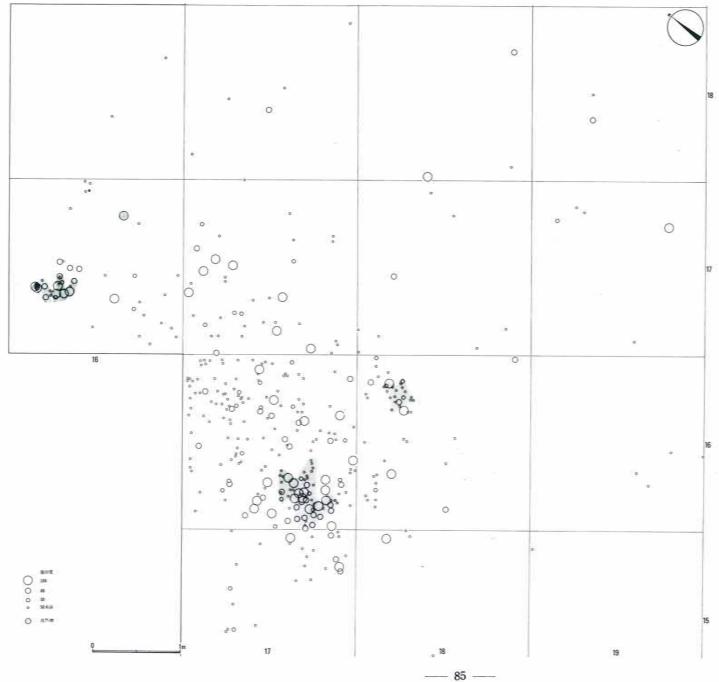


Fig. 127 モデル 2 礫の破損度別分 布図 P-12は,径50cm位の範 囲にまとまっているが,22 個のA礫からD礫までの大 きさが揃っている。P-13 は、全体のまとまりがない が, 南側にやや, 集中す る。この集中部ではA礫か らD礫まで大きさが平均し ている。この中で特にB礫 の大きさが目立つ。P-14 はD礫を中心とした小さな 一群である。 Distribution of Pebbles according to the Stage of Damage, MODEL 2

Unit	Total	A	В	С	D
P-13	19 (22)	8 (6)	7 (7)	1 (2)	3 (7)
P-14	219 (328)	40 (37)	45 (40)	26 (28)	108 (223)
P-15	26 (39)	2 (2)	5 (3)	8 (4)	11 (30)
Model 2	264 (389)	50 (45)	57 (50)	35 (34)	122 (260)

() 内は接合前

Unit	Total	В	С	D
P-13	7	2	1	4
P-14	151	4	13	134
P-15	21	0	0	21
Model 2	179	6	14	159

Fig. 128 モデル 2 接合による礫 個数の変化 Change of Number by Reconstruction of Pebbles, MODEL 2

接合関係を持った礫個数

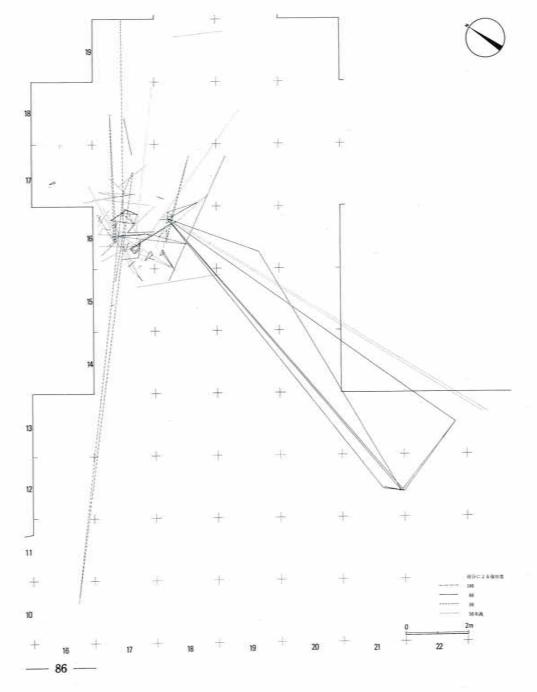
Fig. 129 モデル 2 礫接合図

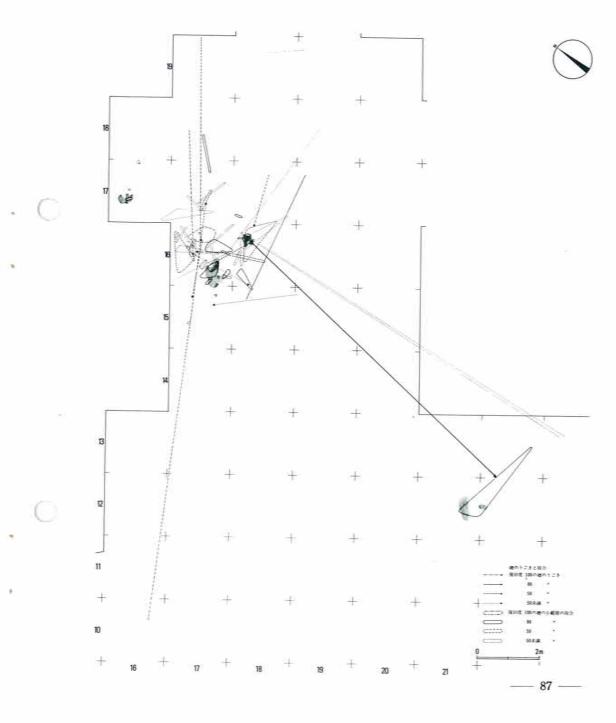
ユニット内で完結する礫の接合は、P-13では3個体、P-14では42個体、P-15では9個体ある。この中でP-13は他のユニットと接合せず、いわば独立的といえる。あるいは、P-14、P-15と同一時限のものではなく、別のユニットと考える方がいいのかもしれない。P-14ではユニット内の接合が殆んどであるが、P-15との間に6個体の接合関係があり、両者の関連の強さが覗われる。Distribution of Connected pebbles

Fig. 130 モデル2 礫のうごき

P-14 と P-15 の関連性が指摘されるが、この 2 つのユニットはいずれ も他のユニット,或いは他の地点の礫と接合する。 P-14 は、北東と 3 個体、南西と 1 個体の接合関係をもつ。北東へは約 5 m、南西へは 約14mの距離を持つ。 P-15 は、3 個体が南側約 12 m の P-18 及びそ の東側の礫と接合関係を有する。

The Movement of Divided Pebbles, MODEL 2





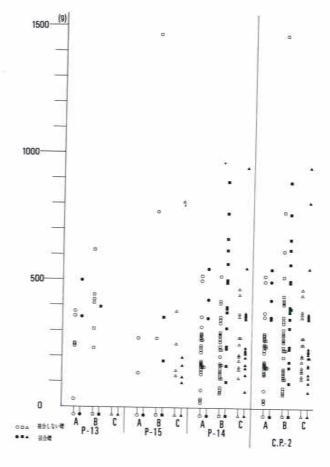


Fig. 131 モデル 2 接合礫と接合しない礫の重量分布 数量的にかたよりが表われている。P-3 は、大 きさが良く揃ったA・B礫で構成されていて、接 合後も変化は無い。ユニット内で完結している。 P-14はA・B・C礫ともに400gまでの範囲に多 い。接合後のB礫、C礫の増加が目立ち、殊にB 礫は重量も大幅に増加している。P-15 は小規模 のユニットである。

Graph showing Weight of Pebbles with Connected or Unconnected, MODEL 2

礫コンポーネント・パート2 モデル2

P-13, P-14, P-15 の 3 群で構成されているが P-14 が中心となろう。P-13, P-15 は平面分布, 垂直分布 ともに纒まっている。P-14は径2mの範囲であるが、 垂直分布に次のような特徴がある。

約50 cm の無遺物層を挟んで上下に分布する礫のう ち、下位の11点の礫と上位の礫が接合する。下位の 礫同志は接合しない。下位の接合関係を持つ礫の範囲 は約1.5 cm の範囲で上位の範囲よりせまい。下位の 接合した礫は、いずれもD礫であるが、形・恰好は良 く揃っている。このような上下関係から何らかの遺構 を想定し得るものの、BBIを切ってハードロームが 陥れような事実を確認出来なかった。

この接合礫数は11個体31点で、そのうちの11点が 下位に属する。接合して復旧した礫の大きさは、A礫 1個体、B礫1個体、C礫3個体、D礫5個体であ る。原位置から接合面の位置関係を見ると、面同志が 向き合うもの3個体、相反するもの8個体である。ま た、一時期の割れによって分散したと考えられるもの

Fig. 132 モデル2 (1) P-14 の一部分と P-15 (東から)

(2) P-14 の一部分(真上から) (3) P-14 の底面の一部分。 礫の粒が大きい (南東から) MODEL 2

分かれたもの3個体である。したがって、少くとも、 破損後の礫片の移動が考えられる。また、垂直的な礫 片の移動に関してどのような人為性を考えるべきだろ うかっ

礫の接合関係から見た場合、P-13は孤立する。P-14 と P-15 の間では 6 個体の接合礫を持つ。そして、 P-14. P-15 は、それぞれ他のユニット群とも接合関 係を持つ。

礫片の移動は、P-14からは北東約5mに1点、南 西約14mに1点、P-15からは南約12mに2点があ る。P-14 は北東及び南西の方向へ、P-15 は南の方向 にユニットが開口する。

つぎに白色斑点状物質付着礫の分布を見ると, これ ら3群を取り巻くように4点が、北西-南東に長軸を 持つ四辺形の位置にある。P-1からP-2に見られる同 付着物のあり方と共通性が覗われるのではなかろう

P-14 の復旧度 80 以上の B 礫, A 礫には, 何らの付 着物も認められない礫が目立つ。また、P-13内にも、



は8個体、2度目の割れによってさらに上下の位置に 赤化が見られず、その上、付着物も無い礫が3点あ る。これらの礫は、線でつなぐ事が出来るような連続 的な分布を示してはいない。P-13, P-14の南部分の 小群, P-15 の間を埋めるような P-14 の散布礫が、3 者の結びつきと、モデル2の分布上の特徴を意味付け ていると考える。

> 以上の、P-13、P-14、P-15のユニット群をまとめ ると,

- 1. 独立的な形状を示す小群 2 ユニット (P-13, P-15) と散布的な P-14 とから成り、これらのユニッ ト群は、遺跡の中では、東のユニット群 (P-18~ P-25), 西のユニット群 (P-1~P-3) に対し、中間 に位置し、独立的な性格を持っていると考えられ るっ
- 2. P-14は、垂直分布が上下に 50 cm の間層 をおい て分かれるが、相互に垂直的な接合関係を持つ。ト 位はハードローム層下層 (第N層) に属し、下位は BBI (第V層) に10 cm 程喰い込む。このような 分布のあり方の成因は、今後研究の課題としたい。
- 3. P-14 は 4 個体、P-15 は 3 個体が遠距離接合をす



る。しかし、接合方向にそれぞれ違いがあり、P-14 では2個体、P-15では1個体の移動関係を捉え た。

4. 白色斑点状物質の付着礫の分布は、これらユニット群をとりまくように北西一南東に長軸を持つ四辺

形の位置にある。

- 5. 付着物の無い復旧度の高い礫が目立つ。何らかの 条件を考えなければならない。
- 炭化物片の分布は、P-13の南とP-14の北側、及びP-13・14から2m程南東の位置にそれぞれ1群

ずつまとまる。P-15 周辺には認められない。 なお、(16, 16) 区に未発掘の関連区域が推定出来 る。

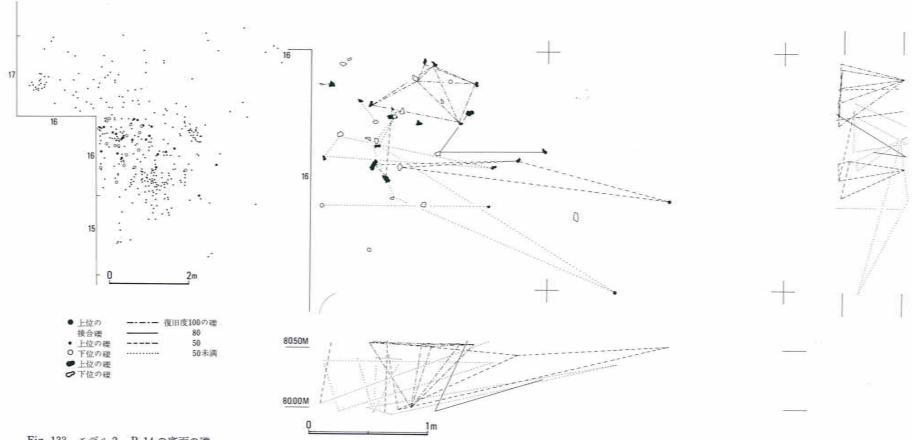


Fig. 133 モデル 2 P-14 の底面の礫 P-14 の底面の礫 P-14 の底面にあたる下位の一群は、P-14 の中央部に分布している。下位の礫は、すべてが上位の礫と接合し、垂直に近い接合関係を示したが、これらは、ほとんど一時期の割れにより上・下に分かれたと考えられる。遺構が不明確であるが、単期の間に機能した礫ユニットに深い関連のある直径約 2 m 程の土壌の存在を推定出来ようか。 Bottom of P-14、MODEL 2

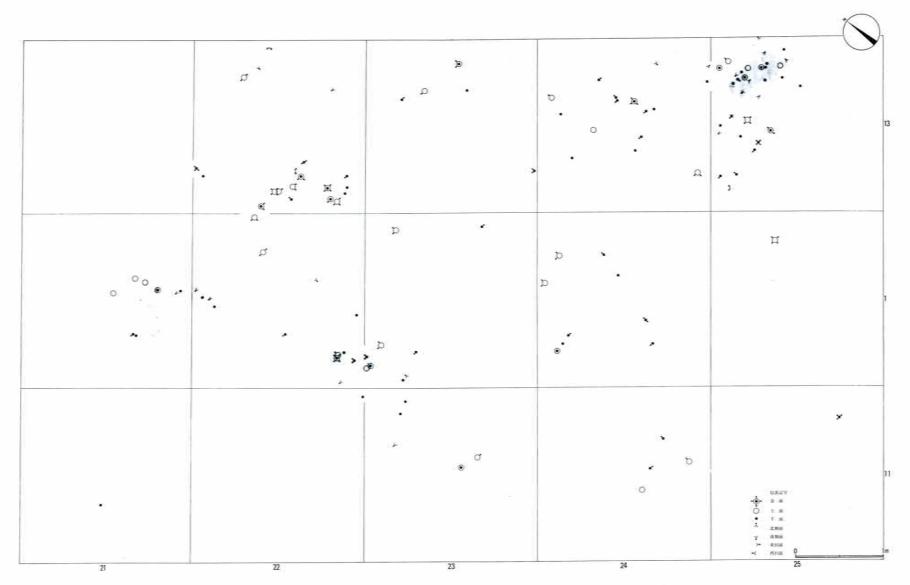


Fig. 134 モデル 3 タール状物質付着礫分布図

P-18 では、全体に分布は疎らで礫の集中部分にわずかに存在するだけである。P-19 では、礫の集中部北側にわずかにまとまる。P-20 では密集部に点在するが、特にまとまりはない。(25, 13) 区に大礫を含めた形で半円を描く様な分布範囲がある。

Distribution of Pebbles with Coaltal-like Attachment, MODEL 3

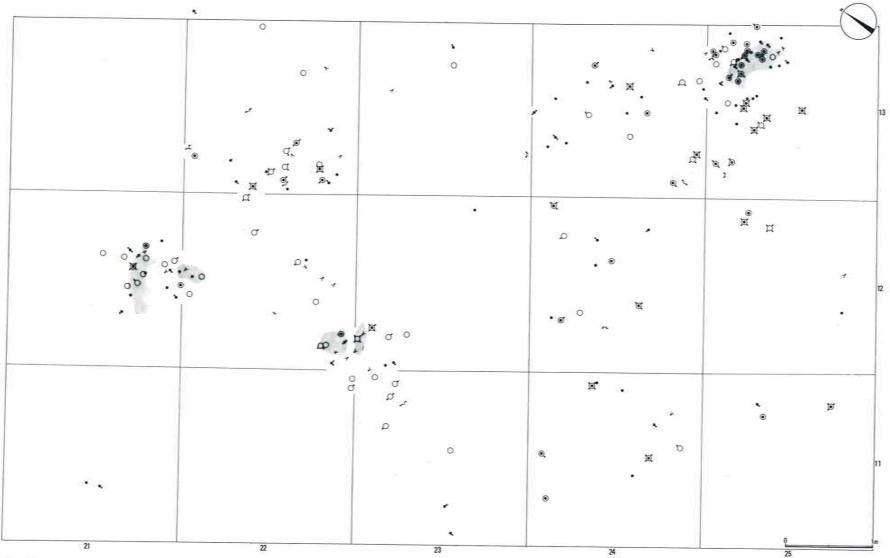


Fig. 135 モデル 3 スス状物質付着礫分布図

P-18 は、2 ヶ所の集中で構成されているが、付着礫は西側に 1 群と、中間に分布する。P-19 では、礫集中部及びその南側にまとまる。P-20 では、礫集中部、北側および南側の 3 ヶ所にまとまりが広がっている。なお、(22, 13) 区の散布地点ではタール状物質は付着礫の分布よりさらに明瞭に 1 群が認められる。(24, 11~13) 区では、大 きさの揃ったA礫、B礫上に付着が見られる。 Distribution of Pebbles with Soot-like Attachment, MODEL 3

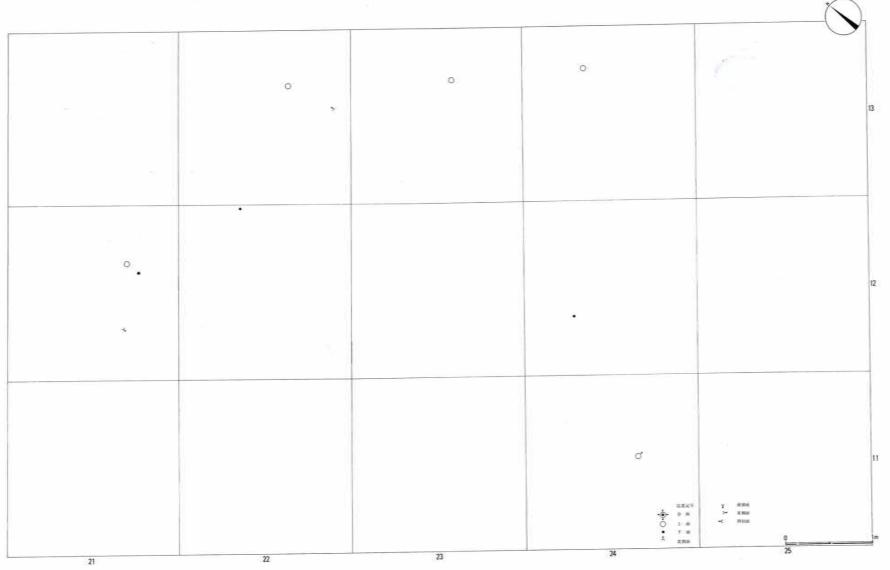
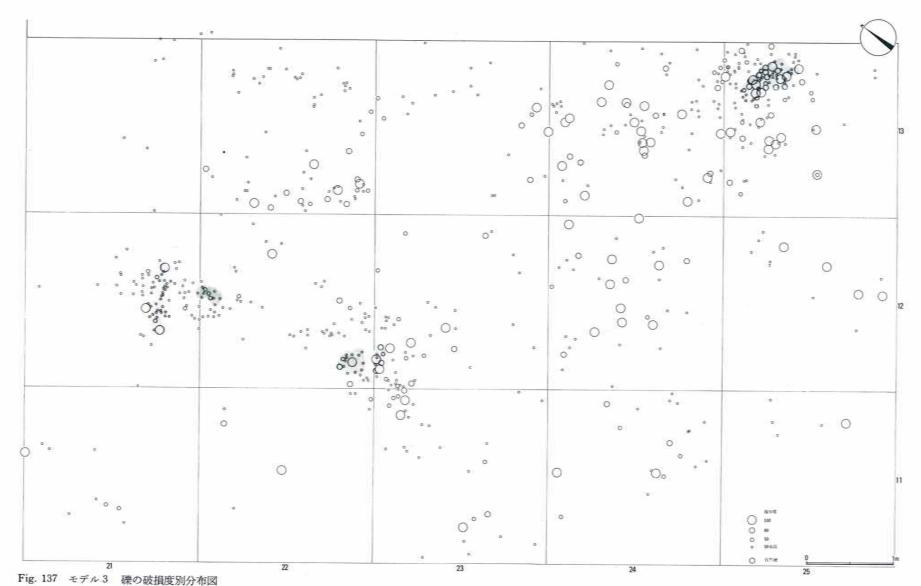


Fig. 136 モデル3 白色斑点状物質付着礫の分布 ここでは、10 個の礫に認められる。そのうち 3 個は P-18 に属するが、他の 7 個はいずれのユニットにも属さない。これらの付着礫を結ぶと、長辺 6 m、短辺 3 m の矩形 の範囲が描け、長辺上に P-18、P-19 が並ぶ。その範囲内は、礫がわずかに散布するか、(23、12~3) 区のように無遺物地域という特徴的な在り方が現出する。 Distribution of Pebbles with White Attachment, MODEL 3



P-18, P-20 には、1,500 g 以上の極立って大きい、ほぼ完形に近い礫がそれぞれ 1 個ずつ配されており、注目される。P-18 は、小さなまとまり 2 群からなり、3 個のA 礫の他は C 礫、D 礫で構成されているが、大きさは比較的揃っている。P-19 は、極立って大きい完形礫 1 個を除いて A 礫から D 礫まで大きさが比較的揃っている。P-20 は、礫の集中部が 1 ケ所あり、全体にまとまりがある。構成している A 礫、B 礫、C 礫は大きさが良く揃っている。6,200 g 程の大礫は、その集中部から約 50 cm 西位置している。その他、(22~23,13) 区、(24,11~13) 区には、A 礫から D 礫までいずれも大きい礫が散布している。(24,11~13) 区では、特に A 礫の分布が目立つ。Distribution of Pebbles according to the Stage of Damage. MODEL 3

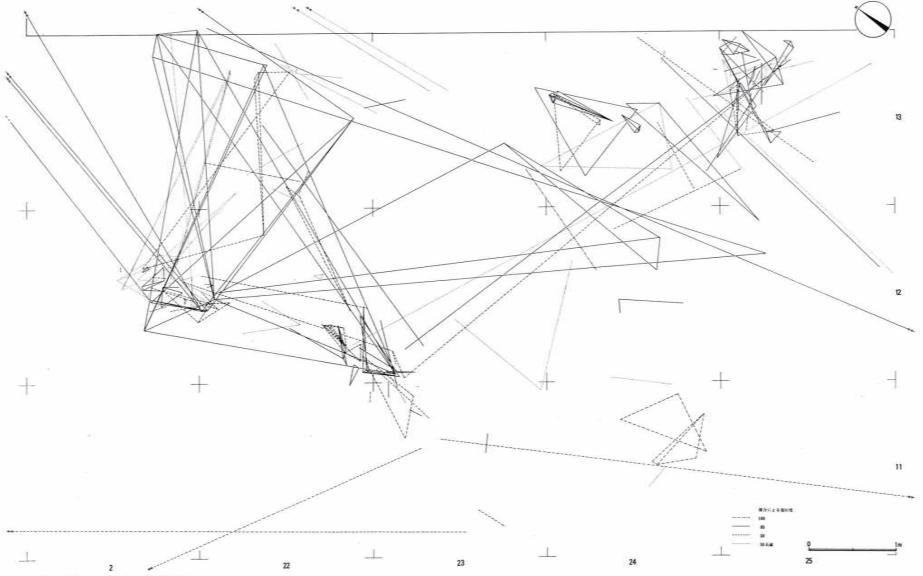


Fig. 138 モデル3 礫接合図
ニニット内で完結する接合関係を見ると、P-18 では 15 個体、P-19 では 15 個体、P-20 では 20 個体ある。ユニット間にわたるものについては、P-18 と P-19 では 2 個体、P-19 と P-20 では 2 個体ある。P-18 と P-20、及び P-18、P-19、P-20 にまたがるものは 1 個体もない。これらのユニットの接合関係が示す特徴は、 ①ユニット内の接合関係がユニット間よりも強い。②接合により多くの破損礫は 5 割方(C 礫)以上に復旧した。8 割方(B 礫)が特に目立つ。③それぞれのユニットは(22、13)区、(24、11~13)区に散布する礫と接合関係を持つ。特に P-18 と(22、13)区の関連がみとめられる。
Distribution of Connected Pebbles、MODEL 3

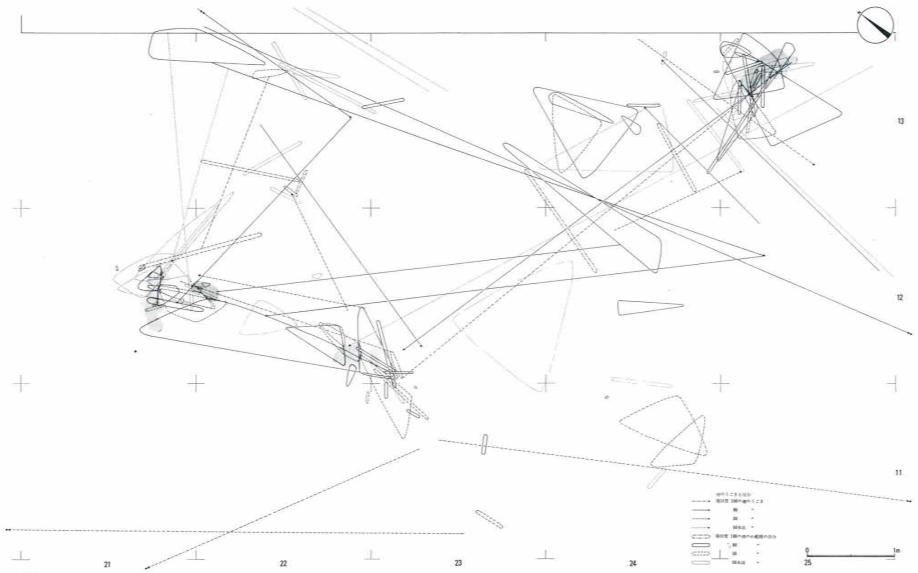


Fig. 139 モデル3 礫のうごき 小範囲の接合ラインの重なりについて見ると、P-18では、北西一南北であり、P-19では、南北である。P-20では、礫の3点以上の接合関係を示す三角形状のラインの重 なりは北西一南東、2点の接合ラインは南西一北東である。これら小範囲の接合ラインの方向性は何を意味するものか。なお、これらの或る方向は、それぞれのユニット における遠距離接合ラインと直交する。 The Movement of Divided Pebbles, MODEL 3

弾コンポーネント・パート3 モデル3

P-18, P-19, P-20 の 3 群から成り, 平面分布は東 西を長辺とする三角形状を呈する。P-18 と P-19 は 約2.5m隔たり、P-19とP-20は約5m隔たる。規模 は3群とも殆んど同じで、特に中心となる群は見られ たい。その平面分布も、それぞれ径約1mの範囲に比 7. 炭化物片は、P-18の西側に顕著である。またP-較的疎らで同じようなまとまりを見せる。

い、中心部のレベルは全く同じである。これに対して P-20は、中心部のレベルが P-19、P-18よりも約10 cm 低い。

P-18, P-19, P-20 のユニット間の関連件は、4個 体の礫の接合による。すなわち、P-18 と P-19 では 2 個体, P-19 と P-20 では 1 個体, P-18, P-19, P-20 に跨がるもの1個体である。しかし、礫の移動関係が 解る個体は1つも無い。他のユニットとの間や、遠距 離の接合では、P-18 と P-15 の間に 1 個体、(21, 13) と P-14 の間に 2 個体、 P-19、 P-18 と (21~22、13) と (25, 12) の礫散布地点に1個体の6例がある。P-18と P-15 の関連では、P-14 から P-18 及び (22, 13) への移動が考えられる。P-14 と (21, 13) との間の 2 例については不明確である。また、P-19 と (21~22、 13) 及び (25, 12) の間の1例は、(21~22, 13) 区 が拠点と推定されるがはっきりしない。

これら3群の特徴をまとめると、

- 1. P-18, P-19, P-20は, 構成礫, 分布等が類似す る。礫接合頻度でもユニット内の方がユニット間の それより卓越していることで共通する。
- 2. 3 礫の中での中心的ユニットが不明確である。
- 3. ユニット間における礫接合に関して、礫片の移動 方向がつかめない。
- 4. P-18 の北東の (21~22, 13) 区と P-20 の南西の 区には破損度の低い礫の散布地点がある。これらの 礫と、各礫ユニットは強い関連を示す。
- 5. P-18, P-19, P-20 とそれ以外の散布礫は,遺物

が少い (23, 12~13) 区の径 2 m 程の範囲を取り囲 むように分布する。

- 6. 白色斑点状物質付着礫は10個あり、これを結ぶ と長辺6m, 短辺3mの矩形になる。これは、3ユ ニットとそれ以外の散布礫の分布範囲とも重なる位 置関係にある。
- 19 と P-20 の中間にまばらに認められる。
- 垂直分布では、P-18、P-19 は約 30 cm の範囲で揃 8. 礫コンポーネント・パート 1 の P-2 に 見られる ように、配石+小礫群の集合+白色斑点状物質付着

礫の範囲をコンポーネント・パートの中心的空間と

前述の5・6・7の分布の共通性は、この様な中心 的空間に匹敵するものと言えようか。

Unit	Total	A	В	С	D
P-18	66 (115)	3 (3)	3 (3)	8 (7)	52 (102)
P-19	76 (114)	8 (6)	17 (9)	11 (12)	40 (87)
P-20	82 (133)	17 (17)	15 (15)	9 (15)	41 (86)
その他	188 (279)	51 (48)	38 (26)	26 (26)	73 (179)
Model 3	412 (641)	79 (74)	73 (53)	54 (60)	206 (454)

()	内は接合前

Unit	Total	В	С	D
P-18	62	0	6	56
P-19	53	0	5	48
P-20	60	3	7	50
その他	129	4	7	118
Model 3	334	7	25	272

接合関係を持った礫個数

Fig. 140 モデル 3 接合による礫個数の変化 Change of Number by Reconstruction of Pebbles, MODEL 3









Fig. 141 モデル3

- (1) P-18 (南から) 礫の大きさが揃っている。
- (2) P-19 (北から) 1個の大碟が良く目立って いる。小群、2群から構成されている様
- (3) P-20 (西から) 東側への拡がりが推され る。3個の大碟が目立っている。
- (4) モデル3の散布礫 (北東から) P-20 より 約10cm上位の面で検出された3ヶ所のサ ークル状の礫の分布。P-18・19 とは同レ ベルである。主として完形礫で大きさが揃 っている。P-25 等の類例となるかもしれ telio MODEL 3

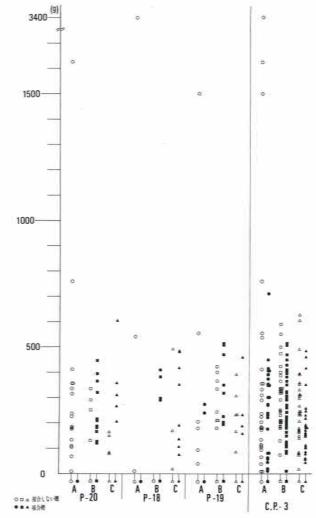


Fig. 142 モデル 3 接合礫と接合しない礫の重量分布 P-18 にはもともとA・B礫が少なく、接合後、C 礫に復旧しているのが数点みられる。P-19は, やはり、接合前も、接合後も 400 g までの B・C 礫が卓越している。P-20は、A礫が多く、接合 後、B·C礫が増加したが、400gまでにほぼ揃 う。P-18・19・20 それぞれに 1,500 g 以上のA礫 が1個ずつ際立って存在している。 Graph Showing Weight of Pebbles with Connected

or Unconnected, MODEL 3

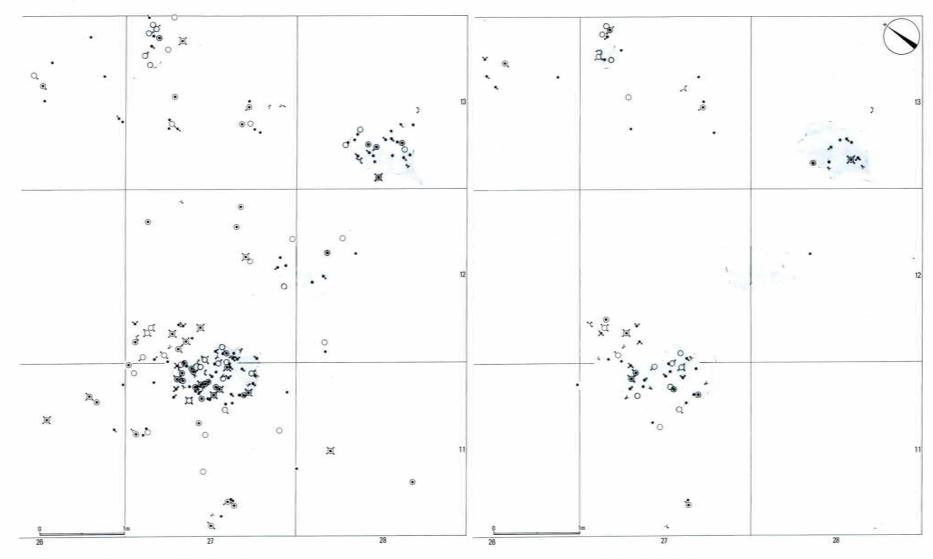


Fig. 143 モデル4 タール状物質付礫分布図 P-21では、礫集中部には見られず、やや南寄りの位置にドーナッ状に点在する。P-22には、殆んどなく、最も東端に1点在るだけである。P-23では、ほぼ全体に散布しているが少ない。P-23の北側に付着礫の小さなまとまりを一群形成している。

Distribution of Pebbles with Coaltal-like Attachment, MODEL 4

Fig. 144 モデル 4 スス状物質付着物礫分布図

タール状物質の付着に比し、まとまる。P-21 では、タール状物質付着礫のとりまいた空白部にはなく、その外側にやや広がって分布する。<math>P-22 では、非常に少ないが、礫集中部の外周に沿って付着礫が見える。中心部には皆無である。P-23 では、殆んど全体に付着するが、東側には付着物が全く見られない小さな空白部分が観察される。

Distribution of Pebbles with Soot-like Attachment, MODEL 4

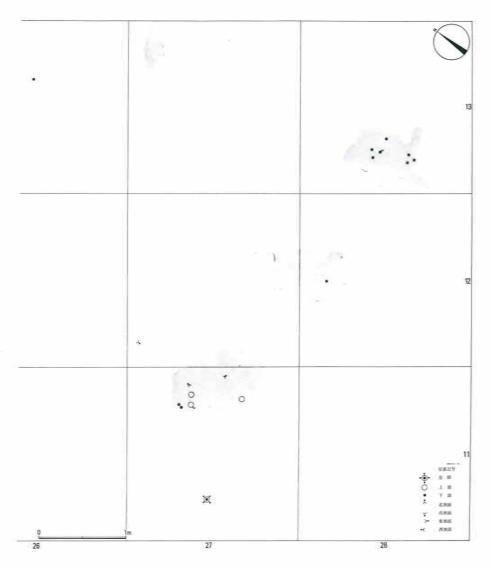
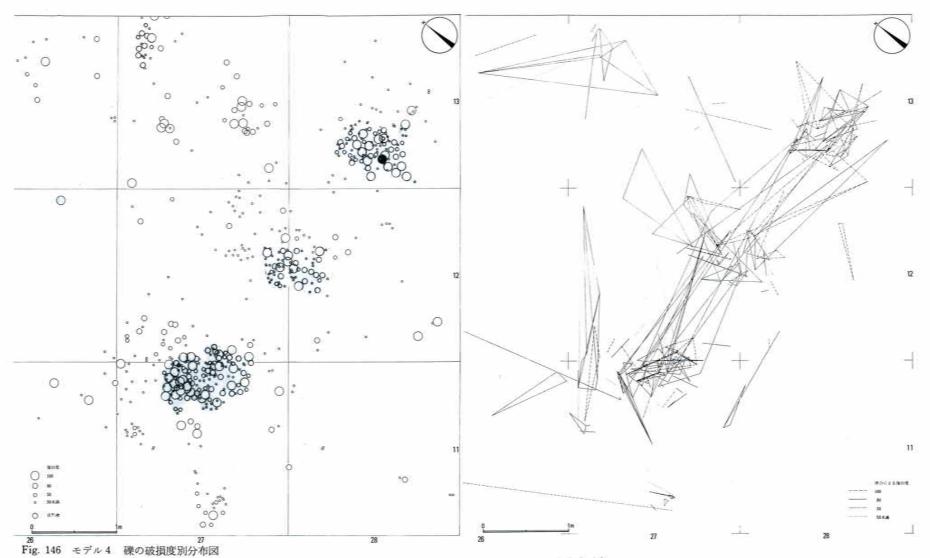


Fig. 145 モデル 4 白色斑点状物質付着礫分布図 P-21 では 6 個, P-22 では 1 個, P-23 では 7 個, いずれも礫集中部の中に認め られる。それらをつなぐ範囲は小さい。 Distribution of Pebbles with White Attachment, MODEL 4



P-21では、D礫が構成礫の約60%を占めるが、それを除いてA礫、B礫、C礫の割合はほぼ同数であり、粒が揃っている。径1mの範囲にA礫からD礫が均等に分布し、その間をD礫が埋めている。P-22では、D礫が75%を占め、集中部の北側に細破損礫が散布している。集中部はP-21よりもまばらな分布を示す。礫の大きさはB礫が圧倒的に多く、C礫、D礫もA礫をしのいでいる。P-23ではD礫が50%を占め、残り50%を A礫、B礫、C礫が3等分している。P-23の密集部の形状は円を2つつなげた様に見える。東部分の礫は西側に比し大きい。西側は礫が組み上げられた様に盛り上がっているが、とりわけ A

礫の分布密度が高い。 Distribution of Pebbles according to the Stage of Damage, MODEL 4

Fig. 147 モデル 4 礫接合図 Distribution of Connected Pebbles

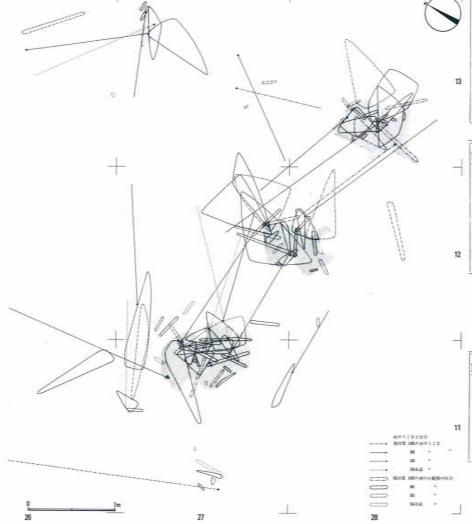


Fig.	148	モデル	4	礫の	3	ごき

ユニット内の接合に限って言えば、礫が接合関係を示す範囲の重複は礫の密集の度合と必ずしも比例するものではない。P-21 の接合は東西に主軸をとる三角形の範囲にあり、これは礫密集部の東側に重なる。 P-22 の接合の主軸は南北方向で、礫密集部を含む北側に広がる。 P-23 は 2 点で接合する例が多い。接合方向の主軸は北西一南東である。ケルン状を呈する西側部分に接合ラインは見られない。

The Movement of Divided pebbles, MODEL 4

Unit	Total	A	В	С	D
P-21	65 (118)	22 (17)	25 (11)	7 (17)	11 (73)
P-22	84 (132)	11 (9)	28 (16)	3 (7)	42 (100)
P-23	134 (220)	41 (35)	42 (36)	10 (32)	41 (117)
P-24	8 (21)	1 (1)	3 (1)	2 (6)	2 (13)
P-25	84 (76)	14 (12)	22 (24)	5 (12)	16 (28)
Model 4	375 (567)	89 (74)	120 (88)	27 (74)	112 (331)

()内は接合前

Uni	t	Total	В	С	D
1	P-21	80	8	14	58
1	P-22	69	4	7	58
1	P-23	132	17	29	86
1 1	P-24	13	0	5	8
1	P-25	26	6	6	14
M	odel 4	320	35	61	224

接合関係を持った礫個数

Fig. 149 モデル4 接合による礫個数の変化 Change of Number by Reconstruction of Pebbles, MODEL 4

Model	4	復旧度	Total	Α	В	С	D
	P-21		24	4	14	6	
	P-22		19	3	11	3	2
	P-23		41	5	20	5	4
	P-24		6		2	2	2
そ	0	他	9	2	4	1	2

ユニット内の接合関係

Model 4	Total	A	В	С	D
P-21 • 22	2	1	1		
P-22 • 23	5		3		2
P-21 • 22 • 23	2		2		
P-21·他	1	1			
P-22・他	2		2		
P-23・モデル外	1		1		
P-24・モデル外	1			1	

ユニット間の接合関係

Fig. 150 モデル4 接合関係一覧 Connected Pebbles, Model 4

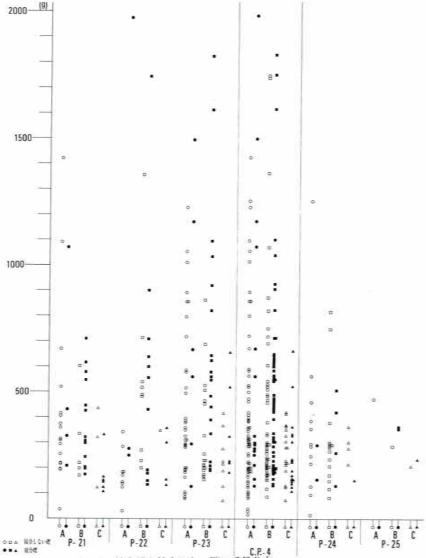


Fig. 151 モデル 4 接合碟と接合しない礫の重量分布

P-21 ① 100~400 g ② 400~700 g

接合 B 礫は 150~700 まで揃う。 反対に A 礫は 400 g までである。

P-22 ① 10~350 g ② 400~700 g

接合B礫は150~700gまで揃う。反対にA礫は200gが主流である。

P-23 (1) 50~400 g (2) 400~700 g (3) 800~1,300 g

A 標、接合 B 礫ともに 100~1, 200 g まで揃う。100~700 g が中心である。 以上のように P-21・22 では 2 グループ、P-23 では 3 グループが観察出来た。 Graph Showing Weight of Pebbles with Connected or Unconnected, MODEL 4 — 102 —

礫コンポーネント・パ ート4 モデル4

P-21, P-22, P-23, P-24, P-25の5つのコニットから成る。P-21, P-22, P-23は, 良くまとまった群を形成している。P-24は, P-23の南西にある小群である。P-25は, P-21の北にある小群を中心とした散布ケ所である。

P-21, P-22, P-23 の分布範囲は、発掘調査時から相互に関連性の強い礫ユニット群として観察されていた。そこで整理作業でも優先して分析したために早期に資料が揃い、またこれらの分析方法が有効であったために他のユニット群にも適用

Fig. 152 モデル 4 (1) 全景 (北東から) 径約 1 m の楕円形状の P-21・22・23 がほぼ等間隔 の分布を示している。

- (2) P-21 (北西から)
- (3) P-22 (西から)
- (4) P-23 (南西から) MODEL 4

した。

この3群における中心的ユニットは明確でない。復旧度別構成礫数の割合や、分布形態で類似し、さらに約1.5mの間隔を以て東西に一直線上に並んだ状態から3群の関連の強さが覗われる。

平面分布での特徴は、構成礫数の差が反映している ようである (Fig. 149・151)。

垂直分布では、3群とも、それぞれ底面は揃っており、レベルは P-22 が最も高く、P-21 は P-22 より5 cm 低く、さらに P-23 は P-21 より5 cm 低い。P-21、P-22 が一面に密着しているのに対し、P-23 の垂直分布幅は密着したまま 25 cm もあり、かつて礫がケルン状に積み上げられたものであったものと考えられる。

P-21, P-22, P-23 の結びつきは、礫の接合関係からも指摘され、本遺跡でも最も特徴的といえる。先ず、各ユニット内で接合する個数が多く、接合したことによって元の礫に復旧する度合も高い。礫群を構成している礫の半数以上が接合したことにより、礫数は当初の約半数となった(Fig. 149・153)。この接合礫の復旧度の高さはこれらユニットの礫が破損後も、ユニット内、或いはユニット周辺、或いは隣接するユニット内に在って、当初のユニットの姿をより良く再現したのであり、少くともユニットが機能したかなり近



(1)

い時期の状態を留めていると考えることが出来る。

3 群の関係を捉え得る接合礫は 9 個体ある。53 個の 礫片が 面の接合面を 本の接合線に表わして礫片 の分布範囲を示している。P-21, P-22 間では 2 個体, P-22, P-23 間では 5 個体, P-21, P-22, P-23 間では 2 個体ある。その中で礫片の移動方向が捉えられるも のは 7 個体ある (Fig. 150・163)。

これらの3ユニットでは、特に、接合関係を持つ礫 片は、いくつかの(2つ以上の)ユニットにわたる場 合でも必ずユニット内に分布している。このことは、 これらユニットの特徴をさらに強調するものと考えら れる。隣接するユニット間の関係がそれぞれのユニットを特徴づける例がもう一つある。

それは、接合線の分布の傾向に表われた関係である。ユニット内での接合の度合は、ユニット間のそれより卓越している事は前に述べたが、その方向はそれぞれほぼ一定していて、ユニット間における方向はそれと直交するような傾向があるユニット内では3群とも南北方向で、ユニット間のそれは東西方向である。P-21 内の接合方向は南北よりやや東に向き、P-23 内では南北よりやや西に向く。したがって P-21、P-22間では東西よりやや南に向き、P-22、P-23 間では東西よりやや北に向いて全体としてユニットにわたる接

合線はくの字型の方向を見せる。3ユニットの分布が それぞれ隣接するユニットを意識した状況が窺えると 同時に台地上東縁部に構築された礫群が3群関わりを 持って台地奥部に向けた消費過程を示す性格が浮び上 ったと考えられるのである。

P-24, P-25 については、P-21, P-22, P-23 との強い関連が見られない。

P-24 は垂直分布でも P-23 と同じレベル であたか も P-23 のつくり出しのような恰好であるが、礫接合で関連が見られず孤立的である。

P-25 は、サークル状に分布する復旧度の高い際の 小群と、小さくまとまる小群であるが、前者は後者よ りも垂直分布が約20 cm 高い。

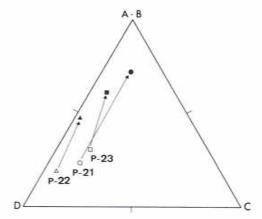
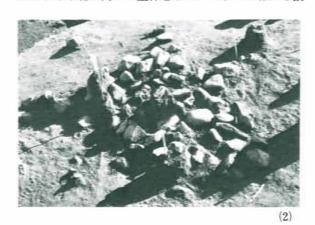
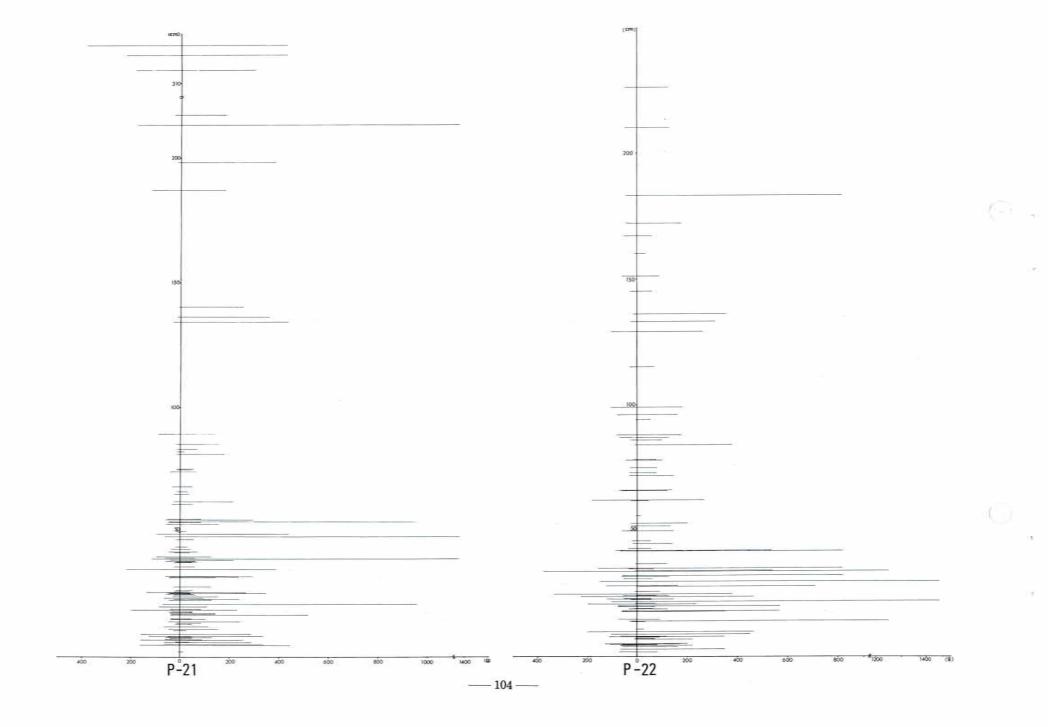


Fig. 153 モデル 4 礫個数の変化 これは、Fig. 149 を視覚化した図である。P-21・22・23 のいずれもD礫の接合により C 碟以上、特にA・B礫への復旧か目覚ましい が、なかでも P-21 の増加の割合が高い。P-22・23 は、C・D礫の接合の割合がA・B礫 の増加を高め、傾向に類似が見られる。 Diagram showing Change of Number by Reconstruction of Pebbles, MODEL 4









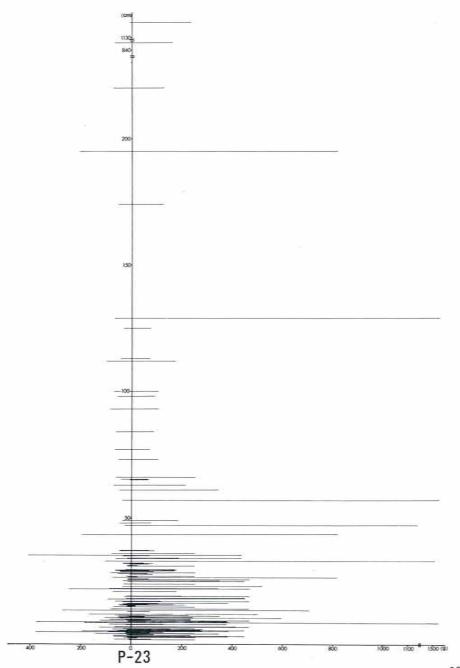


Fig. 154 モデル 4 重量と接合距離の関係

P-21	30 cm	60 cm	90 cm	350 cm
(重)	100~200 g	100~200 g	200 g	400 g
(軽)	↓ 100 g	100 g	↓ 5 g	↓ 200 g

P-22	30 cm	100 cm	200 cm
(重)	100~200 g 600 1,000	200 g ↓ 100 g	100 g ↓ 50 g
(軽)	1 200 g		

P-23		40 c	m	130 cm (1 ⊐)	10 m
(重)	100 g	200 g	400∼500 g	1,500 g	300 g
(軽)	↓ 50 g	↓ 100 g	↓ 100 g	100 g	↓ 10 g

以上のように重量と接合距離は必らずしも比例するとは限らない事が読みとれ、複雑な人為性が窺える。

G. コンポーネントとモデルの設定

石器コンポーネント・パートについて

1960年代から1970年代にかけて南関東においては 幾つかの遺跡が発掘調査の対象となり、ユニットに関 する研究が進展した。それらの具体的な内容と研究史 上の位置づけは第Ⅲ章3節Bで述べた訳であるが、こ こでもう一度整理しておきたい。

一定の範囲に分布する遺物群はユニット、あるいは ブロックと呼ばれ、それらが保有する特定石器類が分 析の対象となり、類型化が進められた。そしてユニットそれ自体が当時の"ヒト"の何らかの行動と直接結 びつけられた(小林・小田他 1971)(小田・C. T. キーリー 1973)。一方、遺跡における遺物の地点分布の あり方と、それらの接合作業を通した結果、移動性の高 い製品や石核の指摘がなされた(安蒜 1977)。又、か つて筆者らも述べた如く、ユニットは必らずしも一回 性、単絡性を持つものばかりではなく、複数で相互関 係を保持する例が多いと指摘した(鈴野・堀井 1978)。

本遺跡の第3文化層からは18の石器ユニットと34の礫ユニットの合計52ユニットが検出された。石器類は個体別分類作業を経て接合作業を行なった結果4群に大別できた。この4群は以下の様になる。

(コンポーネント・パート1)

U-2、U-3、U-4の3つのユニット間での接合がみられ、試掘区のU-16、U-17にも同一母岩が分布する。第1次生産道具のナイフ形石器は、U-2に1点、U-3に6点、U-4に2点で計8点ある。そして特にU-3には第二次生産道具である掻器、削器、彫器も件出している。掻器には先端の平坦な例、右肩や左肩に抉り込みの施こされている例がみられる。又、U-4には礫器1点がある。かくして、コンポーネント・パート1の石器は敵き石を除きほとんどの種類が存在する事となる。多くはチャート・頁岩・珪質頁岩から成り黒曜石は若干量存在するものの製品はみられない。B型石核がU-2に1点、U-3に1点の計2点ある。

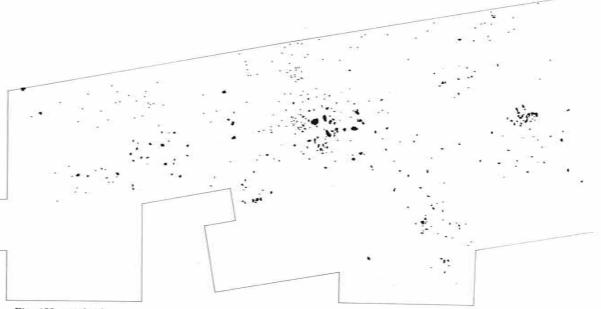


Fig. 155 モデル1 MODEL 1

(コンポーネント・パート2)

U-9。U-9 は西側半分が未調査区となっており全貌 はうかがえない。黒曜石製のナイフ形石器 1 点,使用 痕ある剝片 1 点,敵き石 2 点が存在するにとどまる。 石核は C型の系列が 1 点みられるのみで片寄った組成 を示す。

(コンポーネント・パート3)

U-11, U-12。U-11は遺物分布が疎らであるにもかかわらず製品が多い。ナイフ形石器は4点あるが、この中の1点は台形様石器である。叩き石、先刃掻器がそれぞれ1点ある。U-12にはナイフ形石器2点と礫器、削器、先刃掻器が各1点あり、B型、C型の石核が存在する。黒曜石の占める割合も多い(Fig. 159)。

この様に U-11, U-12 は, 平面分布に量的な差はあるものの,接合により1つのコンポーネント・パートとすることができる。更に,石器の種類も充実して

いる。なお、このコンポーネント・パート3は、石核を仲介として、コンポーネント・パート4とも強い結びつきが看取される。

(コンポーネント・パート4)

U-13, U-14。 黒曜石製の尖頭状石器やチャート製 切出型ナイフ形石器の存在が注目される。さらに第二次生産道具である先刃掻器, 彫器も組成に加わる。U-13, U-14にA型石核, U-14にB型, C型石核が存在する。

U-14 の遺物平面分布は U-13 に比較して疎らではあるが、製品が卓越する点も注目される。黒曜石、珪質頁岩、チャートが主体を占め、特に黒曜石はコンポーネント・パート 1 の割合に比較すると 2 倍の量である。

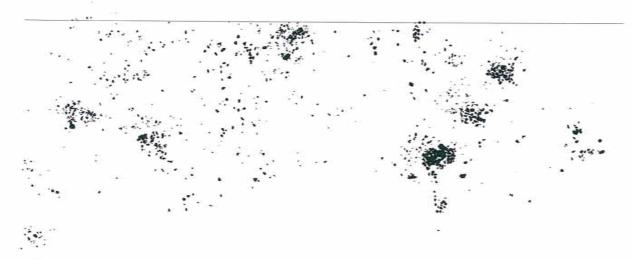


Fig. 156 モデル3・4 MODEL 3・4

礫コンポーネント・について

(礫コンポーネント・パート1)

P-1, P-2, P-3 の 3 つの礫ュニット間での接合が みられ, P-2 は試掘区の P-30 とも僅かの接合関係を持つ。 P-2 との接合関係を持つ礫は、いずれも P-2 で 破損し、P-1, P-3 のいずれかに移動したと考えられる。 P-2 は 3 群中もっとも規模が大きい。

(礫コンポーネント・パート2)

P-13, P-14, P-15 の 3 つの礫ユニットからなる。

P-13, P-15 は小範囲にまとまり、散漫な P-14 に 隣接している。三者の間に接合関係はなく, P-14, P-15 は礫コンポーネント・パート 3 と接合するものもある。もう一つの特徴は、P-14 の垂直分布とその接合状態で、約50 cm の無遺物層をはさんだ上・下の礫が接合する事があげられる。

(礫コンポーネント・パート3)

P-18, P-19, P-20 の 3つの礫ユニット間での接合関係がみられる。3群は、ほぼ同規模の形状を示し、平面分布の位置関係は、三角状を呈する。また、大礫を1個ずつ保有しているのも類似している。3群に隣

接して数漫な分布が2ヶ所あり、いずれも3群との間に接合関係がみられる。

(礫コンポーネント・パート4)

P-21, P-22, P-23の3つの礫ユニット間での接合関係がみられる。3群は、それぞれ約1.5mの間隔で一線に並ぶ。接合による礫の復旧度は非常に高く、これは、このコンポーネント・パートの特徴といえる(Fig. 149)。3群間にまたがる8個体の接合礫は、P-22に必ず関与し、少なくとも7個体の礫は最初に、P-22で破損している可能性がある(Fig. 148)。

P-24 は P-23 に近接し、また、P-25 は P-21 に隣接 し、いずれも小規模な分布を示す。しかし、P-24、 P-25 は P-21、P-22、P-23 とは接合関係を示さない。 3 群 1 単位という結びつきの他に、直接、接合線で結 ばれないものの、隣接する小群は無視できない。

礫コニットの構築や消費の過程が対照的にみてとれる礫コンポーネント・パート1と4を比較検討し、居住の在り方に一歩迫ってみたい。

構築に関して、最も特徴をよく表わしている際ユニットは P-23 である。400g位の自然礫を中心に約130

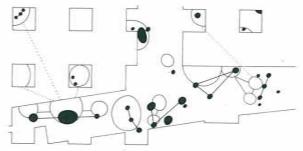


Fig. 157 コンポーネントとモデル COMPONENT and MODEL

個, 総重量 51.2 kg の構成で, 中央が幾分空洞となる ケルン状の積石であったと想定される (Fig. 158)。

礫コンポーネント・パート1における礫ユニット構築に関しては、とりわけ規模の大きいP-2の中の5個の完形礫から成る配石があげられる。他の構成礫はC礫以下の破損礫が殆んどを占め、そして復旧度は非常に低い。100g前後の礫が中心で約270個、総重量22.5kgの構成となる(Fig. 123)。

礫コンポーネント・パート 4 は、P-23 を含め 3 群 の類似した形状の礫ユニットが、自己完結的に存在する状況から、遺跡内で独立性の高い機能を果たしていたと考えられる。

消費過程の姿に話をうつすと、接合礫の復旧の度合、割れた礫の動き、有機物質付着礫の分布が良好な傍証資料となる。復旧の度合では、両者は全く対照的である。ところがP-2の接合B・C礫の重量をみると、元の形は400g前後を持った個体であった事が容易に推定できる(Fig. 142)。以上の事より、5個の配石を中心としたP-2の形状は本来P-23の様に整ったものであったのかもしれない。割れた礫のうごきが、いずれのコンボーネント・パートにも、3群を結んだ直線上に重複して見てとれる。そして、中央に位置するP-22、P-2は3群にまたがる接合礫については、その割れ場所となっている可能性が非常に強い(Fig. 160・163)。これは礫ユニットの配列に関する類似し

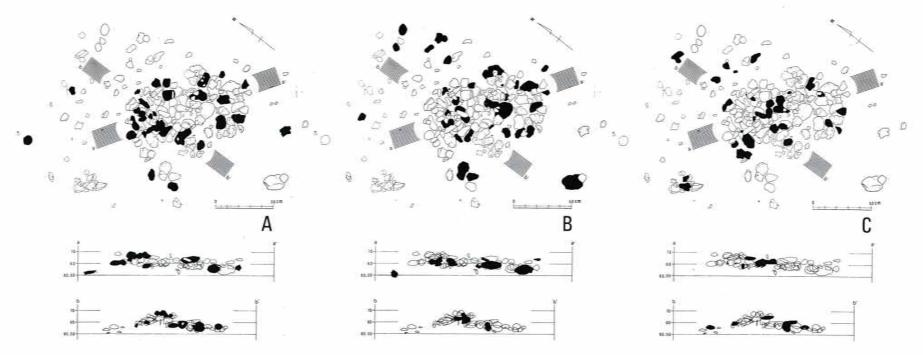


Fig. 158 P-23におけるA礫・B礫・C礫の構成 Composition of Pebble A・B・C; P-23

た用途の反映なのであろうか。

有機物質付着礫の分布についてみると、礫コンポーネント・パート1では、P-2で配石の中心部をはずれたD礫の密集部分に集中し、P-1、P-3では散在している。コンポーネント・パート4では各ユニットの中心部からはずれて、サークル状に分布している。更に、付着面の不均一性などを考慮すると、初期の位置から、小範囲に動かされた事が想定できる。

以上の事から、礫コンポーネント・パート1は、約6mの間隔、4は約1.5mの間隔でそれぞれが構築された。1は新らしい礫の補給もなく徹底的に使用され、4は礫の補給を受けながら活発に機能したものであり、それが遺存形態に極端な相違を示す結果となった訳である。

コンポーネント・パートからコンポーネントへ

石器コンポーネント・パートと礫コンポーネントパートを、それぞれの分析を通すことにより、ある単位 (コンポーネント) が成立する。なお、石器、礫を同一図面上で合体させ再構成し、モデルを設定したが、ここでは炭化物片の分布も考慮に入れてのことであった。

コンポーネント1 (モデル1)

石器コンポーネント・パート1+礫コンポーネント・パート1。

台地のコンタに沿って平行方向で接合関係を有する 3個の礫ユニットと、同一母岩を台地後方に控える3 ~4の石器ユニットから成る。石器、礫の接合線は、 いずれも同一方向で重なりあい、南方向へ伸び出すも のはなく、又、東方向に存在する遺物群とも関係しない。B型石核が特徴的であるとともに、礫群の構成礫は細かく破損している。

コンポーネント2 (モデル2)

石器コンポーネント・パート2+礫コンポーネント・パート2。

接合関係をもつ2つの礫群と、独立的な1個の礫群、2つの石器ユニットよりなる。接合例は極めて少なく、特定器種の伴出量も僅かであり、不明な点が多く解釈が困難である。ユニットの全貌を明らかになし得なかったのが惜しまれる。

コンポーネント3 (モデル3)

石器コンポーネント・パート3+礫コンポーネント・パート3。

3個の礫群と2個の石器ユニットより形成される。 石器類の接合から剝片剝離の順序を追うと、まず、 U-12で連続的な作業が進行し、その後、1点の礫は その南側の U-13へと移動する。このことから、モデル3とモデル4の結びつきが看取される。ところが礫 接合では、モデル4との関連が全くみられない。

厨房用具と考えられる礫の移動と、製品を含めた石器の剝片剝離の行動とは、必らずしも一致しないことが浮彫りにされた。モデル3の中でU-12は遺物の出土量や平面分布から核的な存在であったことが窺える。

コンポーネント4 (モデル4)

石器コンポーネント・パート4+礫コンポーネント・パート4。

台地の先端部に位置し、ほぼ東西の方向に一列にならぶ3個の礫群と、礫群と並列して台地の内側に位置する2個の石器ユニットで構成される。石核がU-13、U-14との間を移動する例や、モデル3から持ち込まれた例が認められる。ナイフ形石器、および各型式の石核が分布し、礫の移動も観察できる。

モデル4での礫群は、隣接地点との接合関係が殆ん どみられず、3群で自己完結する。3群を構成してい る焼礫は、モデル1よりは大きめの礫で形成されてい る点が指摘できる。

以上、モデル1からモデル4を解釈し、次の様な点が指摘されてくるであろう。

- (1) 先土器時代遺跡から検出されるユニットは、接 合作業を通して、はじめてコンポーネントに止揚 できる。
- (2) 第3文化層としてあつかった南関東第N層ないし第V層から検出される遺跡では、石器ユニットが2,3に対し、礫ユニット3・4で1つの単位(コンポーネント)になるものと思われる。
- (3) モデル1・3・4には、炭化物片の集中分布範囲 が伴なうことと、石器製作とそれは関与する叩き 石、石核、砕片、および、第二次的生産道具とし

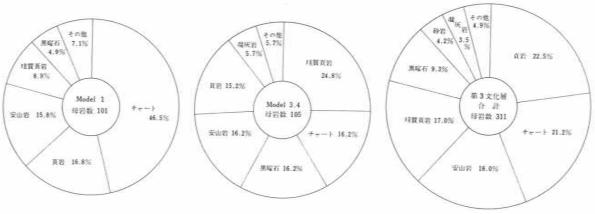


Fig. 159 モデル1とモデル3・4の母岩数と石質の割合 Pacentage of Stones; MODEL 1 and MODEL 3・4

ての掻器, 礫器, 礫群等の各種の情報が複合する ことから, 占地した集団の居住空間が把握でき る。

(4) 独立的な石器ユニット, 礫ユニットは, 屋外の 石器製作址や, 屋外炉, あるいは廃棄場としての 性格が与えられる。

本遺跡第3文化層の単位 (コンボーネント) あるい は独立的なユニットの全てが、同じ時限として存在し たか否かは今後の課題である。

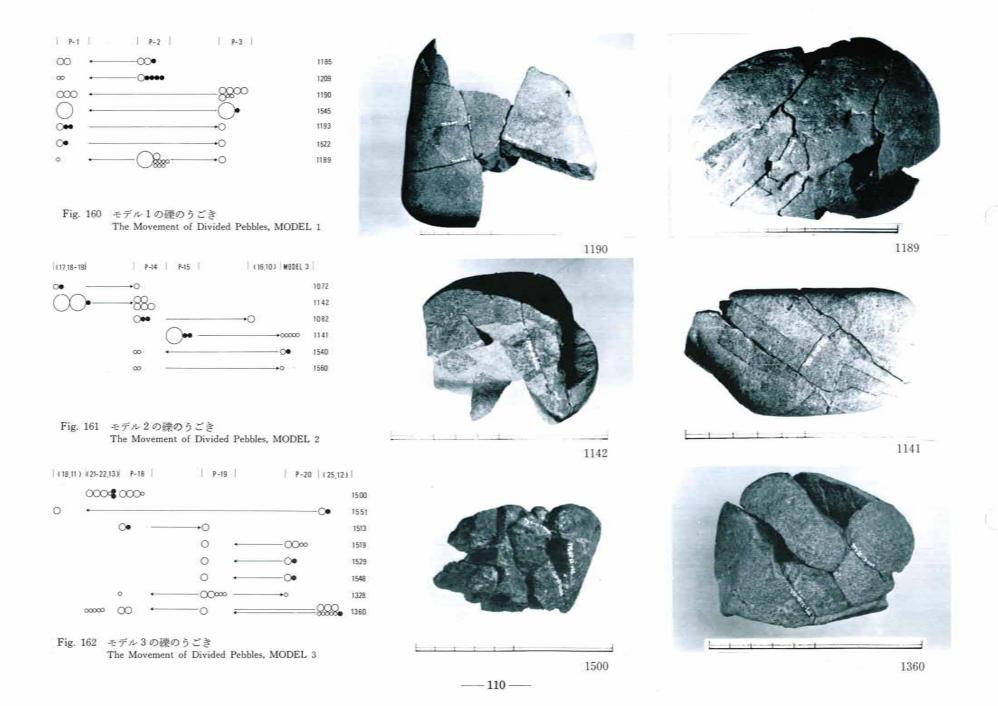
ここでは仮りに、同時存在を前提に置いた場合、次 のような考察が可能になってこよう。

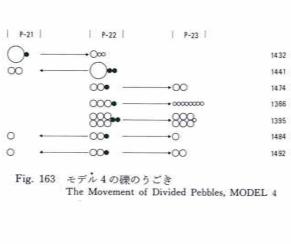
モデル1に比較し、モデル3及び4では黒曜石の占有率が高く、特定器種の卓越性、石核の型式の多様性、さらに礫群の構成礫数の優位性、石器接合範囲の広域性などから積極的なモデルとして認識される。台地の先端部に占地し、モデル3・4を残した集団は、相互に何らかな関係にあり、また共通の意識下に行動している形跡がある。一方、モデル1を残した集団は、台地の縁辺部から西側に占地する。あたかも、これらの二者によって遺跡が構成された感がある。それは、モデル3・4に存在する尖頭状石器やA型石核の

偏在性等によるものである。チョッピングトゥール状のA型石核は、前原遺跡(小田・伊藤・C.T.キーリー1976)、高井戸東遺跡(高井戸東遺跡調査会 1977)にも出土例のある特徴的な石核である。

南関東X層以来の分割技法を含めた縦長剝片剝離技 術の中に、この様な不定形で寸づまりの剝片を生産す る変革要素が誕生するのであろうか。あるいは、西日 本地域からの影響により成立する技術であるのか興味 深い問題と言えよう。

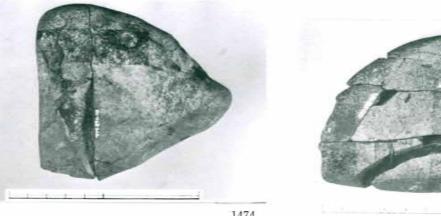
台地の先端部に占地し、情報量を豊富に保有し、積 極的に行動した集団と、台地の西側に位置する閉鎖さ れた消極的な集団の二者の占地関係は、縦長剝片によ って支えられ続けるナイフ形石器の時期が、大きく変 動の方向に向って傾斜しつつある姿を示しているもの と考えられる。



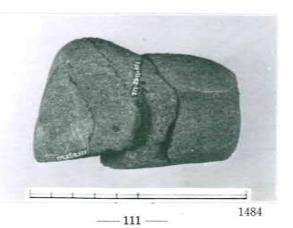














4. 第 4 文 化 層

ソフトローム層から 7 点の槍先形尖頭器の出土をみた。 $(6\sim7, 17\sim18)$ 区からは、配石を伴うユニットが検出されており、主要剝離面側に粗い平担剝離が施された例が伴っている(Fig. 164-3)。本例は、安山岩製で基部は欠失している。

(11~12、17~18) 区には安山岩製の大形 剝片・槍 先形尖頭器・砕片等がみられるが、分布の全体像は不 明である。Pl. 1-7 の槍先形尖頭器と同 Pl. 1-8~12 ま での砕片は同一個体であり、7 を製作する時点ではじ けとんだ、所謂、槍先形尖頭器作出砕片である。これ らのなかには、麦裏ともに、同一方向からの剝離がみ られるもの、第1次剝離面に多方向からの剝離が重複 し合っているものがある。前者は本体の側辺調整時に 剝出されるものである。一方、後者は本体の先辺部あ るいは、基部付近調整時のものであろう。砕片の形状 は左右非対称形をとり、突出する先端を有する。いず れも製品としての形状がはっきり決定された段階の所 産のものであろう。本体と砕片類の接合は、みられな い。

Pl. 1-2 (Fig. 164) は安山岩製で、左右非対象形を呈し、基部は欠損している。4 (Fig. 164) は、疑灰岩で、左右対象形を呈す。基部は平担で、両面ともに二次加工も入念に施こされている。5・6ともに安山岩で、先端は無い (Fig. 164)。5は、基部右位に平担剝離が施こされている。1は安山岩で柳葉形を呈し、先端は一部欠損している。13は、安山岩で礫面を打面とし剝離されているが、表面にみられる剝離方向と90度程の打面転移が行なわれており、一定の厚さを保有する大形の剝片の生産を可能にしている様である。

第4文化層では、槍先形尖頭器が特徴ある石器としてみられる一方、他器種の出土はない。遺物の出土量も少なく、特定器種の組成からなり、ユニットの規模は小さく、石質は安山岩に偏る傾向がみられる。

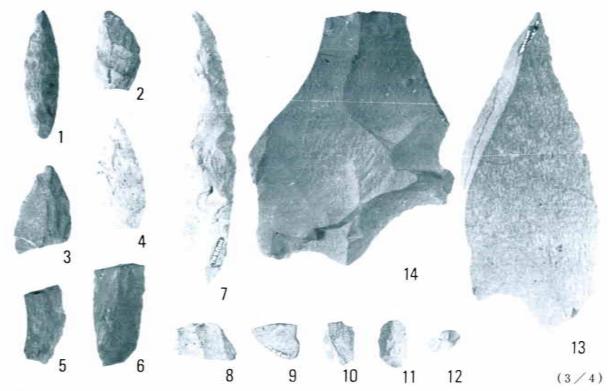


Fig. 164 第4文化層の石器 Artifacts: Culture Layer TAMARANZAKA 4



Fig. 165 U-1 (西から)



Fig. 166 (7, 18) 区の配石 (南西から) Stone Arrengement: Grid (7, 18)

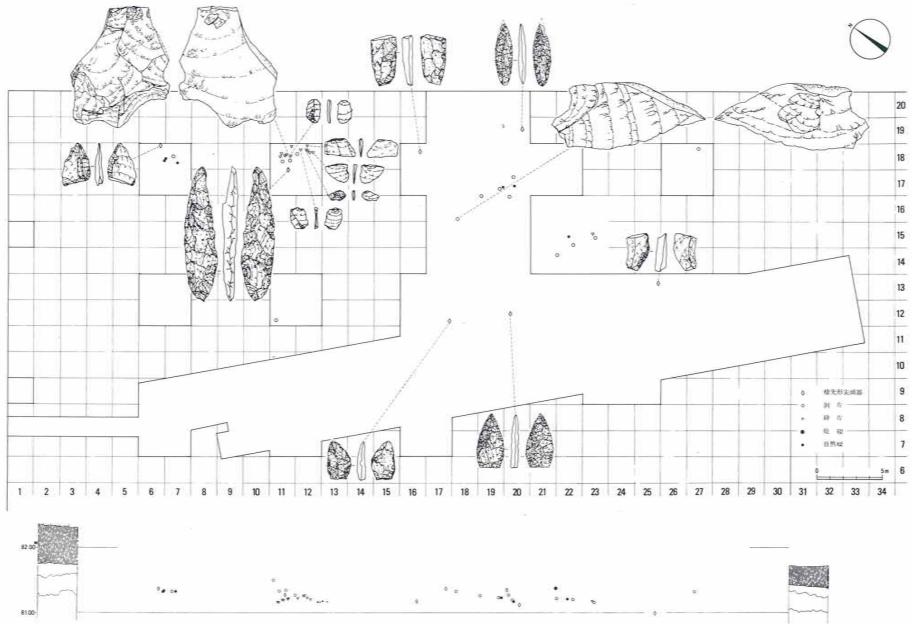


Fig. 167 第4文化層の遺物分布図 Distribution of Remains; Culture Layer TAMARANZAKA 4

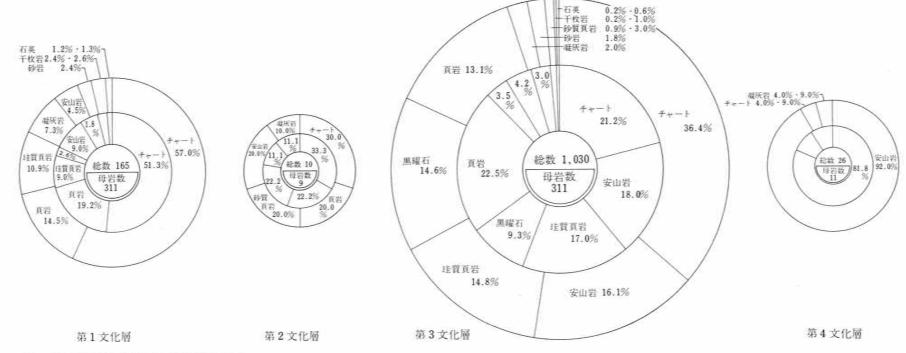


Fig. 168 各文化層における石質と母岩の割合 Pacentage of Stones, in every Culture Layer

各文化層の性格

A. 第1文化層

少量で、しかも規模の小さなユニットを形成する。 く、相接するユニットとは剝片剝離行程を通じて近い 関係にある。

礫面を一部残しながら形状を整える特徴的な手法で 作出された打製石斧は、南関東で数例発見されている ものの一員である。

ナイフ形石器は、両極打面の石核から得られたもの であり、寸詰まりの小形の剝片から作出されている例 である。第一次剝離面から主要剝離面に向かって施こ

であろう。鈴木遺跡第 X 層(鈴木遺跡調 査団 1975・ 1978) 出土例の整った形状のナイフ形石器を本遺跡で は検出出来ず、なしろ高井戸東遺跡(高井戸東遺跡調 基部左右位に 刃潰し加工を施し、打点を残し、やや突 出した基部を形成するものであり、さらに先端には、 左・右のいずれかに細かな刃潰し加工を行なうもので ある。

> 定形石器は極めて少なく、石質も、チャート・頁岩 系が半数以上を占め、黒曜石は存在しない。石核は、 両設に打面を持ち、小さいながら石刃を生産する意識 がみられる例、円盤状の石核から横長の剝片を生産す

されている刃潰し加工は、背面基部加工と呼べるもの る例、さらに第Ⅲ章でも述べた如く、分割技法を頻繁 に用いて不定形の剝片を得る例が存在する。かつて, 中山谷遺跡 (J. E. キダー・小田 1975) 第 X 層で検出 されているチャートの一群は、この分割技法を多用し た結果であろう。

B. 第2文化層

南関東で第『黒色帯上部に含まれる良好な資料は少 なく, 不明な点が多い。野川遺跡・鈴木遺跡・平代坂 遺跡等があげられるものの、ナイフ形石器は鈴木遺跡 都道 213 号線報告 (鈴木遺跡調香団 1977) 例で紹介さ れているのみである。本遺跡でも、わずか数点の剝片 が得られたにとどまった。

礫面を直接の打面とし、正面の一部に礫面を残す大

形の剝片群と、小形ではあるが調整打面を持った石核 から得られる両者が共存する様である。

類似するものである。

C. 第3文化層

イフ形石器の器種も豊富であり、記すべき事は多い いてもこれに類似する傾向がみられる。 が、特に今回検出された大形ナイフ形石器について若 干述べておく事にする。

本遺跡では、2点の資料がみられる。いずれも調整 された打面から得られた。ぶ厚い剝片が素材として使 用され、断面は三角形状をし、バルブは一部残置され るものの、平担な裏面を呈している。

類例は現在のところ、東内野遺跡(戸田 1977) 埼 玉県打越遺跡(註1), 鈴木遺跡(註2)にある。東内野例は 先端が尖がり、また、基部を作出する意識が窺われる。 打越例は先端部が斜行し、全体は中ぼそりの形状を呈 する。使用によると思われる磨滅痕は、側縁に対して 直交する位置にあり、主体的な機能部は、 たしろ、 側 面に求められ、削器としての性格が強い。 鈴木遺跡で は数例出土しているものの欠損品が多く全体像は推定 に頼らざるを得ない。しかしながら、素材の大きさ、 厚さ、大きな剝離によって構成される刃潰し加工等か ら同種のナイフ形石器とすべきものである。また、 鈴 木遺跡例には、 礫面をそのまま打面とするものもあ り, 石核のバラエテイも存在するようである。素材の 大形剝片を得る技術は、目下のところ 不明 た点が 多 く、今後の問題となろう。

D. 第4文化層

遺物は少ないにも拘らず製品が多い。しかも安山岩 が全体の90%以上を占める槍先形尖頭器の文化層で ある。槍先形尖頭器の出土遺跡においては、本遺跡の ごとく, 特定の製品を多出する片寄った組成をみせ, 石器製作技術の工程を窺いにくい一面が存在する様で ある。

南関東において検出されている当該期の例として は、狭山遺跡B地点(吉田・肥留間 1977) があげら いずれの遺跡においても、石質ではチャート類が多 れる。一方、製品を含め、他器種を組成に持ち、剝 用されており、黒曜石が見当らない点は第1文化層と 片・砕片が多出する例もある。前田耕地遺跡(前田耕 地遺跡調査会 1977) はその好例と云えるが、この様 な遺跡ごとの不均衡性は、この時期に特有な何らかの 礫群が発達し、石器の量も多く遺跡に残される。ナ しくみがあると推される。更に、縄文時代草創期にお

- 註1) 荒井幹夫氏の御好意により実見する機会を得た。
- 註2) 現在、整理中である。

Ⅳ 奈良時代の遺構と遺物

1. 遺物の出土状態について

調査区のほぼ中央の (17, 19) 区の断面部に残っていた杉の根を重機を使用して抜根した折に, 黒色土中より出土した。須恵器の埦はその時点で既に上半部の
%程欠失しており、錆付いた銅銭の一部, 更に須恵器
蓋の破片も別々に収納されたものである。埦の下半部
の内面には川砂が充填してあった状態が良好に観察されたが, 既に原位置を失なっておりその他の伴出物は
確認出来なかった。遺物の出土地点を中心に精査したところ, 黒色土層が厚く堆積している様子が窺えたところより, 本来は土壙中にその原位置が求められるものとする事ができる。しかしながら, 本台地を開墾し
植林する時点, 杉林を削平し重機を使用して抜根する時点に於て, 相当の攪乱が行なわれたものと推され, むしろこれらの遺物が出土した事が誠に幸運であったものとしなければならないであろう。

これらを武蔵国分寺遺跡調査会の事務所に持帰り、 境内部に充塡してあった川砂を除去する一方、銅銭の 錆落した作業を行なった結果、容易でない遺物群であ る事が判明した。

遺物は銅銭6枚が墨書された須恵器堀に入れられ、蓋を乗せられて埋納された蓋然性が最も高いものであったろう事が判明するに至った。6枚の銅銭は5枚が和同開珎、1枚が万年通宝であった。以上の事実から更に周辺の精査の必要性が指摘され、あげ土も慎重に見直された結果、万年通宝1枚が追加された。しかしながらこれらの遺物群と関連遺構の存在は一切明らかにし得ずに終り、単独土壙の性格が一層強く残った。尚、土壙の規模は直径1m前後深さ1.2~1.4m程のものであったと推定される。

2. 出土遺物

A. 須恵器・埦 (Fig. 170)

口径12.3 cm, 器高4.0 cm, 底径6.5 cm。器壁は薄く,砂粒が目立つが灰色を呈し,焼成も良好である。口径に比較し底径は大きく,胴部はゆるく彎曲する。口縁内面は直行し,外面は大きく屈曲し外に張り出す。口唇部は内傾するヘラ削りによって成形され平担な面が特徴の一つに入れる事ができる。胴部は内外面ともに横位のヘラ削りが二段にわたって施される。底縁部には三段にわたるヘラ削りが行なわれ軽い稜が残っている。底部は時計回りのヘラ削り手法によって整形されている。

B. 須恵器・蓋

C. 銅銭 (Fig. 169)

隸開和同 4 点 (Fig. 169-1.3~5)

揆和同1点 (Fig. 169-2)

縦点万年1点 (Fig. 169-7)

横点万年1点 (Fig. 169-6)

D. 墨書について (Fig. 172)

須恵器埦の底面に井桁状に組み合せられた墨書がみられる。井桁の中心は底部の中心より若干ズレてみられ、一辺は底縁にかかり不鮮明な墨痕が残っているのみである。これらの墨痕群を以下の様にA~D号とする。

A号

まず第1に墨痕の濃淡・筆圧・筆順から「逆字」である事が観察される。境の底縁と「申」の間には墨痕がみられる。本号は該字より始まっているものと断定できる。次に配されている文字は「廃」「廃」か。不鮮明な点が多く判読は不可能である。次の文字も墨痕が二点のみである。配置からすると旁の上半部に相当しようが「い」からは解らない。次は扁はD号の一部と重複している為に読み取れないが、旁は「足」か「尺」の様に看取できる。次はやや小さく「主」とみれようか。五番目の文字は「西」あるいは「酉」で右肩が極端に上がった形をしている。この第6番目の文字と境底部縁との間は、僅かな間隔しかないが、墨痕と思われる影が薄くみられ文字の存在がうかがえる。しかしこれは胴下半部には至らず底面だけで終っている。

以上、A号には字の大きさから7文字の存在が割り 出された事になるが全体的に右にゆる〈カーブする配 置をとる。これらの文字を反転し並べると「申□□□ 主□□・・・」となる。

B号

A号よりやや下った位置から始まる様であり、D号に重複して終っている。逆文字であるか否か不明であるが墨痕の状態からすると各字の大きさはA号並みであり、4~5文字が配されている様である。左にゆるくカーブしている。

C号

D号と平行に、しかも墨痕からみる限りA・B号に 比較すると小さく、D号と同型の字を配した様子がう かがえる。逆字であるか否か不明。

D号

A・B号の文字に比較し若干小ぶりの逆字で構成されているが、判読できるのは最後から二番目の「己」 と最後の「日」、あるいは「白」の二字のみである。 墨痕からは6~7文字で構成される様に推されるが詳細は不明である。

以上の点からA・D号は逆文字である事が容易に判

明するが、 $B \cdot C$ 号については その断定が下せない。しかしな がら、これらの文字群が $A \rightarrow B$ $\rightarrow C \rightarrow D$ の順序で、しかも意識 的に井桁状に組み、書かれたも のの反転プリントと解すると 「申」から始まり「日」、「白」 に至るまで、全体で $23 \sim 27$ 字 で構成されていた文章であった 事が想定される。

3. 年代とその性格

須恵器, 埦の底部は回転ヘラ 削り手法によって整形され, 胴 下部は手持ヘラ削りによって3 段にわたる整形が行なわれてい る。

口唇部の斜位へラ削りによる 特徴的な器形は南武蔵では福 田編年の第Ⅲ期に相当し、8世 紀第2四半世紀に入る(福田 1978)。北武蔵においては荒神 脇遺跡第3号住居址出土例、 熊野遺跡第4号住居址出土例 に類似する。高橋編年によると 荒神脇第Ⅰ期として8世紀中に 出現し、第Ⅴ期の9世紀で姿を 消す。又、熊野例は第Ⅲ期の10 世紀前とされ回転糸切り手法に 移行しており、この種の須恵

器・埦の消長が10世紀の前半に及んでいる(高橋1975)(註1)。相模では鳶尾遺跡の115号住居址,149号住居址出土にその類例が求められる(国平1975)。鳶遺跡出土の土器群を使用した河野編年によれば(河野1976)、8世紀中葉の第 II 期に出現する。鳶尾115号例は底部周縁と側部下端を回転へラ削りで整形され、こ

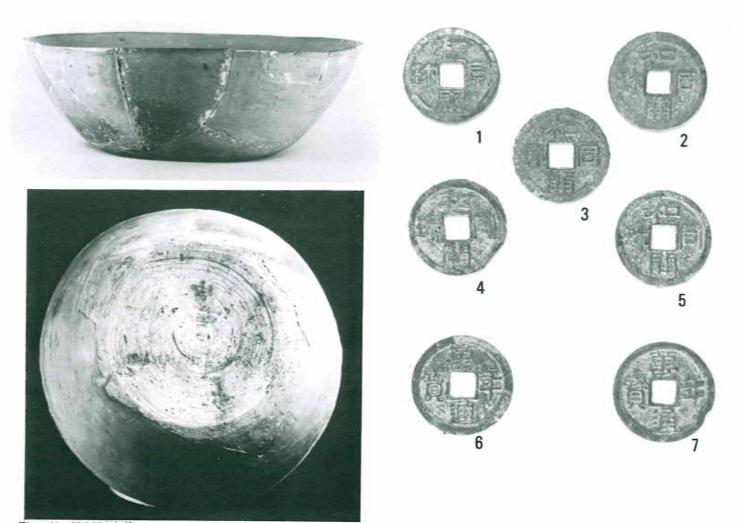


Fig. 169 須恵器と銅銭 Sue-Pottery and Coins

の一群は第Ⅳ期へと連続し、回転糸切り手法に移行する変化がみられる。そして10世紀を境としての第V 期には、器高や底径にバラエティがみられ始める。

一方, 平城宮 SK 820 出土の遺物群は天平及び天平 勝宝の木簡との伴出より平城宮Ⅲとされ A. D. 750 年 の年代が与えられている(奈良国立文化財研究所 1976)。この遺物群に口唇部を斜位に削る手法を持った須恵器の存在が確認されており、この特徴的な製作手法は群馬県八幡観音塚古墳や正倉院の銀器とも共通する。更にこの平城宮Ⅲには、あらたにこれら金属容器の形態を模倣した境Aとする土師器が登場する。須恵器境A、土師器境Aの両者ともに、器形の多様化を

伴いつつ、平城宮 V の 8 世紀末で消滅する 点が指摘されている。

以上の様に福田・高橋・河野の各編年 (註2)もこの埦形須恵器の出現を8世紀に求 めている点は共通するが、その消滅につい ては若干の差がある。本遺跡出土の埦は皇 朝十二銭のうち、和同開宝 (初鋳 A.D. 708 年) 5枚と万年通宝(初鋳A.D.760年) 2枚との共伴関係を有しており、奈良時代 最後の神功開宝 (初鋳 A.D. 765年) は, 伴出していない。これをみる限り A.D. 760 年を上限とし、A.D. 765年を下限とする年 代を設定する事ができる。しかし従来より 多くの研究者により論じられている銭の伝 世の点を考慮に入れると、上限の A.D. 760 年は設定できるにしても, 矢張下限は不明 とせざるを得ない。ここで埦底部の切り離 し技法の推移を前述の東国三編年と比較し てみると、8世紀中葉には既に回転糸切り 技法と手持ヘラ削り整形が共存しており, 必然的にこのヘラ削り手法の位置は8世紀 第3四半紀に求められるであろう。

現在,武蔵国分寺遺跡調査会により周辺 地域の調査が進行しているが,8世紀第3 及び第4四半紀に属すると推される資料は 少ない。国分寺市立第4中学校建設に伴な

う発掘調査で得られた住居址出土例に幾つか存在する様である。また底部の回転糸切り手法を持った例で口唇部を斜位に整形する土器群も幾つか存在するが、9世紀前葉までは溯らせる事は出来るものの、8世紀までは無理との見解を伺った(註4)。いずれにしても武蔵国分寺創建時の特に8世紀後半の資料は少なく、多摩蘭坂遺跡例の理解は今後の詳細な遺跡地図作製まで待たねばならない。

すでに原位置は失なっていたものの, 須恵器城の底 面には銅銭の錆が良好に観察された。これは器底中心

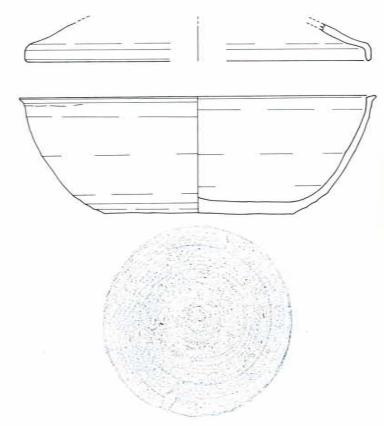


Fig. 170 須恵器実測図 Sue-Pottery

に空間を設けた環状に配された状態を示してはいるものの、銅銭の表裏が判明するものは和同開珎の1枚が伏せて置かせていた以外には判然としない。更にこれらの痕跡からみる限り環状を呈しているにも拘らず、それぞれの間隔は不規則であり片側に偏在して配された様である。また痕跡からは6枚までが読みとれるが、その他に幾つかの不鮮明な錆痕の円弧を辿っていくと、その数は増加する様にもみえる。いずれにしてもどの銅銭がどの位置に相当するかは判らない。

城底部に残る墨痕は先述の如く反転プリントされた

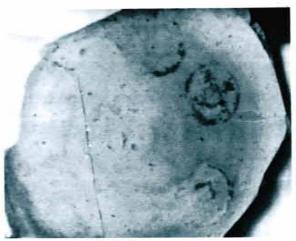


Fig. 171 器内底面の錆痕 Stamp of Coins, within the Sue-Pottery



Fig. 172 墨書の反転 Placing the Photograph face down of BOKUSYO

ものである可能性が強く(註5), 墨痕の縁が明瞭にみられる部分より書かれた素材は粒子のこまかいもので繊

維というよりは紙質であろうと推される。

これらの点より

- (1) 土壙(註6)
- (2) 銅銭
- (3) 埦
- (4) 単独
- (5) 墨書(註7)された紙質のものと埋納

等から考察すると、骨粉の伴出は確認できなかった ものの、蔵骨器としての性格を窺わせるものである。 蔵骨器(註8)と銅銭の伴出例は以下の如くである。

- 1) 本遺跡
- 2) 栃木県日光市日光男体山 (亀井 1963)

Cトレンチからは延喜通宝5枚が皿形土器の中に 埋納され更にその上には青銅製香炉の蓋を以て覆っ てある。土器は正位置におかれ方孔に籍の残ってい るものが存在する。山頂遺跡からは総数51種1,313 枚の銅銭が出土しており、そのうち皇朝十二銭の構 成は隆平永宝1、承和昌宝1、寛平大宝1、延喜通宝 59、乾元大宝10となっている。骨の伴出はない。

 長野県諏訪郡長池村東堀長池小学校西(藤森 1930)

長頸壺の頸部を欠き、土師器坏を蓋として地表下 約60cmのところより正位の状態で出土。長頸壺の 中には骨粉と少量の土壌が三分目程入っており、隆 平永宝が1枚件出している。

4) 石川県七尾市国分町能登国分寺付近(七尾市史編纂委員会 1970)

須恵器壺に和銅開珎6枚が埋納されて出土。

5) 石川県鹿島郡鹿西町金丸杉谷遺跡(浜田・吉岡 1965)

土師質壺の中に隆平永宝9枚が埋納されて出土。

6) 石川県加賀市宮地遺跡

土師器蔵骨器に共伴する須恵器坏に和銅開珎13 枚が包蔵され出土している。

美濃国不破郡宮代村大字四ッ池(後藤・森 1971)

薬壺形須恵器が2点出土し、和銅銭が5枚ずつ入っていたという事であるが、どの様な状態であったかについては不明である。

- 8) 滋賀県東浅井郡浅井町内保(古代文化 1964) 直径 60 cm, 深さ 40 cm の土壙の中より和銅開珎 4 枚を埋納した土師器の壺形土器が検出されてい る。伴出遺物等の詳細な点については不明。
- 9) 滋賀県大津市瀬田町野々原 (中川 1898) 薬壺形の蓋付須恵器中から和銅開珎2枚,万年通 宝15枚,神功開宝45枚が埋納され出土している。 詳細は不明。
- 10) 京都府愛宕郡修学院丸子青良3 (梅原他 1925) 地表面下約90cmの地点より、素焼の壺を中心に 置き、周囲を切り炭と古銭が交互に置かれて出土。 銅銭は隆平永宝1枚と富寿神宝63枚を数える。
- 11) 京都市左京区吉田町 (西田・向居 1931) 地下約1.8mよりロ頭部を欠失した長頭壺中より 寛平大宝314枚の出土がみられる。伴出遺物は不明 である。
- 12) 平城京右京五条四坊三坪(佐藤 1977a) 薬壺形須恵器を用いた蔵骨器が検出されており, 筆管, 墨挺を内包している。この底部にも4枚の和 同開珎の錆着した状態が観察される。
- 13) 奈良県宇陀郡室生村大野縁川(網干・小泉 1966) 板石が囲んだ壺の中から万年通宝・神功開宝等 64 枚の銅銭が出土しており、その中に和銅開珎も含ま れていた様であるが詳細は不明である。
- 14) 奈良市秋篠町西山遺跡 (小島 1956) 土師器壺形土器の内底面に2枚の和銅開珎が密着 した状態で埋納されており、小破片であるが蓋も出 土している。
- 15) 奈良市平松町 (佐藤 1976b)

薬壺形の須恵器を用いており、器底中央に1枚を配し、その四方に文字面を上にして4枚が置かれている。更に、この合計5枚の銅銭の上に絹と思われる細い布目痕が認められている。銅銭は万年通宝2

枚と神功開宝3枚である。墨書は認められない。

- 16) 奈良県磯城郡三宅村字伴堂(稲垣 1961) 薬壺形須恵器の蔵骨器に伴出した土師器中より 8 枚の和銅開珎が発見されている。伴出遺構等詳細は 不明である。
- 17) 奈良県高市郡明日香村豊浦甘橿丘 (網干 1966) 南斜面の地表下約60~70 cm で、区画された木炭 の混入層中より蓋付の薬壺形須恵器が出土してい る。器中には7~8分目程の火葬骨があり、その中 に和銅開珎1枚が検出されている。
- 18) 明日香村奥山字上ノ井手遺跡(奈良国立文化財 研究所 1973)

土師器把手付壺形土器の中に和銅開珎5枚,万年 通宝4枚,神功開宝20枚が骨片とともに納められ て出土。

- 19) 奈良県御所市東寺田(御所市史編纂委員会 1965) 開墾中、口縁部の欠けた長頸壺の中より饒益神宝 1枚が出土。詳細は不明。
- 20) 奈良県五条市牧野町西釜窪 1645·1646 (金谷 1956)

有蓋高台付短頸薬壺土器の内より火葬骨とともに 7~8枚の銅銭が検出されているが、銭文が明らか であるものは寛平大宝2枚のみである。この土器 は、地下約1mに多量の炭灰とともに埋納されたも のである。

21) 兵庫県宝塚市北米谷 (末永 1966)

南斜面に約2m²の平担地をつくり,4個の大形扁平石を台状に並べ,その中に金銅製蔵骨器を埋置した2枚の刳り合せ石櫃が配されている。その南面より把手付平壺・素焼土器2個が検出されており,和同開珎枚6は把手付平壺中より出土している。

22) 和歌山県那賀郡岩出町吉田遺跡(和歌山県教育委員会 1971)

須恵器坏の中に万年通宝1枚,神功開宝2枚が埋納され蓋に覆われて出土している。銅銭3枚は若干ずれながらも重ねられ、坏の側壁に立てかける様な



Fig. 173 蔵骨器と銅銭の伴出遺跡分布図 Distribution of the Sites with Sue-Pottery and Coins

出土状態であるが、坏内部にどの様な伴出物がある のかは不明である。

- 23) 和歌山県田辺市稲成町荒先通称丸橋立 (浦 1940) 容器中からの出土ではないが、本遺跡からは木炭と伴出し、火葬墓群である事が認められている。薬壺形須恵器 2 点、坏 3 点に 5 枚 1 組で計 3 組の神功開宝 3 枚と和銅開珎 2 枚の 1 組が伴出している。
- 24) 和歌山県紀伊郡深草村字西車塚 (中川 1898) 蓋付須恵器から乾元大宝約50枚が出土。伴出遺 物は無く,詳細不明。
- 25) 香川県三豊郡上高瀬村上高瀬平見 (寺田 1937) 地表下約30cmのところより出土し、外部施設の伴出は無い様である。発見時に既に土器の上半部は欠失してはいるが、写真よりすると長頭壺の下半部であろう。隆平永宝40枚が埋納されている。
- 26) 福岡県筑紫郡筑紫野町京町字結浦遺跡 (渡辺 1957)

地表下約1mの土擴に正位置で埋納された把手付 須恵器内に7枚の銅銭が包蔵された状態で出土して いる。この蓋付の薬壺形須恵器の中には、土砂、骨 片の伴出はみられず、又、7枚の銅銭のうち銭文が 明らかなものは和銅開珎2枚のみである。7枚の銅 銭がどの様に配されていたか不明であるが、器底面 に1枚の錆着痕がみられるところより、底面に1枚 ずつ配された状態が覗える。

27) 筑紫国御井郡高良内村杉谷名上峰 (中川 1898) 地下に石を使用した約90cm四方の区画中より1 点の壺が出土し、中に和銅開珎1枚が存したと記している。壺の内面に渦紋があるとされているが、詳細は不明である。

以上より本例は、壺形須恵器を用いた蔵骨器であろうと推定されるが、火葬骨を埋納する器形の多様性に 年代的差や地域差があるか否か、今後の資料の増加を 待ち、分析せざるを得ない。

最後に、全国一の規模を有したといわれる武蔵国分 寺寺域西方にあたる本遺跡周辺は、奈良時代において は墓域の一部であった点を指摘しておきたい。

この報告をまとめるにあたり、鎮壇、土公祭に関した文献等は奈良国立文化財研究所 森郁夫氏をはじめとし、逆字については同所佐原真氏、東北歴史資料館 藤沼邦彦氏から有意義な御教示を頂いた。また、墨書 土器の赤外線 T V 撮影は東京国立文化財研究所保存科学部物理研究室 石川陸郎・三浦定俊両氏の御助力によるものであり、銅銭の計測は、奈良国立文化財研究所 佐藤興治氏によるものである。記してお礼申し上げます。

- 註1) 中道遺跡第6号住居址からは、口唇部を斜位に削る 土師器が出土しており(駒宮 1974)。須恵器城との関 係は今後注意して置く必要がある。
- 註2)福田は八王子下寺田遺跡 SB 03・05 住居址出土の朝 倉窯址の製品と瓦、高橋は柏市中馬場遺跡出土及び前 内出窯址出土の底部成形を、河野は皇朝十二銭との伴 出関係を軸にしてそれぞれ編年を行なっている。
- 註3) 神奈川県森戸原遺跡第17号住居址からは和同開弥 が出土しているものの、土器は矢張後出のものと言え る。
- 註4) 武蔵国分寺遺跡調査の有吉重三氏、福田信夫氏及び 東京都文化課の西脇後朗氏の御教示によるものであ る。なお、国分寺崖線を背にし建設が進められた武蔵 国分寺以西において横穴の存在が指摘されている。崖 線を利用して営まれたもので、内藤横穴例(松井 1960) や観音堂階段下で認められている例がある。
- 註5) 現在まで墨書による逆文字の類は見当たらない。またクロスする墨書の例も見られない。元興寺極楽坊出土遺物(坪井 1976)中には、羽釜形蔵骨器の内面底部には内輪に梵字を四方に配し、外輪には「南無阿弥陀仏」と梵字が交互に時計回りに書かれている例、或いは胴部から底部に向かって四方から墨書し、底部中央に梵字を記す例はあるが、いずれもクロスせず、重複はみられない。しかし、文字ではないが、所謂一筆書きの何らかの記号とも思える例はある。これは、下総国分僧寺址出土の2点の墨書土器(佐々木 1975)であり、1点は环、1点は高台付皿形土器である。

_		重量(g)	厚A(=)	草 8	厚 C	油 D	厚ョ	厚 b	厚c	厚(
	相謂	2.41	1.49	1.47	1,28	1.39	0.67	0.80	0.68	0.80
2	**	2,88	1.48	1,42	1.46	1.52	0.51	0.55	0.82	0.77
	*:	1.94	1.39	1,48	1.66	1.34	0.46	0.48	0.39	0,55
į	*	2,99	1.47	1,43	1.60	1.45	0.90	0.91	0.89	0.83
5	**	3.05	1.50	1,48	1.51	1.29	0.77	0.70	0.67	0.77
6	萬年	3.74	1.51	1.56	1.55	1.58	0.61	0.62	0.67	0.65
7	*	3,83	1.60	1.59	1,57	1.75	0.67	0.72	0.69	0.62

		Ga	G b	N a	N b	g a	g b	0.3	n b	
1	和銀	25.2	25.1	20.9	21.2	8.3	8.0	6.9	6.6	
Y		25.9	25.4	21.2	21.2	8.2	8.0	6.5	6.4	ハ木和銅
	**	25.1	25.0	21.1	21.4	7.5	7.5	6.5	5.4	
4	* **	24.9	24_8	21.2	21.0	8.0	8.0	6.8	6.7	
-	*	25.2	25.0	21.0	21.2	7.9	7.9	6.3	6.2	
-1	萬年	26.0	25,9	21.4	21.4	7.8	8.3	6.9	7.1	孤点高年
1		25.9	26.2	22.1	21.9	7.8	8.5	6.3	6.2	

○重量計測は化学天秤(SHIMADZ4, Type12:0.1mg) を使用。○厚味計測はマイクロメーター(N·S·K:0.01mm) を使用。



Fig. 174 銅銭計測表 Measuring of Coins

註6) 土壌・容器・玉類・銅銭等は、奈良時代に行なわれた鎮壇具とその埋納形式として認められてはいるものの、各寺院址や建造物によって、全てがセットとして確認されている例は少ない。奈良時代の東大寺大仏殿(上田 1927)・興福寺金堂(矢島 1960)・陸奥国分尼寺金堂(仙台市教育委員会 1969)・法華寺金堂等においては、七宝をはじめとして珍宝が使用され、平安時代には醍醐寺塔址(京都府教育庁文化財保護課 1960)から多量の銅銭が検出されている。その後、中世末に至ると興福寺菩提院大御堂(奈良国立博物館 1977)例の様に輪宝を伴った銅瓶を使用するという様に密教的色彩の中に系譜が辿れる。一方、地鎮具としても矢張、先述の土壌・容器・銅銭等が使用されていると推される。兵庫県立岡遺跡(阿久津 1971)・滋賀県服部

遺跡・大阪府野中古墳墳頂(北野 1976)・大阪府東奈 良遺跡等が好例としてあげられる。また、美濃不破関 (波多野・八賀 1976) 例の様に一定の地域を区画する 際に要所要所で行なわれていると推されるものもあ る。

さらに文献から「鎮祭」については、日本書紀の 持統天皇五年十月甲子、遺-使者-、鎮-祭新益京-六年正月戊寅、天皇観-新益京路-、 五月丁亥、遺-浄広肆難波王等-、

鎮-祭藤原宮地_

をはじめとして幾例かの記載がある。これを含め、欽明天皇13年(552)より和銅4年(711)に至る間は、この「鎮祭」が4例ほどみられるが、この4例中遷都を進めてゆく上で一連の過程が窺い知れるものは和銅元年三月の平城遷都の詔発布から平城宮地を鎮祭する十二月に至る間のものみである。これは三月に遷都の詔布がなされ、九月に平城に巡幸し地形の視察が行なわれ、同月従四位下多治比真人池守を造平城京司として任命し、十二月癸巳、鎮三祭平城京地、そして翌年八月平城宮に幸している。これからみる限り、「鎮祭」の場合には平城宮としてあるところより平城京のごく限定された場所での臨時祭式の表現である点を注意しておきたい。

- 註7) 墨書・土壌・砂の伴出より当初鎮壇具としての性格 を推定してはいたが、発掘経過にもある様に、同台地 上で建築址遺構は何ら確認出来なかった点を考慮に入 れ、矢張蔵骨器であろうという点に帰着した。
- 註8) 発掘調査によって検出されている蔵骨器の例は、その単独的性格からみても詳細な点が判明する好資料に恵まれてはいない。銅銭の伴出関係から、すでに明治年間より中川氏により特異な例として指摘されている(中川 1898)。

TAMARANZAKA SITE

Location:

Two-thirds of the area of Metropolitan Tokyo lies on the relatively level Musashino Plateau, an area fringed by coastal lowlands on the east and by the floodplain of the Tama river and a row of low-relief hills on the south. Most of the western one-third of the Tokyo area is mountainous.

The Musashino Plateau is the alluvial fan of the Palaeo-Tama river. During the Late Pleistocene this river cut two distinct terraces along the southwestern edge of the upland, leaving a high scarp known as the Kokubunji Cliff-line separating the upper Musashino terrace from the lower Tachikawa terrace. Springs feeding the Nogawa stream, a tributary of the Tama river, have eroded numerous shallow clefts or notches into this scarp, and since the beginning of the Preceramic period nearly 30,000 years ago these notches have been the foci of human settlement in this part of the Musashino Plateau.

The bluffs of the Kokubunji Cliff-line along the Nogawa stream are rich in sites of every period (Fig. 1). Tamaranzaka is the western-most Preceramic site among them, located at 2-3, 2-chome, Naito, Kokubunji City. At this point the scarp runs from the northwest to the southeast, but a little past Tamaranzaka it turns abruptly eastward. The site covers several thousand square meters of the bluff encircling a small notch, 8 m above the Tachikawa terrace, and 82 m above sea level (Fig. 2). Today the land below the site is dry. However, until a few decades ago springs there fed streams that provided abundant water for wet rice paddies nearby. This was the source of the Nogawa at that time, but the stream now begins at the springs 1.5 km to the east near the National Railway's Kokubunji station.

Excavation:

In 1976 Mitsugi Industries, Ltd., purchased 2,600 m² of the site to develop into housing lots, necessitating a study of the impact of the construction on the buried cultural properties there. An exploratory excavation of thirteen 4 m x 4 m squares was conducted for that purpose, and abundant

Perceramic remains were found everywhere. But because only the building of the access roads and retainer walls on the main cross axes of the site would damage these cultural properties, archaeological excavation was confined to the 1,000 m² required for their construction (Fig. 19). The exploratory and main excavations together took 66 days of field work between February 4 and May 29, 1977. The project was supervised by S. Abiko, S. Horii and T. Tateno, under the direction of M. Nagamine, a member of the Tokyo Council for the Protection of Cultural Properties.

Stratigraphy:

The stratification of the deposits at Tamaranzaka was the same as at most sites on the Musashino Plateau; hence, the system widely used in the Tokyo area for numbering strata was applied to the deposits at this site too (Figs. 3-4). Nine strata could be seen in the upper 3 m of the site. Strata I and II were Holocene humus, and Strata III through X (VIII was missing) were a late Pleistocene aeolian tephra called the Tachikawa Loam. Strata V, VII and IX of this loam are thought to be palaeosols and are alternately referred to as Black Bands I, IIa and IIb. The first two are light gray but the third one is dark gray. Stratum VI corresponds to the Aira-Tanzawa Pumice, a wide-spread horizon derived from a volcanic eruption in southern Kyushu 21,000 to 22,000 years ago (Machida and Arai, 1976). Stratum VIII is an orange loam between Black Bands IIa and IIb in the standard sequence, but it was missing in the deposits at Tamaranzaka. The excavation did not go deep enough to uncover the base of the Tachikawa Loam and the Musashino Loam which were below Stratum X.

Preceramic artifacts and features were stratified in 4 layers in the Pleistocene tephra (Fig. 29). In addition, several artifacts dating to the 8th century A. D. were unearthed in Stratum I.

Preceramic Artifacts and Features:

Cultural Layer 1: A moderate collection of lithic materials was found near the edge of the bluff in a layer about one meter thick in Stratum X and the lower part of Stratum IX (Figs. 34-47). The artifacts are mostly chert or shale, and none are obsidian. Moreover, they generally lack conventional shapes, although a knife-shaped tool, some regular flakes and an ax-shaped tool are included among them. The single feature is a loose scattering of

burnt pebbles. This assemblage is analogous to those from Stratum X at the Nakazanya, Takaido Higashi and Suzuki sites, which are the oldest cultural materials (>27,000 B. P.) yet discovered on the Musashino Plateau.

Cultural Layer 2: The sporadic artifacts that were encountered in the 50-cm thick layer between the Aira-Tanzawa Pumice (Stratum VI) and the upper part of Stratum VII (Figs. 48-49) are typical of assemblages found in these same strata in other sites in South Kanto. Among those from Tamaranzaka are a large blade with some cortical surface on one face, and several small flakes that had been detached from a blade with a prepared platform. As in Layer 1, most artifacts are chert and none are obsidian.

Cultural Layer 3: By far the best collection was recovered from a layer one meter thick spanning the lower part of Stratum IV and the upper part of Stratum V (Figs. 50-65). This collection includes a large number of stone flakes and tools of a wide variety of types, in particular many kinds of knife-shaped tools. Obsidian artifacts are the most common. In addition to the artifacts, numerous clusters of burnt pebbles were also recorded in this layer.

Cultural Layer 4: Only a few artifacts were found in the soft loam, Stratum III (Figs. 164-167). None of them are bifacial spear points like those frequently associated with this stratum in neighboring sites.

Early Historic Artifacts and Features:

A small bowl was discovered in the hole left by the stump of a cedar tree that grew near the middle of the site (Figs. 20, 169-174). In the bottom of the bowl were 6 bronze coins in a sandy matrix. The use of six coins is reminiscent of funerary practices of the Medieval period, but after cleaning in the laboratory the bowl turned out to be Sue ware dating to the early Historic period (7th-10th centuries A. D.), and the coins were found to be 5 Wadō-kaichin coins minted in A. D. 708 and one Mannen-tsūhō coin minted in A. D. 760. A further search through the backdirt yielded one more Mannen-tsūhō coin.

Black ink lettering in a cross pattern can be seen on the base of the bowl. Unfortunately, the writing is illegible, perhaps because the ink was not applied directly to the bowl, but rather transferred from a wrapping of porous paper, reflecting a practice used in some types of magical rites.

The bowl and coins were recovered from a pit estimated to have been

over 1.0 m wide and 1.2 to 1.4 m deep. Such a context indicates a possibility that they were paraphernalia used in a ground-breaking ceremony, but excavation produced no trace of a building nearby. However, they date to a time roughly contemporary with the construction of the local provincial temple, the Musashi Kokubunji, in the late Nara period (A. D. 710-794) or early Heian period (A. D. 794-1192). Thus, another possible interpretation of these artifacts is that they are mortuary goods from a grave related in some way to the temple complex which is less than 1.5 km away.

Behavioral Reconstruction:

For about a decade Preceramic research has studied spatially separated assemblages of artifacts and burnt pebbles, usually called units or blocks, and has identified different types of units with specific kinds of prehistoric human behavior (Kobayashi et al., 1971; Oda and Keally, 1973). However, several analyses of the distributional patterns of refittable artifacts have shown that cores and their flaking products often underwent considerable intrasite dispersion while in use (Anbiru, 1976), and other studies have demonstrated that complex articulations exist between lithic remains and prehistoric activities (Tateno and Horii, 1977).

The research at Tamaranzake built upon these earlier studies, but at the same time it attempted to redefine and expand some of the concepts by emphasizing analytical procedures designed to detect the behavior fossilized in the distributional patterns of artifacts and burnt pebbles. Refitting of cores, flakes, tools and pebble fragments was an integral part of this research. Also, several terms needed to be defined anew so that they would express the essential concepts of the interpretive framework.

"Unit" is defined as a spatially discrete cluster of fabricated or utilized objects that are relatively evenly scattered over a finite area of an occupation surface. When considered in the context of a larger aggregation of objects from the same surface, all of the constituent pebble and artifact units are referred to collectively as the "pebble component part" or the "artifact component part." The larger grouping itself is designated a "model" and, although it lacks the uninterrupted distribution of objects that is intrinsic to a unit, it gains integrity from spatial segregation vis-à-vis similar groupings. A "component" as used here resembles a model but derives its cohesiveness from the bonds of refittable broken objects or from the ties of fragments

lithologically attributable to the same nodule of raw material.

Eighteen artifact units and 34 burnt-pebble units were conspicuous in the distributional patterns of the objects in the large assemblage from Cultural Layer 3 at Tamaranzaka (Figs. 66-163). But abstracting from these units directly to 52 distinct activities or activity sets would have been a mistake. Proximity joined 22 of these units into 4 models that were subsequently analyzed in detail to determine to what extent they coincided with recognizable components.

- (1) The first model is comprised of 3 burnt-pebble units lying along the edge of the bluff and 3 or 4 artifact units lying a little back from the edge (Figs. 115-123). The lines connecting refitted pieces do not extend toward the south or to units on the east, but rather they weld this model into a self-contained component characterized by a single type of core and a large proportion of pebble fragments.
- (2) Three burnt-pebble units and 2 artifact units are encompassed by the second model (Figs. 124-133). Some refittable pieces tie 2 of the pebble units together, but otherwise this model has little internal structure.
- (3) The third model includes 3 burnt-pebble units and 2 artifact units (Figs. 134-142). The sequence of flake detachment evident in the refitted artifacts records a major toolmaking effort at the locus of Unit 12, after which one of the cores was moved to Unit 13, preserving a behavioral link between Models 3 and 4. Contrarily, none of the pebbles refits to fragments outside the area of the model. The divergence of these patterns shows clearly that the cooking and stoneworking activities represented by the burnt pebbles and artifacts did not necessarily always occur together. The density of artifacts in Unit 12 further reflects a concentration of activities there.
- (4) The 5 burnt-pebble units and 2 artifact units contained in the fourth model are located near the point of the bluff in an oblong dispersion with its main axis running east-west (Figs. 143-154). Refittable pebbles fuse the 3 pebble units into an independent component part with a paucity of fragments refitting to pebbles in adjacent models or in isolated pebble units. On the other hand, several examples of cores having been moved between Units 13 and 14 and from Model 3 are apparent.

Models 3 and 4 are characterized by a high proportion of obsidian artifacts, the prevalence of numerous types of specialized tools, a variety of types of cores, the large size and quantity of the stones in the pebble units,

and the wide area over which the refittable artifacts had been scattered. The complexity of these two models contrasts sharply with the comparative simplicity of Model 1. The predominance of Type A cores (Fig. 60) in Models 3 and 4 also contrasts with the predominance of Type B cores in Model 1.

Several conclusions seem warranted from this study. First, without refitting of the fragmented objects, components with behavioral significance could not have been resolved from the welter of individual objects and units. Second, it now seems probable that the cultural layers in Strata IV and V in other sites in South Kanto are composites incorporating one or more separate components, each of which is composed of 2 or 3 artifact units and 3 or 4 burnt-pebble units. Third, Models 1, 3 and 4 document a relatively complete inventory of daily activities and probably mark the living area of a stable association of people. And finally, the isolated artifact and pebble units most likely reflect tool fabrication, cooking and disposal activities outside the main dwelling area. The analytical procedures used in this research offer a good means for determining the chronological relationships of the modular components and the isolated units in the same cultural layer, but this is left for future study.

参考文献

先土器時代

- 麻生優 1975 「原位置」論の現代的意義 物質文化 24 p. 1 ~p. 14
- 麻生優 1975 概説 日本の旧石器文化 I 総論編 p.4~p. 35 雄山関
- Leroi-Gourhan, André, et Michel Brézillon 1966 L'Habitation Magdalénienne no. 1 de Pincevent près Montereau, Gallia Préhistoire, K, Centre National de la Resherche Scientifique, pp. 1 ~ 385
- Leroi-Gourhan, André et Michel Brézillon 1972 Fouilles de Pincevent, Essai d'Aanalyse Ethnographique d'Un Habitat magdalènien, VII. supplément à Gallia Préhistoire, Centre National de la Resherche Scientifipue.
- 安蒜政雄 1974 砂川遺跡についての一考察 史館2号 安蒜政雄,戸沢充則 1975 砂川遺跡 日本の旧石器文化2 p.158~179 雄山閣
- 安蒜政雄 1977 砂川遺跡についての一考察 史館 9 号 内田祐治 1977 栄浜遺跡 p. 226~p. 242 栄浜遺跡緊急調 査報告書 乙部町教育委員会
- 岡村道雄 1978 長野県飯田市石子原遺跡の再検討ーブロックの形成を中心として一 中部高地の考古学 p.9 長野 県考古学会
- 小田静夫, C. T. キリー 1973 武蔵野公園 I p. 19~p. 27 野川遺跡調査会
- 小田静夫, 伊藤富士夫, C. T. キリー編 1976 前原遺跡(I) 国際基督教大学考古学研究 センター Occasional Papers No. 3
- 小野昭 1976 後期旧石器時代の集団関係 考古学研究9-22 p. 89 考古学研究会
- 加藤晋平・桑原護 1969 中本遺跡―北海道先土器遺跡の発 掘報告―
- 加藤晋平、畑宏明、鶴丸俊明 1970 エンド・スクレイバー について一北海道常呂郡瑞野町吉田遺跡の例— 考古学雑 誌55-8 p.44~p74
- 加藤晋平 1970 先土器時代の歴史性と地域性 郷土史研究

- と考古学『郷土史研究講座 I』 p. 58~p. 92
- 加藤晋平, 宇田川洋 1973 松山廃寺 p. 42~p. 43 八王子 市寺田遺跡調査会
- 加藤稔, 渋谷孝雄 1973 山形県岩井沢遺跡の研究-小国盆 地の旧石器時代- p. 24 山形県小国町教育委員会
- J.E. キダー, 小田静夫編 1975 中山谷遺跡 国際基督教大 学考古学研究センター Occasional Papers No. 1
- 木村英明 1973 湧別市川遺跡 p. 28 湧別町教育委員会 清藤一順, 大原正義 1978 佐倉市星谷津遺跡 千葉県埋蔵 文化財センター p. 39~p. 43
- 小林達雄,小田静夫,羽鳥謙三,鈴木正男 1971 野川先土 器時代遺跡の研究 第四紀研究 10巻 4 号 p. 239
- 相模考古学研究会 1974 地蔵坂遺跡発掘調査報告 p.15 綾瀬町文化財調査報告第2集 綾瀬町教育委員会
- 佐藤達夫 1970 ナイフ形石器の編年的一考察 東京国立博 物館紀要第5号 p.21~p.76
- 新開遺跡調査団 1977 新開遺跡-第1次調査 A·B·C·D区 概報- p. 24 三芳町教育委員会
- 新開遺跡調査団 1978 新開遺跡一第 2 次 調査 H. I. J. K. L. Mb. N. O. P 区 報報 三 芳町教育委員会
- 鈴木遺跡調査団編 1975 鈴木遺跡
- 鈴木遺跡調査団編 1976a 鈴木遺跡-流域下水道建設工事 にともなう緊急発掘調査報告書
- 鈴木遺跡調査団編 1976b 鈴木遺跡一流域下水道建設工事 にともなう緊急発掘調査報告書 (その2)
- 鈴木次郎, 矢島国雄, 宮塚義人 1974 地蔵坂遺跡発掘調査 報告書 p. 15 綾瀬町文化財調査報告書第2集 綾瀬町教 育委員会
- 鈴木次郎, 白石浩之 1978 綾瀬町寺尾遺跡の調査 神奈川 県遺跡調査研究発表会第2回
- 鈴木道之助 1975 千葉県の遺跡 日本の旧石器文化2 p. 180~p. 204 雄山閣
- 砂川遺跡調査団 1974 砂川先土器時代遺跡 埼玉県所沢市 砂川遺跡の第2次調査
- 芹沢長介,中村一明,麻生優 1959 神山一新潟県中魚沼郡 津南町神山遺跡調査報告 津南町教育委員会

- 芹沢長介編 1977 栃木県真岡市磯山旧石器時代遺跡出土資料 磯山 東北大学文学部考古学研究室 考古学資料集 1 高岡寺院跡発掘調査会 1978 高岡寺院跡発掘調査報告書 p. 68
- 滝沢浩 1963 関東・中部地方におけるナイフ形石器文化と その終末 p.5
- 田代寛 1975 鳥羽新田遺跡発掘調査機報 p. 33~p. 50 栃木県教育委員会
- 舘野孝・堀井晶子 1978 「国分寺市多摩蘭坂遺跡の調査」 武蔵野文化協会調査・研究発表会Ⅲ
- 辻秀子 1977 勢雄遺跡-先士器遺跡の発掘報告- p. 18 更別村教育委員会
- 富樫泰時 1977 米ヶ森遺跡発掘調査報告書 秋田考古学 戸沢充則 1968 埼玉県砂川遺跡の石器文化 考古学集刊 4 巻 1号
- 戸沢充則 1975 インダストリー論 日本の旧石器文化 I 総 論編 p.64~p.73 雄山閣
- 戸田哲也 1977 東内野遺跡発掘調査概報 p. 19 東内野遺跡調査団
- 宮城哲也,大船孝弘 1976 津之江南遺跡発掘調査報告書 p. 20 高槻市文化財調査報告書第8冊
- 宮城哲也,大船孝弘 1978 郡家今城遺跡発掘調査報告書 一旧石器時代遺構の調査—I 高槻市文化財調査報告書第 11冊 高槻市教育委員会
- 中村紀男,山越茂 1974 磯山遺跡発掘調査報告 p. 16 栃木県教育委員会県史編纂室
- 沼沢豊 1978 佐倉市飯合作遺跡 p.74~p.78 千葉県文化 財センター
- 函館空港内遺跡調査団 1977 編函館空港第4地点・中野遺跡一函館空港拡張工事に伴う遺跡発掘調査報告書 函館 市教育委員会
- 橋本正・神保孝造・上野章 1974 富山県福光町城端町立野 ケ原遺跡群第2次緊急発掘調査概要 p.21 富山県教育委 員会
- 橋本正 1975 富山県における先土器時代石器群の概要と問 題 物質文化 24 p. 16
- 藤野次史 1978 山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年 的研究 周陽考古学研究所 1 p. 23 周陽考古学研究所 古内茂 1971 三里塚新東京国際空港地内の考古学的調査

p. 137 千葉県北総公社

古内茂 1976 先土器時代遺跡の構造について一特に木苅峠 遺跡を中心として一研究紀要1 千葉県文化財センター p.51

前田耕地遺跡調査会 1977 前田耕地 I 一予備調査報告書一 三ツ木貞夫,森田尚宏 1978 大台町出張遺跡調査概報 p.8 出張遺跡調査会

峰山巌 1975 森越ー縄文前・中期の堅穴住居遺跡ー p. 60 p. 172 知内町教育委員会

宮坂英弌 1962 渋川 p.83

吉崎昌一 1963 タチカルシュナイ遺跡 p.14 北海道遠軽 町教育委員会

吉崎昌一, 横山英介 1974 祝梅三角山地点 北海道千歳市 祝梅における旧石器時代遺跡の発掘調査 p.3 千歳市教 育委員会

吉崎昌一 1974 祝梅三角山地点一北海道千歳市祝梅における旧石器時代遺跡の発掘調査— p.3 千歳市教育委員会

吉田格, 肥留間博 1970 狭山・六道山・浅間谷遺跡 東京 都瑞穂町文化財調査報告 1

Johnson, L. Lewis 1977 A Technological Analysis of an Aguas Verdes Quarry Workshop, The Individual in Prehistory, edited by James N, Hill and Joel Gunn Academic Press. pp. 205∼ 225

奈 良 時 代

網干善教,小泉俊夫 1966 古墳時代の文化 室生村史 p. 31~p. 32 室生村役場

阿部義平 1971 ロクロ技術の復元 考古学研究70

稲垣晋也 1961 薬壺形壺 天平の地宝 p.53~p.54 朝日 新聞社

上田三平 1927 東大寺大仏殿須弥壇内に於て発見せる遺宝 に就て 寧楽 8

上野猛,服部敬史 1972 船田 東京都八王子市船田遺跡の 第Ⅱ次調査 p. 81~p. 82 八王子市船田遺跡調査会

梅原末治,他 1925 修学院村経塚 京都府史蹟名勝天然記 念物調査報告第6冊 p. 38~p. 42 補 宏 1940 南紀丸橋丘発掘の一奈良朝墳墓 考古学第11 巻 4 号 p. 218~p. 225 東京考古学会

海老沢稔 1975 「墨書·刻書士器」茨城大学周辺遺跡分布 調査報告書Ⅲ p.57 茨城大学考古学研究会

加賀能登出土の名宝 1973

金谷克巳 1969 大和呉谷発見の蔵骨器 古代 p. 20~p. 22 早稲田大学考古学会

亀井正道 1963 №章 遺物一古銭一日光男体山・山頂遺跡 発掘調査報告書 p. 329 角川書店

北野耕平 1976 河内野中古墳の研究一野中古墳発掘調査報 告ー p. 42~p. 43 大阪大学文学部国史研究室研究報告第 2 冊

木下密運・兼康保明 地鎮めの祭り一特に東密の土公供作法 についてー p. 338~p. 347

京都府教育庁文化財保護課 1960 国宝建造物展酬寺五重塔 修理工事報告書

河野喜映 1976 厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論-歴史 時代を中心として- 神奈川考古1号 p.119

御所市史編纂委員会 1965 御所市史 p.798 御所市役所 小島俊次 1956 大和出土の二例の骨壺 古代学研究 第 15・16号 p.63 古代学研究会

小島俊次 1959 奈良県奈良市西山古墓 日本考古学年報 8 p. 143 日本考古学協会

古代文化 1964 滋賀県浅井町で和銅開珎を発見 古代文化 13巻1号 p.20 古代学協会

後藤守一,森貞成 1971 仏教考古学講座第1巻 p.80 雄 山関

駒宮史朗 1974 中道・西北原遺跡発掘調査報告書 埼玉県 遺跡調査会報告第23集 p. 26~p. 27

金剛寺坊跡調査会 1975 天野山金剛寺 中世墓地発掘調査 河内長野市文化財調査概要

栄原永遠男 1973 日本古代銭貨出土一覧表及び附表 続日 本紀研究第169号 p.13~p.43 続日本紀研究会

栄原永遠男 1975 日本古代銭貨出土一覧表(その2) 続日本紀研究 178 号 p. 1~p. 43 続日本紀研究会

榊原松司,石川和明 1972 森戸原遺跡調査概報 昭和46年

度横浜市文化財調査報告 p. 129 横浜市教育委員会 佐々木和博 1975 下総国分僧寺址出土の墨書土器 MUSEUM ちば p. 16 千葉県博物館協会

佐藤興治 1977a 蔵骨器と副葬遺物 平城京右京五条四坊 三坪発掘調査概報 p. 12 奈良国立文化財研究所

佐藤興治 1977b 奈良山出土の蔵骨器と墨 奈良国立文化 財研究所年報 p. 45 奈良国立文化財研究所

佐藤虎雄 1964 和同開珎の問題 古代学11巻4号 p.332 古代学協会

末永雅雄 1966 宝塚市北米谷出土の火葬骨蔵器 日本歴史 考古学論叢 p. 571~p. 585 吉川弘文館

仙台市教育委員会 1969 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並び に調査報告書

高橋一夫 1974 前内出窯址発掘調査報告書 埼玉県遺跡調 香会報告第24 集 埼玉県遺跡調査会

異三郎 1958 田辺の火葬墓について 田辺文化財2号

坪井良平 1976 日本仏教民俗基礎資料集成第1巻 元興寺 極楽坊 蔵骨器 p.85~p.88 中央公論美術出版

寺田真次 1939 上高瀬村発見の古銭 史蹟名勝天然記念物 調査報告第10 p.9-p.14

中川近礼 1898 斎甕に入りたるが古銭 考古学会雑誌第2 巻6号 p.215~p.217 考古学会

中原上宿遺跡調査団 1979 中原上宿遺跡調査概報 p. 14 平塚市中原上宿遺跡調査団

七尾市史編纂委員会 1970 七尾市史 資料編4巻 p.371 奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館 1977 古代人の いのり一土偶から墨書人面土器まで一

奈良国立博物館 1977 特別陳列 鎮壇具 パンフレット 奈良国立文化財研究所 1973 上ノ井手遺跡 奈良国立文化 財研究所年報 p. 45

奈良国立文化財研究所 1976 平城宮発掘調査報告₩ p. 143 奈良国立文化財研究所学報第 26 冊

西田直二郎,向居淳郎 1931 京都第1中学校跡出土寛平大 宝 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第12冊 p.91~ 92

波多野寿勝,八賀晋 1976 不破関の発掘調査 美濃不破関 の検討 古代を考える 9 p.33 古代を考える会

八王子市船田遺跡調査会編 1969 船田 東京都八王子市船 田遺跡における集落址の調査 I p. 23

- 服部敬史 1975 下寺田・要石遺跡 東京都八王子市下寺田 および要石遺跡の発掘調査 p. 118~p. 119 八王子市下寺 田遺跡調査会
- 浜田賢太郎,吉岡康暢 1965 隆平永宝を包蔵した土師質壺 の新例 石川県考古学会誌 9 号 石川県考古学会
- 福田健司 1978 南武蔵における奈良時代の土器編年とその 史的背景 考古学雑誌 64巻 3号 p. 29
- 藤森栄一 1930 隆平永宝を伴出せる蔵骨器 考古学1-2 p.88~p.96 東京考古学会
- 松井新一 1960 国分寺町内藤新田横穴古墳発掘調査報告 多摩考古1号 p. 28~p. 31 多摩考古学研究会
- 森郁夫 1971 密教の鎮壇具 奈良国立文化財研究所年報 p. 59 奈良国立文化財研究所
- 森郁夫 1972 密教による地鎮・領壇具の埋納について 仏 教芸術84
- 森郁夫 1976 奈良時代の鎮壇具埋納 奈良国立文化財研究 所研究論集Ⅲ p.61~p.73
- 矢島恭介 1960 興福寺金堂出土の鎮壇具 ミューゼアム 116号 p.19~p.23
- 和歌山県教育委員会 1971 吉田遺跡第2次調査機報 p.5 渡辺正気 1957 和銅銭副葬の一蔵骨器 九州考古学1 p.13 九州考古学会

出 土 石 器 一 覧 表

遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	Φεί (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	90200	J. 71: 5-3	1# A m 1"	No.
Catalog	The number	Species	Length	Width	Thickness		1] 円 / 反 / Striking	-	ユニット Unit	文 化 層	接合番号 The_number	備考
Number 1	of individual	植先形尖頭器	47		LOS IS	Weight	Angle	Grid	N mber	Layer	The number of Connected Material	
2	A-060	相兀心天與ि	(29)	13	5.5 7	5以下		20, 18		第4文化層		Pl. 1
3	A-063	,,	30.5	2000	5.5	5以下		17, 12		"	-	,,,
4	T-013	"	24.5	22	9.5	5		06, 18		"		,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
5	A-061	,,	30.5	20	2 301	5		20, 12		W.		,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
6	A-064	,,	53	17 .5	7.5	5		25, 13	()(<i>w</i>
7	A-004			29	17.5	42		16, 18		"		"
1100		# 槍先形尖頭	102	24 .5	9.5	26	110	11, 17	U-1	"		,,,
9	A-008	器作出碎片	14.5	13 .5	35	5以下	116	12, 18	"	*		"
	"	"	15	17 .5	25	5以下	105	"	"	"		"
10	,,		17	12	15	5以下	105	"	"	"		"
11		"	18	11	25	5以下			"	"		,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
12	, occ	"	13.5	7.5	20	5以下		II.	"	"		"
13	A-066	制片	50	117.5	13	70	119	18, 16	10000000	"		"
14	A-005	ある剝片	92.5	72 . 5	90	71	105	12, 18	U-1	"		"
15	SH-071	サイフ形石器使用痕の	144	53	23	173		16, 09	U-5	第3文化層		Pl. 2
16 - a	A-058	ある剝片	(52.5)	59	22	89	121	21, 12		"	012	"
- b	"	"	(28)	58	20	40		22, 13	U-11	"	"	
	, ,,,,,	"	(76)	45	16	60		21, 11	Tagging w	"	"	"
17 - a	A - 059	ナイフ形石器	(52)	30.5	13	15		14, 11	U-4	"	098	Pl. 3
-b	1. 1.5	"	(58)	32	15.5	33		14, 10	U-4	"	"	"
18	表 採	"	48.5	15	8	5	116.5	_	-	: #		"
19	C-010	,,	16	12 .5	8	5以下	106	16, 09	U-5	"		
20	O-009	.00	(22)	20	5.5	5.5	121.5	24, 13	U-12	"		И
21	O-022		36	19	8	6	117.5	15, 10	U-5	и		"
22 - a	C-039	砕 片	(29)	13	8	5以下	112	11, 09	U-3	и	084	"
-b	"	ナイフ形石器	(32.5)	25	10	10	108	10, 09	U-3	2 N	"	"
23	CSH-051	.#	(36)	30 . 5	7 - 5	9	104	08, 09	U-2	H		"
24	C-001	"	(18)	17.5	6	5以下		16, 09	U-5			"
25	O-023	"	(17)	13 .5	6	5以下		20, 12	U-7			"
26	T-003	,,	39	21 .5	85	5以下	116	11, 13	U-17	r		"
27	SA-001	,,	31.5	19 .6	9-5	5	117	18, 11	U-7	"		"
28	SH-008	"	56.5	30.5	10.5	15	112	21, 18		n		"
29	CSH-004	"	36	18	6.5	5以下		27, 11	U-13	"		"
30	CSH-053	"	31	15	6	5以下	116	19, 13	U-8	"		"
31	SH-066	"	39	21.5	9	8		21, 11		n		Pl. 4
32	O-010	"	(23.5)	18	6	5以下		25, 13	U-12	"		"
33 - a	A-028	"	(19)	16	10	5		14, 10	U-4	и	036	n
-b	"	"	(27)	23	12.5	10	116	14, 10	U-4	"	<i>_"</i> "	"
34	CSH-049	n	33.5	23.5	10.5	9	106	27, 11	U-13	"		"
35	SA-001	"	(35)	26	13	13	106	10, 9	U-3	"		"
36	SH-060	n	14 -	33	7.5	5以下	122	27, 12	U-14			"
37	C-011	"	26.5	37	9	5		27, 12	U-14	"		н
38	C-066	"	41	22	7	6	109	10, 9	U-3	"		"
39	C-027	"	27	16	4	5		19, 9	U-6	· W		"
40	C-055	"	26.5	25.5	8	5	83	27, 12	U-14	: 11		"
41	O-010	尖頭状石器	48	29	11.5	10		27, 13	U-14	"		· II
42	·O-008	"	12	41	8-5	5		17, 16	U-9	"		"
43	A-001	ナイフ形石器	28.5	15	8.5	5		10, 10	U-3	"		"
44	C-063	"	31	17.5	3.5	5以下	105	19, 10	U-7	"		"
45	C-056	"	26	12.5	5	5以下	108	6, 18	U-15	"		"

出土石器一覧表

遺物番号	母岩別番号	器 種	長さ(mm)	ФШ (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	Mo. 2
Catalog Number	The number of individual	Speciles	Length	Width	Thickness	Jan 1997 1997 1997 1997 1997 1997 1997 199	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture	The number of Connected Material	(55)
46	SH-061	ナイフ形石器	(31)	16.5	7	6	104	20, 13	U -8	Layer 第3文化層	Material	Pl. 4
47	SH-007	"	(27)	11	6.5	5以下	23%	16, 13		"		Pl. 5
48	C-003	"	20	15.5	6	5以下		6, 18	U -15	H.		"
49	C-003	"	29	61.5	7	5以下		18, 11	U -7	"		,,,
50	C-010	n.	27	26.5	7	9		11, 09	U -3	"		,,
51	O-001	"	25.5	13.5	9	5		19, 12		"		"
52	O-014	"	27	17	9	5		22, 11	U -11	"		"
53	表 採	"	25.5	14	9.5	5				"		"
54	表 採	"	17	44	4	5				"	094	"
55-a	O-031	ナイフ形石器作出砕片	11	13.5	4	5以下		26, 17	U -18	"	"	"
-b	"	ナイフ形石器	29	16	11	5		26, 17	"	"		"
56	O-003	"	18.5	29.5	9	5	128.5	23, 13	U -11	"		"
57	O-028	"	23.5	25	12	8		6, 13	U -16	"		"
58	C-011	"	15	30	5	5以下	118	28, 12	U -14	"		"
59	C-025	"	(18)	29	7	5以下		10, 10	U -3	,,		"
60	C-008	"	29	19.5	9	5以下		10, 9	U -3	,,	085	"
61	A-003	n	(57.5)	37	17	25	88	25, 13	U -12	"	193	,,
62	CSH-003	"	59.5	33	13	21		26, 11	U -13	"	063	"
63-a	C-014	"	(31)	22.5	19	14		10, 09	U -3	"	067	"
- b	"	,,	(38.5)	22	11	6		,,	,,	ų	"	,
64	O-024	台形様石器	14.5	25	8	5		22, 12	U -11	"		Pl. 6
65-a	O-001	ナイフ形石器	19	(16)	5	5以下		22, 18	U -10	"	093	,,
-b	"	,,	19	(10.5)	15.5	5以下		22, 18	"	,,	"	"
-c	"	,,	30	(20)	7	5以下		22, 18	"	"	"	,,
66	O-004	,,	(39)	22	9	7		22, 13	U -11	"		"
67	O-015	"	(32)	17.5	7	5以下		15, 09	U -3	"		
68	CSH-050	影器	52.5	30	10.5	18		26, 13		<i>n</i>		78
69 - a	CSH-018	ナイフ形石器	(33)	30.5	27.5	16		13, 10	U -4	,,	092	"
-b	,,	"	(25.5)	34.5	9.5	8	4	17, 12	"	"	<i>"</i>	<i>w</i>
70	A-003	尖頭状石器	(51)	28	27.5	25	123	27, 13	U -14	"		,,
71	SH-009	打製石斧	(12.5)	(42.5)	(14.5)	10	120	25, 13	U -12	,,		'n
72	A-033	磔 器	104	69	43	409		13, 09	U -5	"		,,
73	O-002	掻 器	26	43.5	28	15		28, 11	U -13	"		Pl. 7
74	O-019	"	44	32	11	12	109	25, 12	0 10	"		"
75	C-012	,,	27	44	11	15		10, 09	U -3	"		"
76	SH-062	,,	37	44	11	17	110	15, 09	U -5	"		,,
77	C-016	,, .	45	(31)	10	15		17, 08	U -5	"	-	,
78	C-059	"	(42)	29	18	22		27, 10	U -13	"	-	"
79	A-003	"	43.5	29	12	18	121	25, 13	U -12	,,		,,
80	SA-003	,,	74	40	24	71	105	11, 10	U -3	"		<i>"</i>
81	O-019	"	44	32	11	12	Januar (17)	25, 12	U -12	,,		Pl. 8
82	C-038	,,	26	39	11.5	10	115	10, 09	U -3	"		// // // // // // // // // // // // //
83	C-003	"	35.5	30.5	5.5	6	115	12, 09	U -3	"		"
84	C-006	,,	27.5	24.5	10	10	110	10, 08	U -3	"		"
85	C-001	"	19.5	28	5.5	5		10, 09	U -3	"		"
86	C-055	"	20.5	27.5	8.5	5		11, 09	U -3	"		"
87	C-003	"	31.5	20	15	6	111	11, 09	U -3	"		"
88	C-027	"	40	24	7	8	116	17, 11	U -7	"		,,
89	O-004	,,	26	22.5	7	5	110	25, 12	U -12	"		
	5 001		20	25.0	1	•		20, 12	0 12			"

遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	hii (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	備考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	A remarks colum
91	O-003	掻 器	28	25	7	6		23, 12	U-11	第3文化層	Marchar	Pl.8
92	C-012	"	32	32 °	11	15	94	10, 09	U-3	"		"
93	C-005	,,	31	29	17	16	118	18, 11	U-7	,,		"
94	O-025	使用痕のある剝片	82	31.5	10	20	104	21, 17		"		Pl.9
95	O-003	剝 片	32	19	6.5	5	129	20, 15	U-8	,,		"
96	O-002	"	(28)	27.5	9.5	5		26, 11	U-13	"		,,
97	O-004	"	(20.5)	18	3.5	5		24, 11	0.10	"		,,
98	O-001	,,	37.5	29	10	10		22, 18	U-10	"		,,
99	O-015	,,	(35)	31	10	9		15, 10	U-5	"		"
100	O-008	,,	28.5	34	10.5	10	115	25, 13	U-12	,,		"
101	O-008	,,	41	34.5	95	10	11.0	18, 17	U-9	,,		
102	O-016		(45.5)	29	1 22 -				0-9			"
	56 36 5	"			16.5	20		27 , 17		,	_	,,,
103	O-016	" ++	29.5	38	18.5	22		27 , 17	11.10	,		"
104	O-002	石 核	26 .	33	17	12		27, 11	U-13	"		
105	O-008	"	30	23.5	13	10 -		27 , 12	U-14	"		,,
106	O-029	"	48.5	32 . 5	20.5	29		15, 09	U-5	"	i i	<i>"</i>
107	A-055	剝 片 二次加工痕	94 . 5	53 .*5	10	59		20, 12	U-11	"		Pl.10
108	SH-058	のある剝片	(81.5)	24	17	40		18, 09	U-6	"		"
109	A-026	剝片	57	30.5	11	21	111	16, 17	U - 9	"		#
110	SH-018	(使用痕の	72.5	40	21.5	65	107	19, 17		"		"
111	C-046	ある剝片	53	35	15	30	114	22, 13	U-11	"		
112	A-026	剝片	108	(51)	16	95	125	16, 17	U-9	n		"
113	A-053	"	69	(52)	15	55	104	12, 10	U-4	"		Pl.11
114	CSH-047	"	80.5	31	21.5	44	121	11, 12	U-17	"		n .
115	SH-059	二次加工痕 のある剝片	(60)	29	10.5	24		16, 08	U -5	n n	_	"
116	SH-025	剃片	(56.5)	26	17.5	23	11 5	11, 12		"		"
117	CSH-001	"	51.5	27	9	16	116	25, 13	U-12	n		n.
118	CSH-001	使用痕の ある剝片	(82)	32 . 5	10	19		23, 12	U-11	u.		#
119	A-056	"	76	15	15	15	127	17, 14		"		Pl.12
120	CSH-003	"	66	22	10	15	105	28, 13	U-14	п		"
121	CSH-039	ii	48.5	21	9	6	120	24, 12	U-11	ü		"
122	CSH-003	二次加工痕 のある剝片	57.5	33	11.5	20	106	25, 13	U-12	"		"
123	A-056	剝片	44	14.5	8	5		16, 13		"		"
124	SH-025	(#	63	36.5	14.5	22	111	12, 08		"		Pl.12
125	C-006	#	45	19.5	8.5	9	-V.	06, 13	U-16	"		"
126	SH-015) # \$	52.5	27	9	15	117	24, 12	U-12	, H		"
127	C-002	n	43	22	95	10		11, 9	U-3	"		"
128	T-002	打面再生剝片	59	19	11	11	119	18, 13	U-8	н		"
129	T-005	"	59.5	23	22	25	113	20, 19		"		"
130	T-008	使用痕のある剝片	28	67	11.5	15	107	11, 13	U-17	"		Pl.13
131	T-006	剝片	37 . 5	23	65	7	117 5	11, 13	U-17			"
132	SH-052	"	42	27 .5	11	15	114.5	17, 11	U-7	n		"
133	T-012	"	55.5	38	8	17	118	27, 11	U-13	"	Sé.	"
134	CSH-051	,,	50	25	12	16	117	23, 13	U-11	,,		и
135	SH-008	"	58	31	11.5	24	9 9	25, 13	U-12	, n		11
136	SH-050	"	(65)	26	10	15		22, 18	U-10	"		#
137	SASH-003	"	69.5	31	9.5	17.5	11 4	27, 17		"		,,
138	SH-022	"	60	33.5	7	19	103	16, 09	U-5	,,		"
139	A-009	"	28	59	10.5	15		23, 13	U-11	,,		Pl.14
140	CSH-004	"	32	17.5	4.5	5以下	115	27 , 12	U-14	"		,,

遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	中最 (mm)	厚さ(mm)	舌里/\	打伤/ 哈\	ш д гл	9 - 1	-t- 11. W	to A of the	No.
直物番号 Catalog	The number	The same of the sa		TO 10 100000	000000 ro	重量(g)	打角(度) Striking	出土区	ユニット Unit	文 化 層 Culture	接合番号 The number	備考
Number	of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Angle	Grid	Number	Layer	The number of Connected Material	
141	SH-008	剝片	25	41.5	6	10	06(0)	21, 18	770000	第3文化層		Pl. 14
142	SA-001	"	(30)	28.5	8	5	111	18, 11	U-7	"		"
143	CSH-051	"	42.5	12	3.5	5以下	118	24, 12	U-11	"		"
144	C-031	"	(40)	27.5	12.5	20	¥14	21, 18		"		" "
145	SA-001	"	44.5	29	7	9	75	10, 09	U-3			· ·
146	CSH-004	"	43	.13	3.5	5以下	121	27, 11	U-13	"		"
147	CSH-001	"	42.5	23	9.5	15	107	27, 11	U-13	"		"
148	CSH-029	"	(26)	22	5.5	5以下		17, 08	U-5	"		"
149	CSH-001	"	46	17	6	5	111	24, 12	U-11	и		"
150	A-025	"	(59)	36	12	20		19, 14	U-8	<i>n</i>		"
151	CSH-010	使用痕の ある剝片	56.5	43.5	11	22	111	16, 17	U-9	"		Pl.15
152	C-009	二次加工痕 のある剝片	47	37	11.5	20	121	24, 13	U-12	, "		使用痕が観察され
153	CSH-001	剝 片	37	37.5	10	20	119.5	24, 13	U-11	"		Pl.15
154	A-022	,,,	48	63	13	55	123	28, 12		u		"
155	C-009	. "	35	32.5	10.5	13	108	25, 13	U-12	"		И.
156	T-011	使用痕の ある剝片	62	72	11.5	50.2	109	17, 17	U-9	tr		,,
157	SH-028	使用痕の ある剝片	61	50	10	35	108	18, 19		"		Pl.16
158	CSH-027	"	51.5	36.5	6	17	108	17, 08	U-5	"		, ii
159	SH-031	"	61	64.5	13	59	108	21, 18		n		"
160	SH-004	"	36	40	13	20	122	24, 13	U-11	"		,,
161	C-017	"	42	44.5	8	16	100	20, 13	U-8	w.		
162	C-009	"	55.5	42	23.5	60	98	24, 13	U-12	"		en.
163	SH-018	"	46.5	60	6.5	23		19, 16		"		· H
164	SH-043	"	35.5	36.5	10	14	131	19, 13	U-8	,,		w.
165	SH-004	"	32	57	11	22	109	25, 13	U-12	"		Pl. 17
166	A-052	"	37	40.7	8	10	99	22, 17	U-10	"		"
167	CSH-031	"	(43)	54.5	16.5	30	114	18, 09	U-6	"	-	"
168	SH-040	"	35.5	33	7.5	6		27, 12	U-14	"		, n
169	SH-032	"	27.5	37.5	6	9	113. 5	16, 08	U-5	"		,,
170	A-048	"	38	50	8.5	12	118	23, 13	U-11	и	-	9#W
171	A-003	,,	46	41	12.5	29	113	25, 13	U-12	"		· ·
172	SH-008	,,	(32)	47	3.5	10		21, 18	207.0	"		
173	A-020	"	(63)	43	17	45		22, 11		"		Pl.18
174	A-023	"	15	33	3	5以下		17, 15	U-9	"	-	"
175	CSH-026	"	32	26	7	5	103	17, 11	U-7	"		,,
176	C-006	石 核	45.5	25	13.5	21		10, 09	U-3	,,		"
177	CSH-019	剃片	26	32	8.5	5		24, 13	U-11	,,		"
178	CSH-035	"	32	44	11	22		19, 17	(#.(##	"		<u>"</u>
179	A-013	,,	35	32	10	10		18, 16	U-9	"		"
179	C-055	,,	14.5	35	6.5	5	98	10, 10	U-3	"	088	"
170 181-a	SH-026	<i>"</i> .	16	(27.5)	6.5	5以下		10, 10	U-3	"	040	"
	J11-020	"	21	West Walk	12	5以下		11, 09	U-3	"	"	
-b	SASH-007	"		(17)	9	9		16, 11	U-5			"
182	0 0000	7 核	(37.5)	27 45	21	60			U-5	"		"
183	A-013	剝 片	53	50.00	8.5	8	115	07, 09	U-Z	"		
184	A -022	利 力	36	24			115	21, 17	11-11			// DI 10
185	A-009		42.5	69	15	40	103	23, 13	U-11	"		Pl.19
186	A-054	"	36.5	54	8	25	103	26, 12	U-13	"		"
187	SH-056	"	45	53.5	15	22	104	25, 13	U-12	<i>II</i> :		"
188	C-005	"	35	37	9.5	11	118	18, 11	U-7	"		"
189	T-004	"	38.5	77	12.5	28	121	17, 13		"		и

出 土 石 器 一 覧 表

遺物番号	母岩別番号	器 種	長さ(mm)	申論 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	備考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	A remarks colum
190	SH-051	剝片	53	36.5	6	15		29, 12		第3文化層		Pl.19
191	CSH-014	"	59	42	8	15	112	07, 18	U-15	"		"
192	CSH-037	"	29	21	55	6	106	25, 13	U-12	"		Pl-20
193	SASH-002	"	34	29	9	5	104	24, 13	U-12	"		"
194	C-006	"	25	25.5	10	5	122	10, 09	U-3	,,		"
195	CSH-042	"	(26)	33	12	10	109	10, 09	U-3	"		"
196	C-006	"	32	22.5	13.5	10		11, 09	U-3	"		"
197	C-006	"	(19)	17.5	5	5以下		10, 09	U-3	"		"
198	C-006	"	24	31.5	7	5		19, 09	U-6	"		n
199	C-040	二次加工痕・ のある剝片:	70	47	23	90		24, 11	U-11	"		"
200	CSH-001	"	(30.5)	25	13	10		26, 11	U-13	"		"
201	C-006	"	38	29	13	15		10, 09	U-3	"		"
202	C-029	,,	37	31.5	11	10	51	28, 11	U-13	,,		
203	SH-030	,,	78	56	21	70	121	07, 09	U-2	"		"
204	SH-010	,,	55	43	15.5	30	92	12, 10	U-4	"		Pl. 21
205	SH-010	"	25.5	35	10	7	112	18, 11	U-7	"		"
206	SH-001	,,	42.5	45.5	12	21	128	25, 13	U-12	"	¥	"
207	A-039	"	57.5	40	12.5	30	117	25, 12	U-12	"		"
208	A-029	"	50.5	44.5	10.5	27	24/3(40)	11, 10	U-3	"		,,
209	CSH-030	"	37	49	13	20	60	24, 13	U-11	"		"
210	SH-022	"	(52)	32	14	26		16, 09	U-5	"		"
211	SH -004	使用痕のある剝片	32	60.5	14.5	35	137	24, 13	U-12	"		"
212	SA-012	機 器	140	101	49	835		27, 17		u		Pl. 22
213	SA-004	"	117	77	66	847		24, 13	U-12	"		"
214	A-013	剝片	(61)	61	22	80		06, 12	U-16	"		Pl.23
215	A-032	石 核	70	62.5	25.5	114		20, 17		"		,,
216	P-003	"	82	72	33	240		15, 08	U-5	.,		"
217	P-002	"	94	80	39	335		28, 12	U-14	"		"
218	CSH-045	"	97	53.5	43.5	460		26, 11	U-13	"		Pl.24
219	CSH-046	"	76.5	56	46	345		24, 13	U-12	,,		"
220	CSH-016	"	77.5	51.5	40	275		19, 14	U-8	,,		"
221	SH-021	"	67	48	36	141		06, 08	U-2	"		Pl. 25
222	C-016	"	50	54	33.5	105		16, 08	U-5	,,	049	"
223	SH-029	"	44.5	59.5	45	115		10, 10	U-3	"	0.000	,,
224	CSH-044	,,	69	54.5	55	265		11, 12	U-17	"		"
225	CSH-034	"	49.5	45.5	25	60		26, 18	9916/9040	п		Pl. 26
226	C-033	"	55	47	24	70		27, 11	U-12	,,		"
227	C-018	"	30.5	34	36.5	35		28, 12	U-14	"		"
228	SH-027	"	68.5	73	47	265	-	18, 15		"		"
229	CSH-025	"	80.5	46	32	90		25, 11		"		Pl. 27
230	CSH-040	打面再生剝片	52	26	22	32		14, 09	U-4	,,		"
231	C-027	石 核	32	35	42	65		24, 13	U-12	"		"
232	C-036	"	78.5	33.5	24.5	55	136	14, 09	U-3	n		,
233	CSH-033	"	52.5	38	23.5	45	5,40,50	18, 11	U-7	n.		"
234	SA-008	叩き石	82	47	24	133		28, 12	U-14	"		Pl. 28
Sweenen 19	SH-067	m e 和	92.5	41.5	34	210	_	11, 12	U-17	,,		P1. 20
235	SA-007	"	69.5	41.5	24	91		18, 19	U-6	,,		"
236	5-200.00 DE005.70		53	29	17.5	42		17, 18	0.0	"		7.2
237	SA-006	"			35.50.00			17, 18	U-9			Pl. 29
238	SA-010		107	41.5	44.5	335		17, 16	U-9	"		

出 土 石 器 一 覧 表

遺物番号	母岩別番号	器	種	長さ(mm)	申篇 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	No. (
Catalog	The number of individual		cies	Length	Width	Thickness	Weight	Striking	Grid	Unit	Culture	The number of Connected Material	10.000
Number 240	of individual SA-002	ण है		52	44	32	80	Angle	22, 11	Number U-11	Layer 第3文化層	Material	NAMES AND ADDRESS OF THE PARTY
241-a	SH-069	15 (0)	片	64	49.5	17.5	70	112	17, 16	U-9	州 3 人儿省	027	Pl. 29 Pl. 31
9		剝	No.	138				112	2000	(#131/es-)			
-b	" C 002	石	核	Value	93.5	68	715	110.5	17, 16	U-9	"	"	,, as
242 -b	C-023	剝	片	49	28	11	15	110.5	18, 15		" .	029	Pl. 33
-c	"	"		59.5	30.5	19.5	40	100	18, 15		""	"	"
-d	"	"		4.7	30.5	13.5	25	109	18, 15		"	"	Pl. 34
-е	"	石	核	72	50	28	110		18, 15		"	"	"
-b'	. "	剝	片	47	28.5	15	20	100	17, 17	U-9	"	"	Pl. 35
-c	"	石	核	86.5	53	31.5	240		18, 15	2000	"	"	"
243-a	CSH-012	剝	片	32	33	8.5	10		27, 12	U-14	"	031	Pl. 36
-b	"	. "	0	37	37.5	15.5	21		25, 12		"	"	"
-c	"	石	核	35	16	12	6		26, 11	U-13	"	"	"
244 - a	C-018	剶	片	205	19	7.5	5	125	27, 12	U-14	"	069	W2
-b	"	石	核	21.5	29.5	26	20		28, 13	U-14	"		
245-a	CHS-006	彫	器	35.5	54	8	16	116	11, 10	U-3	"	025	Pl.37
-b	"	剝	片	58.5	38	20.5	35	114	12, 10	U-3	"	"	"
-c	"	,,,	NE .	35	30	11	11	82	11, 10	U-3	"	"	"
-d	"	"		61	41	22	49	132	10, 09	U-3	"	"	,
246 -a	CSH-005	"		21	15	3.5	5以下		18, 13		, ,	026	Pl. 38
-b	"	"		29	23.5	7.5	6	107	19, 14	U-8	"	"	"
-с	"	n		36	40	13	15		19, 14	U-8	""	<i>y</i>	<i>'</i>
-d	"	"		41	36	11.5	16	131	19, 14	U-8	38116	"	"
-е	"	石	核	42.5	66	18.5	59		19, 14	U-8	"	,,	"
247 - a	C-032	剝	片	11.5	7.5	8	5以下		11, 09	U-3	,,	046	"
-b	,,	石	核	65	38.5	39	105		10, 09	U-3	,,	,,	"
-a	,,	剝	片	31	21	7.5	5		10, 09	U-3	"	,,	,,
248-a	SH-003	"	-	48	35	14	23	109	10, 10	U-3	"	047	Pl. 39
-ь	"	石	核	46	46	44.5	85		13, 08		,,	"	"
249-a	C-026	剝	片	25.5	44	18.5	15		12, 12	U-17	,,	045	"
-b	"	石	核	54.5	34	47	92		12, 12	U-17	"	"	"
250-a	CSH-002	剝	片	39	30	10	15	104.5	10, 08	U-3	"	016	Pl. 40
CORDAN AND		455-52	- 24.0	:=(50/				104.3		25-2 (2)			r 1. 40
-b	"	石	核	74.5	34.5	33	66		10, 10	U-3	"	"	"
-a'	, , , , ,	"	_	74.5	44.5	39	145		10, 09	U-3	"	"	
251 -a	A-015	剝	片	27	51.5	11	15	106	22, 13	U-11	"	030	Pl. 41
-b	"	石	核	68	53.5	34	92		22, 13	U-11	"	"	"
-a'	"	刹	片	47.5	31	14	20	131	22, 13	U-11	"	"	"
252 - a	A-002	Н		26	33	12	14		17, 16	U-9	"	048	n
-Ь	"	n		21.5	40.5	8	5	128	17, 17	U-9	"	"	И
-c	#	石	核	47	29	17.5	25		18, 17	U-9	"	".	∃ <i>H</i> .
253 - a	SH-010	刹	片	37	48	7	10	121	12, 10	U-3	"	004	Pl. 42
-b	"	石	核	40.5	62	20	51		12, 10	U-3	"	"	.ii.
254 -a	C-026	剝	片	23	16.5	6.5	5以下		27, 12	U-12	"	051	"
-b	"	石	核	55	40	31.5	69		29, 12	U-13	"	"	"
255 -a	SH-019	刹	片	36	26.5	23	15		27, 13	U-14	"	018	"
-b	"	石	核	43	76	51	190		27, 13	U-14	"	"	"
256 - a	C-009	剝	片	39.5	64.5	31	45	88	24, 13	U-12	"	039	Pl. 43
-b	"	"		30.5	39	13	15	113	25, 13	U-12	"	"	.W
-c	"	"		27	28	3.5	5	103	24, 13	U-12	"	"	И
-d	"	"		29	21	55	6	121	25, 13	U-12	"	"	*(#)
-е	"	"	-	40	57.5	13	30	121	25, 13	U-12	p	"	Pl. 44

出 土 石 器 一 覧 表

遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	ф (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	備考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	A remarks column
256-f	C-009	剝片	57.5	33	11.5	20	116	25,13	U-12	n Layer	Materia:	Pl. 44
-f'	,,	"	56	57	17	60	102	25,13	U-12	"	"	"
- g	"	"	42.5	54.5	28	35		24,13	U-12	,,	"	,,
257 - a	C-009	"	42.5	38.5	11	21	110	24,12	U-12	"	024	"
- b	"	"	58	47.5	23	62	108	24,13	U-12	"	"	"
258-a	CSH-003	"	50.5	31	-7	15	104	27, 11	U-13	n,	020	P1.45
-b	"	"	34	44	15	20	109.5	27,12	U-14	. II		
-c	"	"	46.5	25	15.5	10		27,11	U-13	(<i>II</i>)	"	
-d	,,	石 核	32	32.5	16	24		28,13	U-14	п	,,	
259 - a	CSH-002	剝片	47	33	26	20		10,10	U-3	. "	060	,
-Ь	"	"	60.5	35.5	24	41	120.5	11,09	U-3	4	п	"
260-a	CSH-003	"	37	37.5	15.5	21	121	25,12			063	P1, 46
- b	"	"	59.5	33	13	21	122	26,11	U-13	#	<i>y</i>	,,
-с	"	"	32.5	53	12.5	20	110.5	24,13	U-12	. #	"	-
261-a	CSH-003	石 核	48	44	25	45		26,11		ж	082	· · ·
-a'	"	剝片	35.5	17.5	7	6	114	27,11	U-13	"	"	"
-b	"	"	32.5	53	12.5	20	121	25,13	U-12	,,	,,	"
262-a	A-010	使用痕の	54	21	16	16	127	07,08	U-2	,,	023	P1.47
-b	"	ある剝片	81	27	8	21	115	06,08	U-2	"	"	,,
-c	**	"	81.5	32	11	40	111	10,10	U-2	,,	"	ÿ
-d	"	剝片	61	40	16	35		06,08	U-2	"	,,	<i>ii</i>
263-a	C-030	"	51	26	12	14	121	07,13	U-16	"	022	P1.48
-b	,,	"	43	27.5	9.5	10	119	06,12	U-16	#	"	"
- c	"	n	51	28	14	17	110	07,12	U-16	"	"	"
264 - a	C-005	"	24	20.5	9	5	121	18,11	U-7	"	042	"
-b	,,	,,	35	16.5	12.5	5 以下	116	200 - 500	U-7	"	"	"
-c	"	ii	35	31	10	9	110	18,10	U-5	w	"	"
-d	"	"	33	20.5	12	11	106	18,11	3000 300	"	"	
265 - a	CSH-001	,,	54.5	28	Ĩ1	15	135	18,11	U-7	"	041	,,
-b	"	"	33.5	29.5	4.5	6	116	20,10	77.77	<i>"</i>	"	u.
266-a	SH-001	"	36.5	20	12.5	5	110	22,12 16,09	U-11 U-5	"	013	P1.49
-b	3H-001 "	"	40.5	24	9.5	10	110	16,09		7/	"	"
266-c	"	"	39.5	25.5	11.5	11	122	une come	U-5	,	,,	"
267 - a	A-003	"	39	33.5	4.5	11	117	16,09	U-5	,,	068	,,
-b	A-003	"	32	29.5	11	15	114	24,13	U-12	,,	"	,
	C-031	"	(19.5)	16.5	5	5 以下	114	21,13	U-11	n n	090	"
268 - a - b	U-031 "	"	(15.5)	11.5	2.5	5以下		18,19		'n	,,	
	A-024	"	(32)	32		18		18,19		1/2	005	
269 - a	H-024	"	(19.5)	34.5	13 7	5		17,08	U-5	"	"	,,
- b		二次加工痕	(33)					17,08	U-5		017	
270-a	T-001	のある剝片	(33)	38	16	25		25,13	U-12	"	017	P1.50
-b	"	"	1236.1257	0.000	13	13	=	24,13	U-12	"	"	"
-c	"		(33)	32.5	14.5	15		23,12	U-11	"		
-d		# PL	(62)	50.5	17.5	50 5 以下		20,12			008	,,
271-a	A-012	剝片	18.5	17	3	5 以下	00	19,11	U-7		008	// DI 51
- b	"	"	24.5	40	10.5	10	98	19,11	U-7	"	*	P1.51
- c	"	"	33.5	44	9	12	98	18,11	U-7	"	"	u
- d	n	(本田痘の	43	28	8	10	103	19,11	U-7	"	"	"
-е	,,,	使用痕の ある剝片	40.5	34	8	12	103	18,19	U-6	. "	"	n.
-f	"	剝片	24	15	5	5以下		19,11	U-7	"	"	"
272-a	SH-001	"	42	14.5	7	5以下	9	25,13	U-12	"	034	Pl. 52

出土石器一覧表

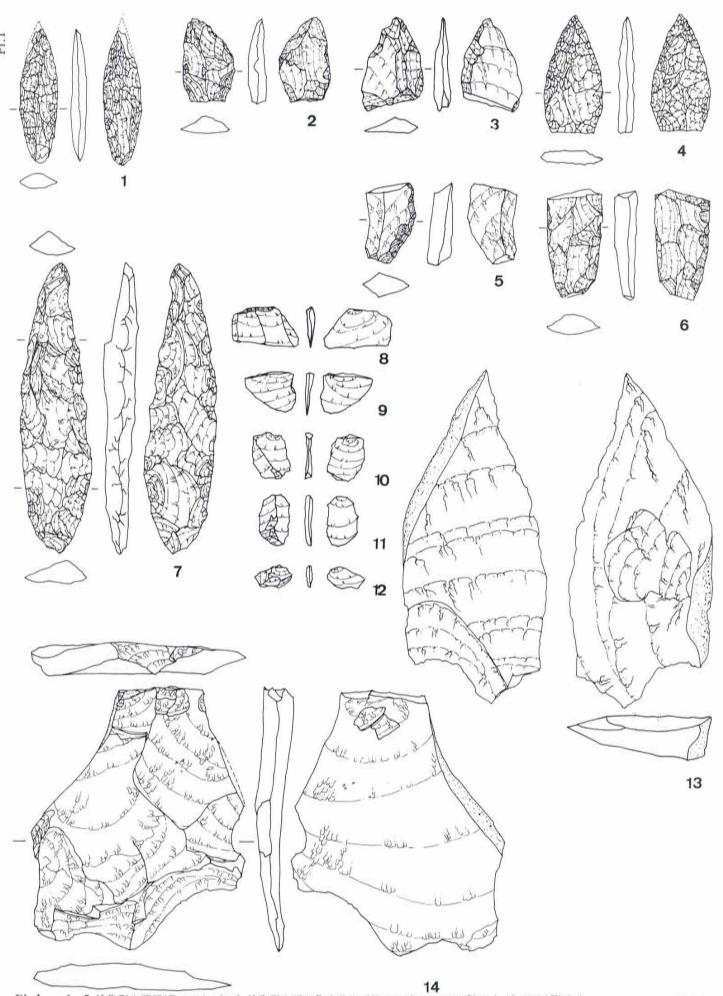
遺物番号	母岩別番号	器 種	長さ(mm)	中留 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	No. 備 考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	A remarks colum
272-b	SH-011	二次加工痕 のある剝片	71	46.5	20.5	80	Aligie	25,13	U-12	第3文化層	010	Pl . 52
273-a	CSH-017	剝 片	54.5	40	16	30	108	23,13	U-11	"	010	"
-b	"	石核	37.5	26	24.5	18		24,13	U-11	"	,,	"
274 - a	C-024	剝片	21	(25)	10.5	9	116	11,08	U-3	"	091	,,
-b	"	,,	32	23	6.5	9	120	11,08	U-3	,,	,,	,,
275-a	CSH-003	"	46	27	17	15		26,13	U-12	"	015	Pl . 53
-b	"	"	24	28	4	5以下	96.5	27,11	U-13	"	,	"
-c	"	"	35	49	8	11	104	28,12	U-14	"	"	"
276-a	CSH-003	"	43	23	13.5	12		24,13	U-12	n	071	"
-b	"	"	14	16.5	3.5	5以下	117	25,13	U-12	"	"	• "
-b'	"	"	50	34	24	26		27,11	U-13	"	,,	"
277 - a	CSH-003	"	23	26.5	7.5	5	123	27,11	U-13	"	079	Pl . 54
-b	"	,,	25.5	28	7.5	5	128	22,19		"	"	,,
278-a	C -022	"	32	28	7.5	6	106	18,11	U-7	"	064	<u>"</u>
-b	"	,,	32.5	15.5	5.5	5以下		18,12	U-7	"	"	"
279-a	SH-007	"	27	30.5	6.5	4	99	16,13	350000	"	081	"
-b	"	"	26.5	18.5	5.5	5以下	120	18,13		"	"	"
280 - a	CSH-011	,,,	24.5	(31.5)	15	10	(4.5.7)	24,13	U-11	"	035	
-b	// // // // // // // // // // // // //	,,	26	(37.5)	17.5	12		23,12	U-11	,,	"	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
281 - a	A - 006	,,	28	(20)	7	5		14,09	U-4	"	061	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
-b	"	"	24	(17.5)	6	5以下	126	13,09	U-4	"	"	"
282 - a	SH-020	,,	38	(46.5)	7.5	15	135.5	27,12	U-14	"	003	PI 55
-b	311 020 #	,,	30.5	38	13.5	10	109	28,13	U-14	"	."	"
283 - a	A - 003	使用痕の	32	(31)	5.5	10	100	25,13	U-12	"	028	"
-b	A 003	ある剝片 剝 片	37	(30)	15	15	92	24,13	U-12	"	"	"
-0.097	T-003	;kij /1	29.5	53	5	10	116	20,14	U-8	"	080	,,
284 - a - b	"	,,	33	34	7	5	109	26,12	0.0	,,	"	, ,
	C-022	,,	25.5	(31)	5	5	109.5	16,08	U-5	"	050	,,
285 - a -b	"	,,	41.5	(30)	9.5	10	100.0	16,08	U-5	"	"	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	SH-065	使用痕の	87	69	23	185	123	25,12	0.0	第2文化層		Pl . 56
286 -		ある剝片	71	33	12.5	67	114	29,13		# Z X IC/B	075	"
287 - a	A - 021	剝 片	90	35.5	23	100	103	29,13		"	"	
-b	SASH-006	"	50	21	11.5	20	116	13,08		"		Pl . 57
288	C-070	,,	19005 12	21.5	8.5	7	110	14,08		"		"
289	70-0 10-0-0		54.5	20-20-0		5	107			,,		,,
290	T-010	(使用痕の	115	23	7		WEAD.	16,08		"		"
291	CASH-008	ある剝片	115	34.5	16.5	74 129	115	30,11	U-20	第1文化層	001	"
292	SH-060	播 器 ナイフ形石器	65.5	80.5	24.5	5	117	24,09	U-23	弗工义化槽	001	
293	C-081	IN 65 PROGRAMMA	39.5	20		115		24,09	U-23	"		
294	SA-015	礫 器	63	51.5.	24.5 13.5	21	101	07,07	U-19	"		"
295	C-100	ナイフ形石器	56.5				101	23,09	U-19	"		Pl . 58
296	P-005	打製石斧	73	48.5	18	80			U-23			PI . 58
297	SH-078	打製石斧 作出砕片	27	39	4	5 5以下		25,10 17,07	U-23	"	101	"
298-a	T-014	# Act that To the	20	19	1.5	LEOSECCIII		0	1.00 1.0000		101	
-b	"	打製石斧	42	40	12	24		17,07	U-22	"	"	
299	T-014	# ##### \$6	21	31	10.5	5		17,07	U-22	"		
300	T-014	打製石斧 作出砕片	25.5	33.5	6	4		17,07	U-22	"	Lo anticonocio	"
301 - a	T-014	"	11	19	3	5以下		17,07	U-22	"	102	
-Ъ	"	"	22.5	31.5	6	5以下		17,08	U-22	"	"	"
302	T-014	"	44	21	11	9		17,07	U-22	"		"
303	T-014	"	19	23.5	2	5以下		17,08	U-22	"		"

出土石器一覧表

遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	ф <u>н</u> і (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	備考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	
304	T-014	打製石斧 作出砕片	15	32.5	6	5以下		17, 07	U-22	第1文化層	Material	P1.58
305	T-014	"	22	42	6	. 9		12, 07	U-20	"		"
306	T-014	"	30	43	6.5	9		17, 07	U-22	,,		"
307	A-067	剝片	63.5	60	14	55	115	22, 10	U-23	"		P1.59
308	A-071	,,	57.5	57.5	14	56	99	12, 07	U-20	"		"
309	A-070	使用痕のある剝片	85	85	15	74		11, 07	U-20	п		"
310	C-078	剝片	94	65	17	131	68	07, 07	U-19	,,		Pl. 60
311	C-071	"	50	22	10	10	108	10, 07	U-20	,,		,,
312	SH-077	"	77.5	25	11	15	108	13, 08	U-21	,,		,,
313	CSH-055	"	104	33	22	60	98	25, 10	U-23	"		,,
314	SH-085	使用痕のある剝片	70	38	15	42.5	118	16, 07	U-22	"	10	"
315	SH-082	剝片	54.5	27	10	15	116	24, 09	U-23	"		Pl.61
316	C-083	"	31	20 .	12	8	121	13, 08	U-21	n		"
317	C-083	"	36	22.5	8.5	9	115	12, 08	U-20	"		"
318	SH-081	ıı .	41	31.5	8	11	99	16, 07	U-22	"	(1)	,,
319	C-072	и	30.5	22	4.5	5以下	103	14, 08	U-21	"		"
320	A-068	"	49	29	12	16	104	06, 07	U-19	и		ï,
321	A-069	,,	56	33	18	35	135	07, 08	U-19	,,		, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
322	C-072	"	22	39	11.5	10	114	17, 07	U-22	,,		"
323	C-075	п	43.5	24.5	13	13	111	14, 08	U-21	,,		'n
324	C-104	и	48	32	11.5	15	103	10, 07	U-20	n		n.
325	SH-073	n	61	48.5	14.5	44	110	27, 10	U-23	,,		
326	C-103	"	45	30	24.5	38	91	17, 07	U-22	"		P1.62
327	C-105	"	(26.5)	45	11.5	10		11, 07	U-20	11		"
328	C-101	"	(24.5)	28.5	6	5		22, 09	U-23	7.00		,,
329	SH-073	"	28.5	49	9	15	124	11, 13	U-24	W		
330	T-015		69	45.5	13	29	128	13, 08	U-21			
331	SH-074	剝片	23.5	22	3.5	3	115	17, 07	U-22	"		3 H S
332	SH-079	"	37	42.5	10	15	115	15, 08	U-21	"		"
333	SH-074	"	36.5	55.5	9.5	9	86	17, 08	U-22	,,		n n
334	C-091	"	35	70	15	45		16, 08	U-22	,,		,,
335	SH-080	二次加工痕	90	96	31	315	129	11, 07	U-20	,,		Pl. 63
336	C-085	のある剝片 石 核	81.5	53	49.5	303		14, 08	U-21	"		"
337	C-099	"	78	70	34.5	215		30, 12		"		,,
338	C-080	"	36	55.5	42.5	89		14, 08	U-21	и .		Pl.64
339	C-088	,,	43	30	20	20		01, 09		"		"
340	CSH-058	"	45	30	24.5	38	11/	17, 07	U-22	"		,,
341	C-084	"	30	42.5	24	28		14, 08	U-21	"		и.
342	C-072	,,	24.5	37	25.5	30		17, 08	U-22	"		и.
343	SH-084	"	38.5	31	16	25		25, 10	U-23	"		n
344	SH-072	.H	70	38	15	42.5		16, 07	U-22	"		P1.65
345	SA- 014	叩き石	95.5	74.8	18.2	200		28, 11	U-23	u		F1.03
346 - a	Q-003	剝 片	(31)	22	14	11		06, 08	U-19	"		"
- b	"	,, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	(26)	25.5	8	7		07, 08	U-19	"		"
347 - a	SH-073	,,	19	32	6	4	131	12, 13	U-24	"	053	"
-b	3H-073	"	12.5	32	25	5以下	122	11, 12	U-24	и.		
348 - a	CSH-060	"	50	65	18.5	45	100	- 5/1 ===	U-20		001	DI CC
-b	CSH-000	播 器	65.5	80.5	24.5	129	117	12, 08			001	P1.66
	"	別 片	20.5	27	1000		117	11, 07	U-20	"	"	
- c	****	4F9 /1	20.0	64	9.5	5		12, 08	U-20	"	u	

出土石器一覧表

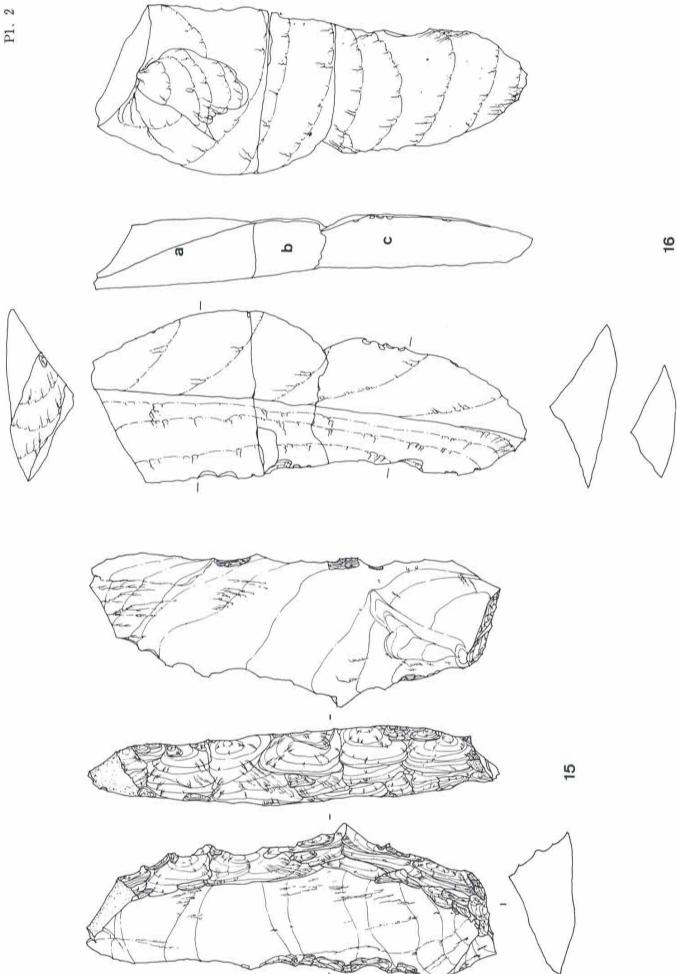
2.vog/ 1.40 xx		ī										No.1
遺物番号	母岩別番号	器種	長さ(mm)	ф∰ (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打角(度)	出土区	ユニット	文化層	接合番号	備考
Catalog Number	The number of individual	Species	Length	Width	Thickness	Weight	Striking Angle	Grid	Unit Number	Culture Layer	The number of Connected Material	A remarks column
348-е	CHS-060	剝片	30.5	29	18	10		11, 08	U-20	第1文化層	001	Pl.67
-f	"	"	47	29.5	14	22		11, 08	U-20	n	"	"
- g	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	石 核	82	59	52	275		12, 08	U-20	"	"	"
-a'	"	剝片	39	20.5	8	5		12, 08	U-20	n	"	ОИ
- b'	i N	"	59	35	22.5	50		11, 07	U-20	"	"	ii .
· c'	**	"	30.5	34	8.5	12	105	12, 08	U-20	"	"	"
349 - a	C-074	"	18.5	15	5.5	5以下		24, 09	U-23	"	006	Pl.68
- b	"	- #	30	21	10	5		24, 09	U-23	#	"	"
- a'	,,	"	57	48	27	67		24, 09	U-23	"	"	"
350 - a	C-076	"	38.5	27.5	9	7	110	17, 08	U-20	7.11	007	"
- b	"	石 核	(36)	35.5	21	46		17, 07	U-20	"	"	*#*
- c	"	u	(31.5)	39	19.5	35		17, 07	U-20	"	"	"
351 - a	C-071	二次加工痕 のある剝片	71	25	12.5	20	119	11, 07	U-20	,,	057	Pl.69
- b	"	石 核	40	56.5	31	66		10, 07	U-20	"	"	"
352 - a	C-075	剝 片	71	25	12.5	20	119	13, 08	U-21	,,	073	"
- b	,,	"	57.5	29.5	12	18	110	14, 08	U-21	<i>y</i>	"	"
353 - a	C-073	"	33	23	12	10		17, 07	U - 22	"	058	"
- b	"	"	29	21	10	5		17, 07	U - 22	"	"	"
354 - a	CSH-054	#	20	37.5	9	6	120	17, 08	U - 22	"	054	Pl.70
- b	"		46	27	13	21	116	17, 08	U-22	"	"	"
- c	"	"	40.5	11.5	4.5	5以下		17, 07	U-22	"	"	"
355 - a	CSH-076	"	52.5	51	13.5	25		12, 07	U-20	"	070	,,
- b	"	#	26.5	32.5	7	10		11, 07	U-20	"	"	"
								×				
												11001111
		8										



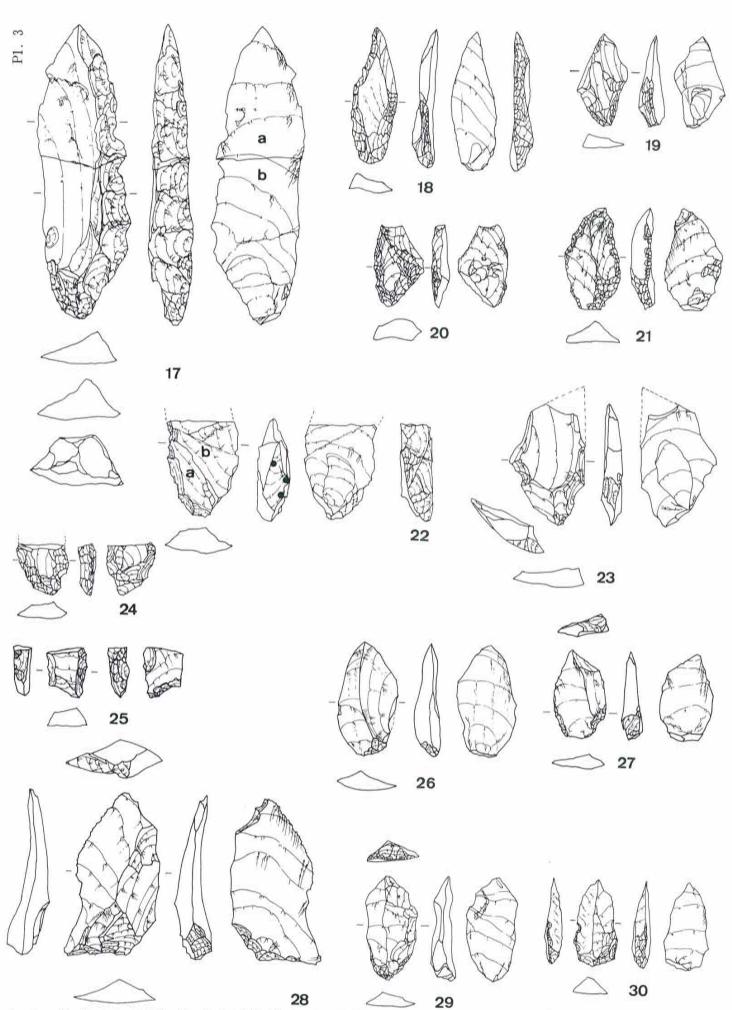
14 Pl. 1 1-7 槍先形尖頭器(Points), 8-9 槍先形尖頭器作出砕片 (Point sharpening Chips),13 剝片(Flake), 14 使用痕のある剝片(Utilized Flake)

(3/4)

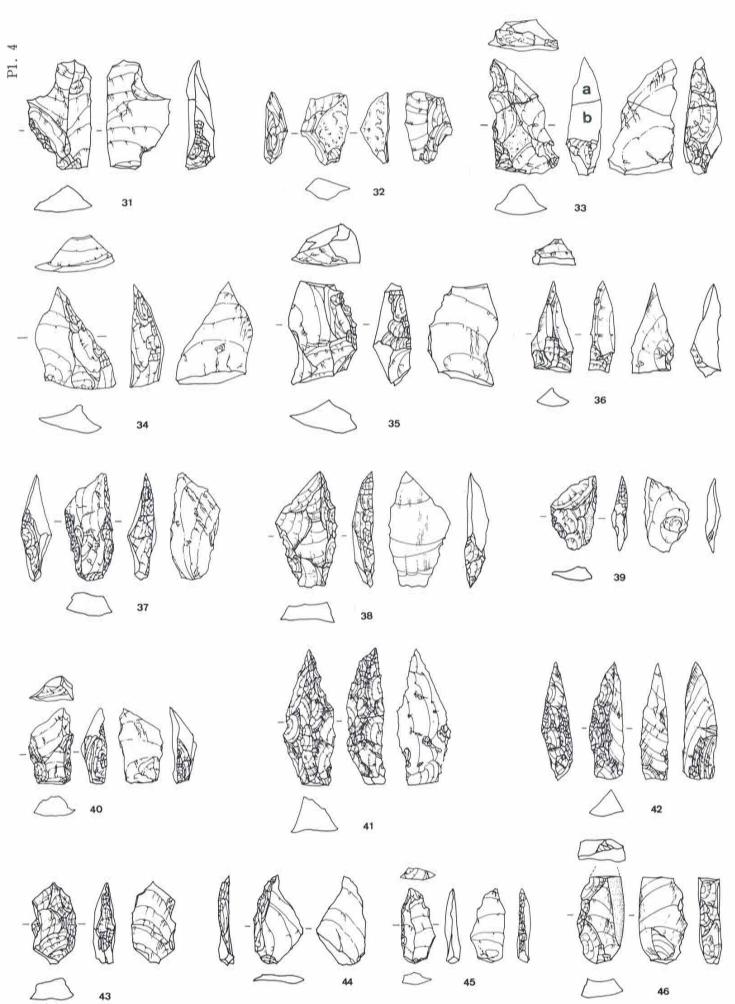
多摩蘭坂第 4 文化層(Culture Layer TAMARANZNAKA 4)



15 ナイフ形石器 (Knife-shaped Tool), 16 使用痕のある剝片; 接合資料 (Utilized Flake; Connected Material) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3) P1.2

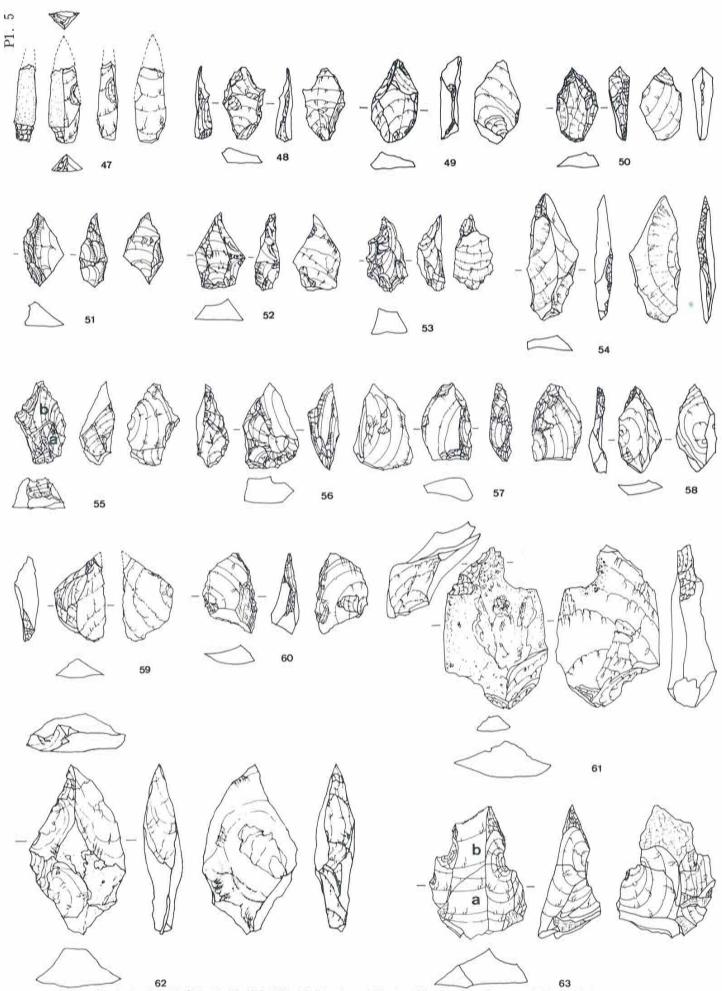


P1.3 17-30 ナイフ形石器: 17, 22 接合資料(Knife-shaped Tools; 17, 22, Connected Materials) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)

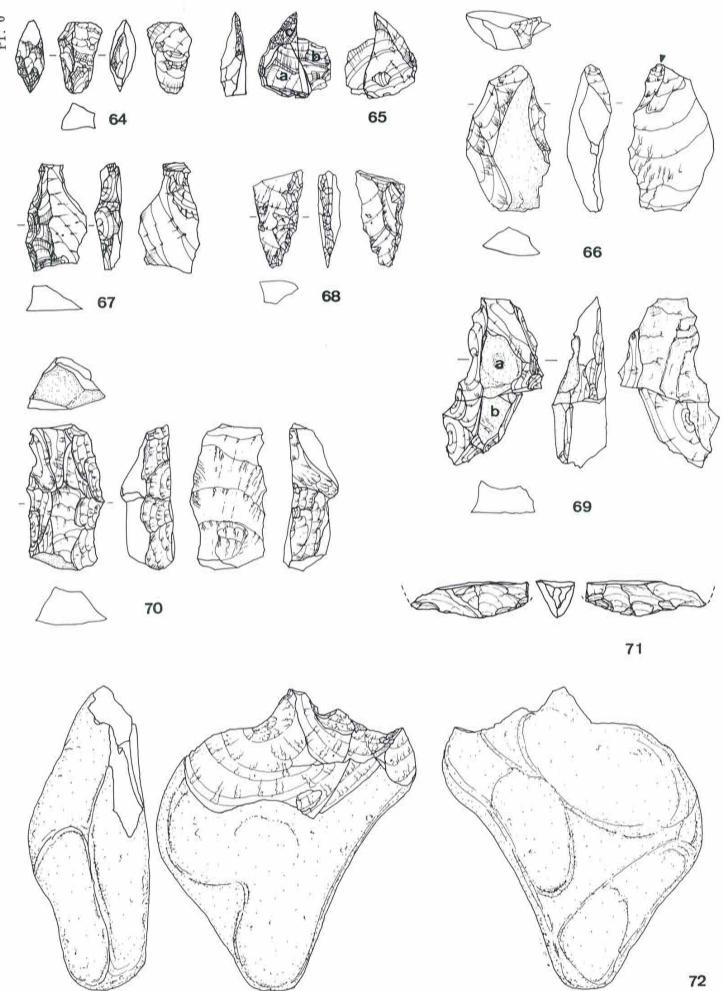


71.4 31-40, 43-46 ナイフ形石器; 33 接合資料 (Knife-shaped Tools; 33 Connected Material) 41-42 尖頭状石器 (Point-shaped Tools)

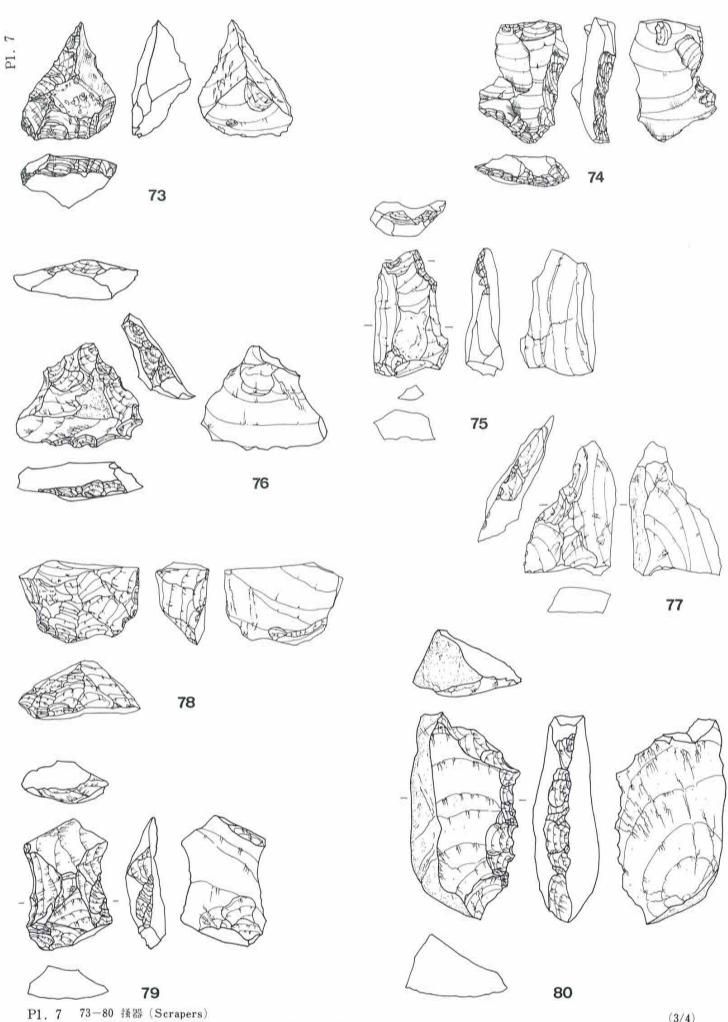
(3/4)



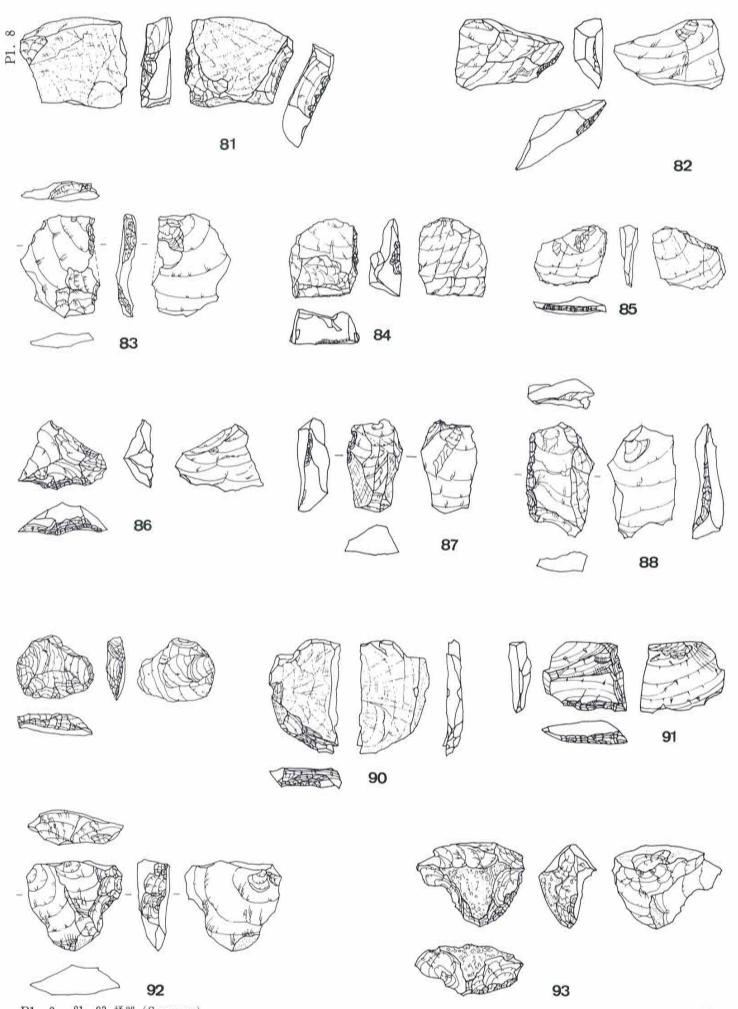
P1. 5 47-63 ナイフ形石器; 55,62,63 接合資料 (Knife-shaped Tools; 55,62,63 Connected Materials) 多摩蘭坂第3文化層 (Calture Layer TAMARANZAKA 3)



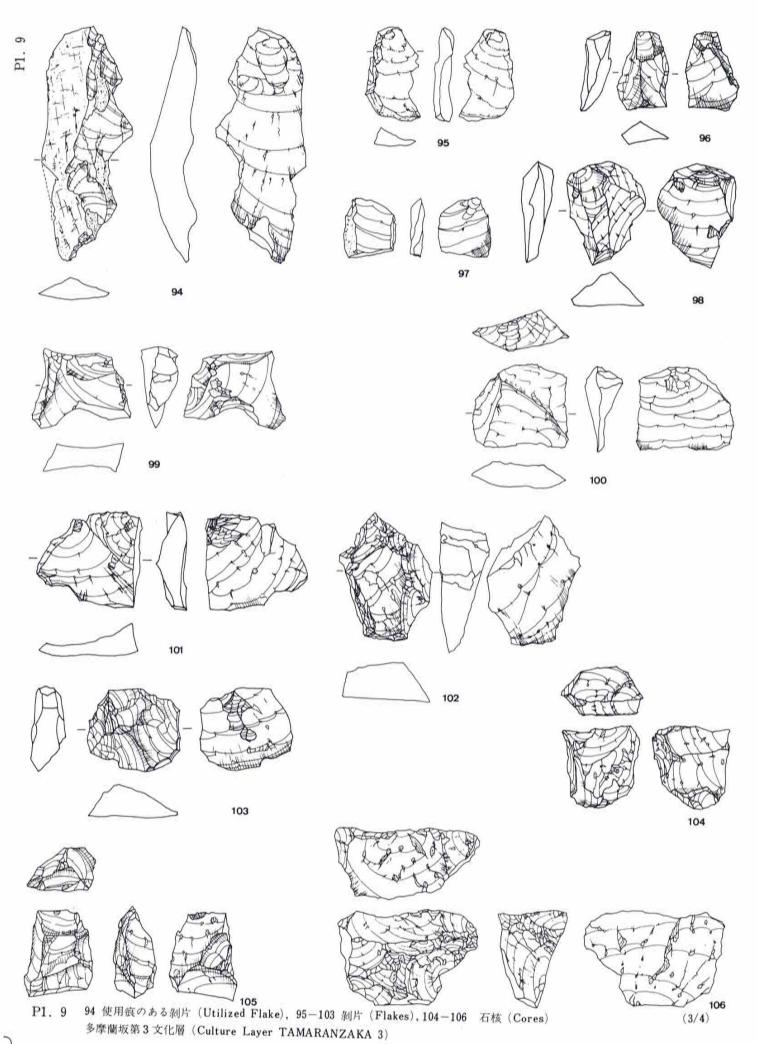
P1. 6 64 台形様石器(Tpapezoid), 65-67, 69 ナイフ形石器; 65,69 接合資料(Knite shaped Tools; 65,69 Connected Materials), [68, 彫器(Graver) 70 尖頭状石器(Point-shaped Tool), 71 打製石斧(Ax), 72 礫器(Pebble Tool) 多摩蘭坂第 3 文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)



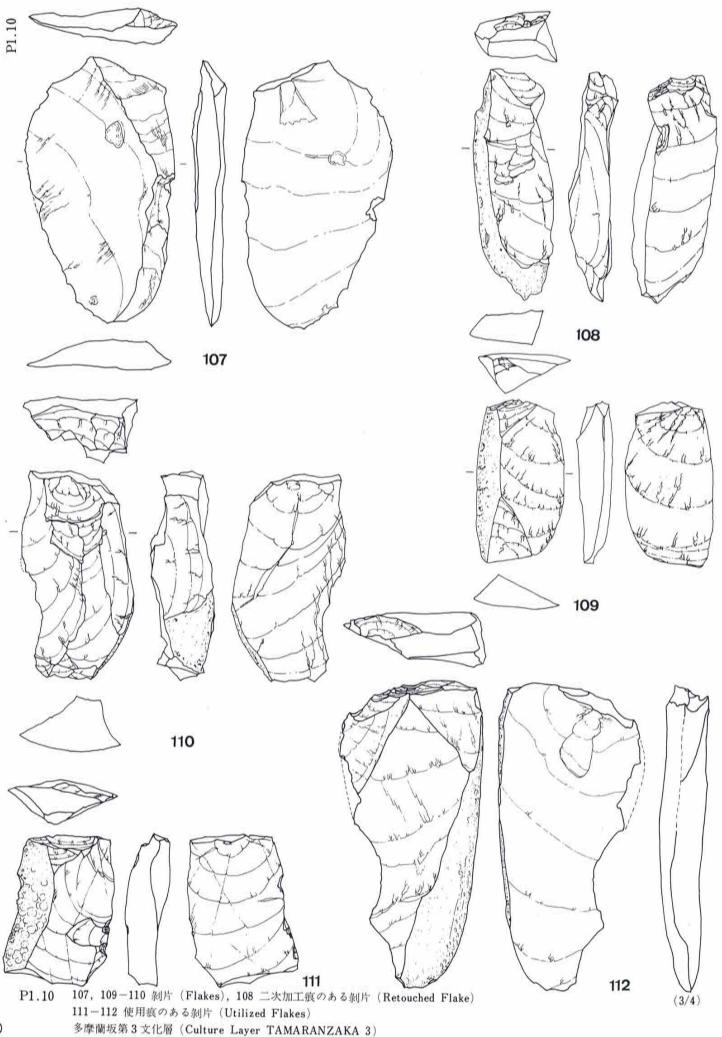
多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

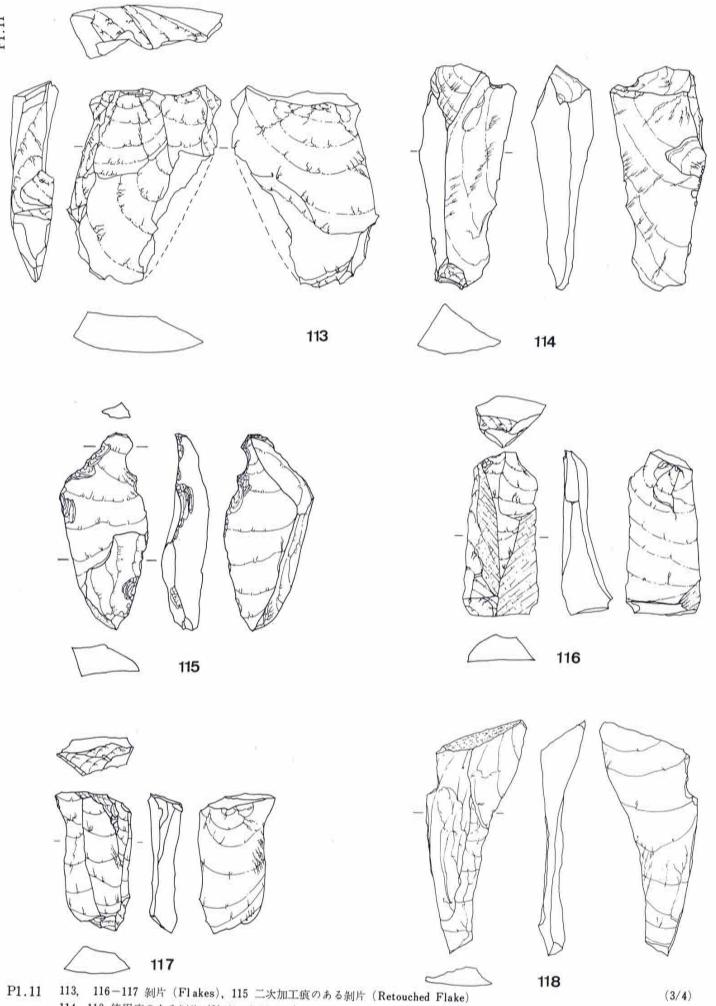


P1. 8 81-93 掻器(Scrapers) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)

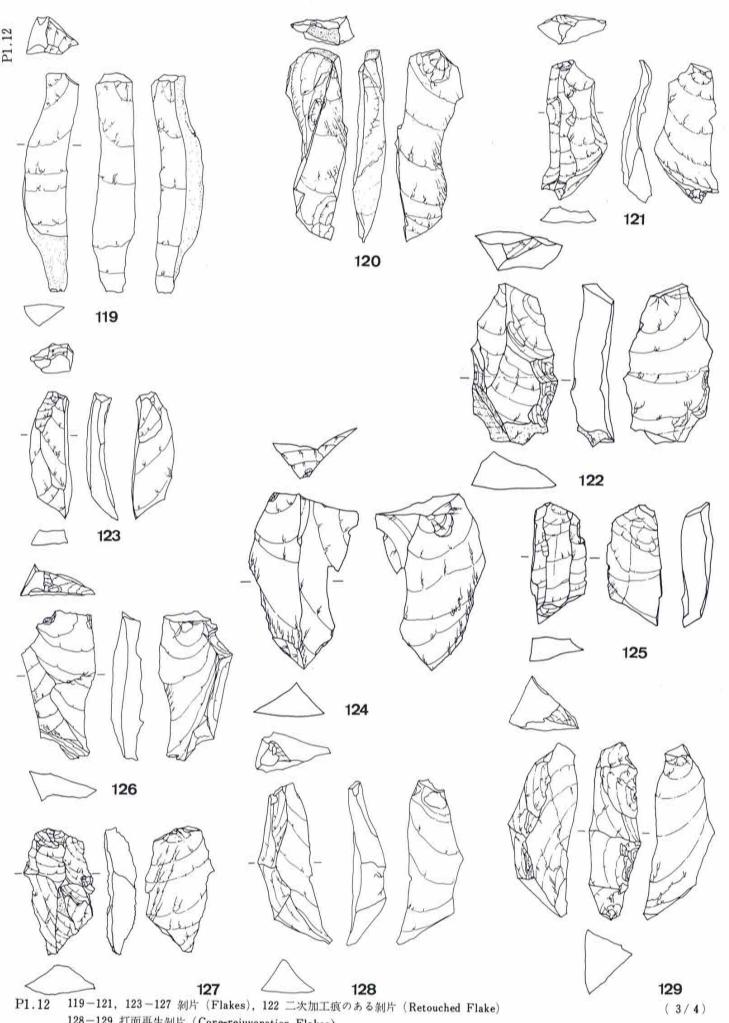


C

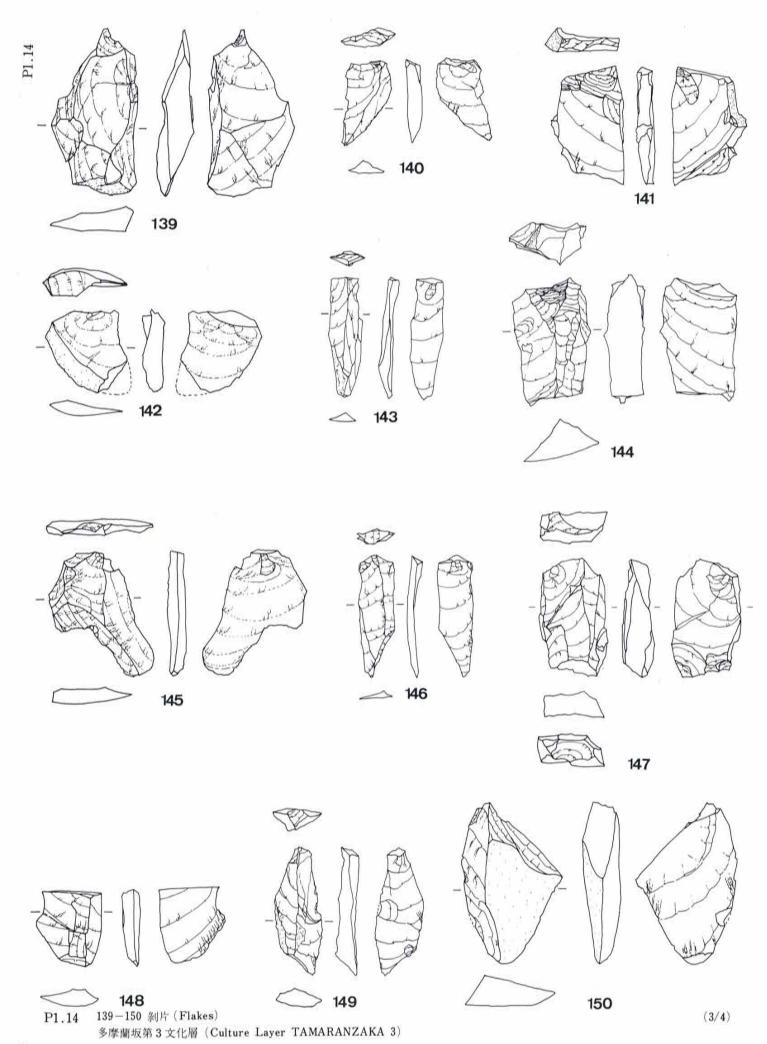


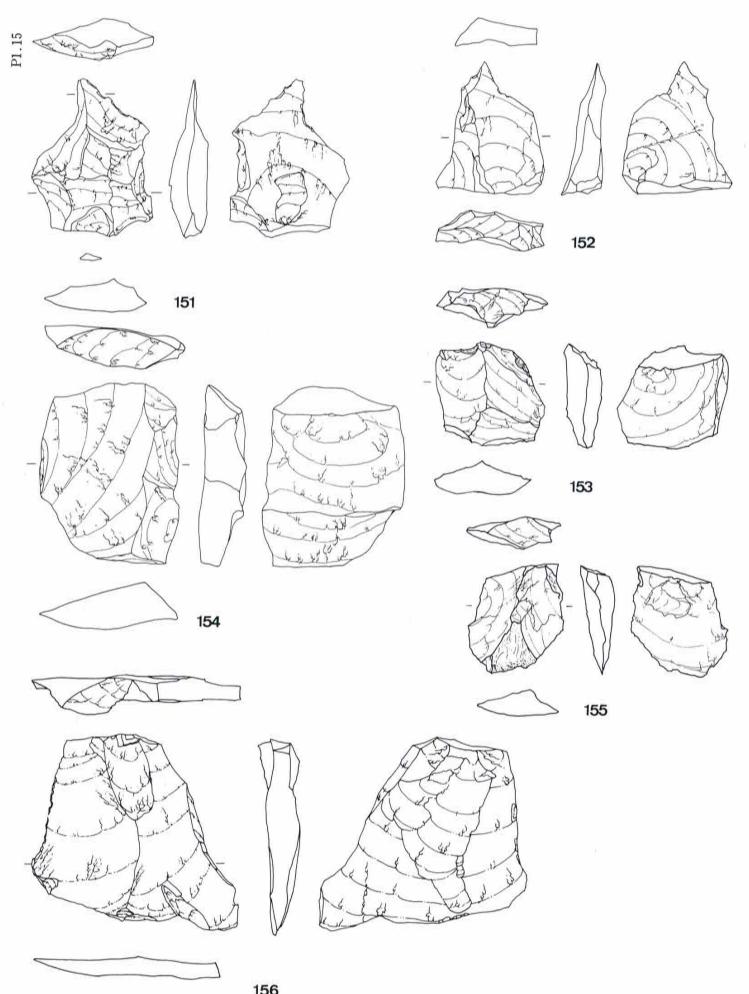


114, 118 使用痕のある剝片 (Utilized Flakes) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

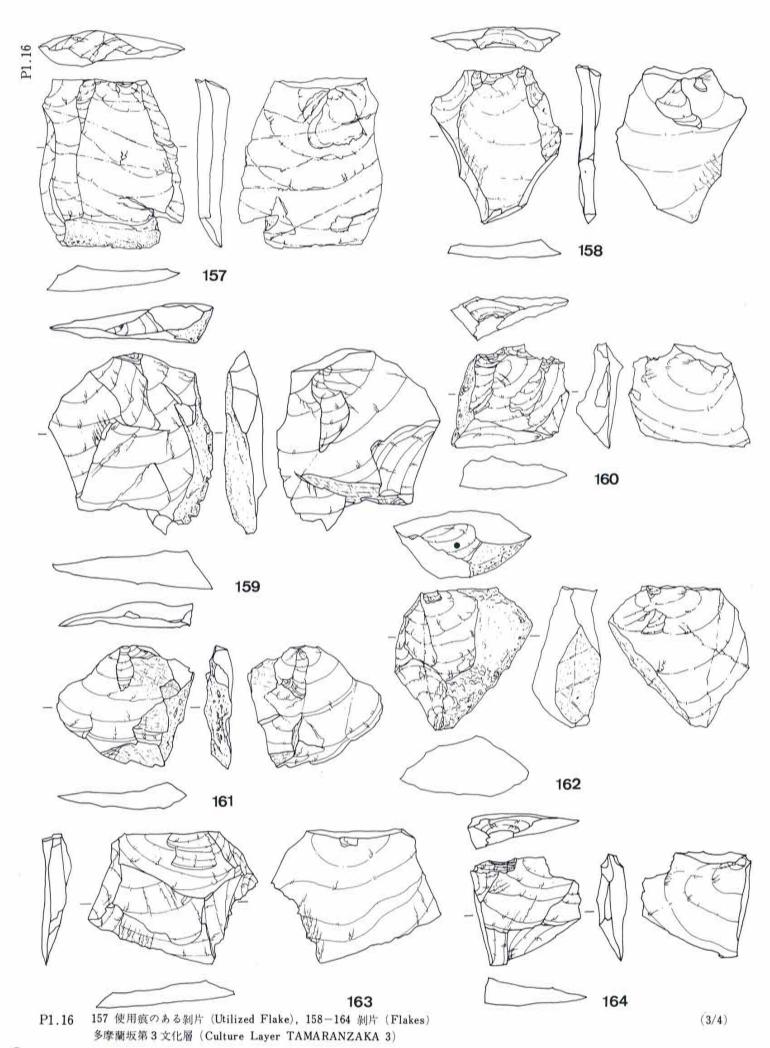


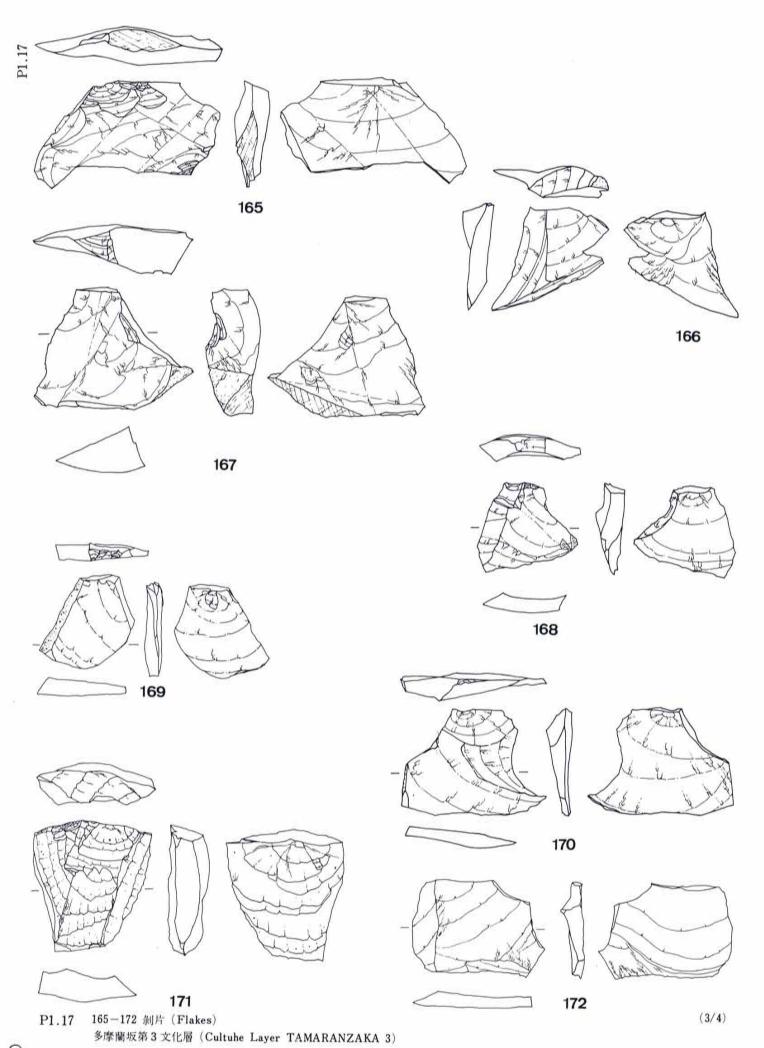
128-129 打面再生剝片 (Core-rejuvenation Flakes) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

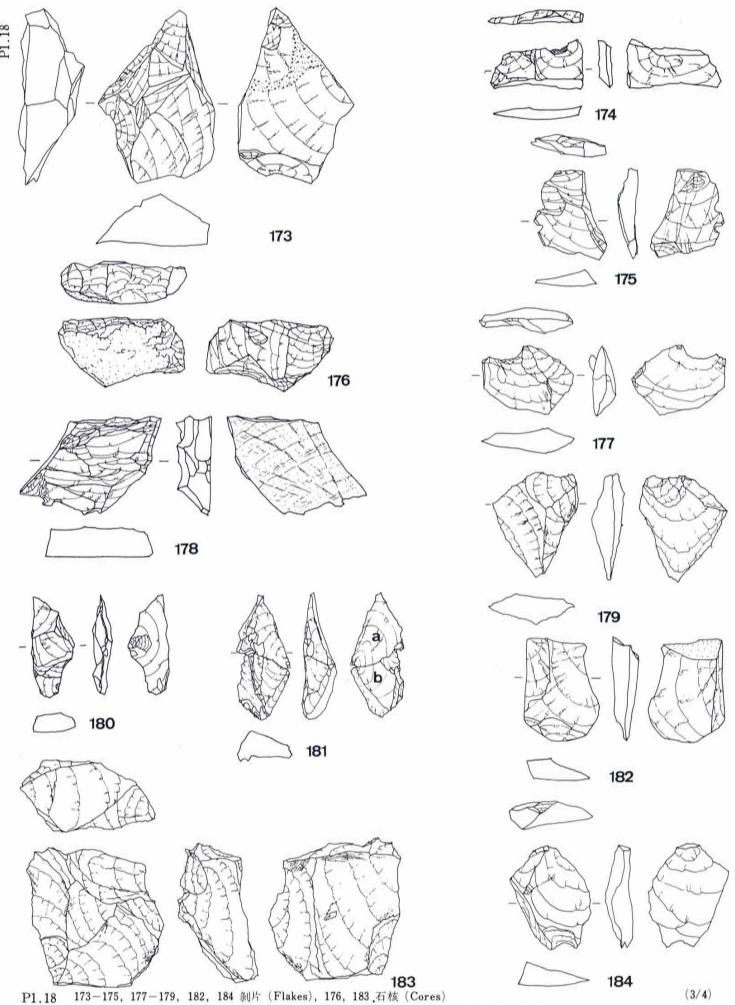




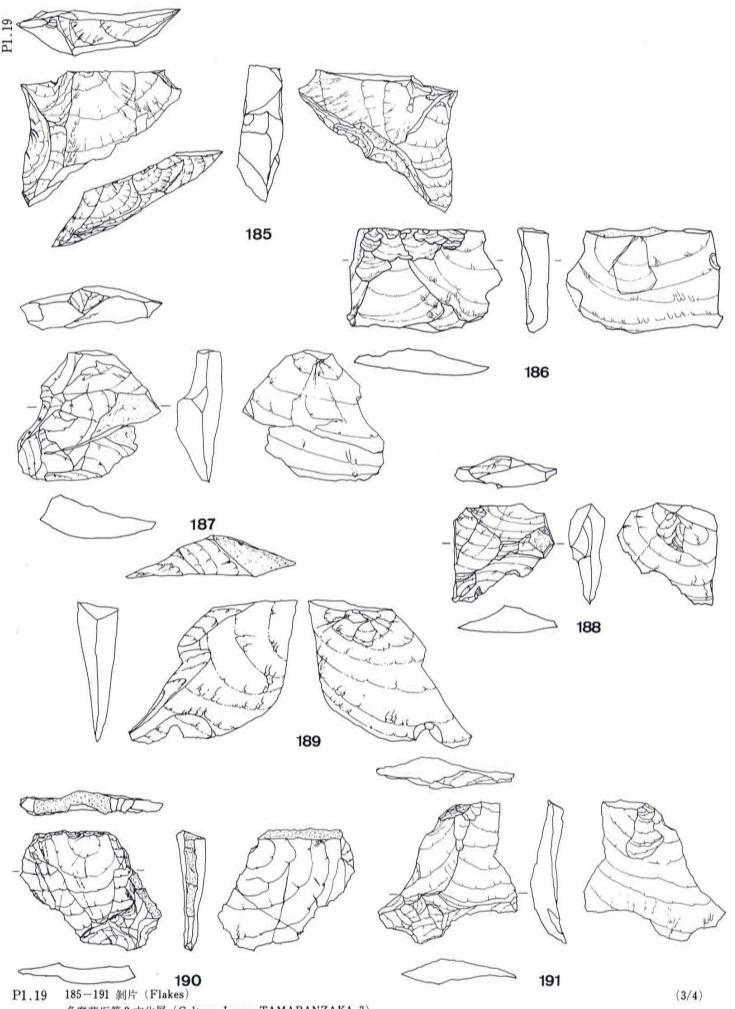
156
P1,15 151, 156 使用痕のある剝片 (Utilized Flakes), 152 二次加工痕のある剝片 (Retouched Flake) 153-155 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



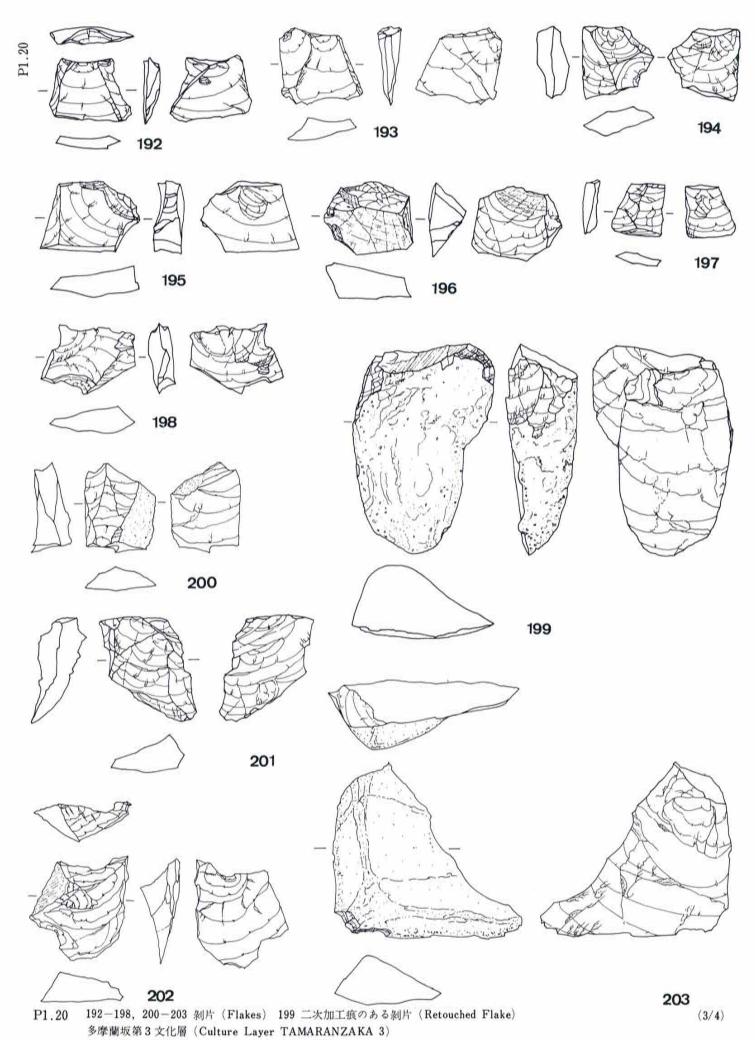


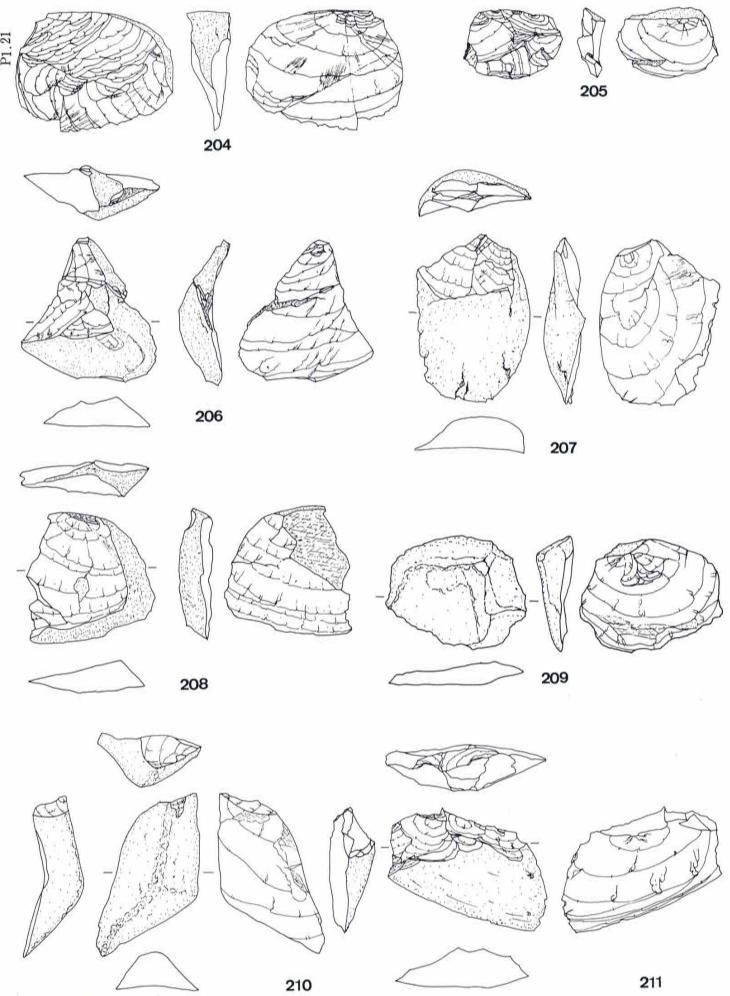


180-181 二次加工痕のある剝片; 181 接合資料 (Retouched Flakes; Connected Material) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

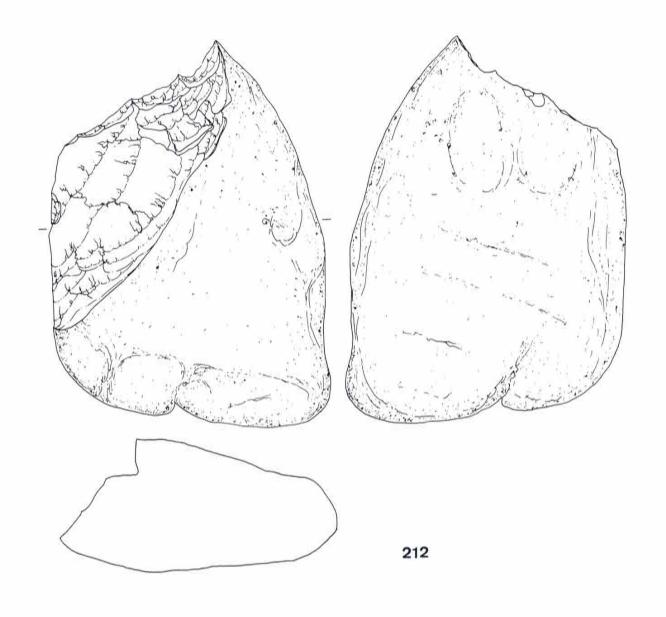


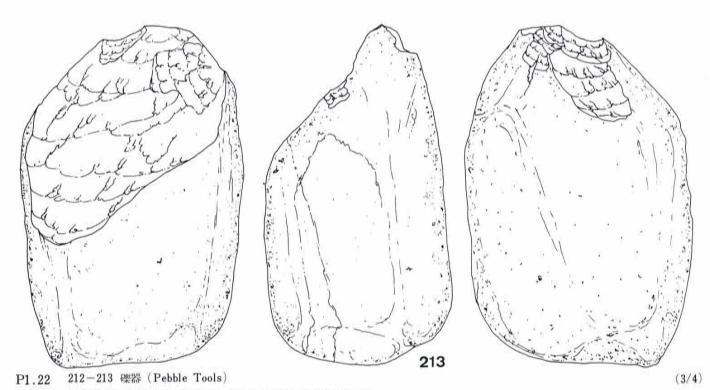
多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



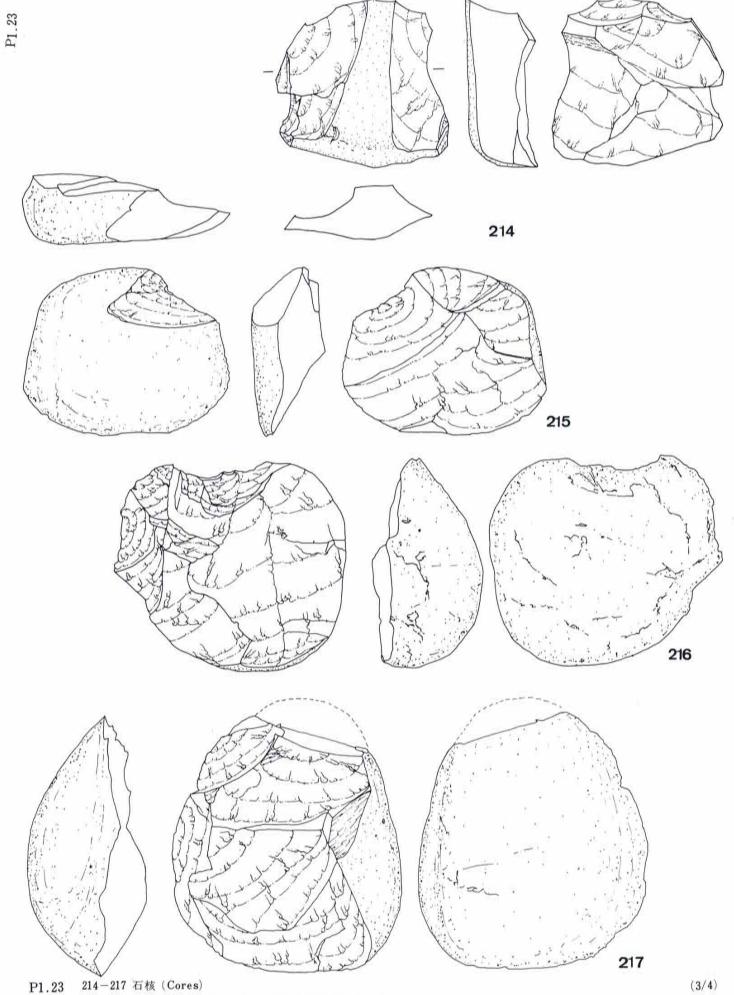


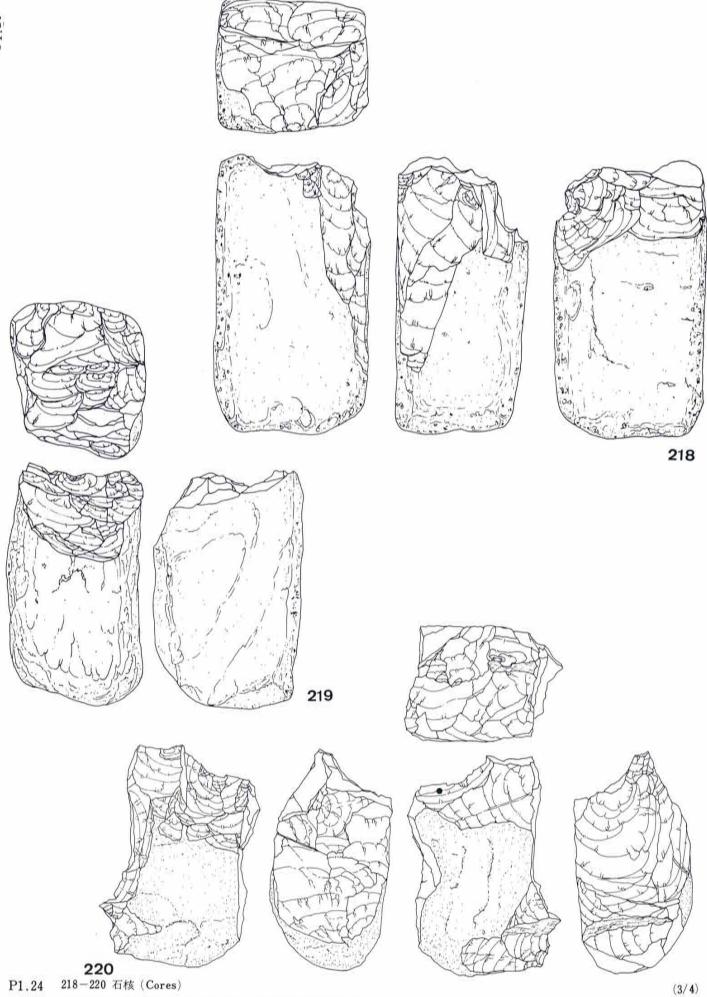
P1.21 204-210 剝片(Flakes), 221 使用痕のある剝片(Utilized Flake) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)





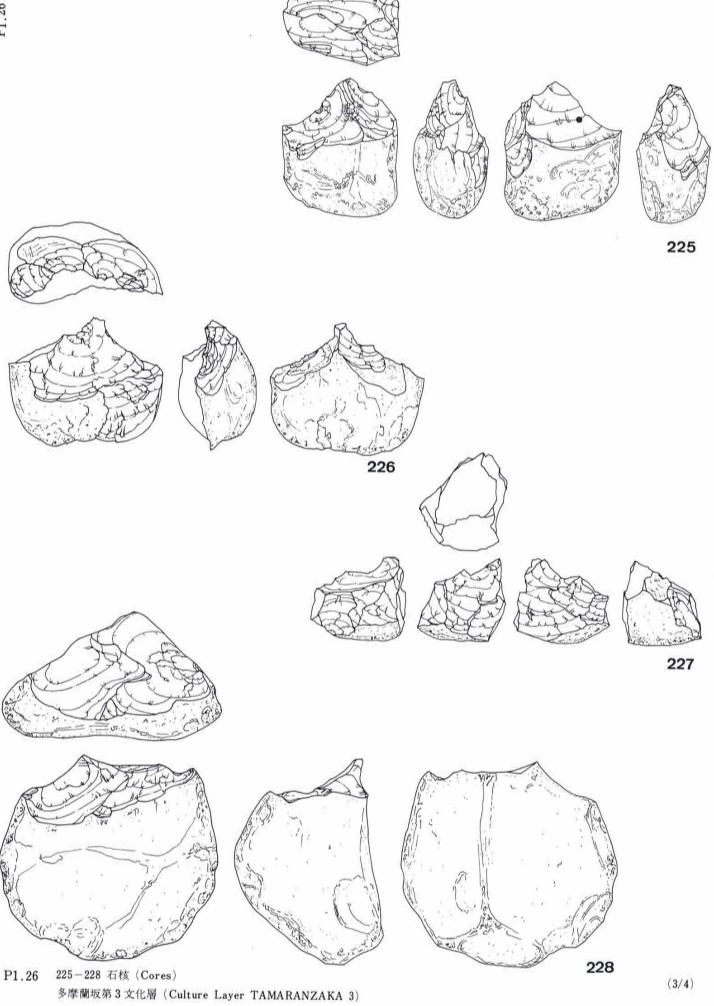
多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

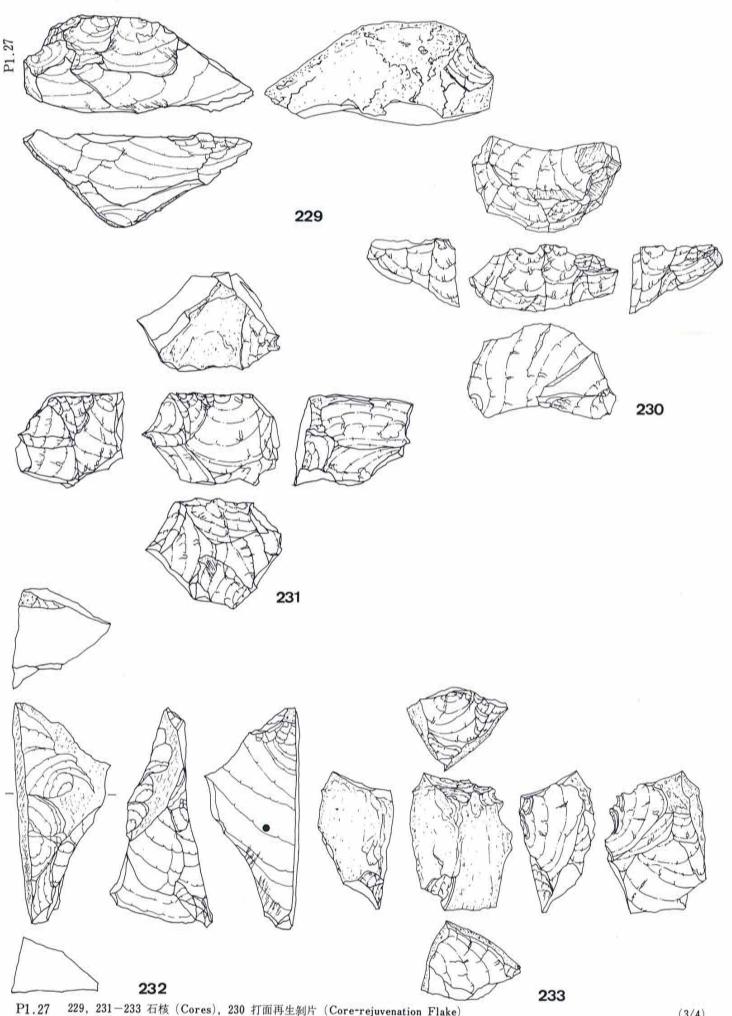




多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

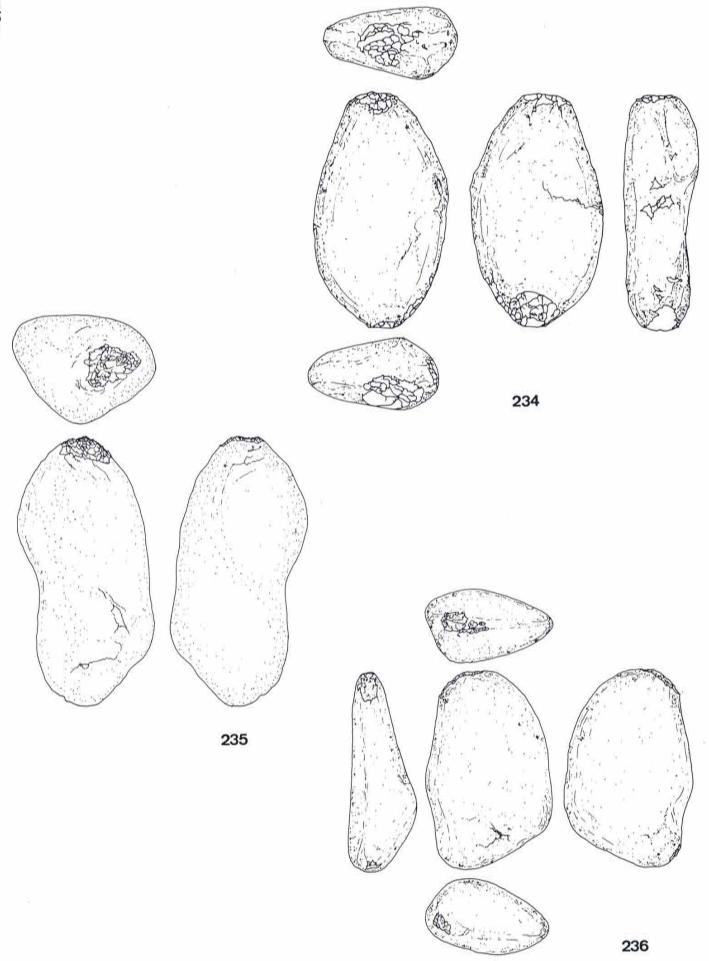
多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)





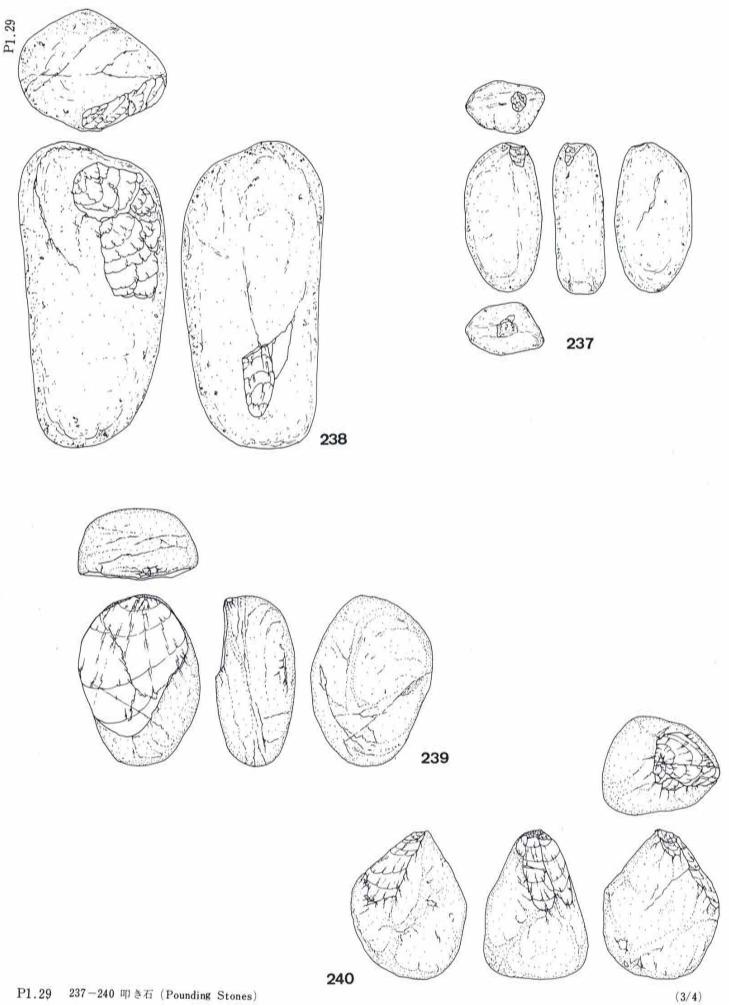
229, 231-233 石核 (Cores), 230 打面再生制片 (Core-rejuvenation Flake) 多摩蘭坂第3文化層 (Cultre Layer TAMARANZAKA 3)

(3/4)

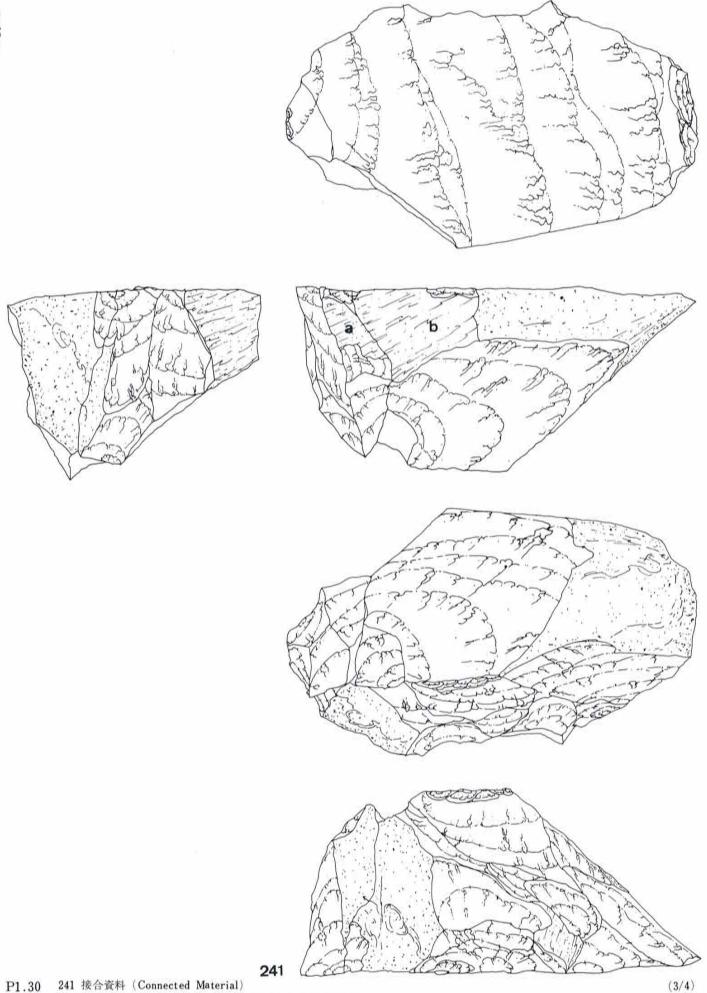


P1.28 234-236 叩き石 (Pounding Stones) 多摩蘭坂第3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

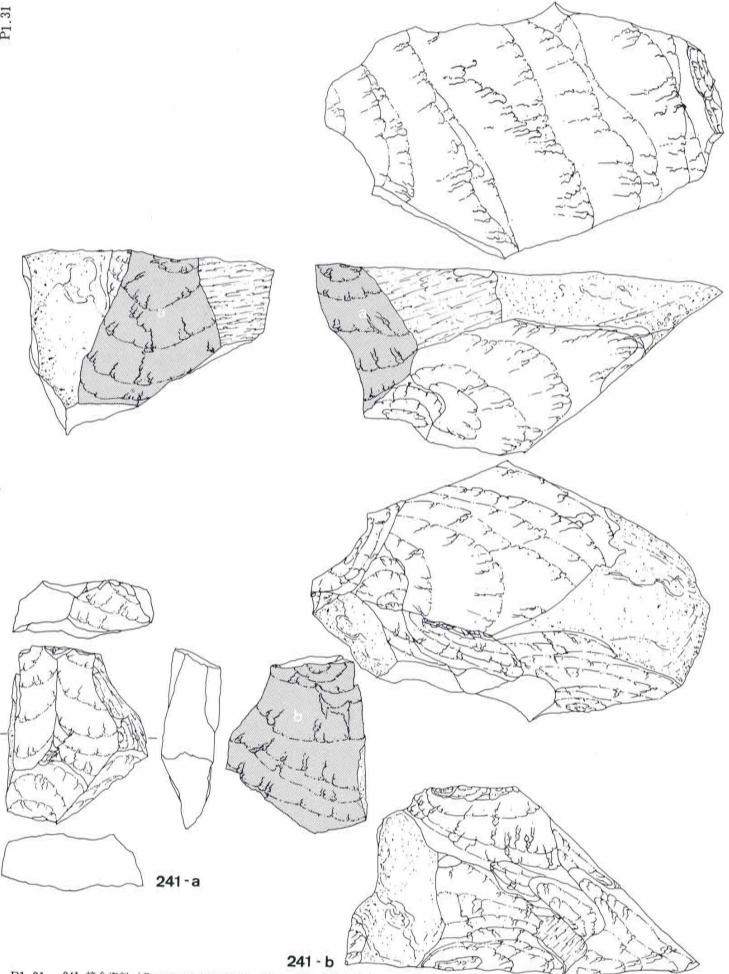
(3/4)



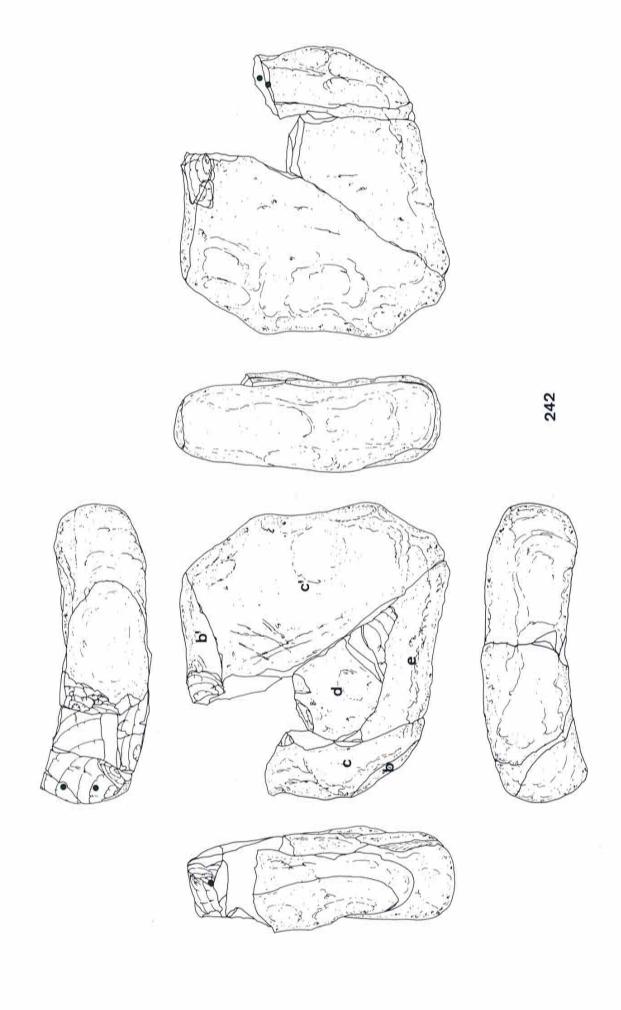
P1.29 237-240 叩き石 (Pounding Stones) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)



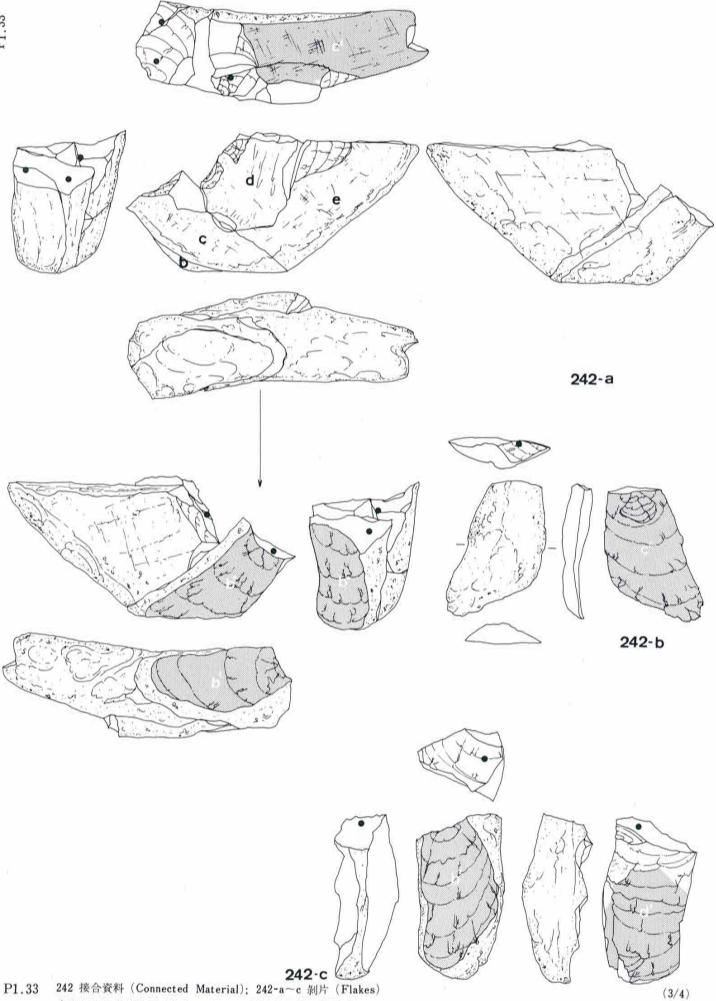
P1.30 241 接合資料 (Connected Material) 多摩蘭坂第3文化層 (Culturc Layer TAMARANZAKA 3)



P1.31 241 接合資料 (Connected Material); 241-a 剝片 (Flake) 241-b 石核 (Core) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)



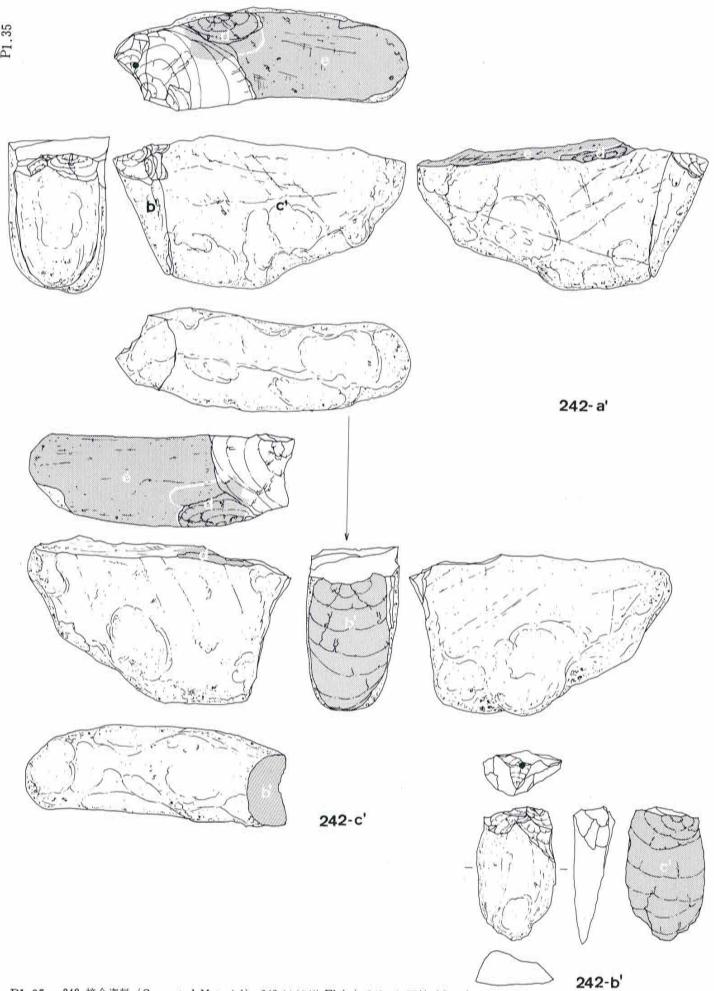
PI.32 242 接合資料 (Connected Material) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



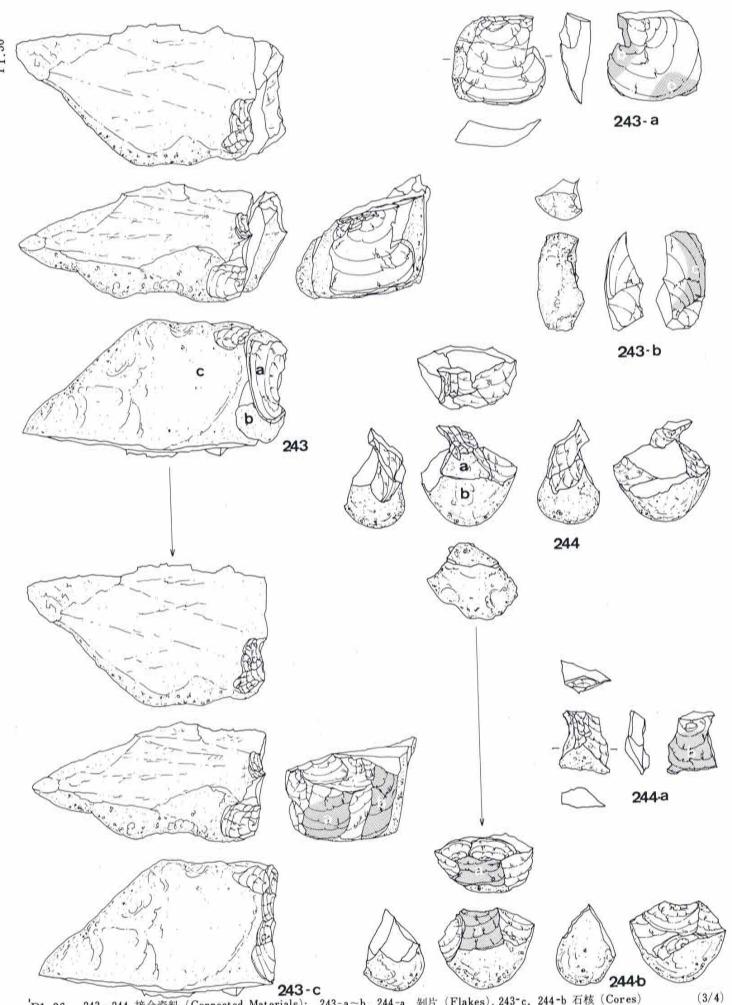
多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



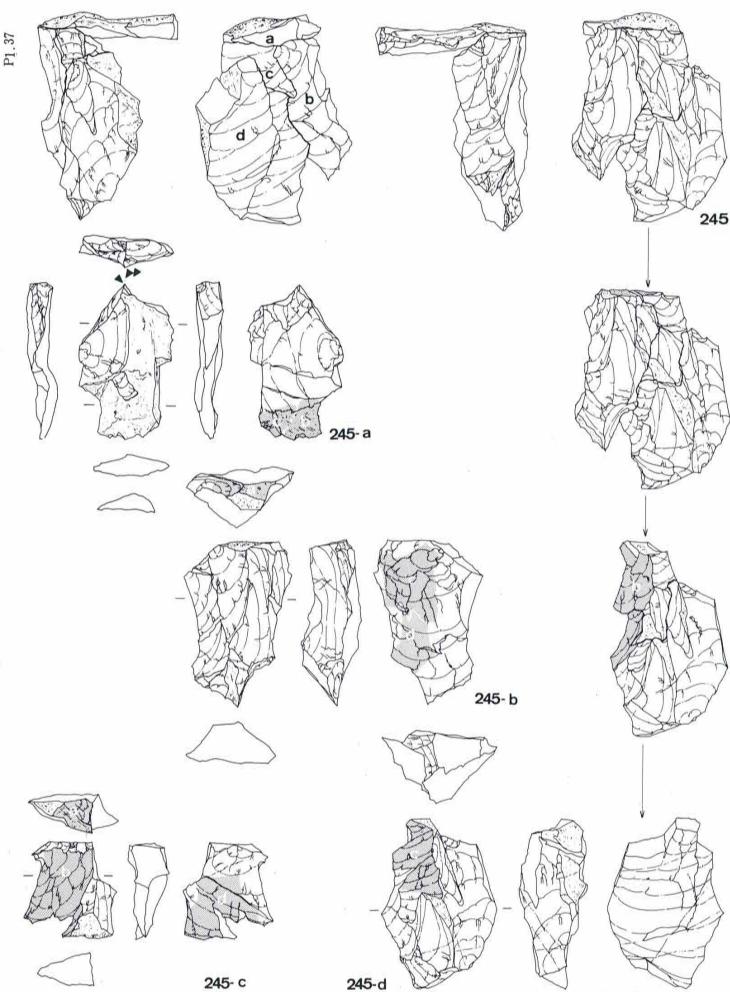
242 接合資料 (Connected Material); 242-a 剝片 (Flake), 242-e 石核 (Core) P1.34 多摩蘭坂地 3 文化層(Culture Layer TAMARANZALA 3)



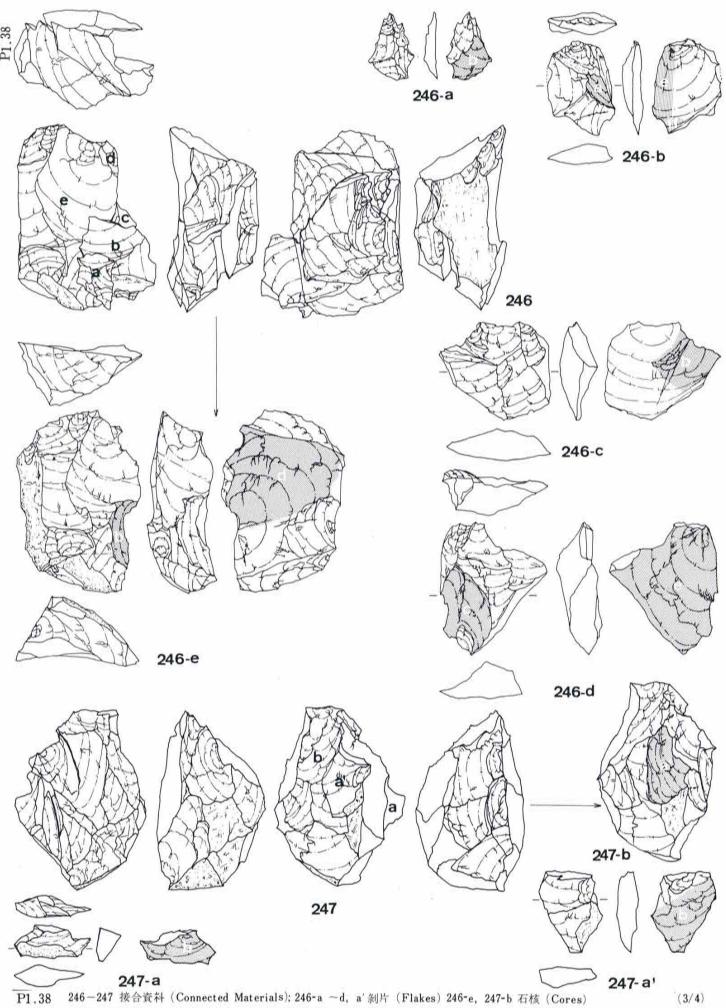
P1.35 242 接合資料 (Connected Material); 242-b'(剝片Flake), 242-c' 石核 (Core) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



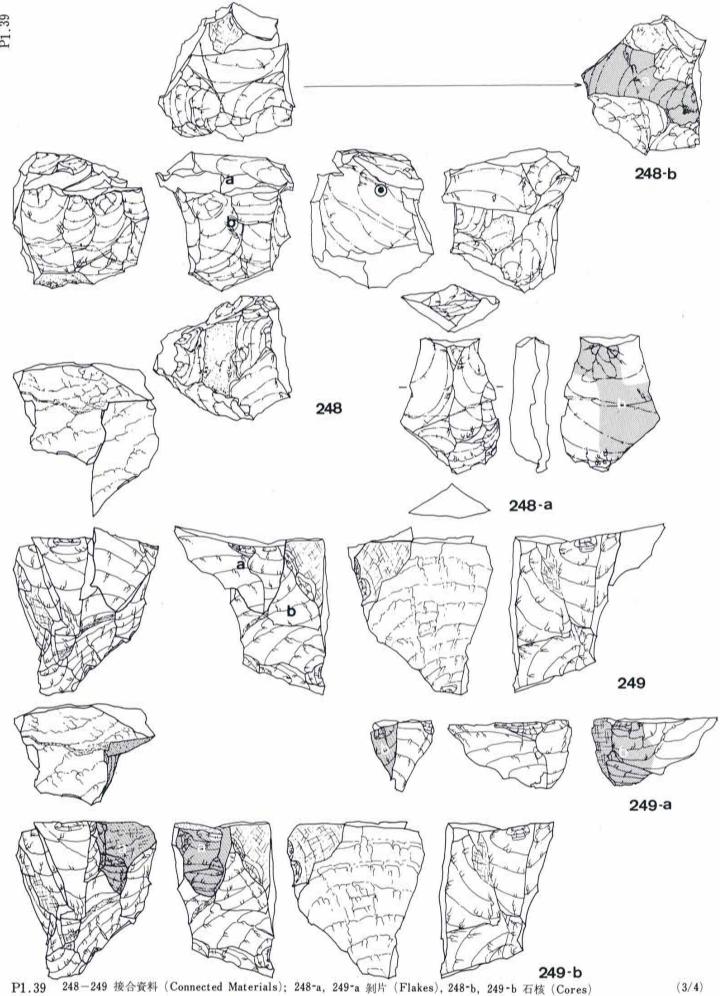
P1.36 243-244 接合資料 (Connected Materials); 243-a-b, 244-a 剝片 (Flakes), 243-c, 244-b 石核 (Cores) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



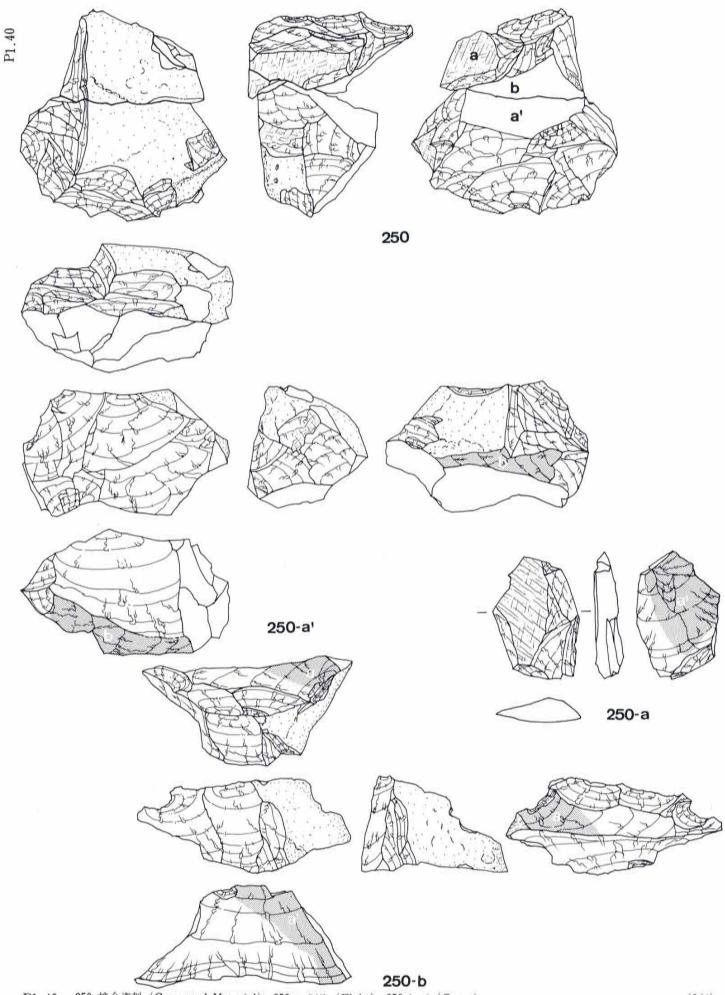
P1.37 245 接合資料 (Connected Material); 245-a 影器 (Graver), 245-b-c 剝片 (Flakes), 245-a 石核 (Core) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



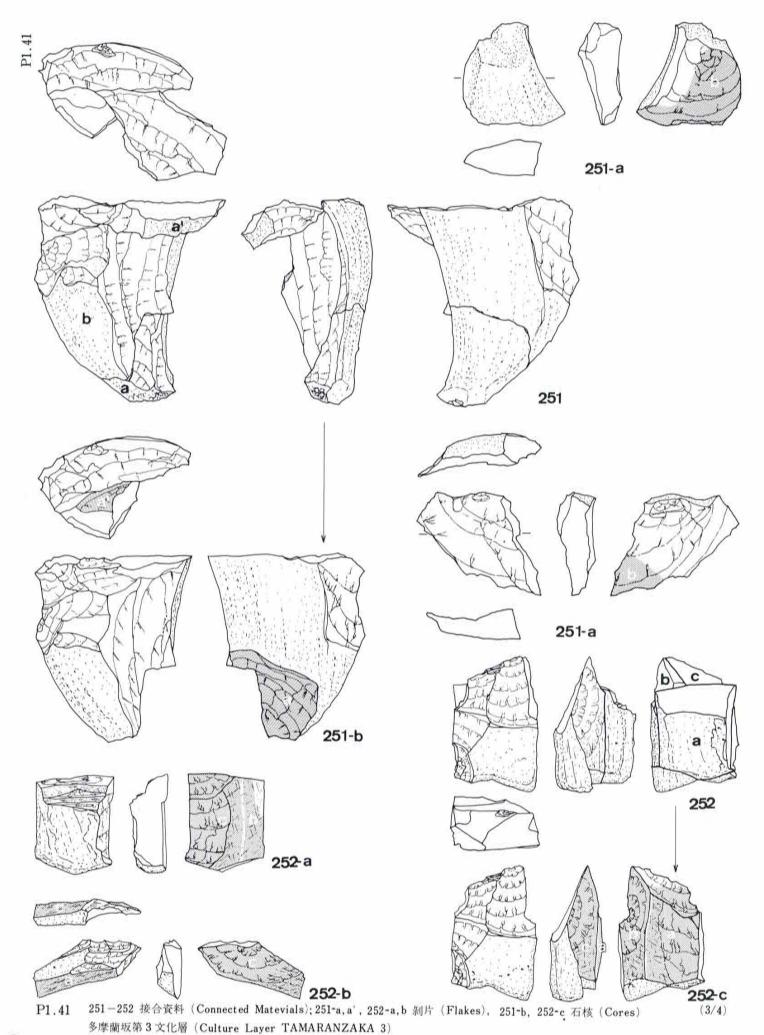
多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



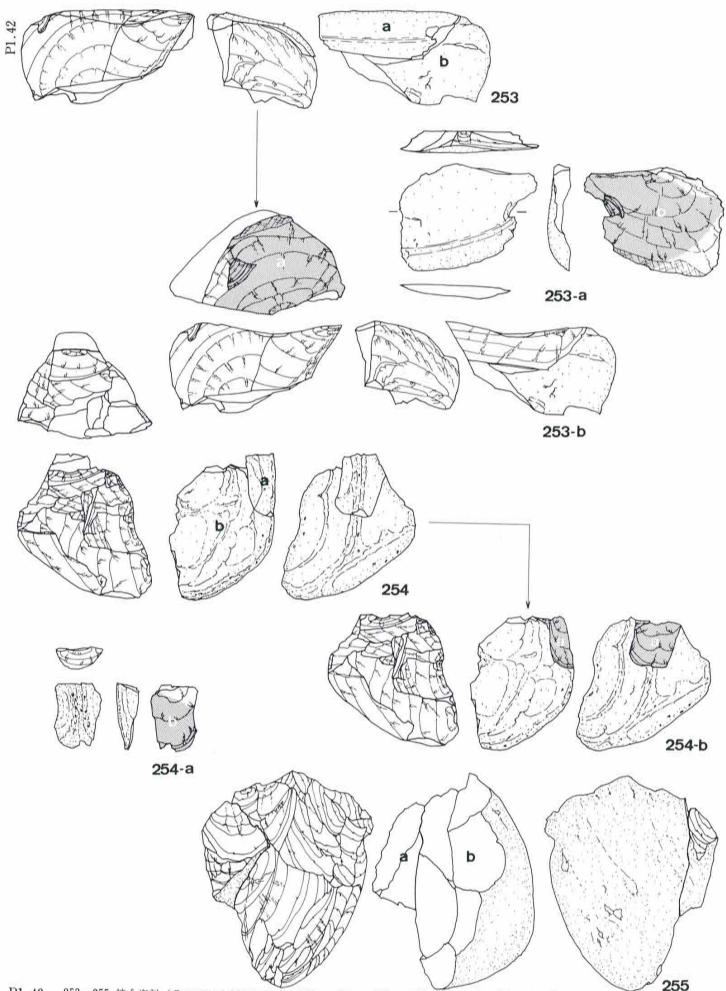
248-249 接合資料 (Connected Materials); 248-a, 249-a 刹片 (Flakes), 248-b, 249-b 石核 (Cores) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



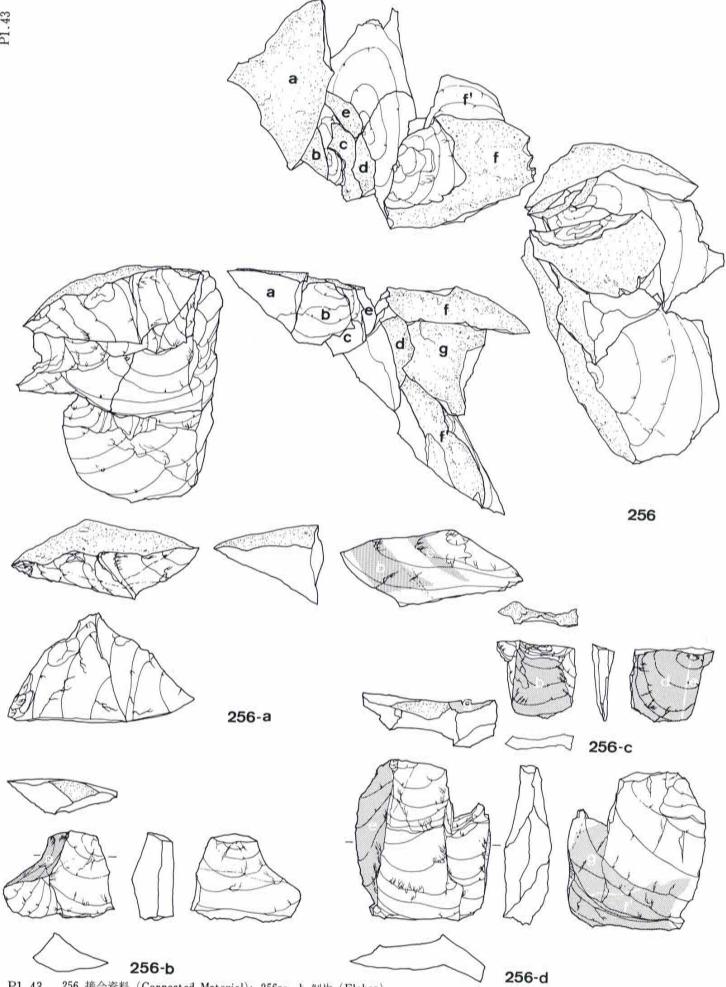
P1.40 250 接合資料 (Connected Material); 250-a 剝片 (Flake), 250-b,a' (Cores) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



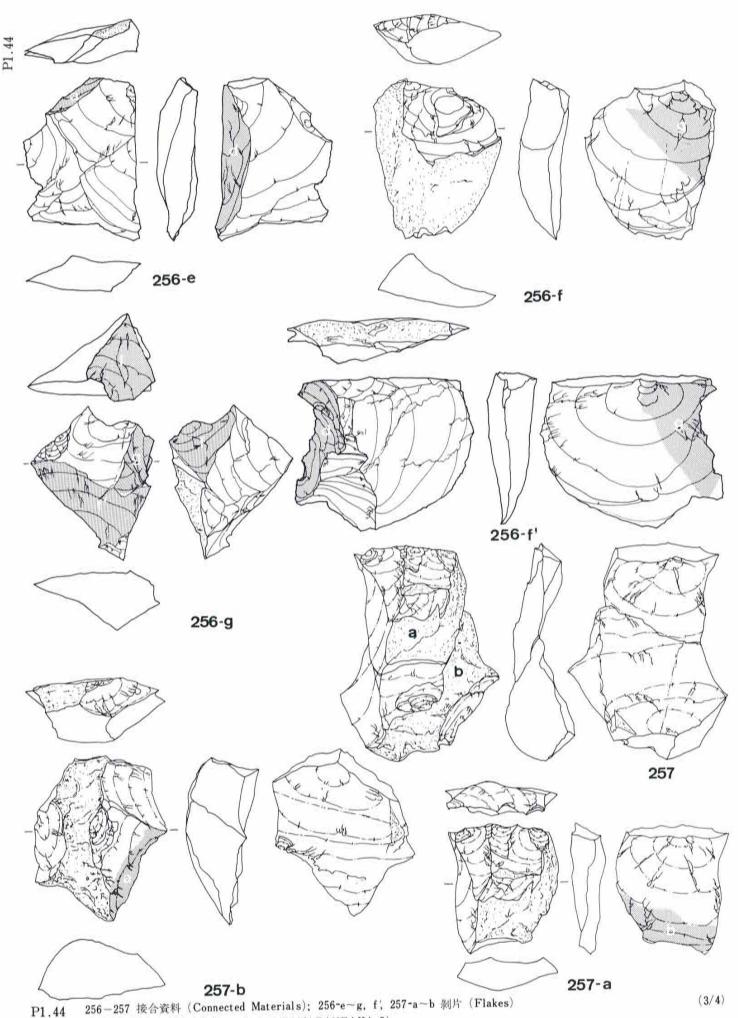
O



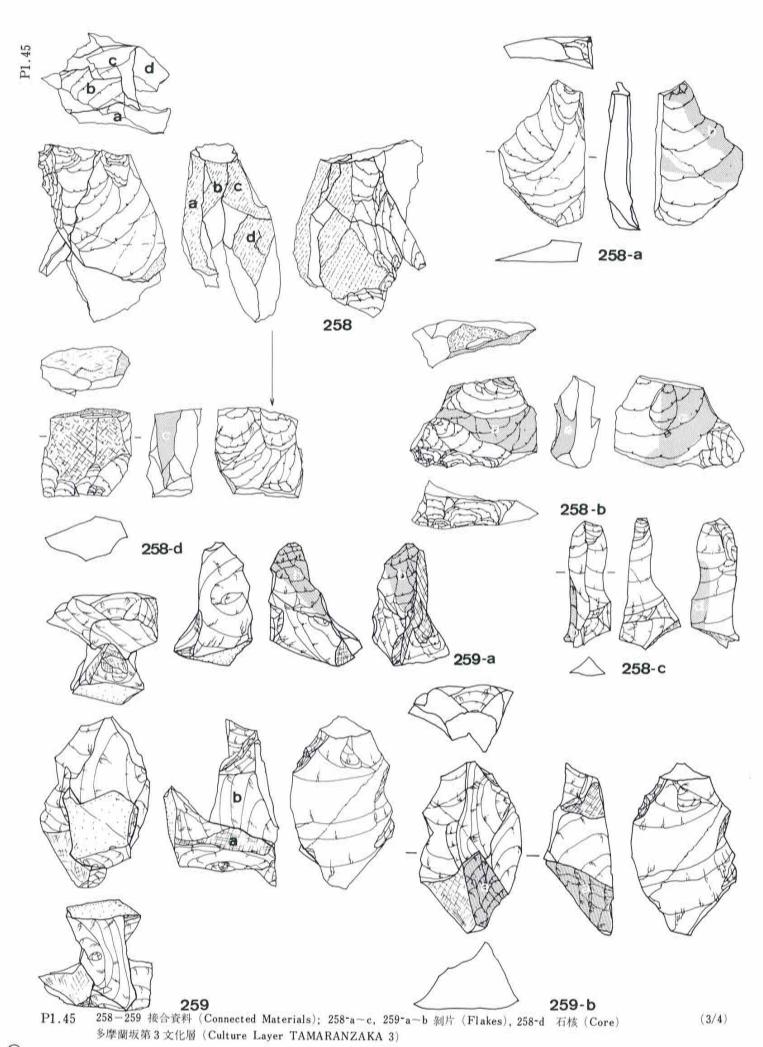
P1.42 253-255 接合資料 (Connected Materials); 253-a, 254-a, 255-a 剝片 (Flakes), 253-b, 254-b, 255-b 石核 (Cores) (3/4) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

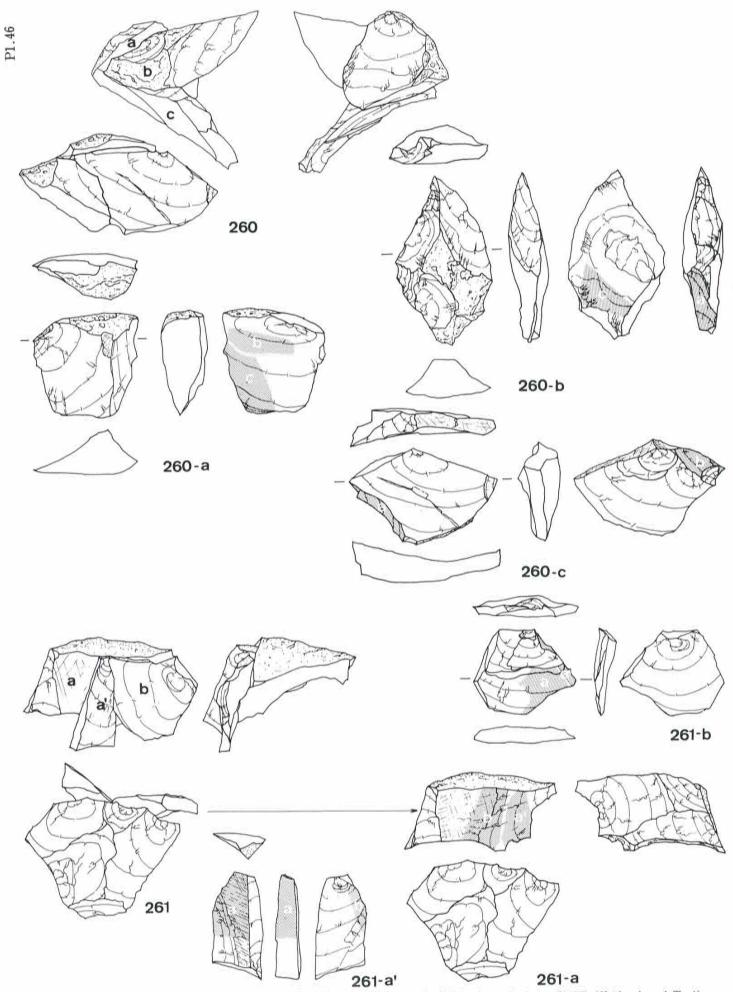


P1.43 256 接合資料 (Connected Material); 256-a~b 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)

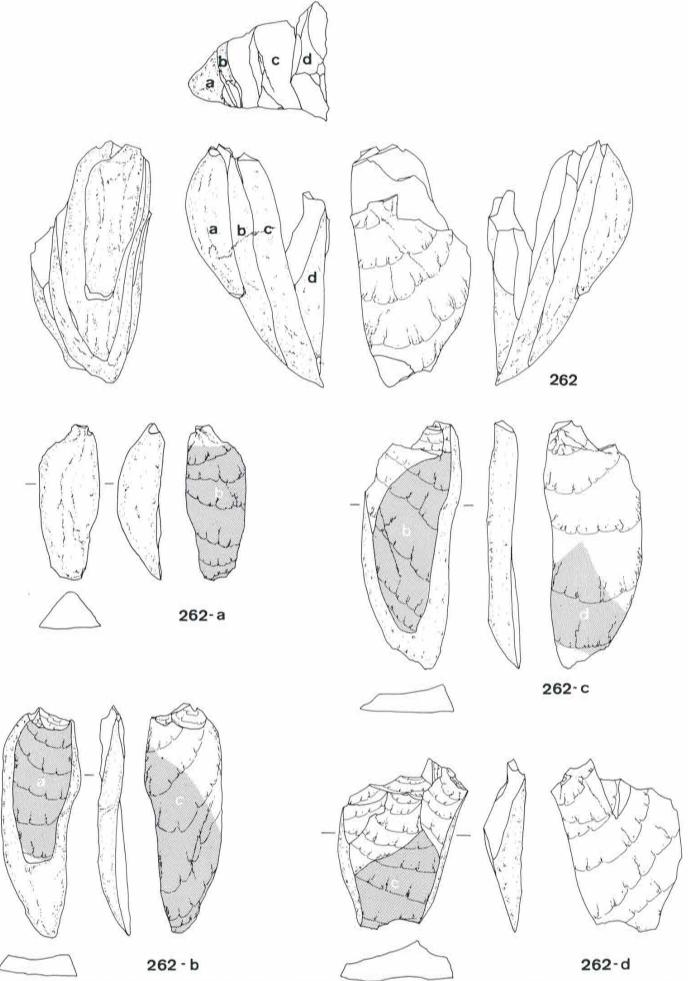


P1.44 256-257 接合資料 (Connected Materials); 256-e-g, f, S 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

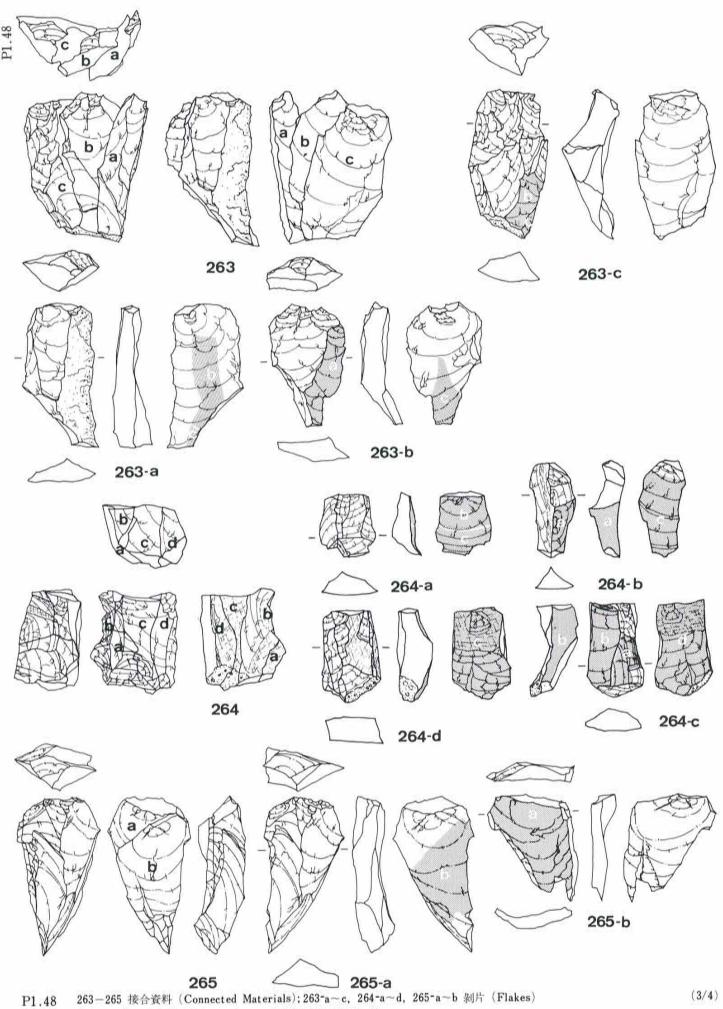




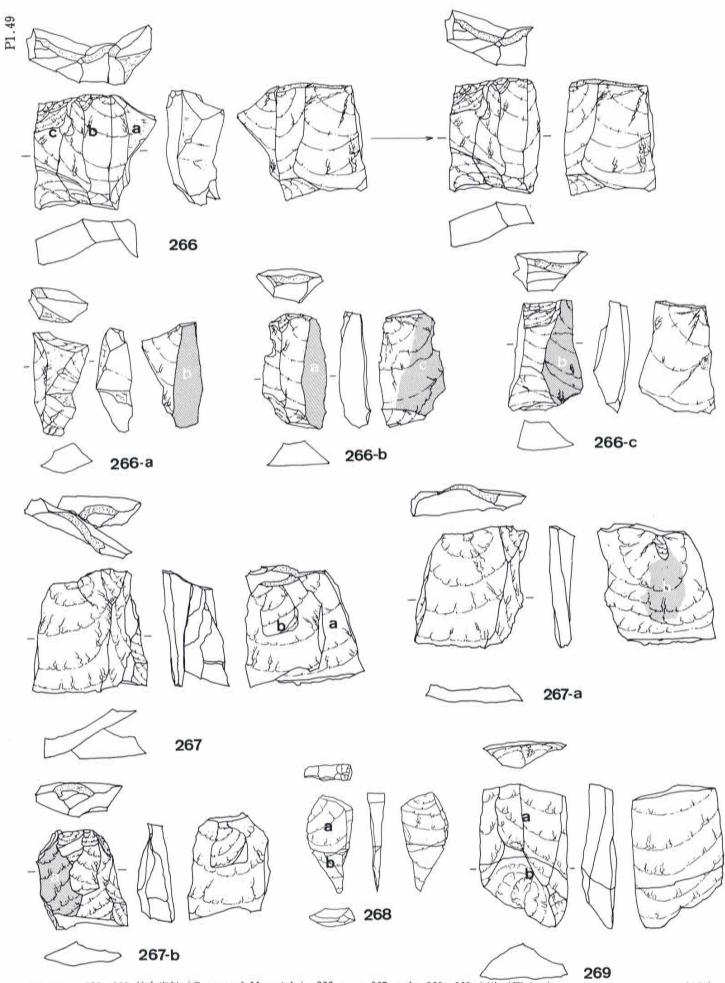
P1.46 260-261 接合資料 (Connected Materials), 260-a, c, 261-b, a' 剝片 (Flakes) 260-b ナイフ形石器 (Knife-shaped Tool), 261-a 石核 (Core) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



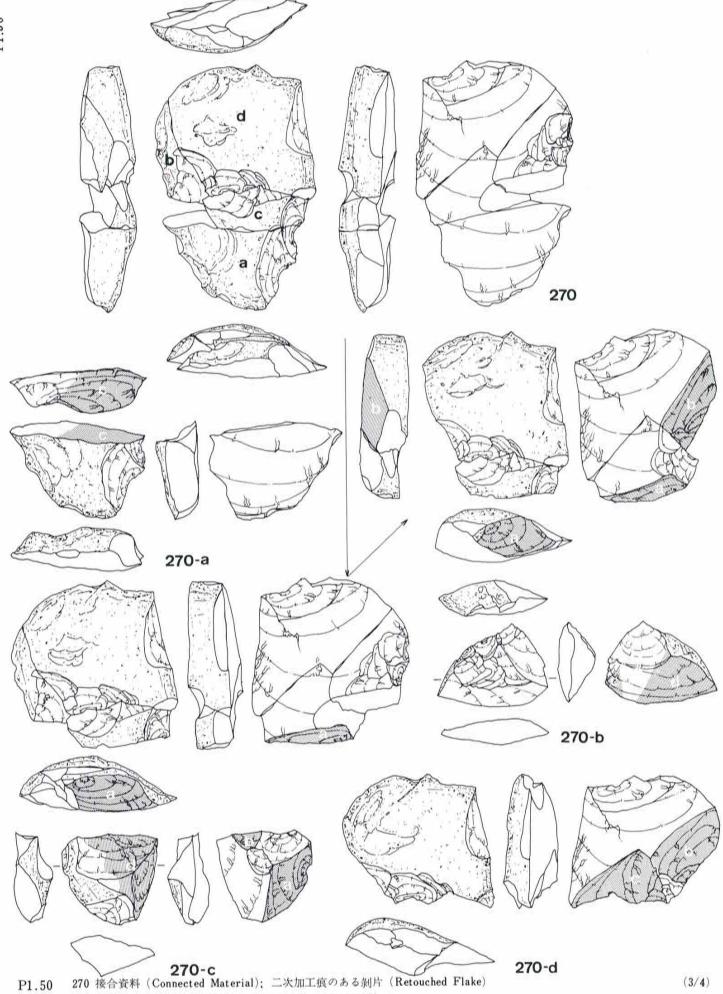
P1.47 262 接合資料 (Connected Material); 262-a~c 使用痕のある剝片 (Utilized Flakes) 262-d 剝片 (Flake) 多摩蘭坂第3文化層



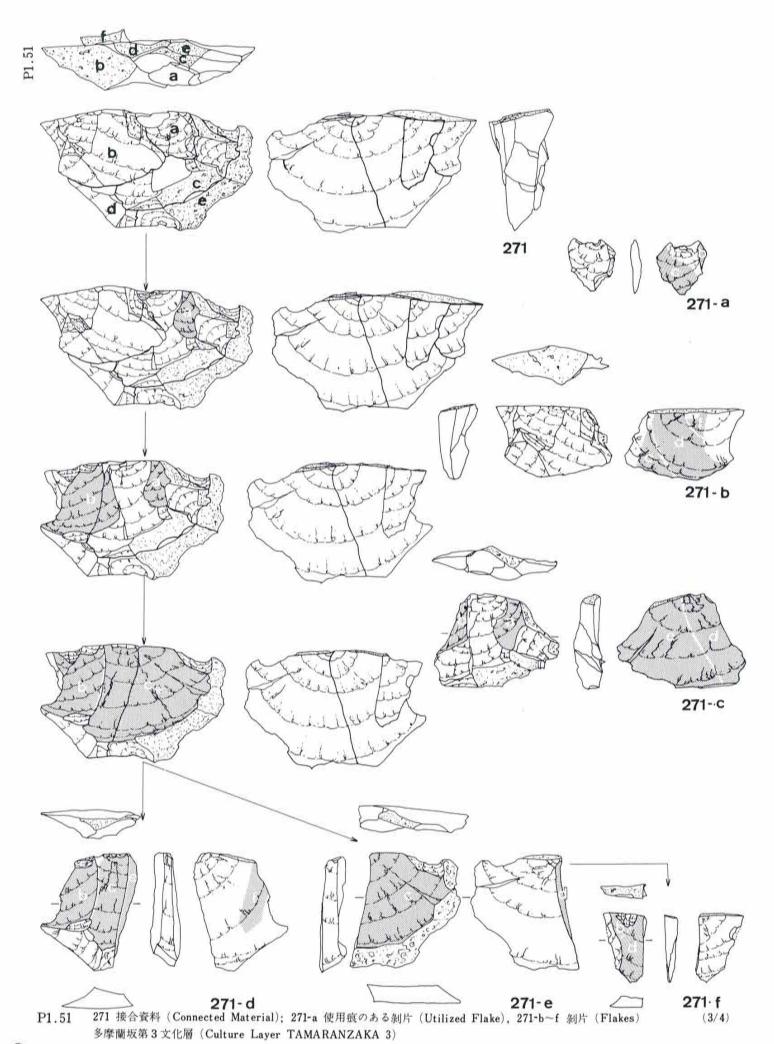
263-265 接合資料 (Connected Materials); 263-a-c, 264-a-d, 265-a-b 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

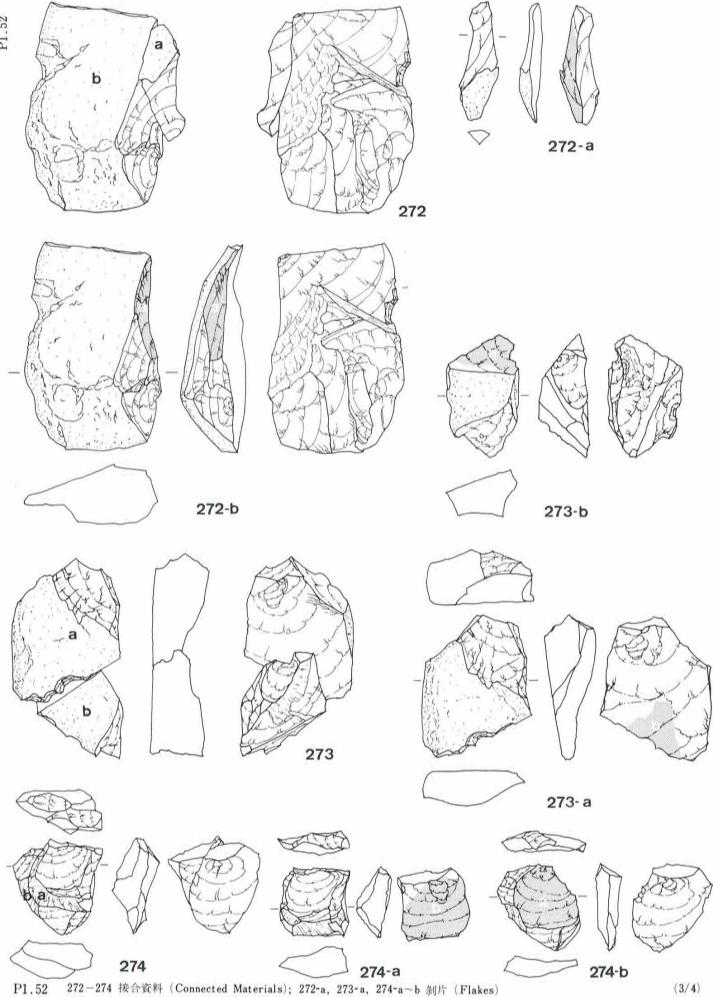


P1.49 266-269 接合資料 (Connected Materials); 266-a-c, 267-a-b, 268, 269 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)

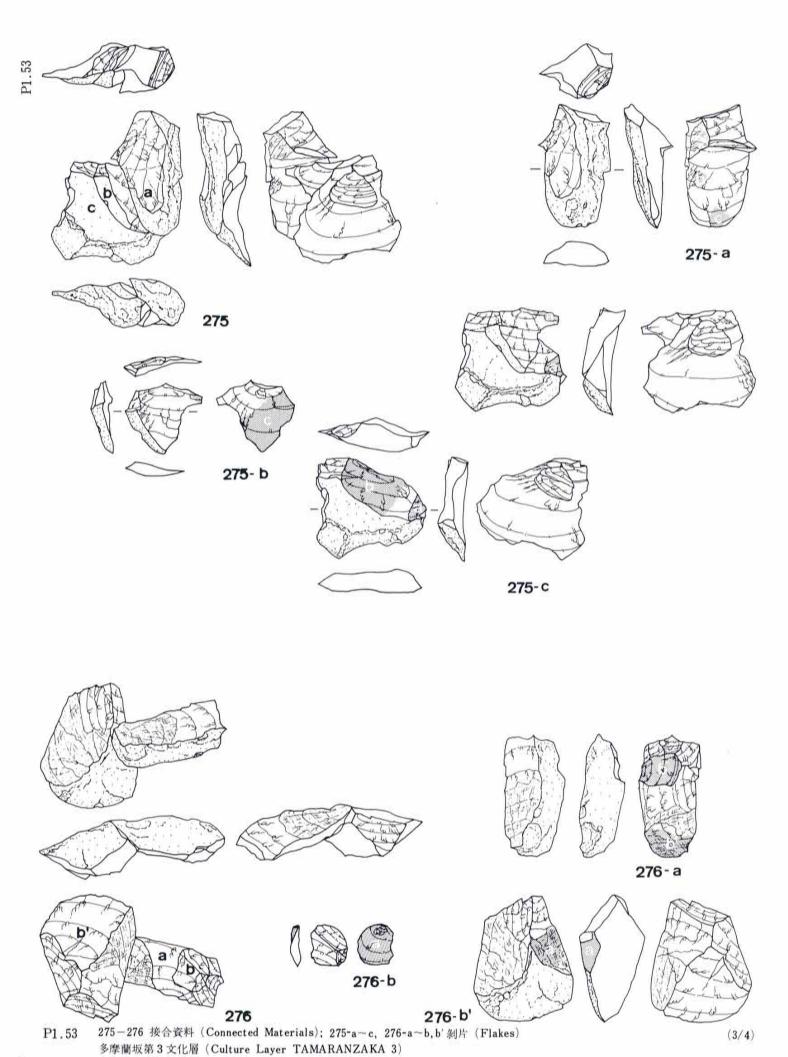


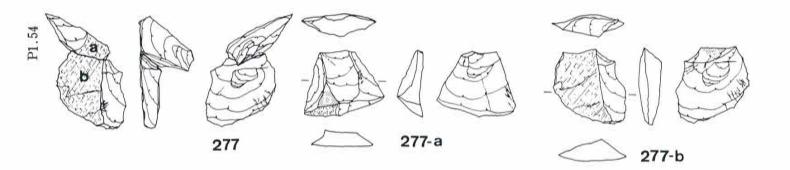
多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)

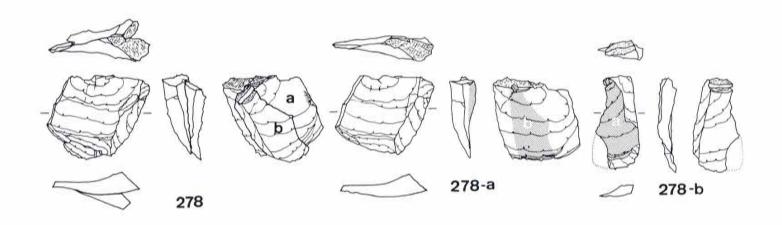


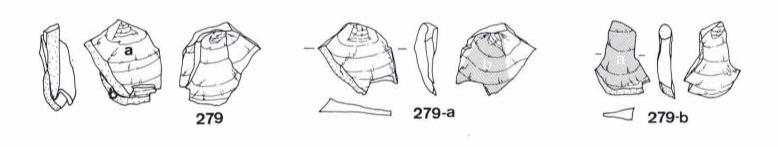


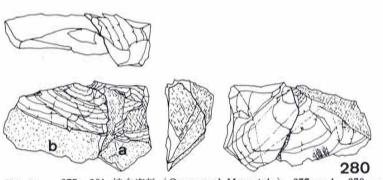
272-274 接合資料 (Connected Materials); 272-a, 273-a, 274-a-b 剝片 (Flakes) 272-b 二次加工痕のある剝片 (Utilized Flake), 273-b 石核 (Core) 多摩蘭坂第3文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3)



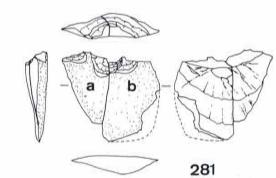


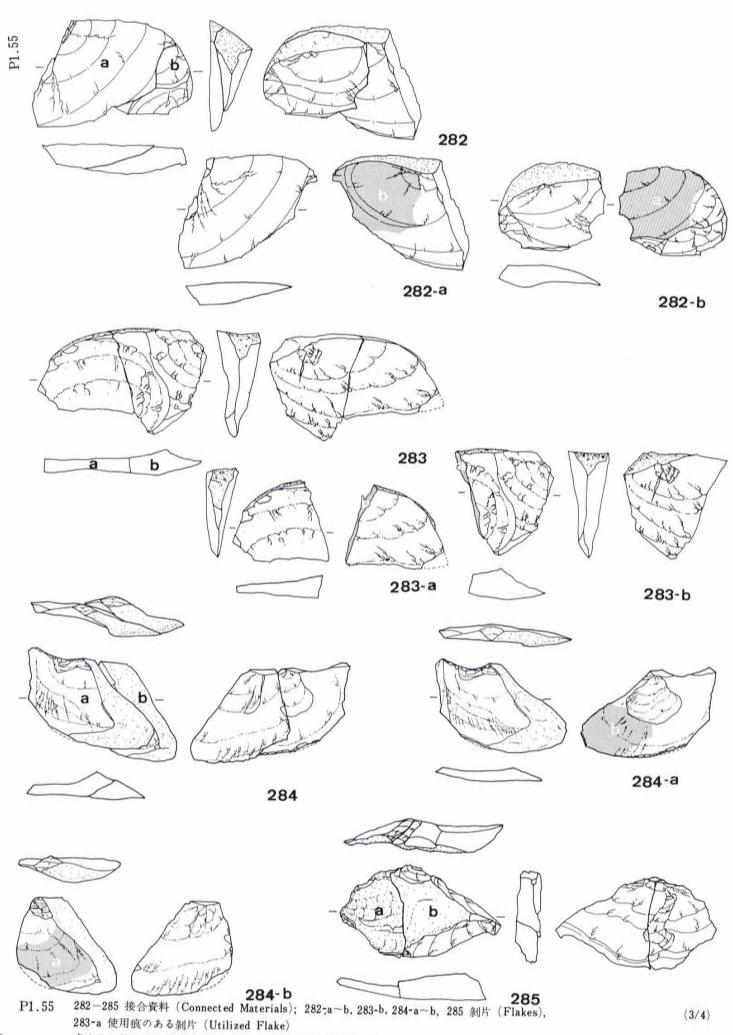




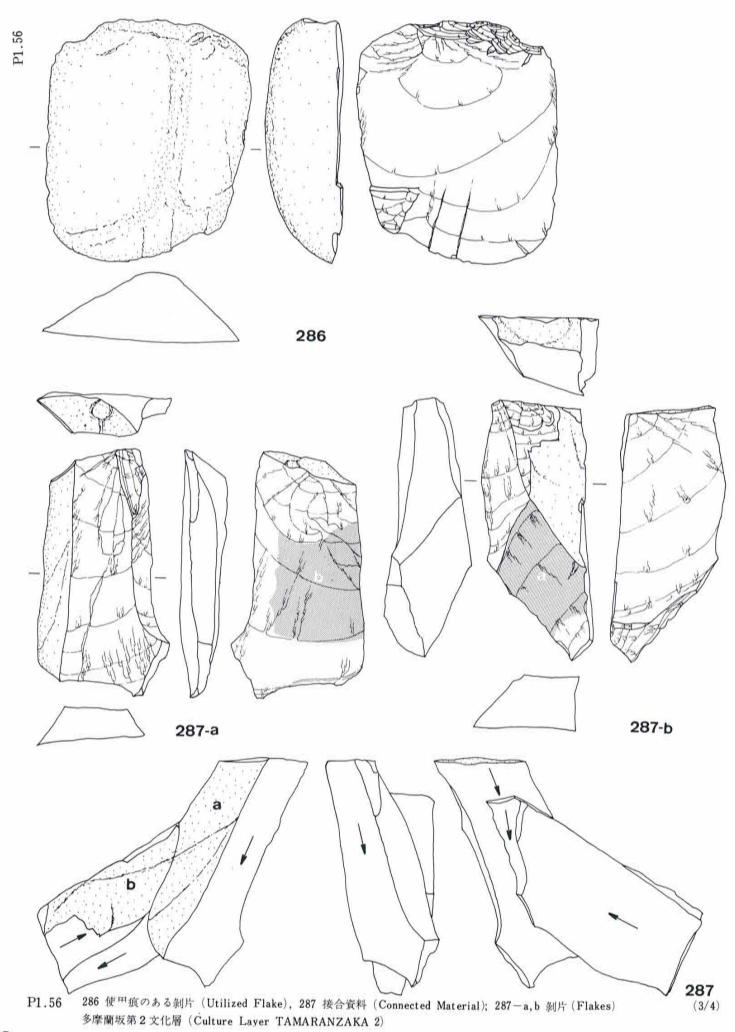


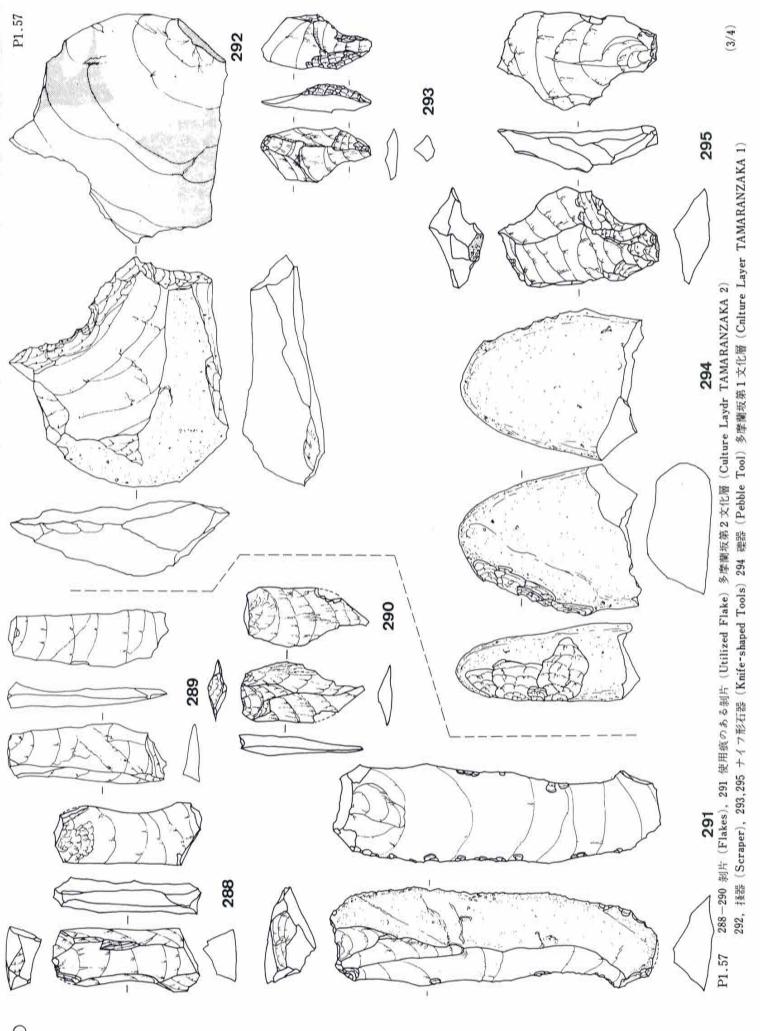
P1.54 277-281 接合資料 (Connected Materials); 277-a~b, 279-a~b, 280-a~b, 281 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第 3 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 3) (3/4)

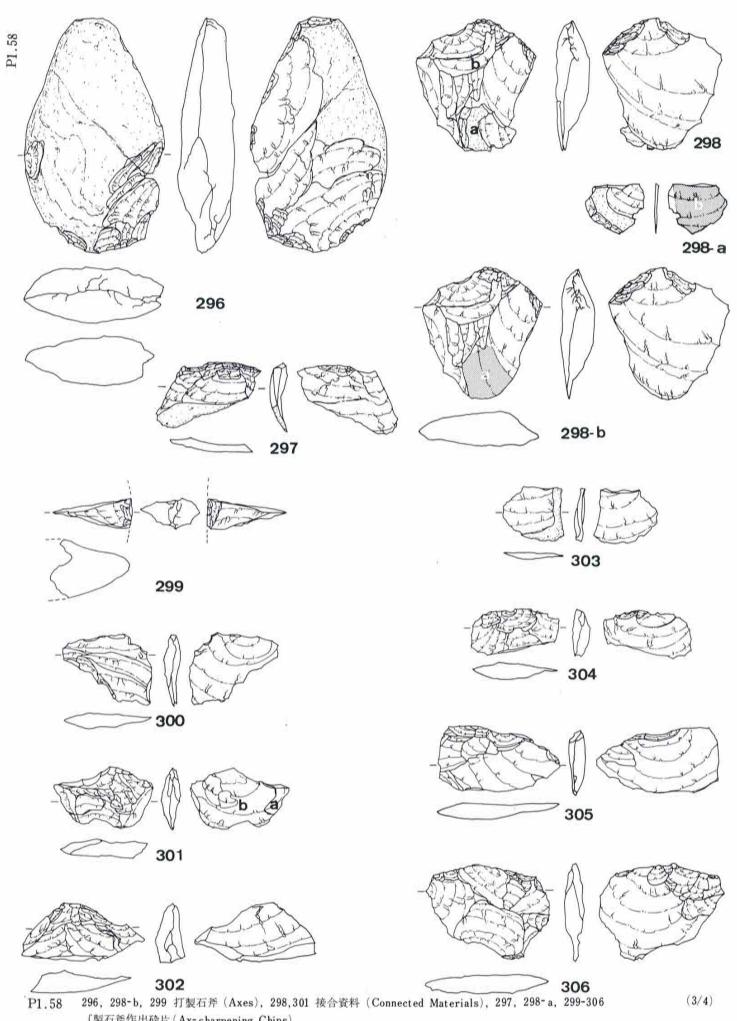




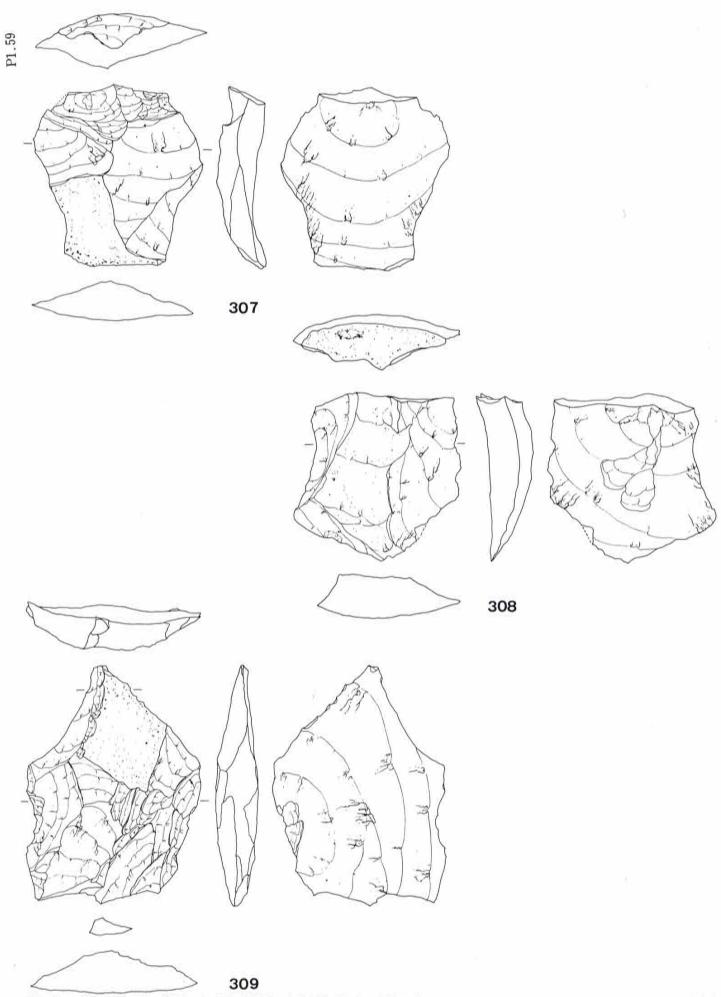
多摩蘭坂第3文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 3)



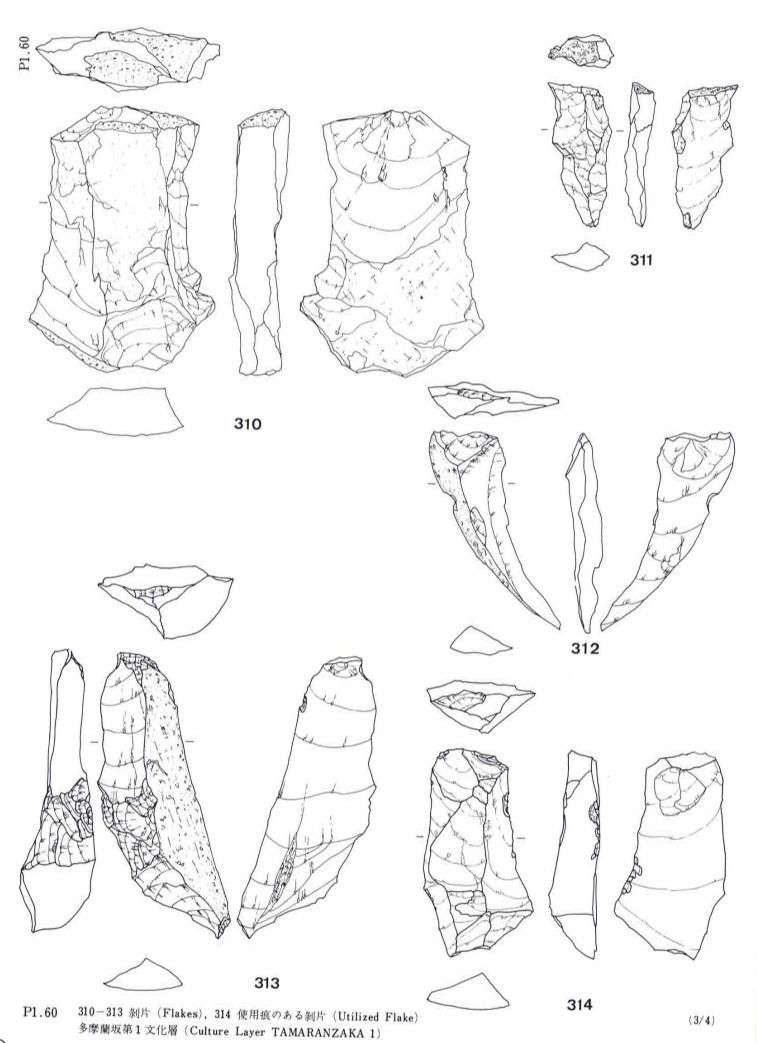


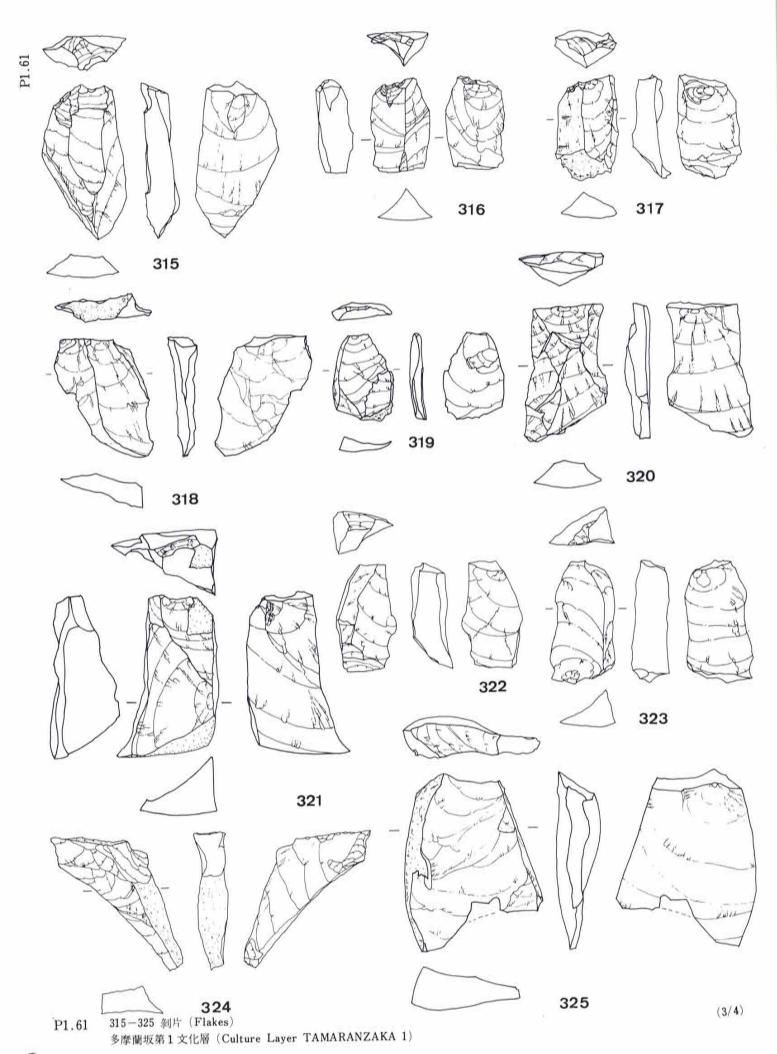


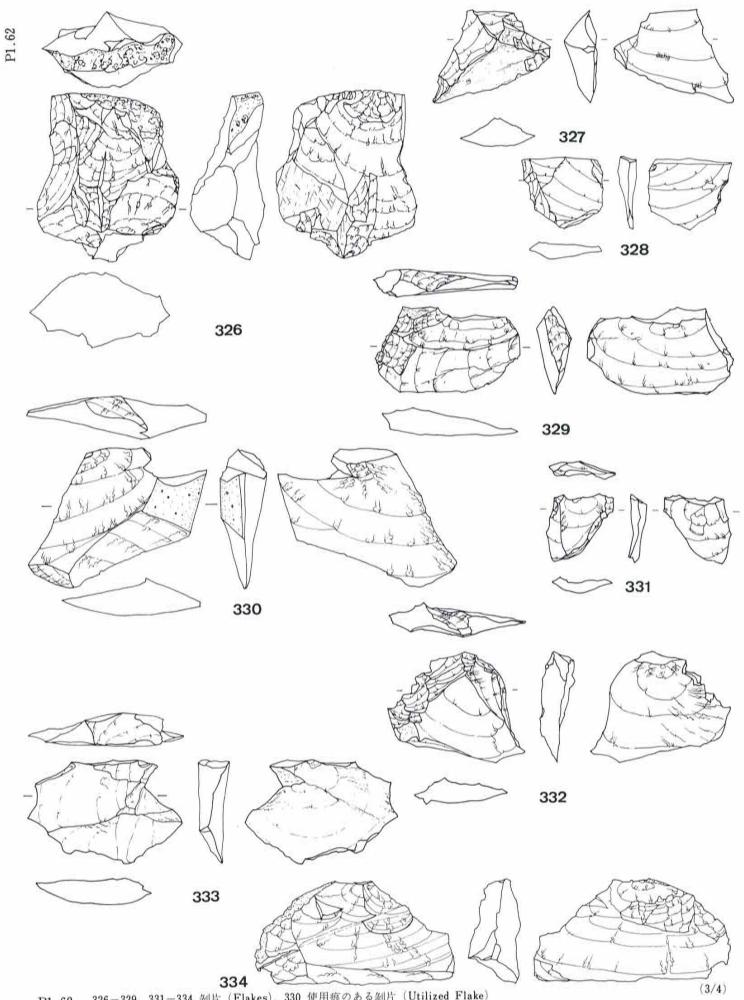
「製石斧作出砕片 (Ax-sharpening Chips) 多摩蘭坂第1 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)



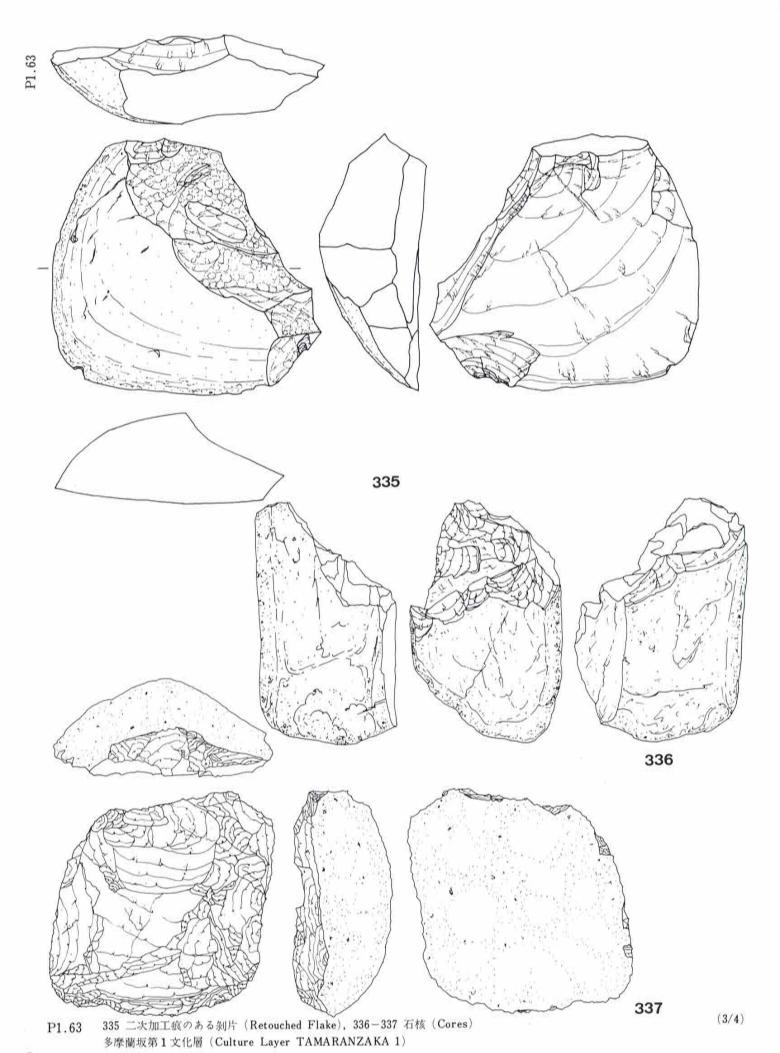
P1.59 307-308 剝片 (Flakes), 309 使用痕のある剝片 (Utilized Flake) 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)

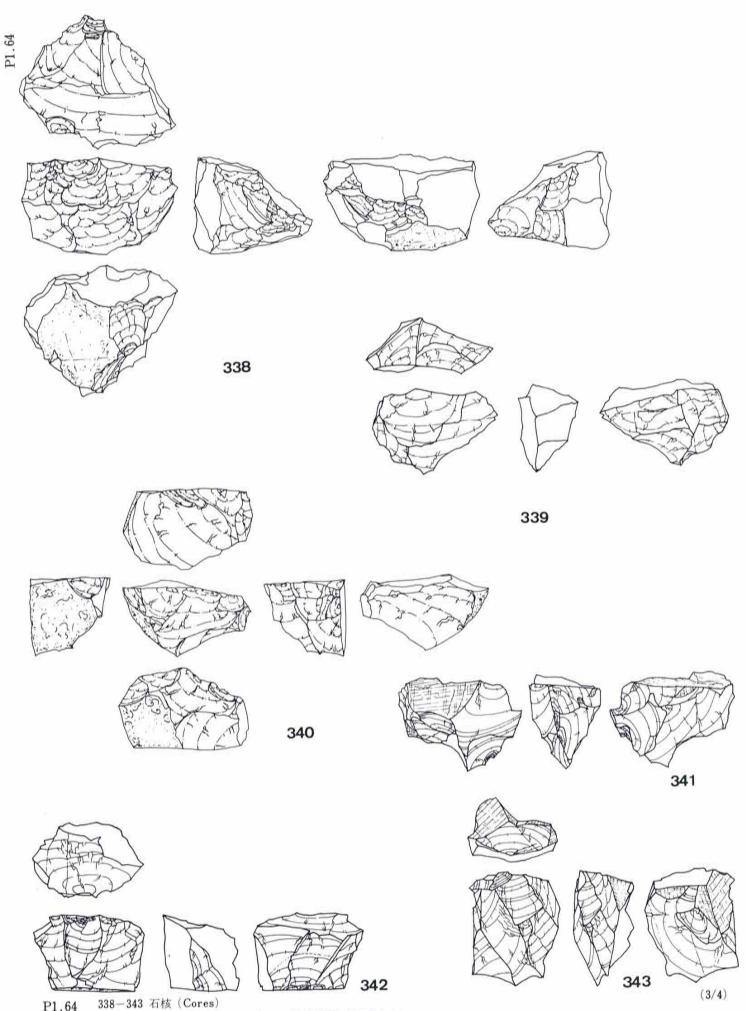




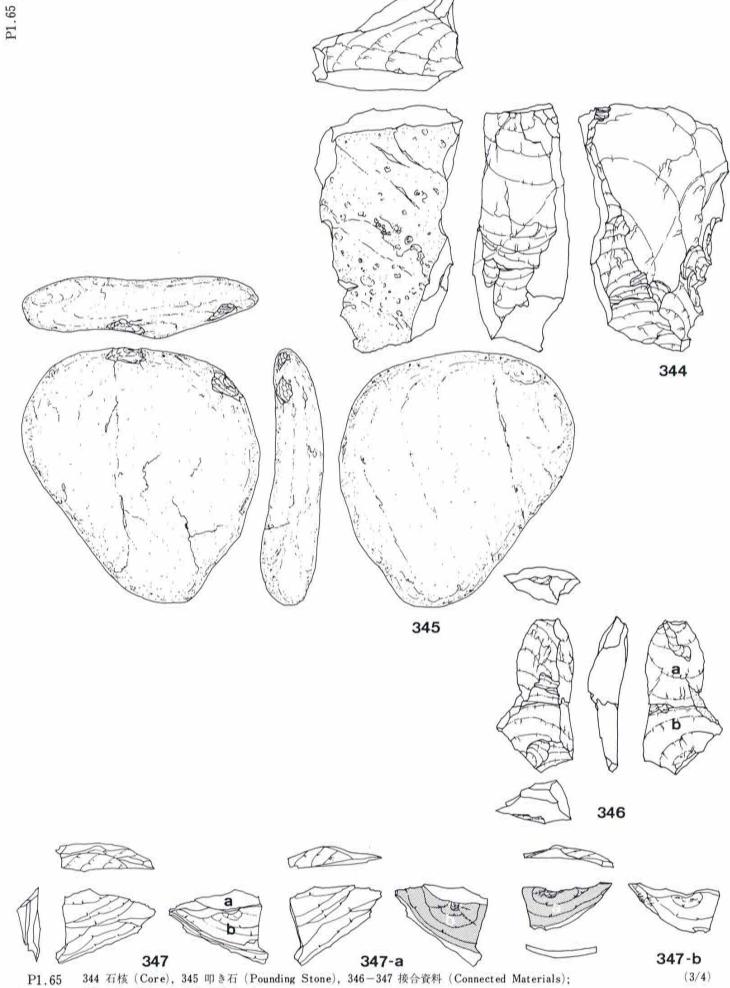


P1.62 326-329, 331-334 剝片(Flakes), 330 使用痕のある剝片(Utilized Flake) 多摩蘭坂第1文化層(Culture Layer TAMARANZAKA 1)



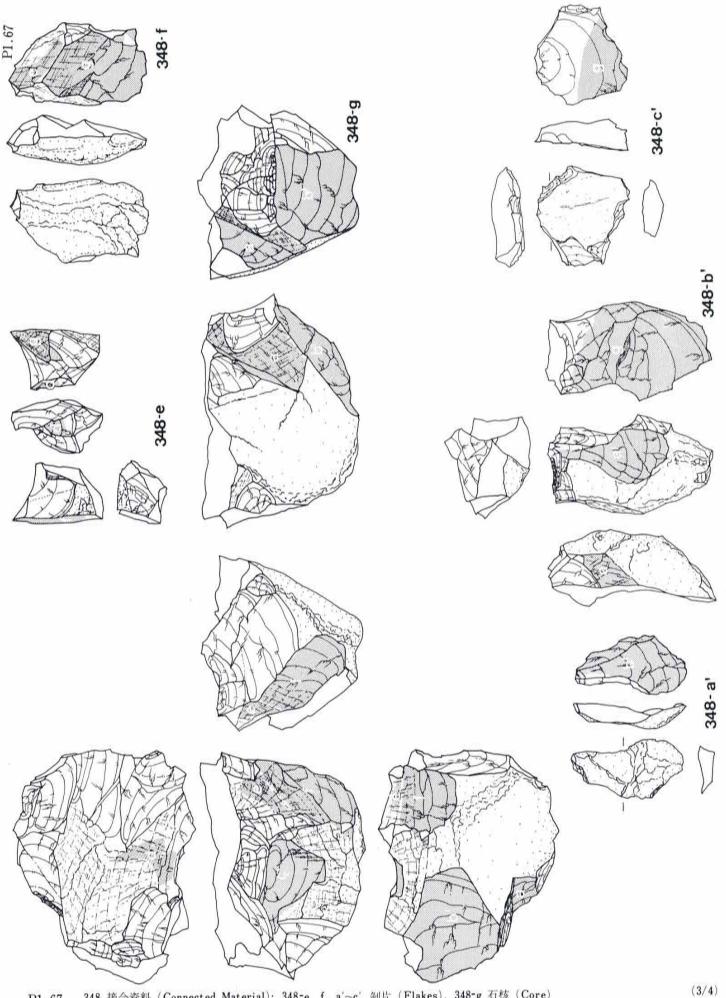


P1.64 338-343 石核 (Cores) 多摩蘭坂第 1 文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)

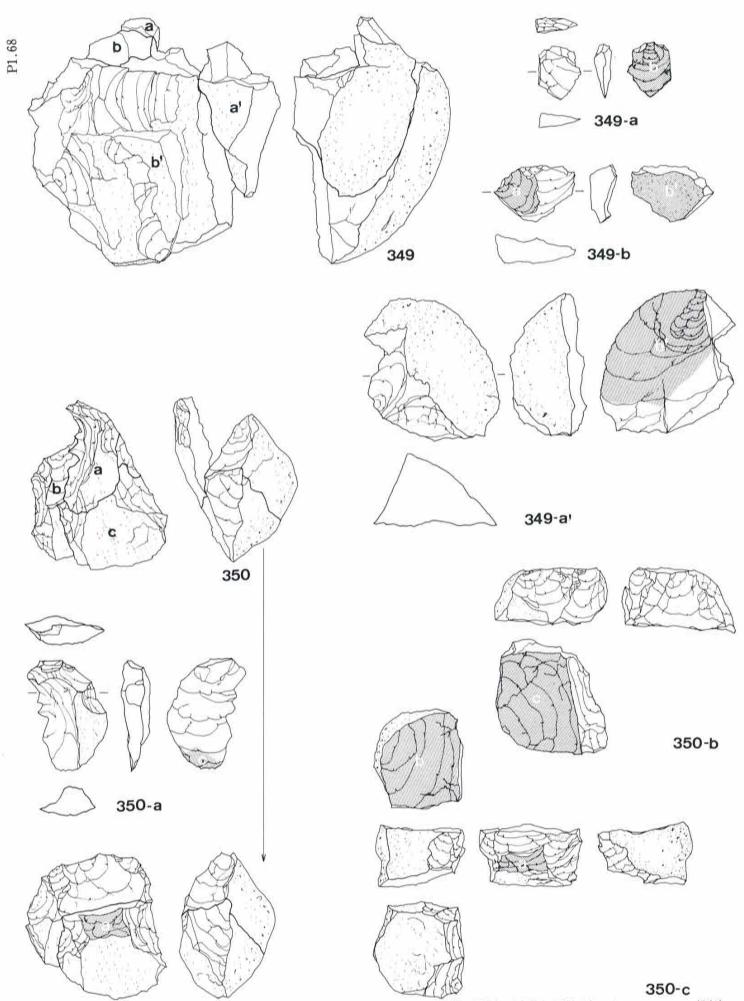


346-a,b, 347-a,b 刻片(Flakes) 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)

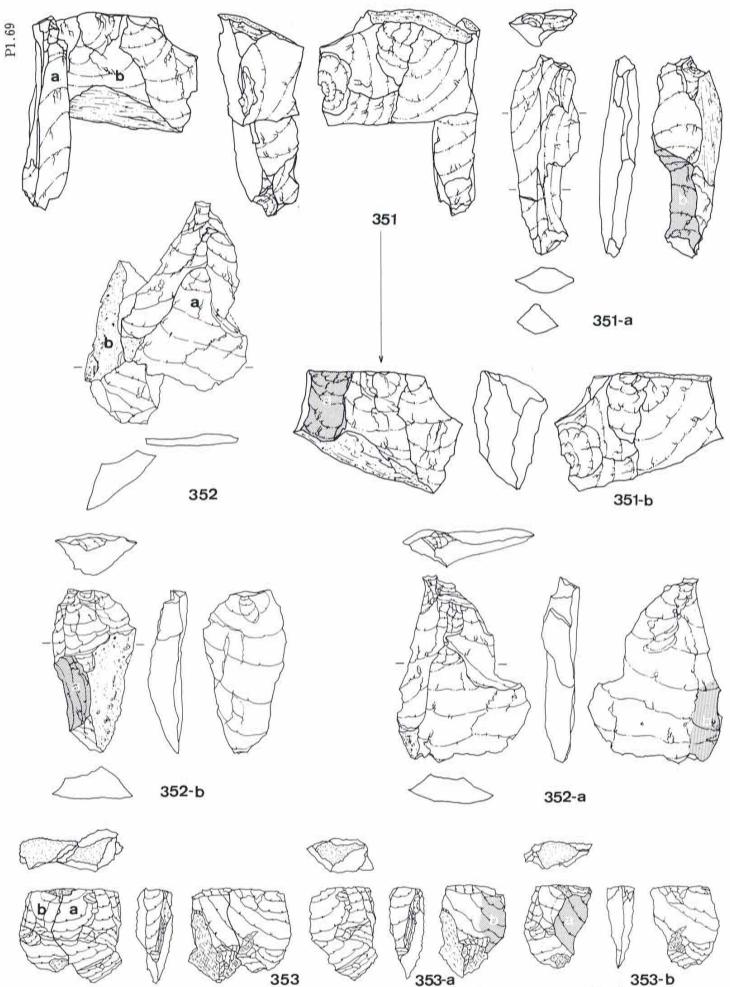
348 接合資料 (Connected Material); 348-a, c ~d 剥片 (Flakes), 348-b 掻器 (Scraper)多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)



P1.67 348 接合資料 (Connected Material); 348-e, f, a'-c' 剁片 (Flakes), 348-g 石核 (Core) 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)



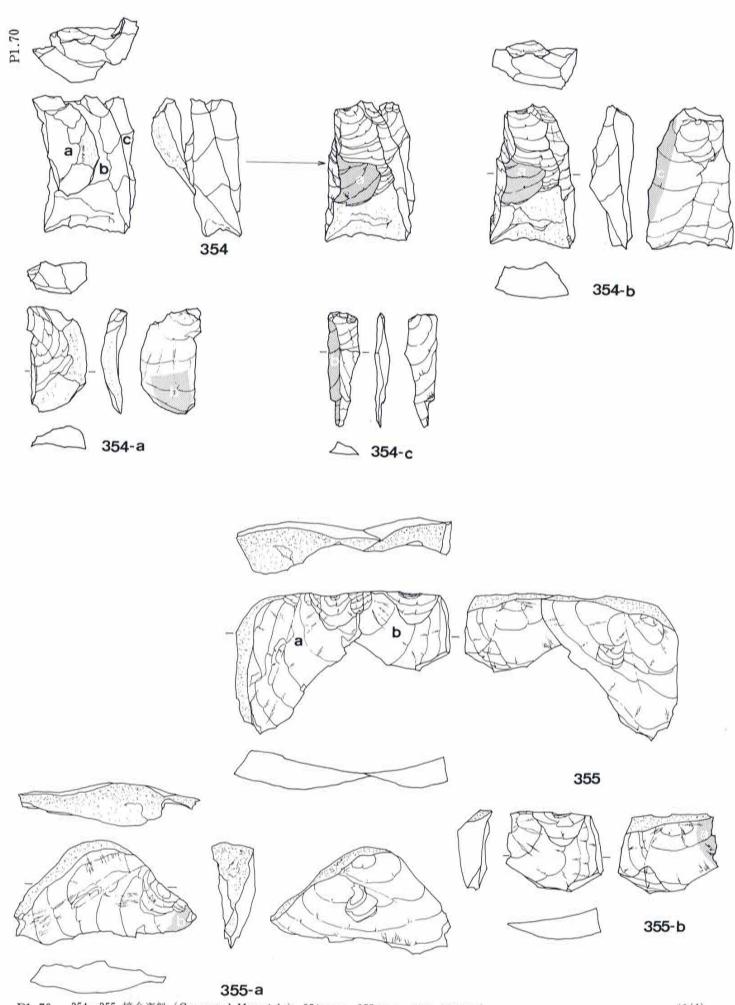
P1.68 349-350 接合資料 (Connected Materials); 349-a, b, a; 350-a, c 剝片 (Flakes) 350-b 石核 (Core) 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)



 353
 353-a
 353-b

 P1.69
 351-353 接合資料 (Connected Materials); 351-a, 352-a-b,353-a-b 剝片 (Flakes), 351-b 石核 (Core)
 (3/4)

 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)



P1.70 354-355 接合資料 (Connected Materials); 354-a-c, 355-a-b 剝片 (Flakes) 多摩蘭坂第1文化層 (Culture Layer TAMARANZAKA 1)

多摩蘭坂遺跡

印 刷 日 昭和55年4月30日 発 行 日 昭和55年4月30日 編集責任者 永 峯 光 一 発 行 者 国分寺市教育委員会 印 刷 所 暁印刷株式会社

令和3年(2021) 9月9日 デジタル版作成 添付図版カードを含む